群馬県利根郡月夜野町

# 城平遺跡
# 諏訪遺跡

一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に
伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書 ―― I ――

*1984*

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料
NO. 61-572
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
昭和61年8月12日
01-351
38
(7)

群馬県利根郡月夜野町

# 城平遺跡
# 諏訪遺跡

一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に
伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書 ── I ──

*1984*

群馬県教育委員会
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 序

美しい山懐に囲まれ、静かなたたずまいを見せていた月夜野町も、昭和50年代に入ってからは幹線交通網の建設が集中する所となり、大きな変貌をとげつつあります。

本報告書に関連する月夜野バイパスも、一般国道17号線のバイパスとして計画され、建設がすすめられているものであります。

建設にあたっては、昭和56年度から58年度にかけての３ケ年間に計画路線内に確認された６ケ所の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査も実施されました。

ここに報告します城平遺跡、諏訪遺跡は、昭和56年度に調査を実施したものです。特に城平遺跡は、群馬の名城「名胡桃城」の一端にかかる遺跡で、城の馬出堀の一部が確認されました。ほかに、縄文時代、弥生時代、古墳時代の住居の跡も発見され、この地の歴史の一端をのぞかせています。

月夜野バイパスに関連する調査につきましては、これまで３冊の調査概報を発表してまいりましたが、本冊子は、出生遺物をはじめ各種の記録を整理した上でまとめあげた報告書としては最初のものであります。ここにいたるまでには、建設省関係の方々をはじめ、地元関係者、調査担当者、その他多くの方々の御理解と御協力をいただきました。厚く感謝申し上げます。

月夜野町では、本遺跡のほかにも、多くの発掘調査が実施されています。本報告書が、他の遺跡の報告書とともに、当地域の歴史解明の上で多くの人々に有効に活用していただければ幸いであります。

昭和59年10月25日

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　清　水　一　郎

# 例　　言

1．本報告は一般国道17号（月夜野バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．事業主体者　建設省

3．調査主体者　群馬県教育委員会・財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

4．調査組織　事務担当　小林起久治・沢井良之助・井上唯雄・細野雅男・近藤平志・国定　均・笠原秀樹・山本朋子・吉田有光・柳岡良宏・並木綾子・野島のぶ江・吉田笑子・吉田恵子

調査担当　中沢　悟　調査研究員

原　雅信　調査研究員

岩崎泰一　調査研究員

5．調査期間　昭和56年4月3日～昭和57年3月31日

6．遺跡は利根郡月夜野町大字下津に所在する。

城平遺跡　利根郡月夜野町大字下津字城平3491―2・3492・3448・3451・3450―2・3461・3460―1・3409・3410番地

諏訪遺跡　利根郡月夜野町大字下津字諏訪3376・3332・3333・3333―2番地

7．調査面積　城平遺跡　6,600㎡

諏訪遺跡　2,250㎡

8．本書に関係する地名等の名称は以下のとおりである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 城　平 | JOHHIRA | 湯丹沢 | YUBUNEZAWA |
| 諏　訪 | SHUWA | 後　沢 | USHIROZAWA |
| 名胡桃 | NAGURUMI | | |

9．整理・報告書作成期間　昭和58年9月1日～昭和59年3月31日

整理組織　事務担当　小林起久治・白石保三郎・松本浩一・大沢秋良・細野雅男・国定　均・笠原秀樹・山本朋子・吉田有光・柳岡良宏・今井もと子・並木綾子・野島のぶ江・吉田笑子・吉田恵子

整理担当

編　集　岩崎泰一

図版作成　青木静江・石井弘子・霜田恵子・関口加津枝・田村千種

遺物写真　佐藤元彦

保存処理　関　邦一・宮沢健二

10．本文執筆は、中沢・原・岩崎が共同して行い、本文執筆の文責については文末に記してある。また諏訪遺跡・1号住居址出土土器については大木紳一郎氏に、名胡桃城関連の遺構・遺物に関しては次の3氏に原稿をお願いした。

VI章　第1節　大江正行

第2節　山崎　一

第3節　新倉明彦

11．出土遺物・調査図面等の保管場所は群馬県埋蔵文化財調査センターにある。

12. 本書を作成するに当り次の各氏よりご指導、ご協力を頂いた。(敬称略・アイウエオ順)

月夜野町教育委員会・新井悦子・新井房夫・飯田陽一・石坂　茂・石塚久則・石守　晃・大江正行・大木紳一郎・神谷佳明・菊池　実・木津博明・小島敦子・坂井　隆・坂口　一・徳江秀夫・新倉明彦・山崎　一

# 凡　　例

1．各遺構図の縮尺は原則として次の通りとした。なお、不統一の実測図もあるため、これについては挿図中に明記した。

住居址　1/60　　住居址炉・竈　1/40　　住居址掘方　1/80

土坑　1/40　　掘立柱建物址　1/60

2．住居址は竈を上に作図した。

3．概報時に使用した住居址番号を一部変更した。

| 概報 | | 本書 |
|---|---|---|
| 諏訪遺跡8号住居址 | ⟶ | 1号住居址 |
| 2・5号住居址 | ⟶ | 2a・2b号住居址 |

4．遺構図中に記した断面基準線は標高で表わした。

5．遺物実測図の縮尺は原則として1/3に統一した。なお、不統一の実測図もあるため、これについては挿図中に明記した。

石鏃・古銭・鉄器　1/1　　縄文・弥生土器片　1/2　　中・近世陶器類　1/2

板碑・石臼・五輪塔　1/6

6．出土土器・石器類については遺物観察表に記述した。

7．住居址実測図中に示す番号は遺物実測図・遺物観察表の番号と一致する。

8．遺構・遺物実測図中に用いたスクリーントーンは次のことを表示している。

ローム土　　粘土　　焼土範囲　　黒色処理

# 目　　次

序
例　　言
凡　　例

## 城　平　遺　跡

第Ⅰ章　調査に至る経過……3
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……4
第Ⅲ章　調査の方法と経過……7
第Ⅳ章　基本土層……9
第Ⅴ章　検出された遺構と遺物……10
第１節　縄文時代の遺構と遺物……10
(1)　住 居 址……10
(2)　土 坑 ……15
第２節　中・近世の遺構と遺物……18
(1)　名胡桃城址（馬出堀）……18
(2)　掘立柱建物址……24
(3)　土　　坑……29
第３節　遺構外の遺物……31
(1)　縄文時代の遺物……31
(2)　平安時代の遺物……34
(3)　中・近世の遺物……35
第Ⅵ章　成果と問題点……40
第１節　中・近世の遺物について……40
第２節　名胡桃城址について……42
第３節　周辺採集遺物……56

## 諏　訪　遺　跡

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境……61
第Ⅱ章　調査の方法と経過……61
第Ⅲ章　基本土層……62
第Ⅳ章　検出された遺構と遺物……63
第１節　縄文時代の遺構と遺物……63

(1) 土　　坑……63
(2) グリッド出土遺物……84
第2節　弥生時代の遺構と遺物……90
(1) 住 居 址……90
第3節　古墳時代の遺構と遺物……100
(1) 住 居 址……100
第Ⅴ章　その他の遺構と遺物……134
(1) 土　　坑……134
(2) 溝……135
(3) 遺　　物……136
第Ⅵ章　成果と問題点……138
(1) 土坑について……138
(2) グリッド出土石器について……140
(3) 1号住居址出土遺物について……141
(4) 古墳時代の遺構と遺物について……142

# 挿　図　目　次


第１図　周辺の遺跡……5
第２図　遺跡周辺の地形図……折込
第３図　城平遺跡全体図……折込
第４図　城平遺跡基本土層図……9
第５図　１号住居址実測図……10
第６図　１号住居址炉実測図……11
第７図　１号住居址出土遺物(1)……12
第８図　１号住居址出土遺物(2)……13
第９図　１・２・３・４号土坑実測図……16
第10図　５号土坑実測図……17
第11図　馬出部状況図……18
第12図　馬出・馬出堀実測図……19
第13図　馬出堀出土遺物(1)……20
第14図　馬出堀出土遺物(2)……21
第15図　馬出堀出土遺物(3)……22
第16図　１号掘立柱建物址実測図……24
第17図　２号掘立柱建物址実測図……25
第18図　３号掘立柱建物址実測図……26
第19図　４号掘立柱建物址実測図……27
第20図　５号掘立柱建物址実測図……28
第21図　６・７号土坑実測図……29
第22図　８・９・10号土坑実測図……30
第23図　遺構外の出土遺物(1)……31
第24図　遺構外の出土遺物(2)……32
第25図　遺構外の出土遺物(3)……34
第26図　遺構外の出土遺物(4)……35
第27図　遺構外の出土遺物(5)……36
第28図　遺構外の出土遺物(6)……37
第29図　遺構外の出土遺物(7)……38
第30図　榛名峠城址……53
第31図　名胡桃城址……53
第32図　名胡桃城馬出跡（発掘調査前の状態）54
第33図　名胡桃城馬出発掘見取図……54
第34図　名胡桃城丸馬出縄張り推定図……55
第35図　名胡桃城馬出普請推定図……55
第36図　五輪塔実測図……57
第37図　板碑実測図……58
第38図　諏訪遺跡基本土層図……62
第39図　諏訪遺跡全体図……折込
第40図　16・25号土坑実測図……63
第41図　18・19・20・21号土坑実測図……64
第42図　22・42号土坑実測図……65
第43図　７・８・32号土坑実測図……66
第44図　２・３号土坑実測図……67
第45図　15・33号土坑実測図……68
第46図　５・６・31号土坑実測図……69
第47図　11・34号土坑実測図……70
第48図　１・35号土坑実測図……71
第49図　30号土坑実測図……72
第50図　４・46号土坑実測図……73
第51図　９・17号土坑実測図……74
第52図　39・40号土坑実測図……75
第53図　12・13号土坑実測図……76
第54図　10・23・41号土坑実測図……77
第55図　24・29・37号土坑実測図……78
第56図　26・27・43・44号土坑実測図……79
第57図　36・38号土坑実測図……80
第58図　14・28・45号土坑実測図……81
第59図　グリッド出土遺物(1)……84
第60図　グリッド出土遺物(2)……85
第61図　グリッド出土遺物(3)……86
第62図　１号住居址実測図……90
第63図　１号住居址炉実測図……91
第64図　１号住居址出土遺物(1)……92
第65図　１号住居址出土遺物(2)……93
第66図　１号住居址出土遺物(3)……94
第67図　１号住居址出土遺物(4)……95
第68図　２ａ号住居址実測図……100
第69図　２ａ号住居址竈実測図……101
第70図　２ａ号住居址出土遺物(1)……102

第71図　2 a 号住居址出土遺物(2)……103
第72図　2 a 号住居址出土遺物(3)……104
第73図　2 a 号住居址出土遺物(4)……105
第74図　2 a 号住居址出土遺物(5)……106
第75図　2 b 号住居址実測図……110
第76図　2 a ・ b 号住居址掘方実測図……111
第77図　2 b 号住居址出土遺物……112
第78図　3 号住居址実測図……113
第79図　3 号住居址竈実測図……114
第80図　3 号住居址掘方実測図……114
第81図　3 号住居址出土遺物(1)……115
第82図　3 号住居址出土遺物(2)……116
第83図　4 号住居址実測図……118
第84図　4 号住居址竈実測図……119
第85図　4 号住居址掘方実測図……119
第86図　4 号住居址炭化物出土状態実測図……120
第87図　4 号住居址出土遺物(1)……120
第88図　4 号住居址出土遺物(2)……121
第89図　4 号住居址出土遺物(3)……122
第90図　5 号住居址実測図……124
第91図　5 号住居址竈実測図……125
第92図　5 号住居址掘方実測図……125
第93図　5 号住居址出土遺物……126
第94図　6 号住居址実測図……128
第95図　6 号住居址竈実測図……129
第96図　6 号住居址掘方実測図……129
第97図　6 号住居址出土遺物(1)……130
第98図　6 号住居址出土遺物(2)……131
第99図　47・48号土坑実測図……134
第100図　1 号溝状遺構実測図……135
第101図　遺構外の出土遺物(1)……136
第102図　遺構外の出土遺物(2)……137
第103図　III層出土石器……140

# 図　版　目　次


図版１　１　遺跡遠景　(1)
図版２　１　遺跡遠景　(2)
図版３　１　１号住居址
　　２　１号住居址炉
図版４　１　名胡桃城址・馬出部（調査前）
　　２　名胡桃城址・馬出部
図版５　１　馬出・出入口部
　　２　同・調査風景
　　３　同・土層
　　４　同・馬出部
　　５　遺物出土状態
図版６　１　Ⅳ区全景
　　２　１号掘立柱建物址
　　３　２号掘立柱建物址
　　４　３号掘立柱建物址
　　５　４・５号掘立柱建物址
図版７　１　６・９号土坑
　　２　７号土坑
図版８　　１号住居址出土遺物　(1)
図版９　　１号住居址出土遺物　(2)
　　馬出堀出土遺物　(1)
図版10　　馬出堀出土遺物　(2)
図版11　　馬出堀出土遺物　(3)
　　８・９号土坑出土遺物
図版12　　遺構外の遺物　(1)
図版13　　遺構外の遺物　(2)
　　遺構外の遺物　(3)
図版14　　遺構外の遺物　(4)
図版15　　遺構外の遺物　(5)
図版16　　遺構外の遺物　(6)
　　周辺採集の遺物　(1)
図版17　　周辺採集の遺物　(2)
図版18　１　諏訪遺跡全景（南側）　(1)
　　２　諏訪遺跡全景（北側）　(2)
図版19　１　25号土坑
　　２　16号土坑
　　３　21号土坑
　　４　19号土坑
　　５　20号土坑
　　６　18号土坑
　　７　22号土坑
　　８　７号土坑
図版20　１　２号土坑
　　２　８号土坑
　　３　６号土坑
　　４　11号土坑
　　５　４号土坑
　　６　１号土坑
　　７　30号土坑
　　８　46号土坑
図版21　１　17号土坑
　　２　23号土坑
　　３　29・37号土坑
　　４　26号土坑
　　５　45号土坑
　　６　45号土坑
　　７　14号土坑
　　８　12・13号土坑
図版22　１　１号住居址
　　２　同・土層
　　３　同・遺物出土状態　(1)
　　４　同・遺物出土状態　(2)
　　５　同・炉
図版23　１　２ａ・ｂ号住居址
　　２　同・土層
　　３　同・竈
　　４　同・遺物出土状態　(1)
　　５　同・遺物出土状態　(2)
図版24　１　３号住居址
　　２　同・土層

| | | |
|---|---|---|
| | 3 | 同・竈 |
| | 4 | 同・遺物出土状態 |
| | 5 | 同・掘方 |
| 図版25 | 1 | 4号住居址 |
| | 2 | 同・土層 |
| | 3 | 同・竈 |
| | 4 | 同・遺物出土状態 (1) |
| | 5 | 同・遺物出土状態 (2) |
| 図版26 | 1 | 5号住居址 |
| | 2 | 同・竈土層 |
| | 3 | 同・掘方 |
| 図版27 | 1 | 6号住居址 |
| | 2 | 同・竈土層 |
| | 3 | 同・掘方 |
| 図版28 | 1 | 47・48号土坑 |
| | 2 | 溝状遺構 |
| 図版29 | | 土坑出土遺物 (1) |
| 図版30 | | 土坑出土遺物 (2) |
| | | グリッド出土遺物 (1) |
| 図版31 | | グリッド出土遺物 (2) |
| 図版32 | | グリッド出土遺物 (3) |
| | | グリッド出土遺物 (4) |
| 図版33 | | グリッド出土遺物 (5) |
| | | 1号住居址出土遺物 (1) |
| 図版34 | | 1号住居址出土遺物 (2) |
| 図版35 | | 1号住居址出土遺物 (3) |
| 図版36 | | 2 a号住居址出土遺物 (1) |
| 図版37 | | 2 a号住居址出土遺物 (2) |
| 図版38 | | 2 a号住居址出土遺物 (3) |
| 図版39 | | 2 a号住居址出土遺物 (4) |
| | | 2 b号住居址出土遺物 |
| | | 3号住居址出土遺物 (1) |
| 図版40 | | 3号住居址出土遺物 (2) |
| | | 4号住居址出土遺物 (1) |
| 図版41 | | 4号住居址出土遺物 (2) |
| | | 5号住居址出土遺物 |
| 図版42 | | 6号住居址出土遺物 |
| 図版43 | | 口縁部調整痕 (1) |
| | | 口縁部調整痕 (2) |
| | | 口縁部調整痕 (3) |
| | | 口縁部調整痕 (4) |
| | | 口縁部調整痕 (5) |
| | | 体部調整痕 (1) |
| | | 体部調整痕 (2) |
| | | 体部調整痕 (3) |

# 城　平　遺　跡

# 第Ⅰ章　調査に至る経過

利根郡月夜野町地区の国道17号線は、関越自動車道の月夜野インターチエンジの設置、上越新幹線上毛高原駅の開設などによって渋滞が予想されることになり、国道291号線の整備と相まってこの月夜野バイパス計画が策定されることになった。

昭和52年度、建設省はこの計画を採択し、群馬県教育委員会と協議を重ね、事前に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施した。その結果、名胡桃城址をはじめ13カ所の文化財包蔵地を指定し路線の確定に向けて両者の間で調整が図られることになった。

昭和53年度、その結果を受けて建設省は月夜野バイパスの計画路線を決定したが、その中には6地点の文化財包蔵地がかかることが確認された。この調査について建設省と県教育委員会間で調整を重ねてきたが周囲の情勢から発掘調査の計画が具体化したのは53年度後半のことであった。その結果、発掘の地点として次の6地点が確定した。

| 地　　点 | A | B | C | D | E | F |
|---|---|---|---|---|---|---|
| st. No. | 148～159 | 160～165 | 176～190 | 198～203 | 215～225 | 227～240 |
| 調査対称時代 | 縄文・城址 | 縄文～古墳 | 縄文～平安 | 縄文・平安 | 平　　安 | 平　　安 |
| 面　　積(m²) | 6,600 | 2,250 | 7,500 | 2,250 | 5,200 | 6,300 |

当初の計画では昭和54年度後半から調査に入る予定であったが、諸般の事情から当初計画どおりの着手が困難となった。

昭和55年2月に入り、昭和56年度から調査に着手することが確定し、調査地点の確認と調査計画の検討に入り、昭和53年3月、調査計画に関する建設省、県教育委員会、埋蔵文化財調査事業団の三者での調整がなされ、次の結論を得た。

1)　全事業は、昭和56年度から59年度の4カ年とする

2)　地域的にみて厳冬期の発掘は避け、整理にあてること

3)　発掘調査は1年先行する形をとり、報告書は次年度刊行とすること

4)　現地の発掘調査は3カ年で終了すること

これを受けて昭和56年4月14日、調査の具体的実施に関する打ち合わせを、建設省高崎工事事務所、県教育委員会文化財保護課、県埋蔵文化財調査事業団の三者が会合して行い、調査実施について細部の事項について協議を行った。

事業団ではこれを受けて調査準備を進め、4月21日、現場事務所設置、4月27日作業に着手した。この間、発掘作業員雇用等について、月夜野町教育委員会の協力を得た。

# 第II章　遺跡の立地と環境

遺跡の所在する利根郡月夜野町下津は、新潟県境の三国山麓より東流する赤谷川と、水上町北方より南流する利根川の合流点から、南西へ約1kmの地点に位置する。調査地域は、周辺を大峰山や三峰山等の標高1,000m前後の山々に囲まれた河岸段丘上に位置し、通称「名胡桃平」と呼ばれている。遺跡の立地する「名胡桃平」の標高は430～435mで、利根川との比高差は約50mである。

城平遺跡は、湯舟沢から諏訪沢までの地区を、諏訪遺跡は諏訪沢から後沢までの地区を言う。

周辺の遺跡は、西約2kmの地点に存在する塚原古墳群をはじめ、昭和48年より開始された上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財調査及び当遺跡を初年度とする月夜野バイパス建設[(1)]に伴う発掘調査や、それらに関連した小川城跡[(2)]や藪田東遺跡[(3)]の調査等が行われている。また利根川の対岸では関越自動車道路建設に伴う発掘調査が実施され、その概要がしだいに明らかになりつつある。

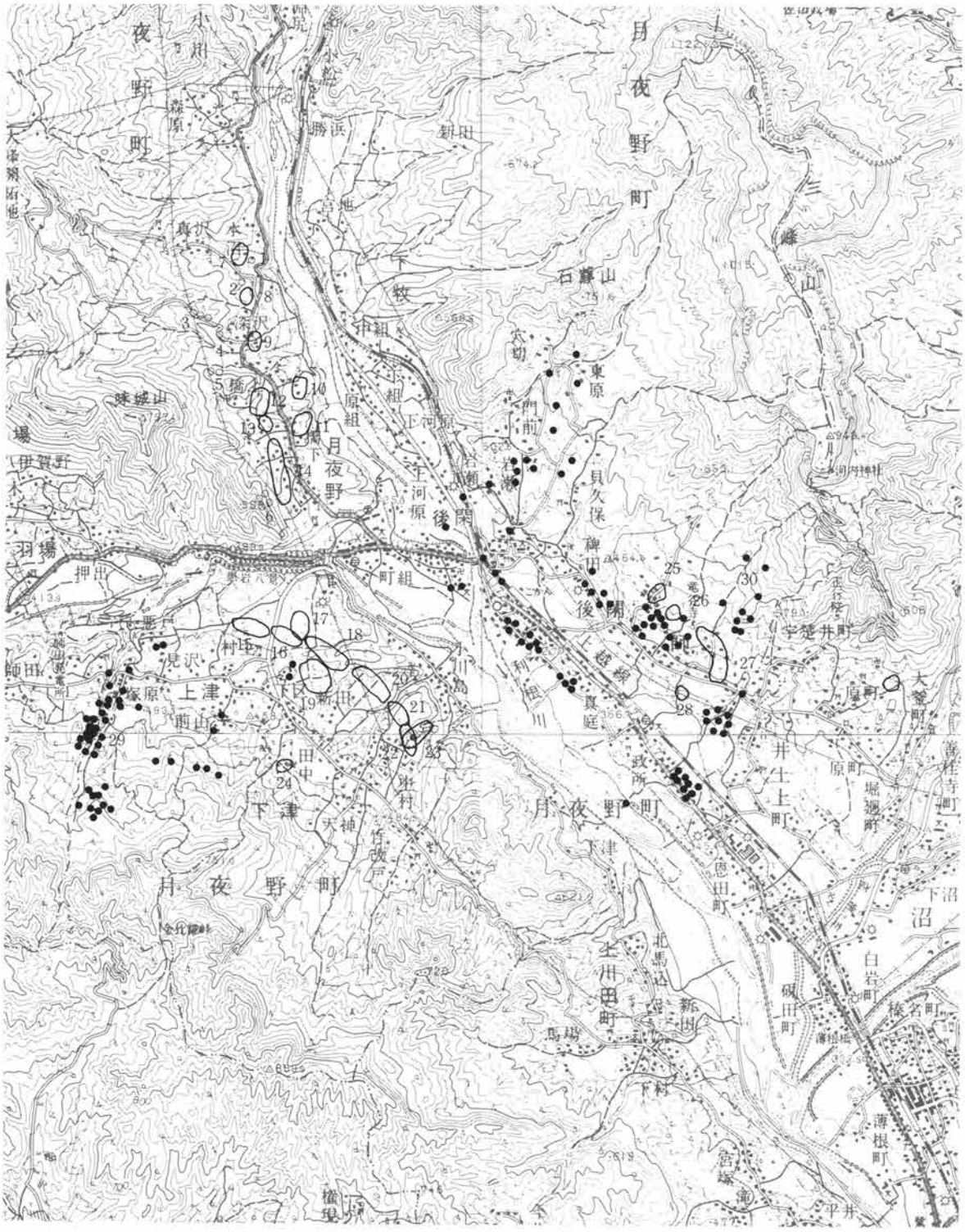
月夜野町地内における旧石器時代の遺跡調査は、利根川左岸の善上遺跡[(4)]・三峰神社裏遺跡[(4)]・後田遺跡[(5)]等で実施されている。いずれもＡＴ前後の石器群を主体としており、極めて興味深い内容をもっている。

縄文時代の遺跡は、当遺跡をはじめ、3年計画で実施された月夜野バイパスに関連した6遺跡のすべてから検出されている。当遺跡においては、前期黒浜式期の竪穴住居跡一軒とこの時期に近いと思われる陥穴及び土坑が51基検出されている。2年次の三後沢遺跡[(6)]においては、前期の住居跡5軒、中期の住居跡2軒、陥穴4基等が検出されており、十二原II遺跡においては、前期3軒・中期7軒・陥穴17基等が検出されている。3年次の大原II遺跡では、陥穴22基、村主遺跡では陥穴16基が検出されている。当遺跡の北約3kmには、中期の敷石住居跡の検出された梨の木平遺跡[(7)]や後期の配石墓[(7)]が多く検出された深沢遺跡[(8)]が調査されており、また北西約4kmの山中においては、前期の土坑4基が発掘調査された須摩野遺跡[(9)]が知られている。

弥生時代の遺跡は、すべて後期の樽式土器を伴う時期のものであり、月夜野バイパス[(10)]に伴なう初年度の遺跡では良好な土器群を伴って1軒調査され、2年度に行われた三後沢遺跡においては、7軒が、十二原II遺跡においては6軒調査されている。3年度の大原II遺跡においては3軒調査されている。十二原II遺跡と大原II遺跡は上越新幹線に伴う埋蔵文化財調査の実施された十二原遺跡と大原遺跡に近接した遺跡であり、大原遺跡においては2軒、十二原遺跡においては1軒、赤谷川の北側の藪田遺跡[(11)]においても1軒調査[(11)]されている。

古墳時代の遺跡は諏訪遺跡において5軒の住居跡が検出されており、他にこの名胡桃地区では、諏訪遺跡西約1.5kmの地点の天神遺跡が報告されている。この地域では他に住居跡の調査は行われていない。古墳は、諏訪遺跡西約2.5kmに塚原古墳群[(12)]があり、この古墳群は「緩傾斜の小地域に41基分布している。そのうち8基は横穴式石室が開口しており、昭和28年に実測を行い他の30基もあわせて調査した。明確に横穴式石室をもったものとして認められるのは20基であるが、このほかに上津地区には更に10基存在していて、あわせて51基の多くが横穴式石室のようである。」[(1)]他に名胡桃地区以外の古墳群や集落は、利根川対岸の師・後閑地区を中心に90基を超える古墳群、さらに赤谷川の対岸の月夜野地区には9基の古墳が確認されている。集落としては、善上遺跡、三峰神社裏遺跡、後田遺跡等において総計200軒以上発掘調査[(13)]されている。

奈良・平安時代における遺跡は、集落遺跡及び窯跡群の遺跡として知られている。奈良時代の集落は、村主遺跡において14軒調査されており、対岸の後田遺跡において数軒調査されているのみで、月夜野町全体として調査例が少ない。平安時代の集落跡は、利根川右岸の旧桃野村地域において、多く調査されている。上




1．水沼A窯跡群　2．真沢窯跡群　3．深沢B窯跡群　4．深沢C窯跡群　5．沢入A窯跡群　6．洞A窯跡群　7．前中原遺跡　8．前田原遺跡　9．深沢遺跡　10．梨の木平遺跡　11．小川城址　12．藪田・藪田東遺跡　13．洞II遺跡　14．洞I・II遺跡　15．村主遺跡　16．大原II遺跡　17．大原遺跡　18．十二原II遺跡　19．十二原遺跡　20．三後沢遺跡　**21．諏訪遺跡　22．城平遺跡　23．名胡桃城址**　24．天神遺跡　25．善上遺跡　26．三峰神社裏遺跡　27．後田遺跡　28．師B遺跡　29．塚原古墳群　30．金山古墳群

第1図　周辺の遺跡

越新幹線関連で調査された遺跡として、前田原遺跡で１軒、前中原遺跡で１軒、薮田遺跡で10軒、洞遺跡で９軒、大原遺跡で１軒、十二原遺跡の計22軒調査[14]され、月夜野バイパス[15]に伴う村主遺跡[16]で17軒、国道291号道路改良工事に伴う薮田東遺跡[17]で８軒、県道小日向・上津・沼田線の改良工事に伴い実施された梨の木平遺跡で１軒調査[3]され、合計48軒調査されている。奈良・平安時代の窯跡群としては、月夜野地区のみで確認[8]されており、南より、洞Ａ・薮田・沢入Ａ・深沢Ｂ・Ｃと真沢・水沼の７群が知られている。その中で奈良時代に属する窯跡として洞Ａ・沢入Ａ窯跡群、平安時代に属する窯跡群[18]として沢入Ａを除く５群の窯跡群が知られており、水沼Ａに関しては出土遺物が不明のため時期が明らかでない。

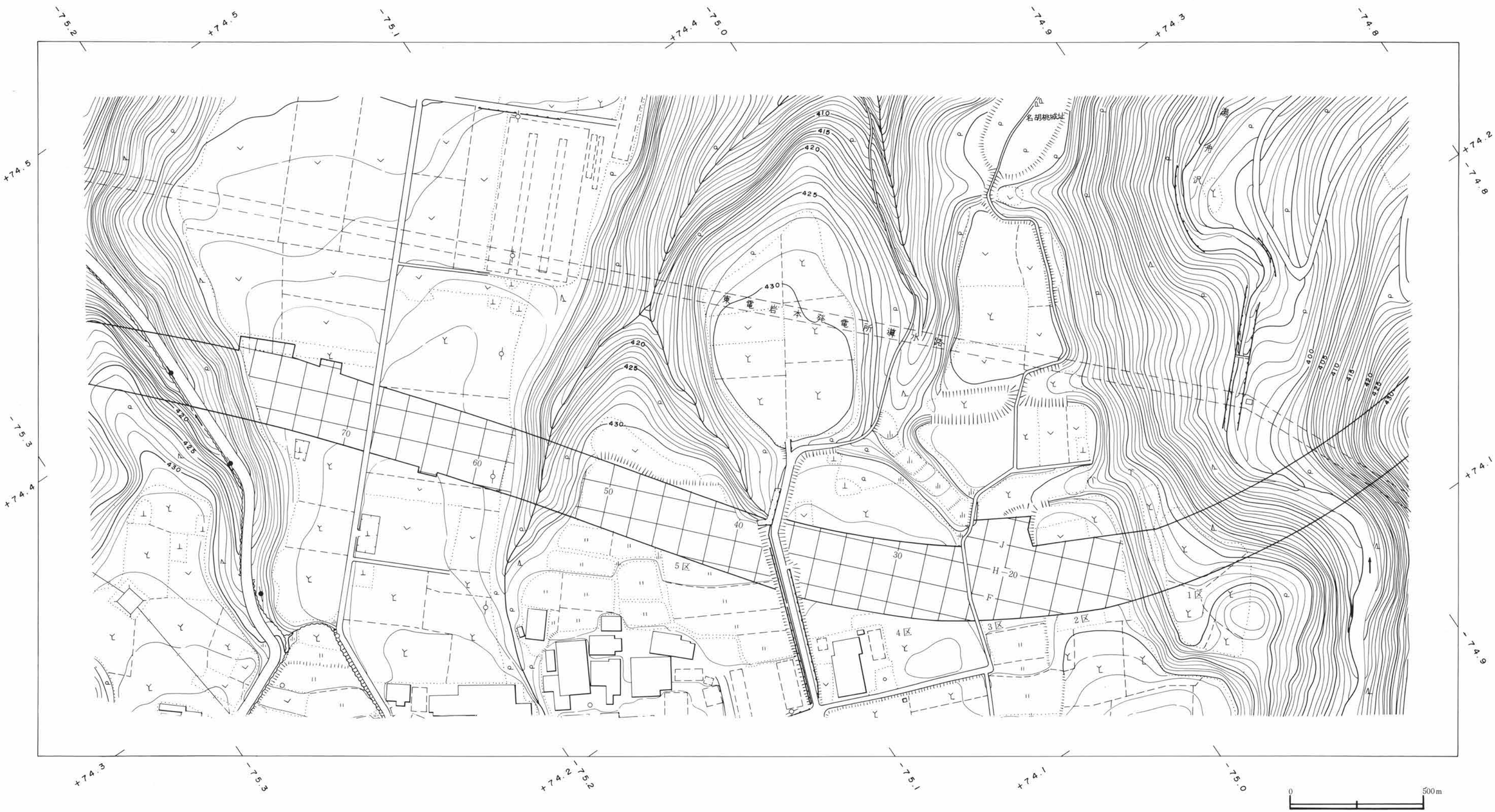
中・近世における遺跡は、中世末の戦乱期から近世前半における、城跡およびそれに関連した遺構等で知られている。城平遺跡の調査においては中世末と考えられる。名胡桃城の馬出部分の一部が、月夜野バイパス道部路線内にあり、発掘調査を実施した。この城跡とほぼ同じ時期の城跡として、赤谷川北側に小川城跡が知られる。この城は中世末から近世初めにかけて使用されており、国道291号線の改良工事に伴い、二の丸推定地域の一部が調査された。薮田東遺跡においては、墓坑より、火縄銃の鉛玉が出土しているものや多くの掘立柱建築遺構が確認されており、また、同じく薮田・洞遺跡においても、多くの掘立柱建築遺構が調査されている。これらの多くは、中～近世に属すると考えられている。また国道291号道路改良工事に伴い菩提木遺跡[19]では、経塚一基が発掘調査され、一字一切経を多数検出している。

このように、月夜野地区においては、旧石器時代以来、多くの遺跡が発掘調査されており、今日しだいにその成果が公表されつつある。

（中沢　悟）

**註**

(1) 尾崎喜左雄「毛野」『日本考古学講座５』昭和30年
(2) 『小川城址』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1981
(3) 『薮田東遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
(4) 「善上遺跡」「三峰神社裏遺跡」『年報２』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
(5) 大江正行・神谷佳明・麻生敏隆「後田遺跡」『年報２』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
(6) 『三後沢遺跡・十二原II遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
(7) 『大原II遺跡・村主遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984
(8) 『梨の木平遺跡』群馬県教育委員会　1977
(9) 下城　正・西田健彦・新井順二「群馬県深沢遺跡配石遺構」『日本考古学年報22』日本考古学協会　1979
(10) 秋池　武「須摩野遺跡」『緊急文化財調査報告書』群馬県教育委員会　1983
(11) 前沢和之・清水和夫・下城　正「69・70地区」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ｉ』群馬県教育委員会
能登　健・中里吉伸「大原遺跡（70地区）」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報II』群馬県教育委員会　1975
(12) 尾崎喜左雄『月夜野町上津遺跡調査報告』1954なお、この報文はガリ版刷りのものである。本遺跡は「上津遺跡」として報告された。1982年の『関越自動車道地域埋蔵文化財分布調査報告書』では「天神遺跡」の名称が使用されている。本報告では小字名をとり「天神遺跡」とした。
(13) 『上毛古墳総覧』群馬県　1938
(14) 中束耕志「前田原遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報　VI』群馬県教育委員会　1980
(15) 能登　健「前中原遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報　IV』群馬県教育委員会　1978
(16) 下城　正「薮田遺跡」（78地区）『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報　V』群馬県教育委員会　1980
(17) 下城　正「洞Ｉ・II遺跡（76地区）」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報　VI』群馬県教育委員会　1980
(18) 『土器部会研究資料№２』群馬歴史考古同人会　1983
(19) 「菩提木遺跡」『年報１』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982




第2図　遺跡周辺の地形図

# 第Ⅲ章　調査の方法と経過

## 1　調査の方法

城平遺跡は昭和53年の路線踏査時に縄文時代前期の住居址の存在が予想されていた他、群馬県指定史跡の名胡桃城址・馬出堀の一部を路線が通過することから、城址に関連する遺構・遺物の存在が確実に予想された。初年度調査は2地区（城平・諏訪地区、約8,500m²）について行った。調査時点では名称の区別は行わなかったが、整理段階では両地区の内容が異なるために城平遺跡（A地点・st148～159）・諏訪遺跡（B地点・st160～165）と呼称した。

調査に入った時点で、諏訪地区の未買収地を除いて各地点で試掘調査を行った。試掘に際しては5×5mグリッドを設定した後、2×4mのトレンチによって行い、遺構・遺物・土層等の状況を把握した後、本調査を行った。この結果から、城平遺跡Ⅰ区では従来、指摘されていたような人為的な堀跡は認められず、遺物の出土もないことが確認された。Ⅱ区では、縄文時代前期の住居址と土坑が数基確認され、Ⅳ区では、多数の柱穴と土坑が確認された。Ⅲ・Ⅴ区からは、数条の溝状の落込みが認められた。遺物はⅢ区の暗渠部分から出土したのみである。調査は、これらの内容をふまえ、以下の方法で実施した。

1.　調査は「グリッド方式」によることとした。

まず、調査地区内に任意の基準線（Hライン）を設定し、5×5mのグリッドを設定した。グリッドの呼称は城平地区から諏訪地区方向へ5mごとに1～82までの番号、西から東方向へA～Oまでのアルファベットを与え、東北コーナーの名称で呼ぶことにした。

2.　調査は5×5mのグリッド内に2×4mのトレンチを設定し、手掘りによる土層、遺構・遺物の確認を行うこととする。

3.　図面は基本的には、平面・断面図とも縮尺1/20で作図することとした。

4.　写真は基本的には、6×9版ブロニーサイズを使用し、補助的に35mm版を使用することとした。

5.　調査の体制及び期間については次のとおりとした。

調査の期間　　昭和56年4月28日～同12月25日　　担当者　中沢　悟・原　雅信・岩崎泰一

## 2　調査の経過

第1年度調査については、当初より群馬県指定史跡の名胡桃城址馬出部分に路線がかかると言うことで、その保存対策が懸案事項として問題となっていた。何度かの協議の結果、全面的に埋戻し、水路等についても配慮するということで合意に達し、調査に入ることになった。また、この他にも、部分的に諏訪地区で未買収部分が残っており、必ずしもスムーズに調査は行えなかった。調査は分散することが多かったが、11月1日には現地説明会を開催し、地元を中心に約200名の参加があった。調査は4月27日の機材搬入より12月23日の機材搬出まで約8カ月に亙った。以下、各地点での調査経過を略記する。

調査は、4月30日より開始した。各地点の層序・遺構・遺物の有無等を確認するためにトレンチを設定し、

予備調査とした。未買収地等諸々の事情で一部で予備調査と本調査を並行して行うこととした。

Ⅰ・Ⅱ区。5月下旬より、Ⅲ区と並行して調査を開始した。全体に著しく攪乱を受けており、遺構の検出状況は良好ではなかった。Ⅱ区で縄文時代前期の住居址1軒・土坑5基を調査して、6月上旬に調査を終了した。

Ⅲ区。浅い沖積地を利用した水田部分と馬出部分。水田部分については5月上旬より、Ⅱ区と並行して調査を開始した。浅い溝状の落込みの他は何ら検出されず、土層図を作成して6月上旬に調査を終了した。馬出部分については、保存問題の合意が得られず、調査を開始したのは9月下旬であった。10月上旬に路線にかからない馬出部分の土地所有者・高橋いし氏と借地契約を行った。11月下旬には馬出部の出入口部分と想定される町道部分の調査を計画し、月夜野町と中村地区長の承認を得た。馬出部分の調査は11月20日をもって終了し、山砂を入れて全面的に埋戻した。

Ⅳ区。6月上旬より、調査を開始した。予備調査の結果から、遺構が全面に広がることが想定されたため重機を使用して全面的に表土を除去した。8月より全面調査に入り多数のピット・土坑を調査して終了した。

Ⅴ区。6月上旬より、調査を開始した。数条の溝状の落ち込みを確認。同下旬に調査を終了した。

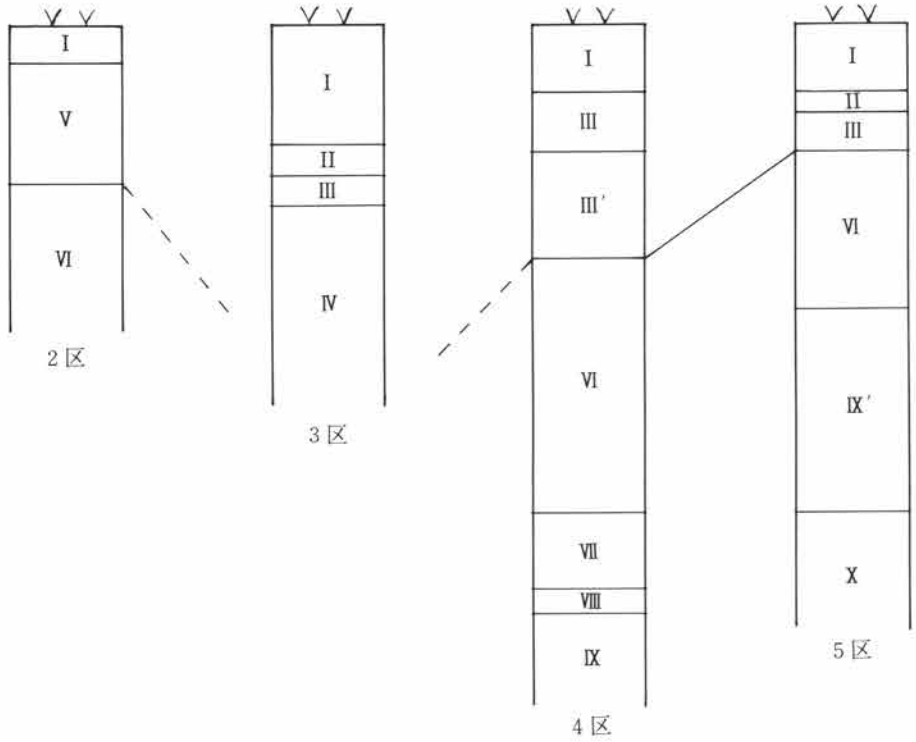
410
415
420
425
430
435
1住
1土
2土
3土
4土
5土
6土
7土
8土
9・10土
1掘立
2掘立
3掘立
4掘立
5掘立
0
1:400
20m

第3図　城平遺跡全体図

# 第Ⅳ章　基　本　土　層

本遺跡では、地点毎に土層の堆積状態が著しく異なって観察された。周辺の地域は通称「名胡桃平」と呼ばれる平坦な台地形が広がっているが、各地点で観察された土層からは現在に至るまでに外見とはかけはなれた複雑な過程を経ていることを示している。本遺跡では厳密な意味での地質学的検討を行っていないが、遺跡周辺には小規模な湧水が存在すること、欠水地帯であるがために近世の新田開発が「ため池」によったことなど扇状地地域に見られる諸要素が認められる。

本遺跡は基本的には、赤谷川の最上位段丘面上に位置するが、上述した理由により、段丘地形と扇状地地形が複合した地形と見ることができる。



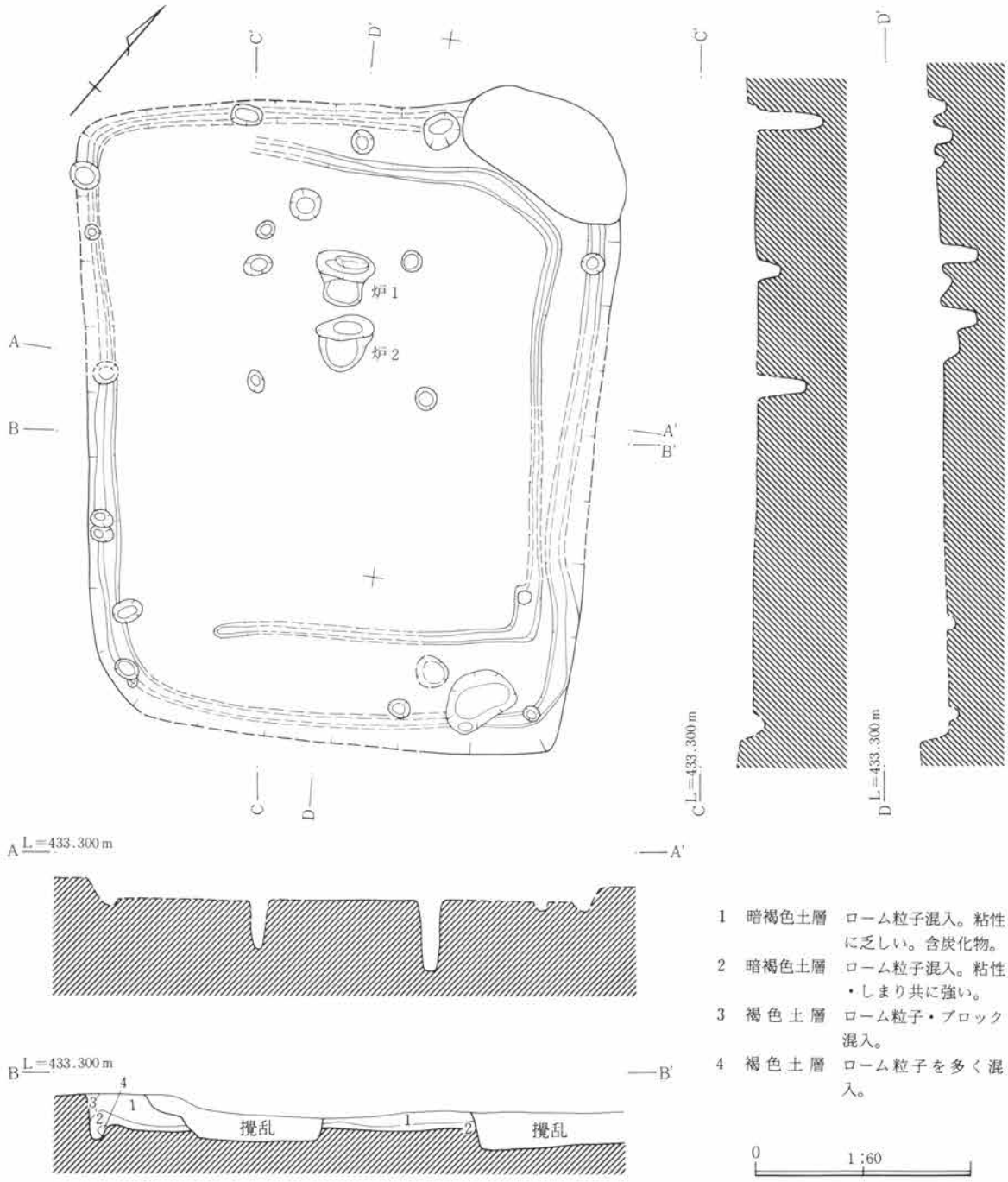

| | | |
|---|---|---|
| I層 | 表　土　層 | |
| II層 | 赤褐色土層 | 鉄分の沈着により生成、通称「ニガド」 |
| III層 | 黒色土層 | 灰白色パミス（F・P、二ツ岳降下軽石層）を混入。 |
| IV層 | 暗褐色土層 | 粘土・しまり共に強い。 |
| V層 | 黄色ローム層 | |
| VI層 | 褐色粘土層 | しまりが強く、小礫を混入。 |
| VII層 | 褐色粘土層 | しまりが強い。上層に比べて粘質化している。 |
| VIII層 | 砂質土層 | 白色粘土層を間に挾む。 |
| IX層 | 礫層 | 径50cm大の溶結凝灰岩を多く含む。IX'層は小円礫・砂質土からなる。 |
| X層 | 青色粘土層 | 砂質で比較的粒度は粗い。 |

第４図　城平遺跡基本土層図

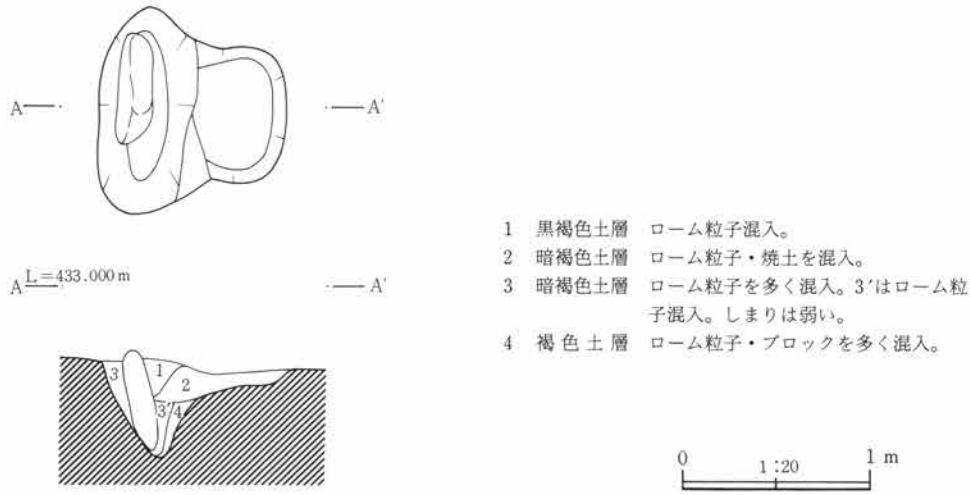
# 第Ⅴ章　検出された遺物と遺構

## 第1節　縄文時代の遺構と遺物

### (1) 住 居 址




第5図　1号住居址実測図




第６図　１号住居址炉実測図

**１号住居址**（第５図）

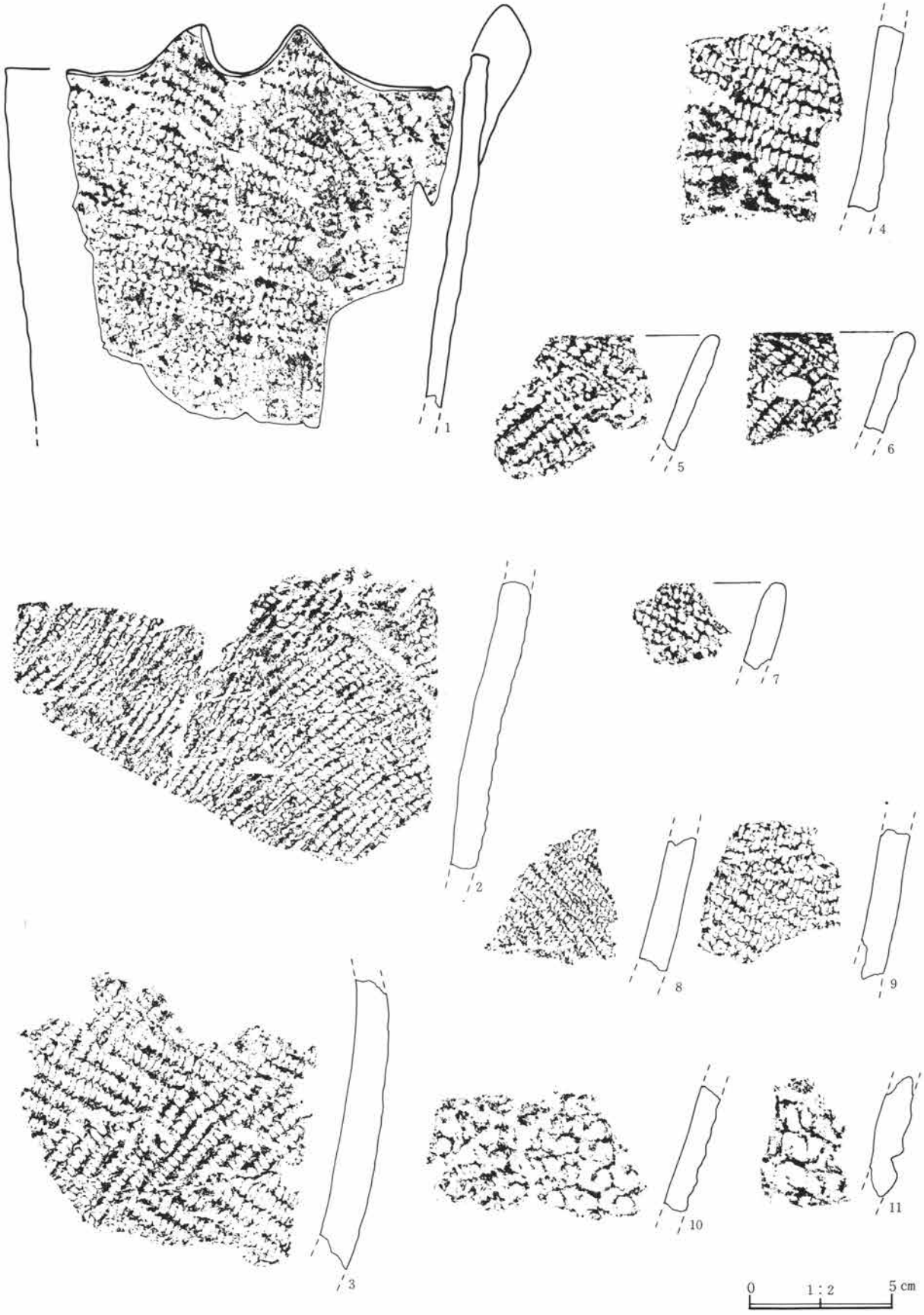
本住居址は調査区南端の湯舟沢に面した台地上に占地し、Ｉ―15グリッドを中心として検出された。住居址は昭和48年の踏査の段階でその存在が認められた程で、通称「イモ穴」と呼ばれる耕作坑により、その大半が失なわれ、辛うじて住居址の規模・形状等が把握されたに過ぎない。住居址北東コーナー部で土坑と切り合い関係がある。

本住居址の規模、および、形状は長軸5.85m、短軸（北壁側5.05m・南壁側4.45m）を測り、台形に近い形状を呈している。主軸方位はＮ―39°―Ｗを測る。壁高は西壁側で約15cm・東壁側で10cmを測り、ほぼ垂直に立上がっている。床面はローム層を掘り込んで構築されており、残存部では良好な状態で検出されている。周溝は北東コーナー付近で一部乱れるが、西壁側で１列、西壁を除く各壁側で２列確認されている。深さは約10～15cmを測る。柱穴は総計21本が検出された。攪乱が激しいため、不明瞭な部分が多いが、主柱穴６本、ないし、８本と壁際の支柱穴の組み合わせからなるものと思われる。支柱穴は西壁側で比較的良好に検出されている。炉址は２ヶ所（炉１・２）で検出された。いずれも、楕円形状を呈する掘り込みの部分と半円状の浅い掘り込みの部分からなっている。炉１の床面は良好に焼成を受けていた。炉内には扁平な自然石が立て掛けられた状態で埋めこまれており、その上半部分は赤化していた。炉２は焼成を受けた痕跡は明確にし得なかったが、位置的にも形態的にも炉としての機能をもっていたと考えられるもので、埋土は黒褐色土を主体として一次埋没した後に、ローム土を主体とした褐色土により貼床されていることを確認している。

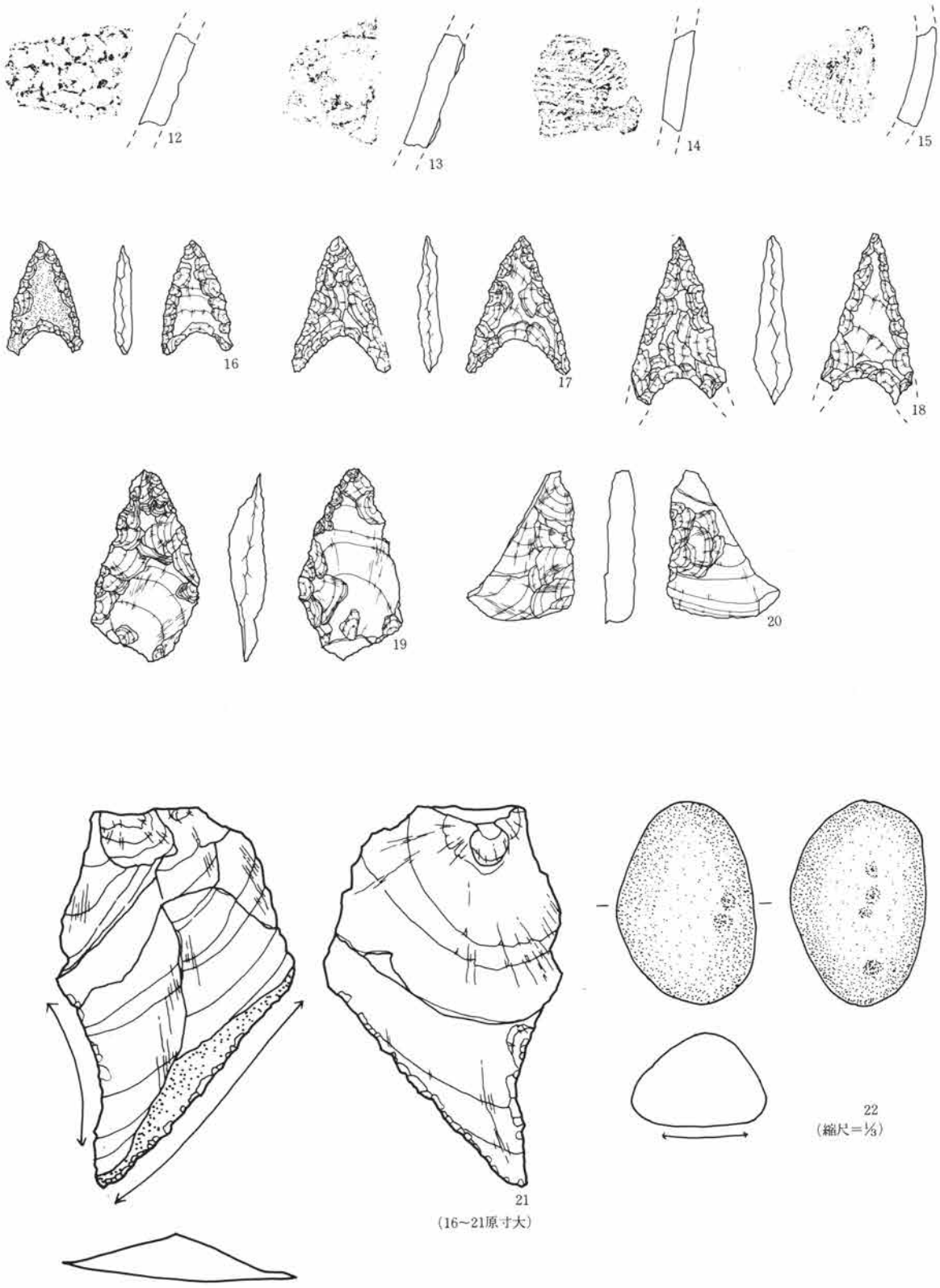
本住居址は炉１・２とも同様な構造をもつこと、炉２が貼床されていること、および、周溝のあり方等から集団の移動を介在とした「建て替え住居址」と見ることができよう。

住居址埋土は３層からなり、しまりの強い暗褐色土を主体として自然堆積状態を示していた。

遺物は総数22点と非常に少ない。（第７図１・図版第８図１）が住居址北西コーナー付近より床直で、南東コーナー付近の周溝中より石鏃（未製品１を含む）・剝片類（第８図・図版８図）が集中して出土している他、埋土中より土器片・10数片が出土している。




第７図　１号住居址出土遺物（１）




第８図　１号住居址出土遺物(2)

**遺物観察表(1)**　（第７・８図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 部位 | 出土位置 | 文様・整形の特徴 | ①胎土 ②色調<br>③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7－1<br>8－1 | 片口注口 | 口縁部 | 覆土 | 注口部はやや外側に張り出し、口縁両方に山形の隆起物を施す。器面には、不規則なＲＬ（横位）が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－2<br>8－2 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器面にＬＲ横位、器内面は平滑であるが、多少繊維が露出する。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－3<br>8－3 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器面にＲＬ、ＬＲ横位帯状施文による羽状縄文が構成される。器内外面に多少繊維が露出する。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－4<br>8－4 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器面にＲＬ横位。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－5<br>8－5 | 深鉢 | 口縁部 | 埋土中 | 器面にＬＲ横位。口縁近くに附加条第２種がみられる。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－6<br>8－6 | 深鉢 | 口縁部 | 埋土中 | 器面にＬＲ横位。口縁近くに附加条第２種がみられる。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | ５と同一個体か？ |
| 7－7<br>8－7 | 深鉢 | 口縁部 | 埋土中 | 器面にＲＬ横位。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－8<br>8－8 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器面にＲＬ横位。一部施文方位が不規則となっている。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－9<br>8－9 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器面にＲＬ $r^3$ 横位。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－10<br>8－10 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器面にLOOP（ＬＲ）横位多段施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 7－11<br>8－11 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器面にLOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 8－12<br>8－12 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器面にLOOP（ＬＲ）横位多段施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 8－13<br>8－13 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 胎土中の繊維が器内面に露出し、横走する繊維痕が明瞭にわかる。波状の低い隆帯文が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 8－14<br>8－14 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器外面に条痕文が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 8－15<br>8－15 | 深鉢 | 胴部 | 埋土中 | 器外面に条痕文が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 形状・調整加工の特徴 | 石質 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8－16<br>9－16 | 石鏃 | 長 1.9<br>厚 0.3 | 埋土中 | 「凹基無茎鏃。」側縁部にやや丸味をもち、「返し部」に反りが見られる。<br>礫表皮を残し、素材の縁辺に微細な剝離を施すことにより作出されている。 | 珪質頁岩？ | 重 0.5 |

**遺物観察表(2)**　（第8図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 形状・調整加工の特徴 | 石質 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8－17<br>9－17 | 石鏃 | 長 2.2<br>厚 0.4 | 周溝内 | 「凹基無茎鏃。」側縁部にやや丸味をもつ。断面D字状を呈す。<br>表面は微細な剥離により全体が被われ、裏面に第1次剥離面を部分的に残す。 | 黒色頁岩 | 重 0.68 |
| 8－18<br>9－18 | 石鏃 | 長 (2.8)<br>厚 0.6 | 周溝内 | 「凹基無茎鏃。」側縁部は直線的な形状を呈す。「返し部」は欠損。断面形はD字状を呈す。<br>表面は微細な剥離により全体が被われる。裏面に第1次剥離面を大きく残し、縁辺のみに微細な剥離を施す。 | 黒色頁岩 | 重 (1.31) |
| 8－19<br>9－19 | 石鏃 | 長 3.2<br>厚 0.6 | 周溝内 | やや幅広の縦長剥片を素材とする。基部を除く表裏両面に微細な剥離を施す。 | 珪質凝灰岩<br>（玉髄質） | 未製品<br>重 2.61 |
| 8－20<br>9－20 | 剥片 | 長 2.5<br>厚 0.5 | 埋土中 | 剥片末端部がヒンジフラクチャー状になる縦長の剥片を素材とする。剥片は節理面で欠損。側縁部に表裏両面より微細な剥離を施す。 | 珪質頁岩 | 調整痕ある剥片<br>重 (1.71) |
| 8－21<br>9－22 | 剥片 | 長 6.3<br>厚 0.8 | 埋土中 | 接合資料。先細りの縦長剥片で、打面を大きく残す。左右両側縁に微細な刃こぼれが認められる。 | 珪質頁岩 | 使用痕ある剥片 |
| 8－22<br>9－21 | 磨石 | 長 3.3<br>厚 4.5 | 埋土中 | 平面形は楕円形状。断面D字状を呈す。熱を受けており、全体に赤化、ススが付着している。部分的に打痕が認められる。 | 安山岩？ | 打痕あり |

## (2) 土　　坑

縄文時代の土坑と考えられるものは総計5基が検出され、II区のみに分布する。土坑の遺存状態は耕作がローム層にまで及び、極めて悪い。

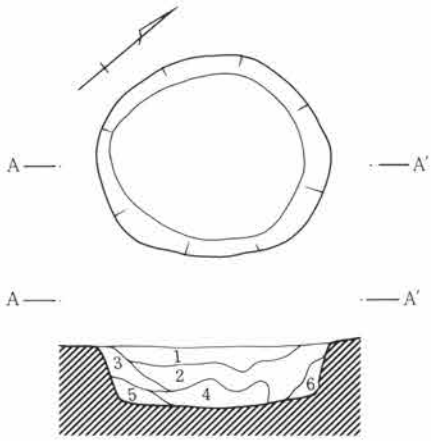
検出された土坑は、円形状を呈するものと楕円形状を呈するものの二形態が認められる。円形を呈する土坑（1・2号土坑）は径50～60cm、深さ20～40cmを測る。坑底はフラットで、壁はほぼ垂直に立上がる。楕円形を呈する土坑（3・4号土坑）は長軸80～90cm、短軸40～50cm、深さ30～40cmを測る。坑底はフラットで、ピット痕は認められていない。

5号土坑は中間的な形態を呈するもので、平面確認時は図に見られるように中央部にロームブロックを主体とする褐色土が認められ、所謂「風倒木痕」と同様なあり方を呈するものであった。土層図、および、完掘状態から、土坑が廃棄後、完全に埋没する以前の段階で、人為的に埋められたものと思われる。

なお、4号土坑は住居址と切り合い関係にある。土坑と住居址との新旧関係を明確に把握することはできなかったが、調査時の所見では、土坑を切って住居址が存在していたものと考えられた。

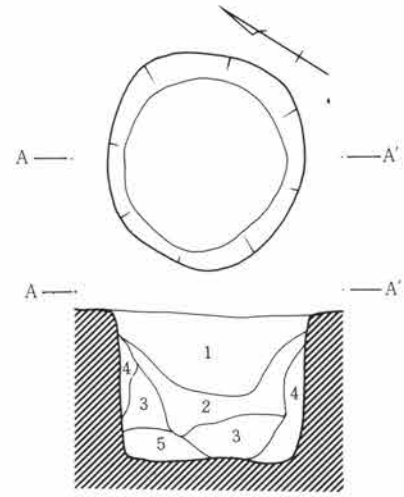
各土坑の埋土はいずれも白色パミスを混入する暗褐色土を主体として自然堆積状態を示すものがほとんどであった。出土遺物は4号土坑から土器片1点のみ検出された。

1号土坑



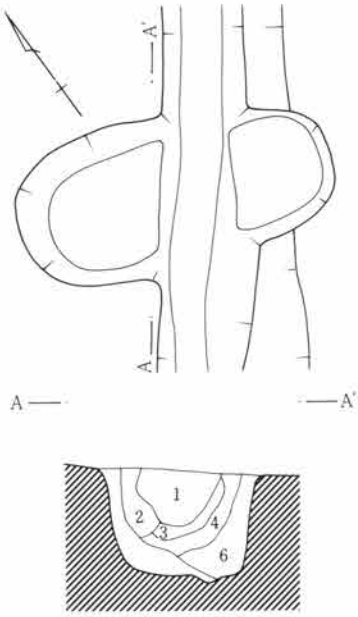

1　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に乏しい。
2　黒褐色土層　1層よりやや明るい色調を呈し、しまりは強い。
3　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性に乏しい。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。含炭化物。
5　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。しまりは弱い。
6　暗褐色土層　ロームブロック混入。

2号土坑



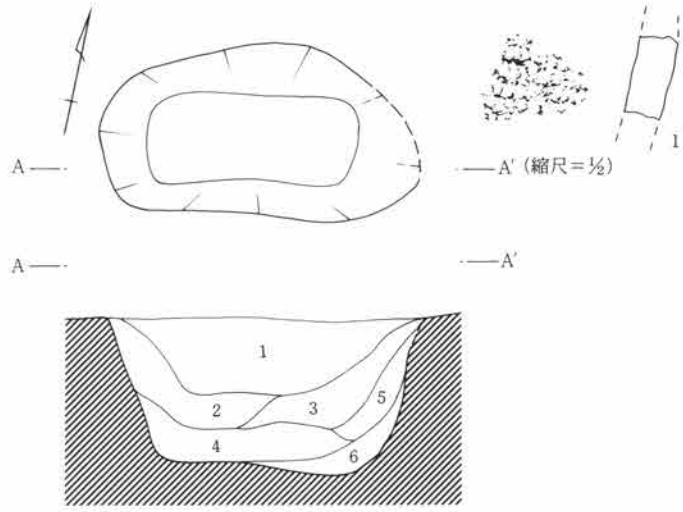

1　黒褐色土層　ローム粒子・白色パミスを多く混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。含炭化物。
3　黒褐色土層　粘性に富み、含炭化物。
4　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。

3号土坑




1　黒褐色土層　ローム粒子混入。含炭化物。
2　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。3層より明るい色調を呈す。
5　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性・しまり共に強い。
6　暗褐色土層　ローム粒子・ブロック混入。

4号土坑

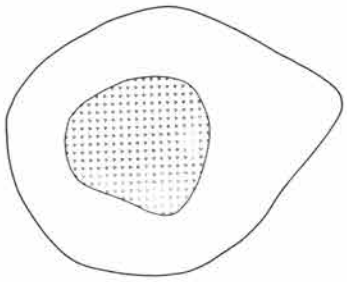



1　暗褐色土層　ローム粒子混入。含炭化物。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。1層よりもやや明るい色調を呈す。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性・しまり共に強い。

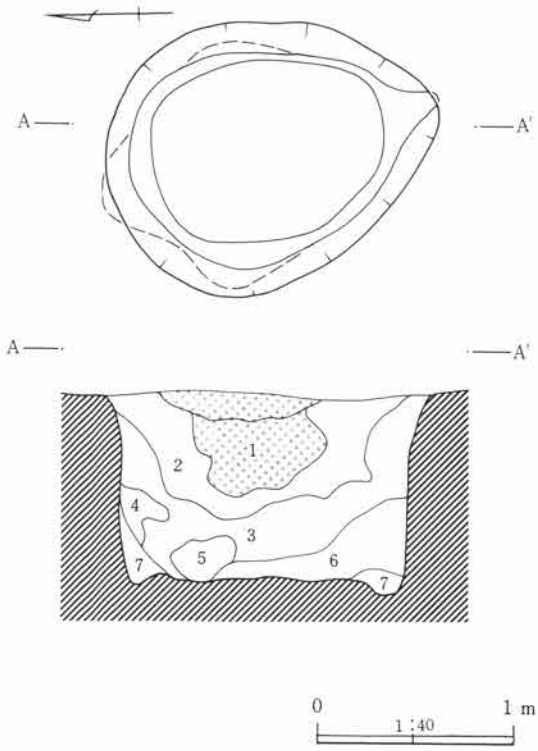
0　1:40　1 m

第9図　1・2・3・4号土坑実測図

５号土坑



５号土坑確認状態




1　褐色土層　ローム粒子・ブロックの混土層。
2　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
6　褐色土層　ロームブロックを多く混入。
7　黒褐色土層　ローム粒子混入。しまりは弱い。

第10図　５号土坑実測図

**土坑一覧表**

| No. | 長　軸 | 短　軸 | 深　さ | 主軸方位 | 形　態 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1.26 | 1.08 | 0.53 | N－43°－E | III | |
| 2 | 1.12 | 1.08 | 0.76 | N－58°－E | III | |
| 3 | 1.68 | 0.8 | 0.58 | N－65°－W | II－a | 耕作溝により切られている。 |
| 4 | 1.74 | 0.92 | 0.82 | N－85°－E | II－a | １号住居址に切られている？ |
| 5 | 1.78 | 1.34 | 1.02 | N－14°－W | II－a | 一部人為的埋土 |

# 第2節　中世～近世の遺構と遺物

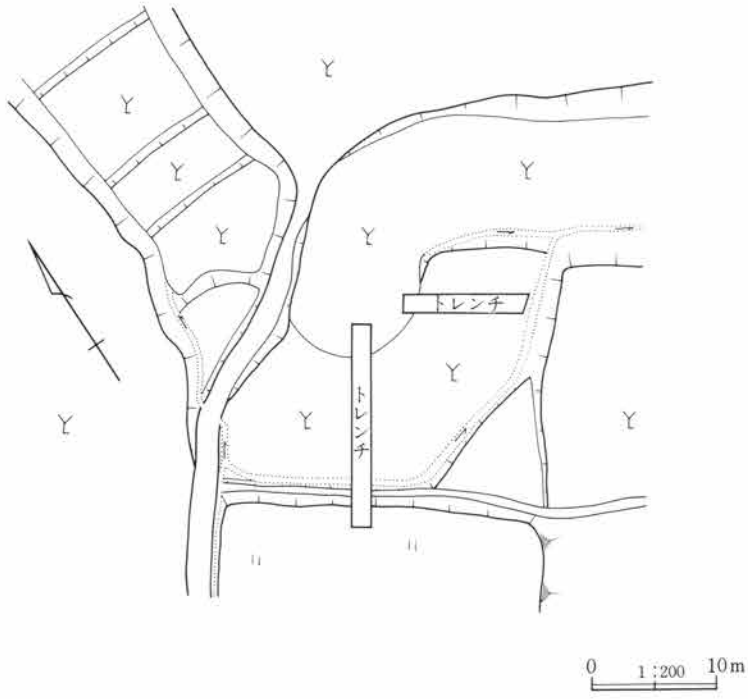
## (1) 名　胡　桃　城　址（馬出堀）

### (1) 調査の経緯

名胡桃城址は、昭和24（1949）年12月20日群馬県指定史跡に指定されている。又同地には、これに先だち大正13（1924）年に名胡桃城址保存会（会長　内海文之助）が設立されており、史跡指定についても同保存会が中心となり計画が進められ、以後保存、整備等についても現在に至るまで主体的に取り組んでいる。このため城址の保存状態は極めて良好であり、県内における中世城郭の代表的存在として広く一般に知られ、近隣小・中学校の歴史教育の場としても活用されている。

月夜野バイパスは、名胡桃城址馬出堀部分を通過する計画となっており、調査開始前から路線変更を含めて、県教育委員会（文化財保護課）との協議をもち、名胡桃城址の現状保存について強く要望した。又、工事主体者である建設省（沼田出張所）に対しても保存対策に関し、設計変更等について協議を行った。これらの協議の中で、現段階における計画変更は困難であるが、発掘調査を先行させ、その結果のもとに再度保存対策を講じると言う内容が示された。発掘調査は、この内容のもとに保存に対し最大限の配慮をすることを前提に実施されることになった。しかし、調査を着手する時点において、すでに路線及びその他関連工事の計画が決定し、なおかつ一部において工事（利根川渡河部高架工事）が開始されていたため、この段階での路線変更は事実上不可能であると言う状態も生じており、最終的にとり得る保存対策は工法上の対応と言う内容まで後退してしまった。

以上のような経緯をもって名胡桃城址馬出堀の発掘調査が実施されることになったが、一部とはいえ、群馬県指定史跡が破壊されようとすることは、大きな問題として残るものであった。




第11図　馬出部状況図

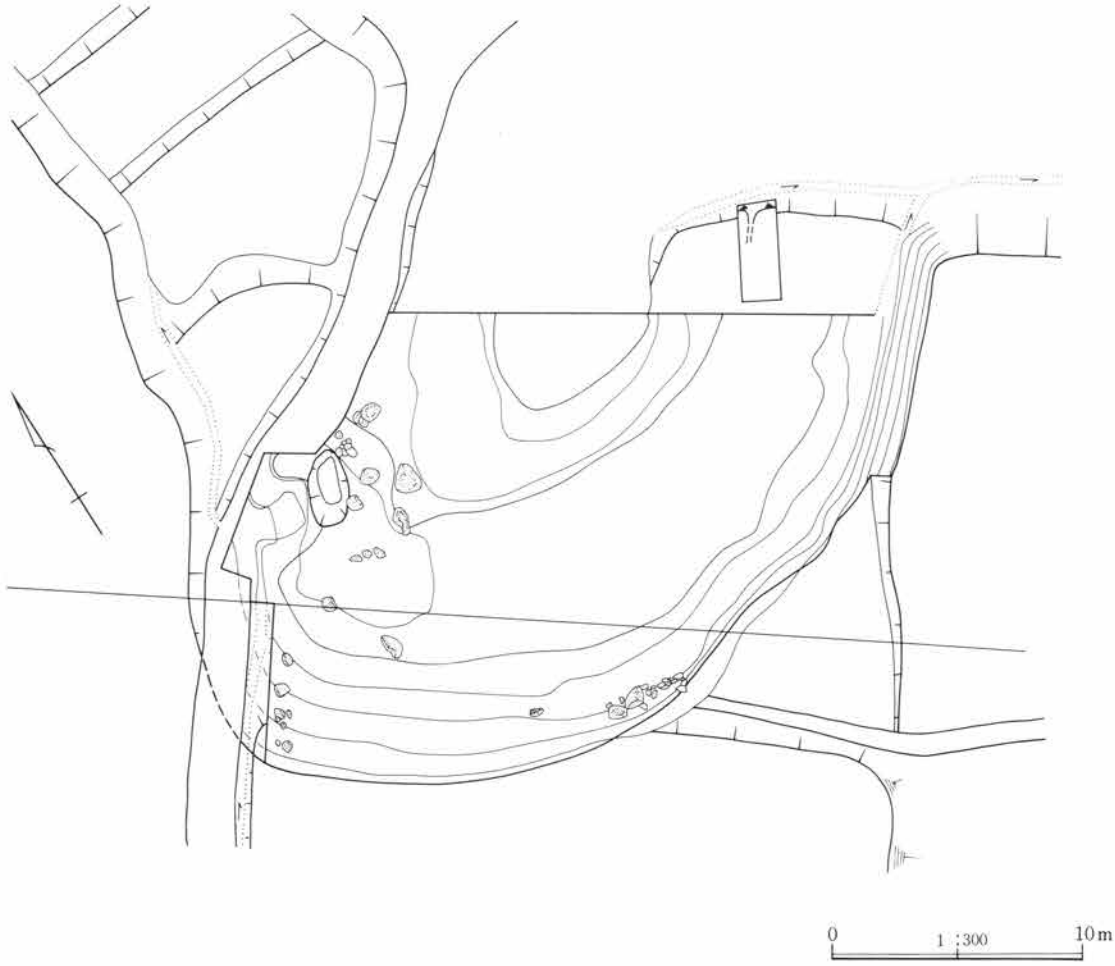
### (2) 調 査 の概 要

名胡桃城址は、利根川右岸段丘上の崖端を利用して構築され、主体部周囲は自然地形を利した防御構造をもっている。又、各郭は堀切りを画しており、馬出は城・西南端にあたる三の丸西側の虎口に設けられている。現状は桑園として利用されているが、前述したように名胡桃城自体保存状態が良好であり、馬出についても旧状をよくとどめており、発掘前においても馬出及び馬出堀の形状についてその痕跡が明瞭に確認されるものであった。現況では梯形を呈しており、角馬出として理解してい

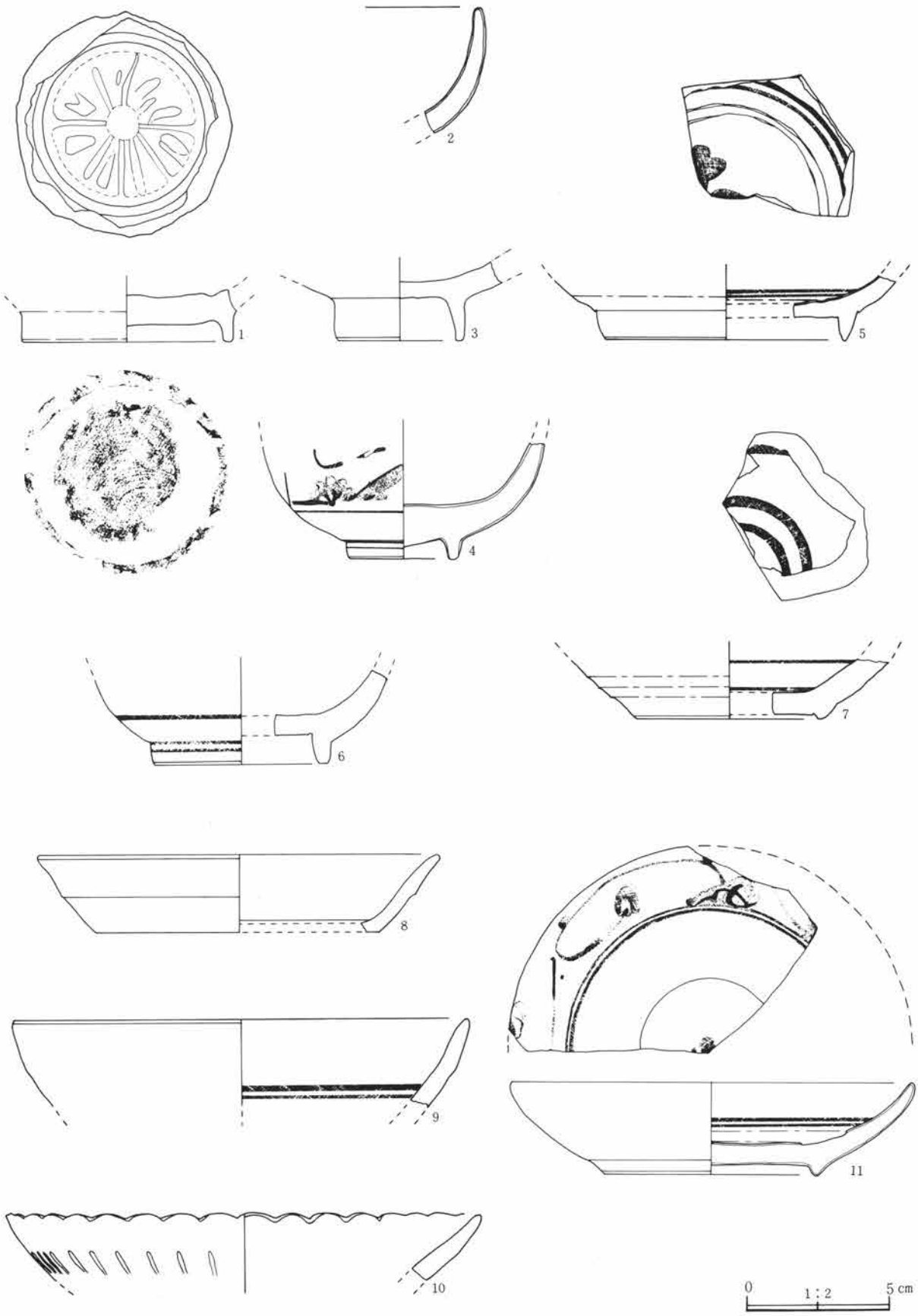
た。なお、一般的に馬出に伴う土塁等の付属施設については現状では認められない。

発掘調査は、月夜野バイパス建設工事に伴い提起されたが、先の経緯のとおり、馬出の保存を前提に実施されたものである。同時に調査に際しては馬出の構造、規模等を含め、最低限概要を把握することも目的として、調査範囲については路線通過分にこだわらず、三の丸側は本堀の手前まで、北側は農道までとした。馬出の平面形は現況で認められるような角馬出を考えていたが、弧状を呈する丸馬出であることが確認された。馬出堀は、西側に向って大きく脹らみをもち、堀巾は最大18m、最小10.5mと不整弧状を呈し深さは平均1.6m前後を測る。底面はほぼ平坦であるが、西側に向ってやや傾斜し、この部分には自然礫が散乱している。又、湧水のため底面はこの部分を中心にかなりぬかるみとなっている。通路については掘り残しによる土橋を用いることが一般的とされるが、名胡桃城に関してはこれにあたる構造物は認められないため、架け橋を利用したことが考えられる。このことに関連して堀西側底部に掘り残しによる張り出し部が検出され、堀巾も狭くなっているため、この部分に架け橋を渡した可能性が強いと思われる。馬出に伴う施設としての土居・塀等の痕跡は認められなかった。遺物は堀中より陶・磁器、木製椀、及び銃丸（１個）が出土している。

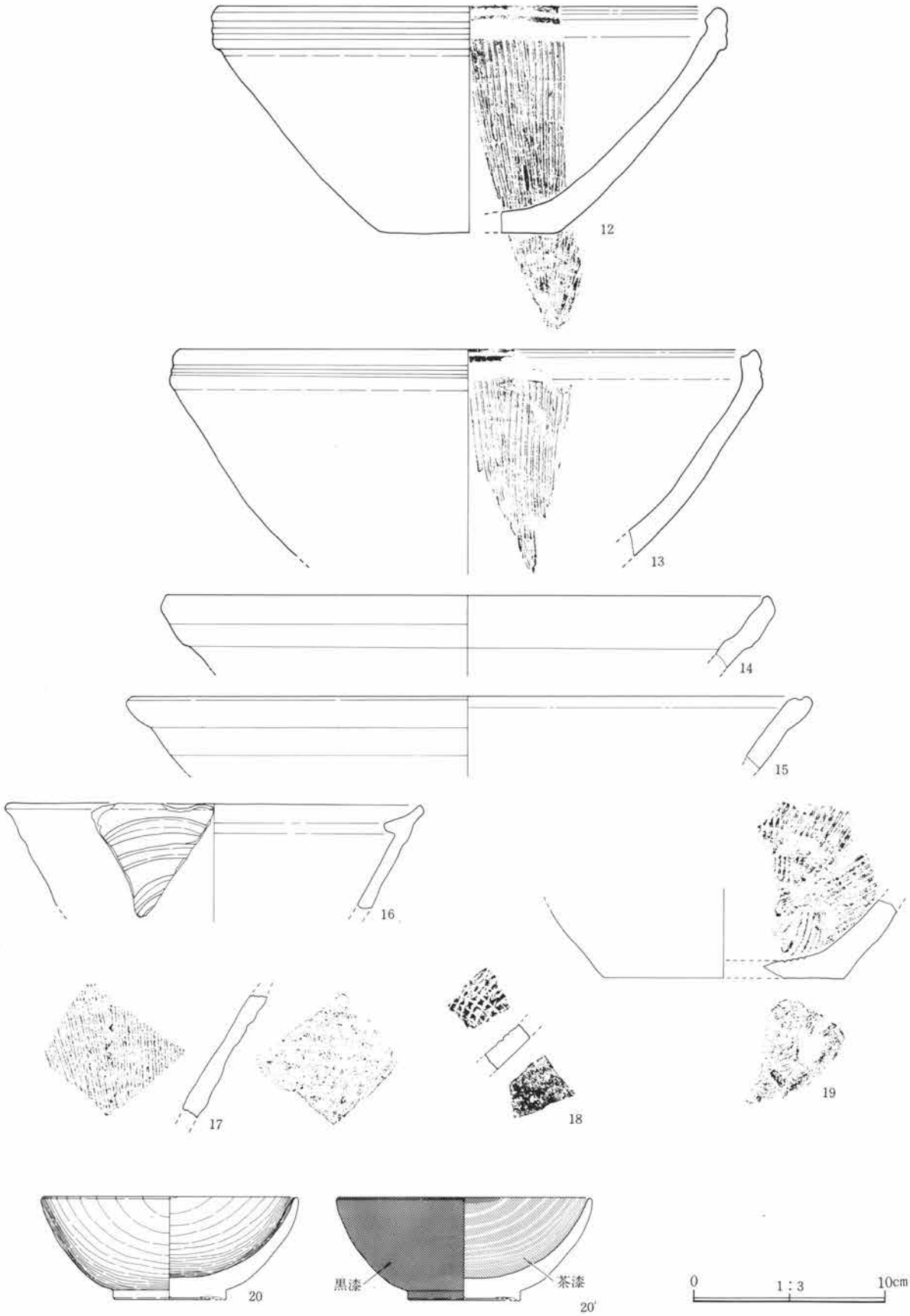
（原　雅信）



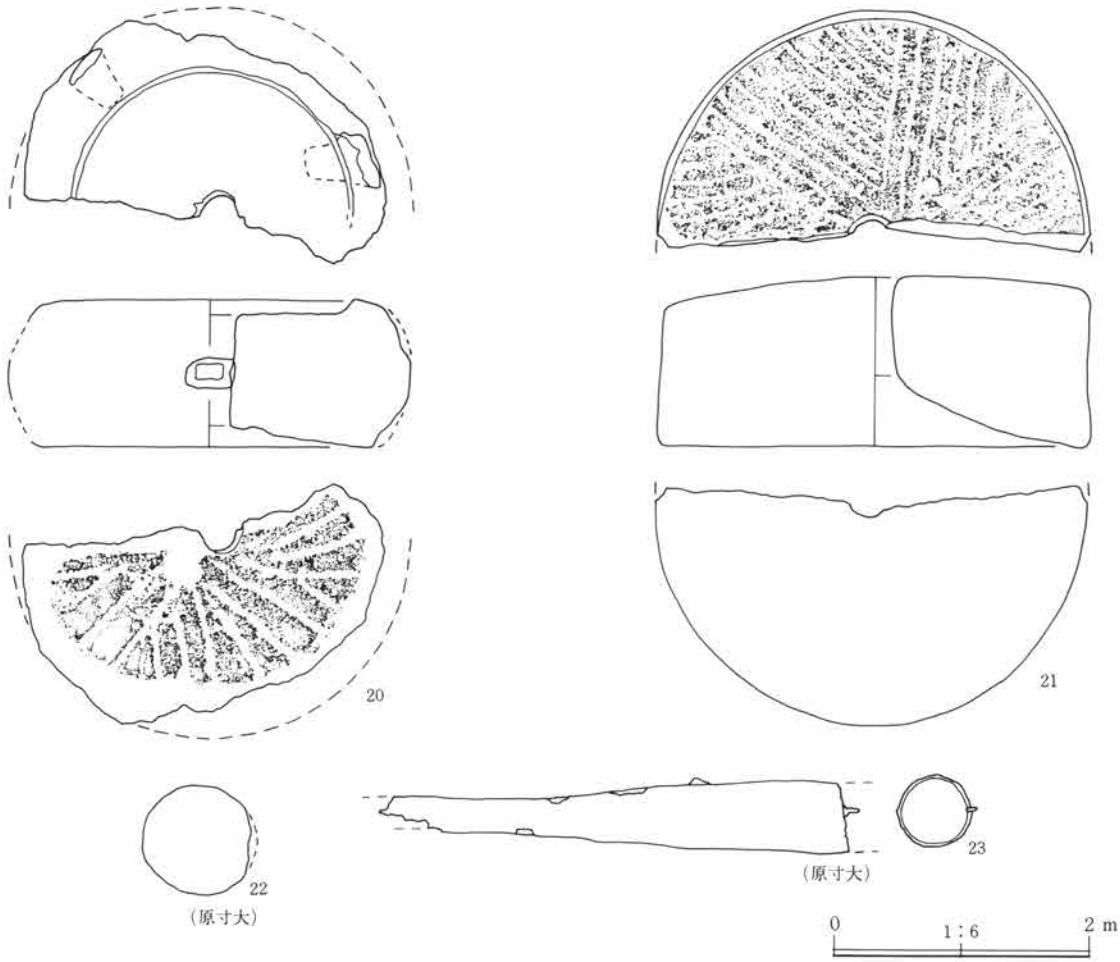

第12図　馬出・馬出堀実測図




第13図　馬出堀出土遺物(１)




第14図　馬出堀出土遺物(２)




第15図　馬出堀出土遺物(３)

**遺物観察表(1)**　　(第13図)

| 挿図番号<br>図版番号 | 焼物種<br>器種 | 量目 | 釉色・胎土 | 特徴 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 13－1<br>9－1 | 陶器　碗 | —— | 釉　黄灰色<br>胎　黄灰色 | 見込部のみ施釉。内面に花文印花あり。高台は糸切り後貼り付高台。轆轤左回り。素地は、ざんぐりしている。 | 美濃焼<br>16C |
| 13－2<br>9－3 | 磁器　染付皿 | —— | 釉　淡灰色<br>胎　黄灰色 | 内外施釉。外面に山呉須を用いた染付施文あり。 | 江戸中期 |
| 13－3<br>9－2 | 陶器　茶碗 | 底　4.4 | 釉　淡黄褐色<br>胎　黄灰色 | 高台端部を除き、内外面に施釉あり。釉中に貫入を生ずる。 | 京焼系<br>江戸前期 |
| 13－4<br>9－7 | 陶器　染付碗 | 底　3.8 | 釉　灰　色<br>胎　灰　色 | 高台端部を除き、内外施釉。釉調は乳濁した灰色で貫入を生ずる。呉須は、山呉須を用いて草文を描く。 | 江戸前期 |
| 13－5<br>9－5 | 陶器　皿 | 底　8.6 | 釉　淡黄色<br>胎　黄灰色 | 体部外面上半から、見込全面施釉あり。見込に重焼きの痕跡あり。体部内面中位に２条圏線。中央に鉄絵施文あり。灰釉。高台は付高台。 | 美濃焼<br>17C前半 |

**遺物観察表(2)**　（第13・14図）

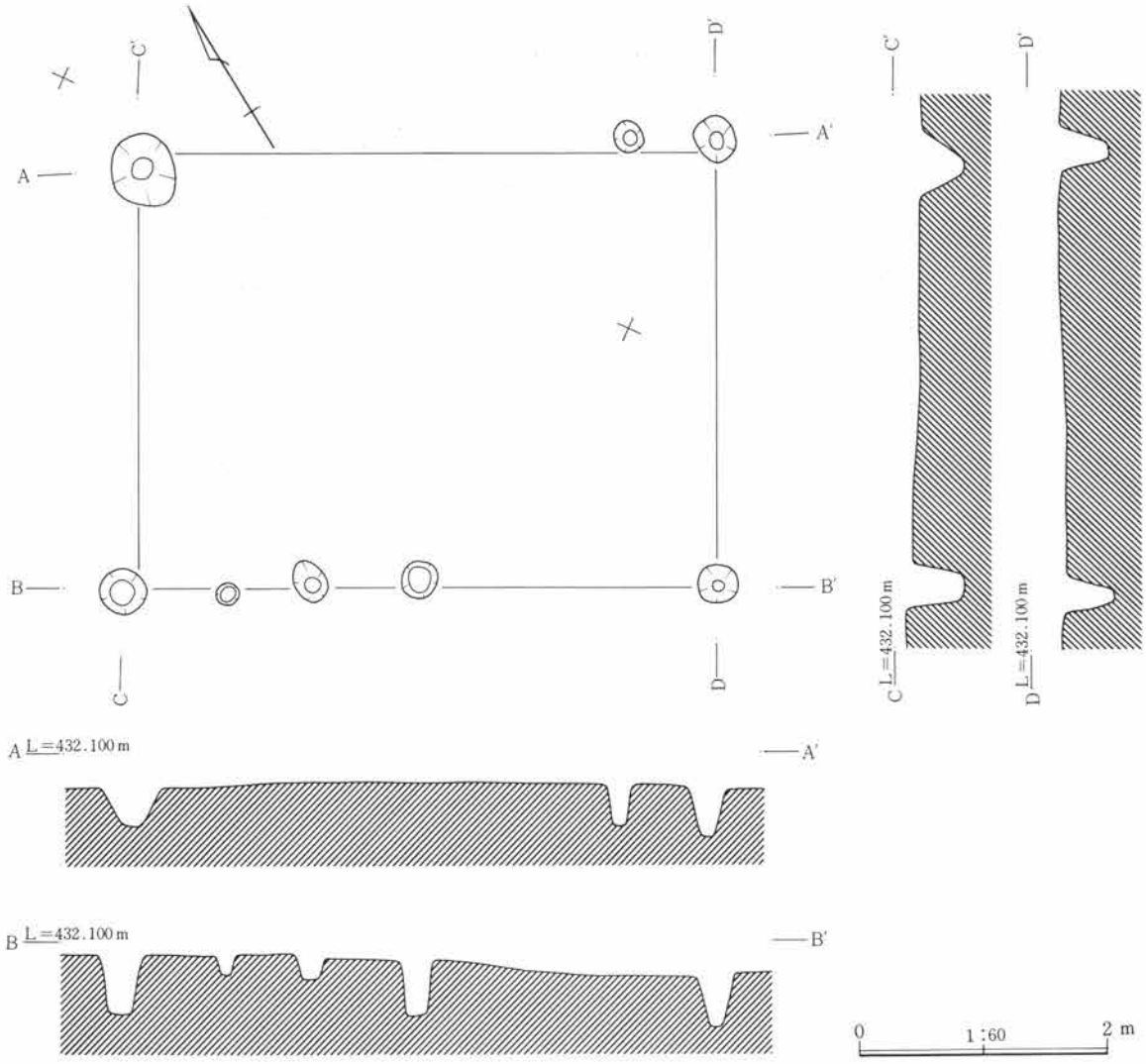
| 挿図番号<br>図版番号 | 焼物種<br>器種 | 量目 | 釉色・胎土 | 特徴 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 13－6 | 陶器　茶碗 | 底　6.2 | 釉　灰　色<br>胎　灰　色 | 高台端部を除き、内・外施釉。釉調は乳濁した灰色で貫入を生ずる。染付は、山呉須を用いて草文を描く。 | 江戸前期 |
| 13－7<br>9－6 | 陶器　皿 | 底　6.4 | 釉　淡黄色<br>胎　黄灰色 | 全面施釉。釉調は灰釉。胎土は、ざんぐりしている。削り出し高台。 | 美濃焼<br>17C |
| 13－8<br>10－9 | 陶器　皿 | 口　14.0 | 釉　淡黄色<br>胎　灰　色 | 底部を除いて施釉あり。灰釉。 | 江戸前期 |
| 13－9<br>10－10 | 陶器　皿 | 口　16.2 | 釉　淡黄灰色<br>胎　淡灰色 | 外面体部上半、内面に施釉。口縁、内面に鉄釉の圏線あり。 | 美濃焼 |
| 13－10<br>9－4 | 陶器　皿 | 口　16.4 | 釉　淡黄色<br>胎　黄灰色 | 菊皿の破片で、口縁はヘラにより、花弁を表わし、体部外面にヘラによる菊花の刻みあり。 | 美濃焼<br>17C |
| 13－11<br>9－8 | 磁器　皿 | 口　8.6<br>高　3.2 | 釉　淡青色<br>胎　白　色 | 高台端部と、見込の蛇目部分を用いて施釉。蛇目部に重焼痕あり。染付は山呉須を用いたくすんだ青色で、草花を描く。見込中央に、こんにゃく判あり。くらわんか皿。 | 江戸中期<br>（波佐見焼か）<br>伊万里系 |
| 14－12<br>10－13 | 陶器　擂鉢 | 口　26.2<br>底　6.0 | 釉　焼　締<br>胎　赤褐色 | 口縁部に１条の沈線あり。口縁部直下外面に２条の沈線あり。体部外面にヘラ削り後、ナデあり。内面におろし目あり。割れ口に漆接合面あり。 | 美濃焼<br>江戸中期 |
| 14－13<br>10－14 | 陶器　擂鉢 | 口　3.0 | 釉　焼　締<br>胎　赤褐色 | 口縁部に１条の沈線あり。口縁部直下の外面に２条の沈線あり。体部外面にヘラ削り後、ナデあり。内面におろし目あり。 | 美濃焼<br>江戸中期 |
| 14－14<br>10－12 | 陶器　鉢 | 口　35.2 | 釉　淡緑色<br>胎　灰　色 | 体部外面に轆轤使用に於ける凹凸あり。口縁部に１条の沈線あり。 | 中世陶器<br>産地不明 |
| 14－15<br>10－11 | 陶器　擂鉢 | 口　31.6 | 釉　茶褐色<br>胎　黄灰色 | 内外面施釉。鉄釉。 | 美濃焼<br>江戸前期 |
| 14－16<br>10－18 | 陶器　鉢 | 口　22.0 | 釉　淡緑色<br>胎　灰　色 | 内外面施釉。釉調は灰釉。外面に渦巻文状の刻線文あり。口縁部は内側にかえりをもち、一方の端部は外反する。折口の口縁。 | 美濃・瀬戸焼<br>15C |
| 14－17<br>10－15 | 陶器　擂鉢 | 底　12.6 | 釉　茶　色<br>胎　黄灰色 | 内外鉄施釉。底面糸切り。内面に14＋$\alpha$本のおろし目あり。 | 美濃焼<br>江戸前期 |
| 14－18<br>10－16 | 陶器　擂鉢 | ―― | 釉　焼　締<br>胎　灰　色 | 底部片か？　内面に２重におろし目が入る。 | 常滑焼<br>16C～17C |
| 14－19<br>10－17 | 陶器　擂鉢 | ―― | 釉　焼　締<br>胎　灰　色 | 内面におろし目あり。外面に轆轤目あり。胎土中に白色鉱物粒を多く含む。 | 常滑焼<br>16C～17C |

## (2) 掘立柱建物址

名胡桃城の「遠見」と呼ばれる地点、Ⅳ区から検出された。当初、城址に関連する遺構の存在が考えられたが、積極的に城址との関連を傍証する根拠は得られなかった。むしろ、採集された遺物は、近世以後の遺物が多い。馬出堀の存在するⅡ区は沖積地であり、現在は水田になっている。この水田は近世以後であることは間違いなく、石臼はこの部分からの出土である。この他にもⅣ区からは、多数の柱穴が検出された。いずれも径が20～40cm、深さが15～50cm程であるが、規格性を見出すことは出来なかった。

**1号掘立柱建物址**（第16図）

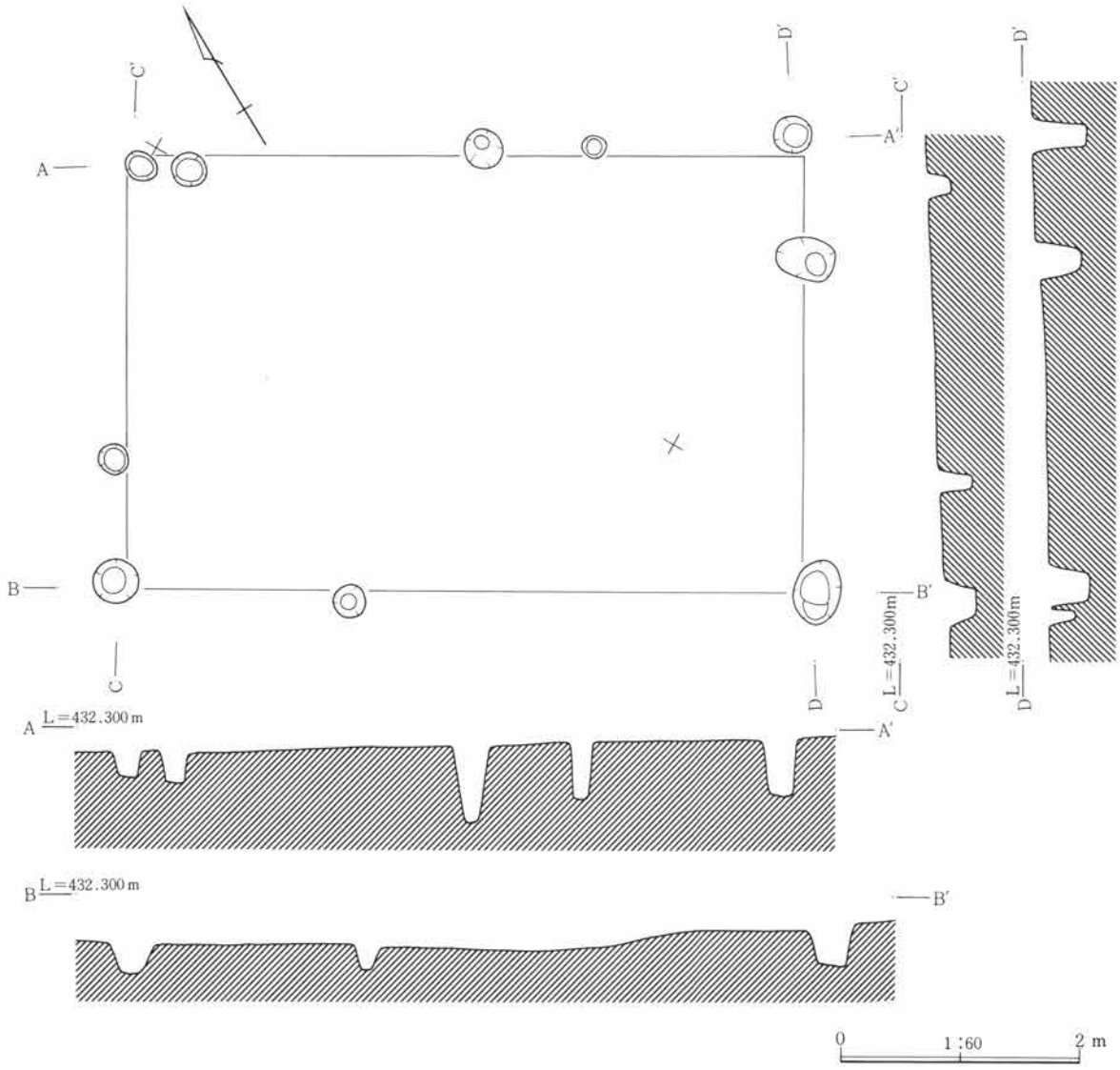
F－27グリッドを中心に位置する。2号掘立柱建物址と一部重複するが、新旧関係については不明である。柱間は以下の掘立柱建物址同様極めて不規則であり、各コーナーの柱穴を中心に構成される。北辺および南辺に存在する柱穴は本址に伴うものか確定し得ない。規模は長辺4.65m・短辺3.45mを測り、面積は16m²、長軸方位はN－60°－Wである。本址に伴う遺物は出土していない。




第16図　1号掘立柱建物址実測図

**２号掘立柱建物址**（第17図）

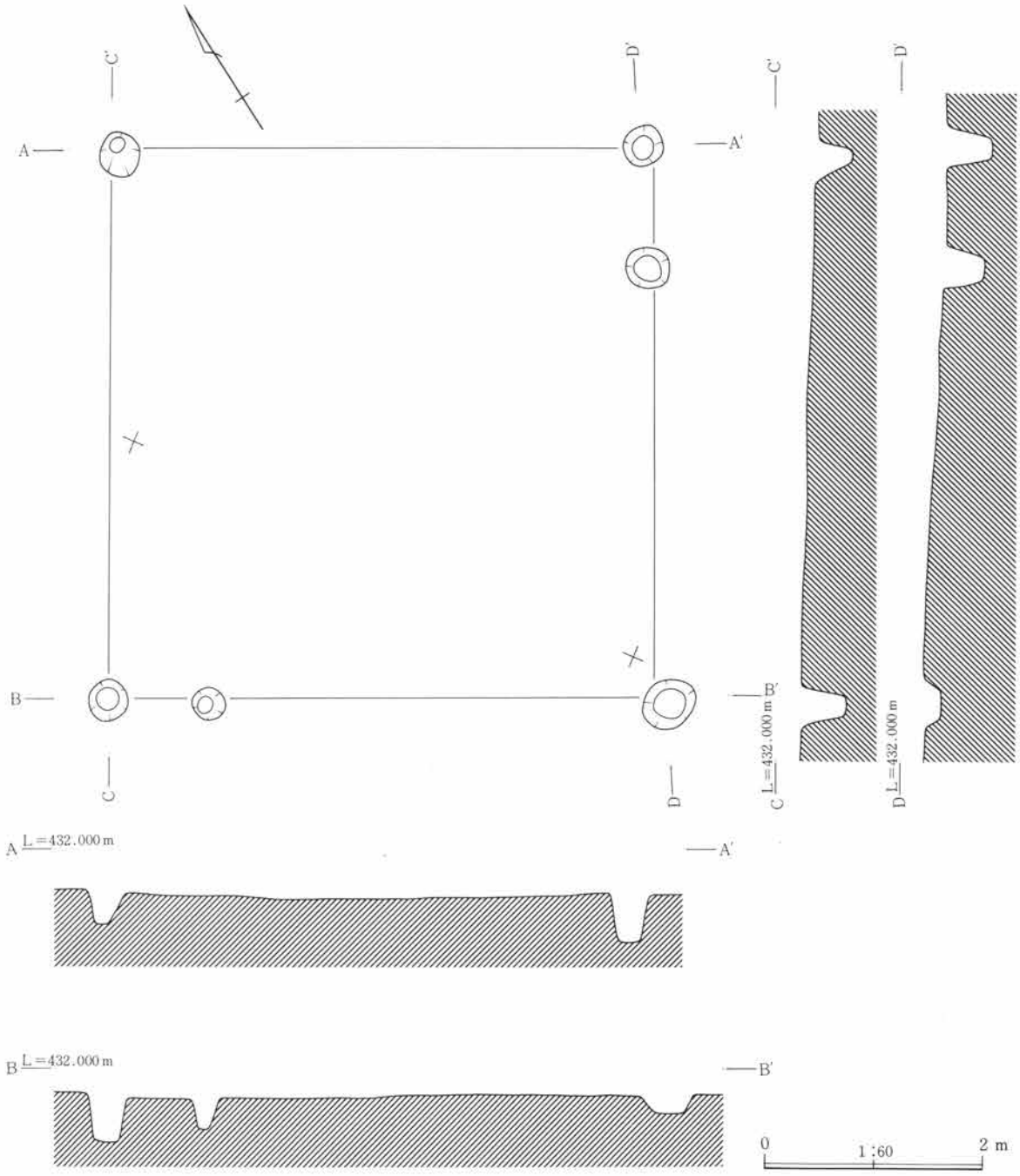
Ｅ－26、Ｆ－26グリッドを中心に位置する。柱間は極めて不規則であるが、柱穴にある程度まとまりが認められるため、掘立柱建物址として摘出した。本址は、各コーナーの柱穴を中心に構成されるが、その間に存在する柱穴については、本址に伴うものであるのか否か確定し得ない。各柱穴の調査については、平面的および半裁により柱痕の確認を行ったが、いずれも不明であった。規模は、長辺5.67m・短辺3.60mであり、面積は20.4m²を測る。長軸方位はＮ－58°－Ｗである。本址に伴う遺物は出土していない。




第17図　２号掘立柱建物址実測図

**3号掘立柱建物址**（第18図）

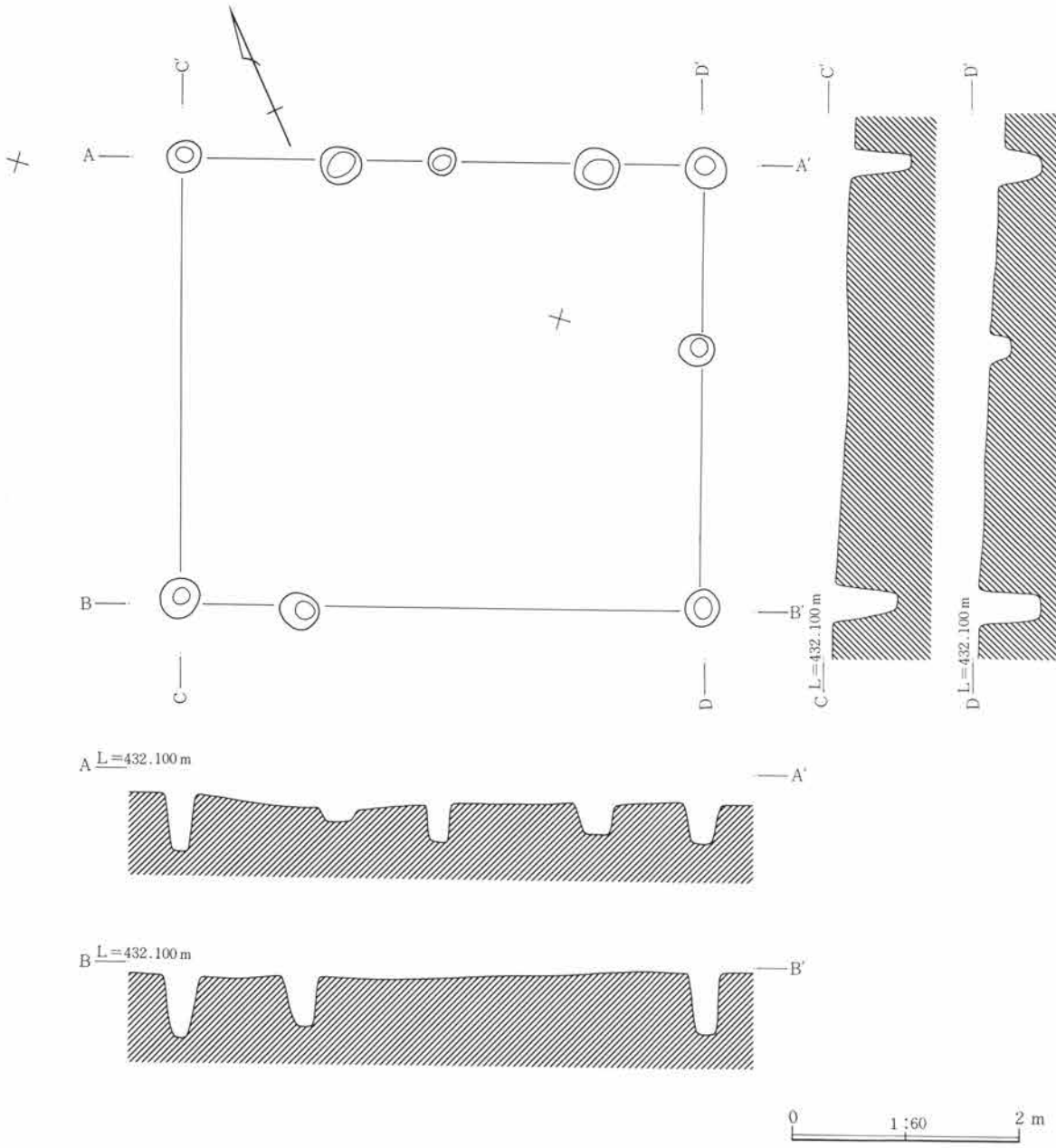
4号掘立柱建物址の北側に位置し、G－29グリッドを中心に広がりをもつ建物址である。近接する他の掘立柱建物址に比し、最も規模が大きなものである。本址は、各コーナーの柱穴により構成される。西辺および南辺に1個づつ柱穴が認められたが、本址に伴うものか確定し得ない。規模は、1辺5m×5mを測り正方形を呈し、面積は25m²である。長軸方位はN－58°－Wである。柱穴掘方は円形を呈し、径は平均40cmである。柱痕は検出されなかった。本址に伴う遺物は出土していない。




第18図　3号掘立柱建物址実測図

**４号掘立柱建物址**（第19図）

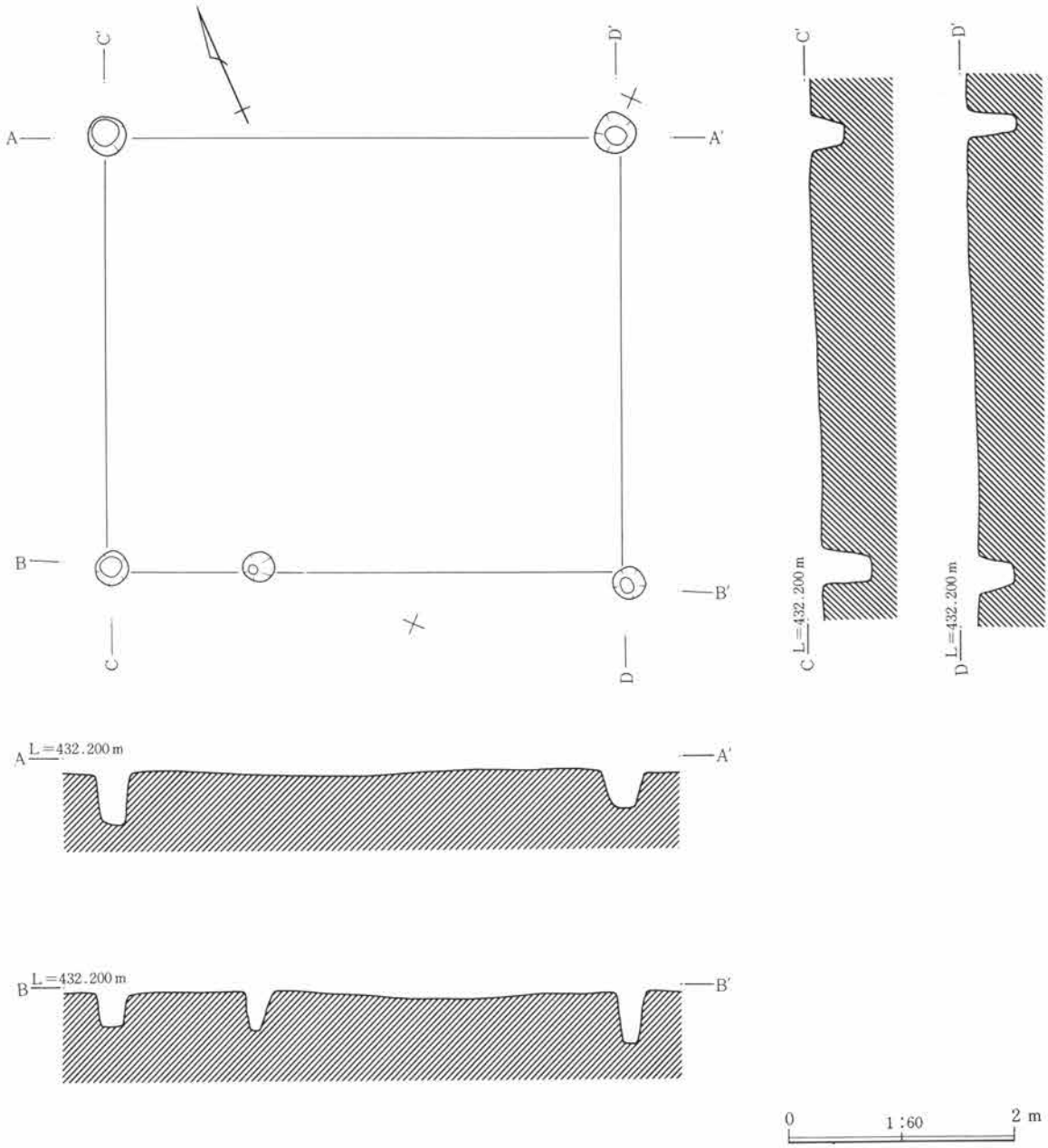
３号および５号掘立柱建物址の間に位置し、E－31グリッドを中心に広がりをもつ建物址である。建物は、各コーナーの柱穴を中心に構成される。各辺に存在する柱穴については、柱間等不規則であり、本址に伴うものか確定し得ない。規模は、長辺4.60m・短辺3.80mを測り、面積は17.5m²である。長軸方位はN－65°－Wである。柱穴掘方は円形を呈し、径は平均40cmを測る。深さは50cm前後である。柱痕については検出されなかった。本址に伴う遺物は出土していない。




第19図　４号掘立柱建物址実測図

**5号掘立柱建物址**（第20図）

E－31、F－31グリッドを中心に位置する。本址についても、他の掘立柱建物址同様、各コーナーの柱穴により構成され、他の柱穴については検出されなかった。南側長辺にはコーナー間に1個柱穴が存在するが柱間等不規則であるため、本址に伴うものか確定し得ない。規模は長辺4.55m・短辺3.80mであり、面積は17.3m²を測る。長軸方位はN－66°－Wである。柱穴掘方は円形を呈し、径は平均30cm、深さは平均40cmを測る。柱痕については検出されなかった。本址に伴う遺物は出土していない。（原　雅信）




第20図　5号掘立柱建物址実測図

### (3) 土　　坑

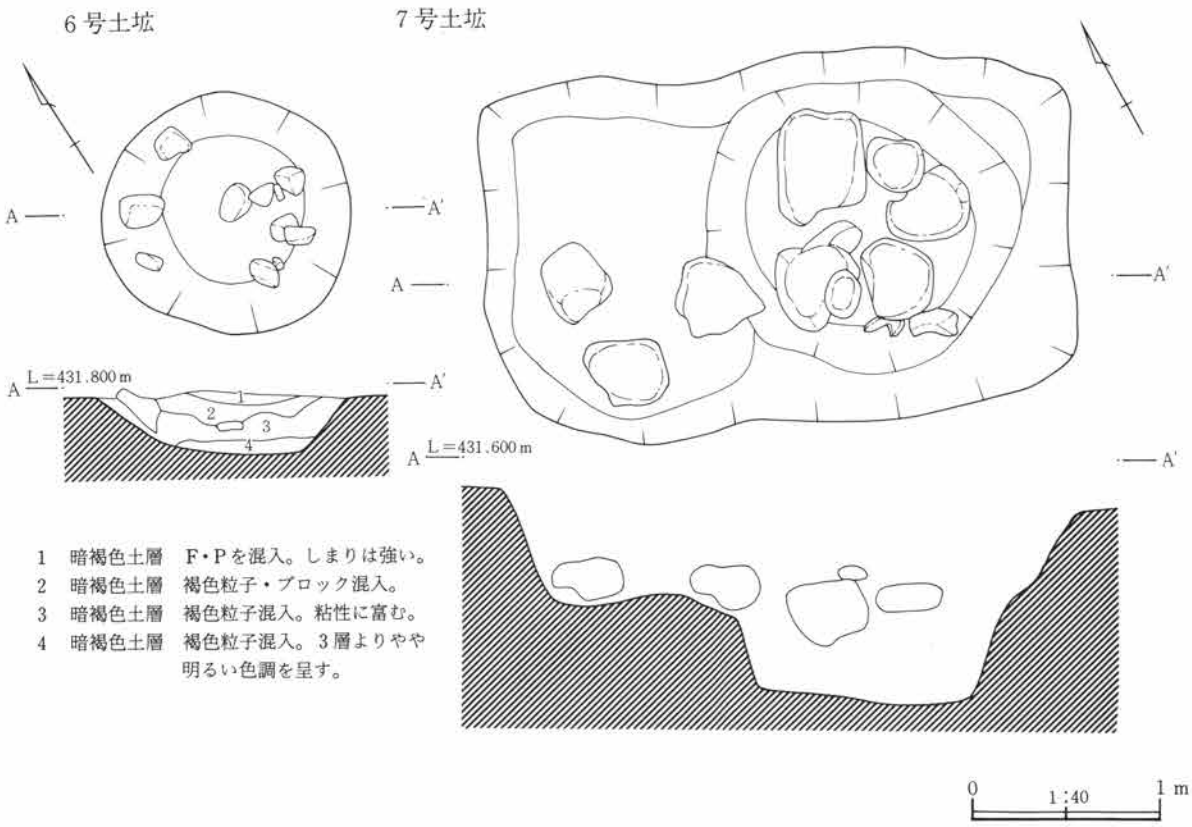
いずれの土坑も名胡桃城の「遠見」と呼ばれる地点（Ⅳ区）から検出されたが、積極的に時期を決定するような遺物の出土はなかった。

検出された土坑は総計５基である。土坑は平面形が円形を呈するもの（６・８・９号土坑）と長方形を呈するもの（10号土坑）に分けることができる。９・10号土坑の切り合い関係により、円形タイプの土坑が長方形タイプの土坑よりも新しく見ることができる。円形タイプの６・８・９号土坑はいずれも径1.5m、深さ0.3m前後を測る。６号土坑、９号土坑からは10～30cm前後の円礫が坑底から15cm程浮いた状態で検出されている。８号土坑は部分的にテラスをもっている。長方形タイプの土坑は10号土坑の一基のみであり、長軸2.2m、短軸1.7m、深さ0.6mを測る。埋土は暗褐色土を主体として地山のブロックを多く混入するもので、人為的に埋められたものと思われる。

一方、７号土坑は形状は長方形タイプの土坑に近いが、坑底の一部に円形の掘り窪みが見られる。また、出土した礫のあり方からは人為的に敷れた可能性がある。本土坑の埋土の観察を行っていないため切り合い関係等については不明であるが、上述した理由により、一応、10号土坑とは区別される。

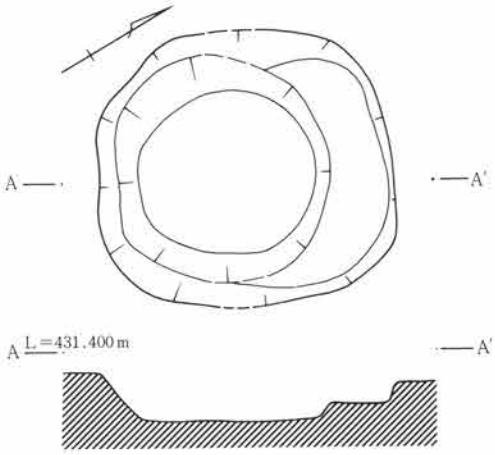
埋土は７、10号土坑を除いて、いずれも暗褐色土を主体とした自然堆積状態を示していた。

出土した遺物は８号土坑埋土中より南宋銭が一枚、また、９号土坑埋土中より北宋銭が１枚、下臼（½欠損）がある。

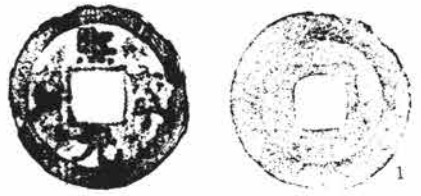



第21図　６・７号土坑実測図

8号土坑

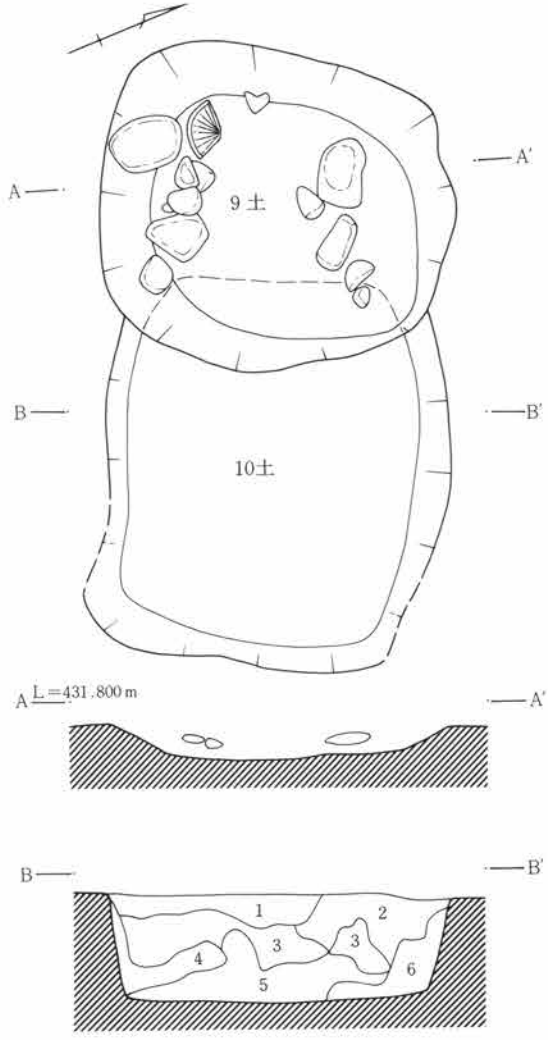


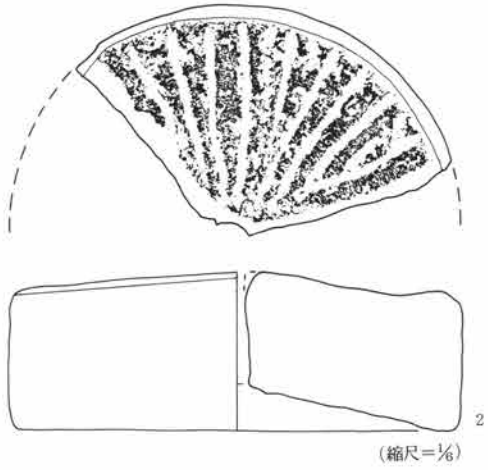
開慶通宝
(南宋1259)　(原寸大)




熙寧元宝
(北宋1068)　(原寸大)

9・10号土坑




1　暗褐色土層　褐色粒子・F・Pを多く混入。
2　暗褐色土層　褐色粒子混入。1層よりやや明るい色調を呈す。
3　暗褐色土層　褐色粒子・ブロックを多く混入。しまりは強い。
4　暗褐色土層　褐色粒子・ブロック混入。
5　暗褐色土層　褐色粒子・ブロック混入。4層よりもやや明るい色調を呈す。
6　暗褐色土層　5層よりやや明るい色調を呈し、粘性に富む。

0　1:40　1 m

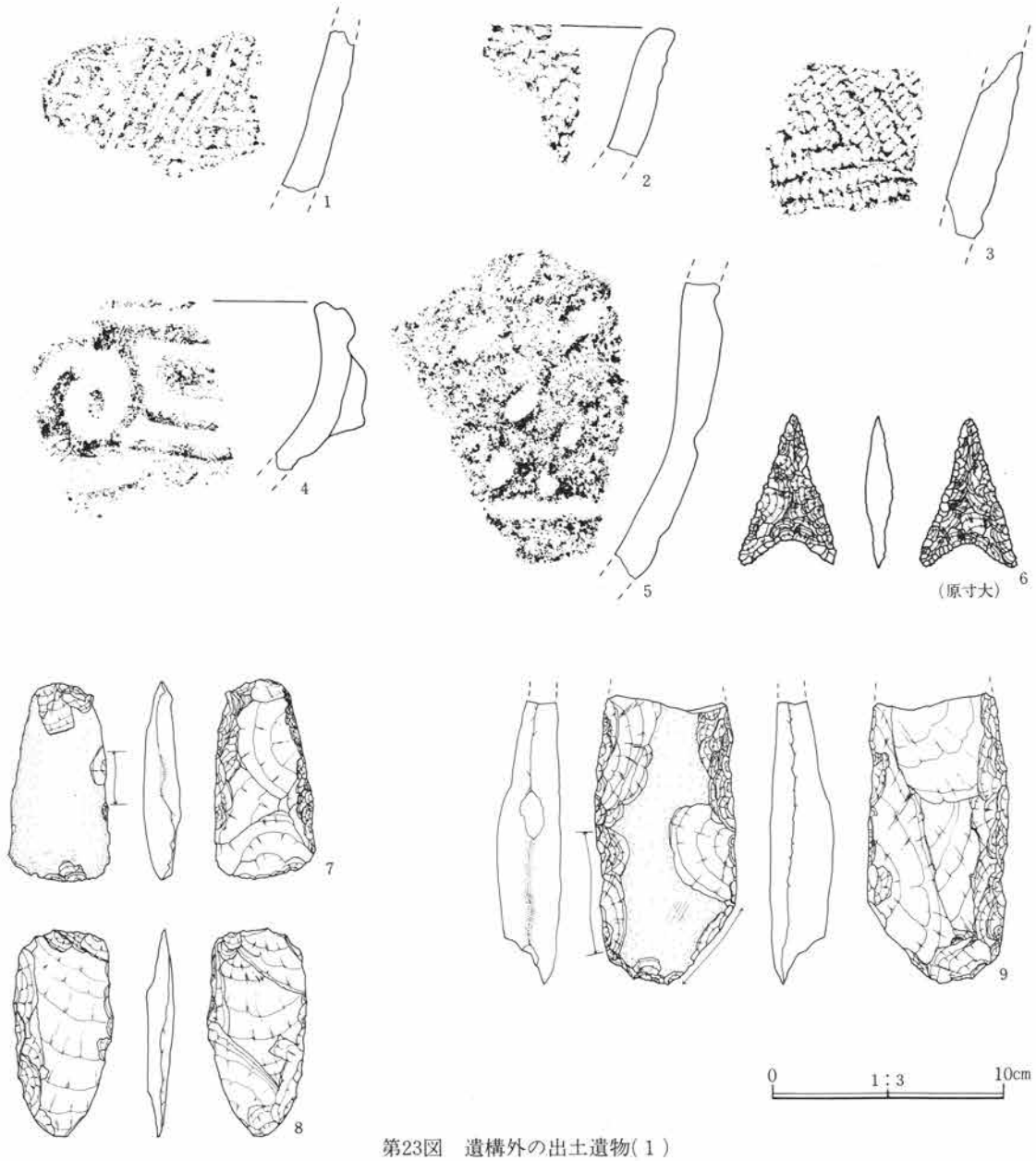
第22図　8・9・10号土坑実測図

# 第３節　遺構外の遺物

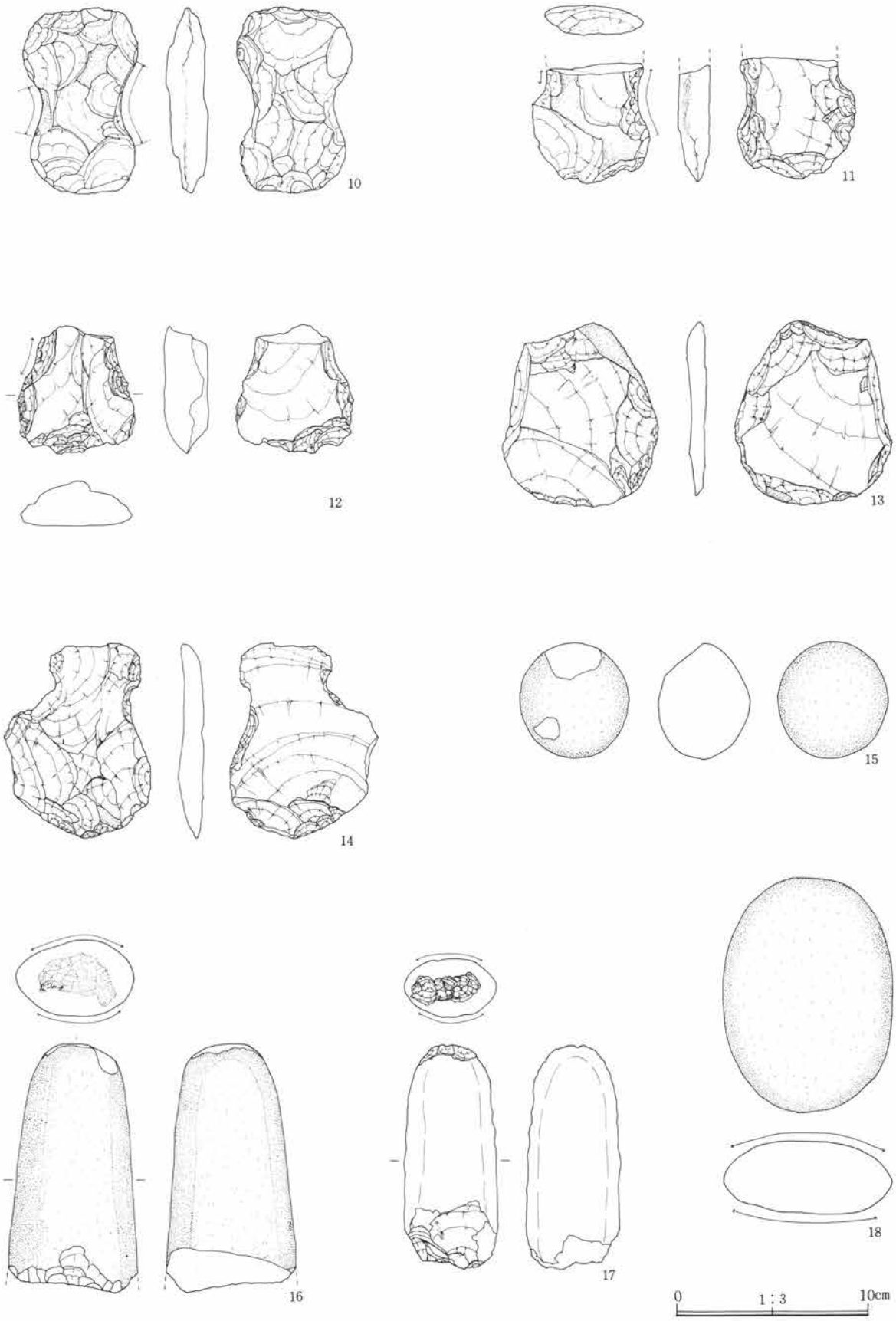
## (1)　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物のほとんどは住居址が検出されたII区、およびIII区（馬出堀を含む）から出土しているほか、他地点ではIV区北東部（H－35・36グリッド付近）から得られたのみである。Ⅰ・Ⅴ区からは全く遺物は出土していない。

土器は前期から後期にかけてのものがわずかに出土したのみである。石器は分銅形の打製石斧を中心に、不定形剝片を素材とした機能的にはスクレイパーにあたる剝片石器や棒状の礫の先端部に打痕、全体に磨滅の認められる多目的に使用されたと見られる石器の他に石鏃、磨石等が出土している。




第23図　遺構外の出土遺物(１)




第24図　遺構外の出土遺物(２)

**遺物観察表**　（第23・24図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 部位 | 出土位置 | 文様・整形の特徴 | ①胎土 ②色調<br>③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 23—1<br>12—1 | 深鉢 | 胴部 | 表土中 | 器面に直前段合撚L{L{R R, R{L L}}, R{L{R R}, R{L L}}}横位により羽状縄文を構成。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 23—2<br>12—2 | 深鉢 | 口縁部 | H—15 | 器面にLR横位。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 23—3<br>12—3 | 深鉢 | 胴部 | H—15 | 器面にRL、LR横位による羽状縄文を構成。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 23—4<br>12—4 | 深鉢 | 口縁部 | 表土 | 隆線および太い沈線による渦文、楕円文により口縁部文様帯を構成する。区画内にはLR横位による羽状縄文を構成。 | ①砂粒子混入<br>②褐色 ③良好 | 加E2 |
| 23—5<br>12—5 | 深鉢 | 胴部 | H—36 | 器面は粗く、ザラつく。沈線文および列条文が施される。 | ①砂粒子混入<br>②褐色 ③良好 | 称2 |

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 形状・調整加工の特徴 | 石質 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 23—6<br>12—6 | 石鏃 | 長 2.2<br>厚 0.4 | I—18 | 「凹基無茎鏃。」断面形はレンズ状を呈す。押圧剥離により形状を作出。 | 黒曜石 | 重 0.47 |
| 23—7<br>12—7 | 打製石斧 | 長 2.9<br>厚 1.5 | 表土 | 短冊形。石器表面に自然面を残し、断面形はD字状を呈す。刃部は1枚の剥離面により作出。横位の擦痕が認められる。 | 黒色頁岩 | 重 73.9 |
| 23—8<br>12—8 | 打製石器 | 長 3.0<br>厚 1.2 | 表土 | 短冊形状を呈す。側縁の「つぶれ」が認められない。表面右側縁に裏面側から連続的な剥離痕が認められる。 | 黒色頁岩 | 重 49.9 |
| 23—9<br>12—9 | 打製石斧 | 長 (4.2)<br>厚 2.7 | 表土 | 短冊形状を呈す。上半部欠損。表面右側縁にのみ「つぶれ」左側縁先端部から器体中央にかけて磨滅している。 | 黒色頁岩 | 重 230 |
| 24—10<br>12—10 | 打製石斧 | 長 3.2<br>厚 2.1 | 表土 | 分銅形。抉り部は両側縁とも「つぶれ」が認められる。刃部は一方のみ磨滅している。 | 輝石安山岩 | 重 142.9 |
| 24—11<br>12—11 | 打製石斧 | 長 2.1<br>厚 1.7 | 表土 | 分銅形。下半部欠損。抉り部は両側縁とも「つぶれ」。裏面の一部に部分的な磨滅が見られる。 | 黒色頁岩 | 重 84.9 |
| 24—12<br>12—12 | 打製石斧 | 長 2.2<br>厚 2.4 | 表土 | 分銅形。上半部欠損。抉り部は両側縁とも「つぶれ」が認められる。刃部は鋸歯状を呈している。 | 点紋粘板岩 | 重 110 |
| 24—13<br>12—13 | 削器 | 長 3.1<br>厚 0.9 | 表土 | 石器上半では表→裏面へ調整加工が、下半では交互剥離が施されている。刃部角度は鋭角。 | 黒色頁岩 | 重 100.1 |
| 24—14<br>12—14 | 石匙 | 長 3.3<br>厚 1.2 | 表土 | 幅広で大形の粗製品。抉り部は右側縁では裏→表面、左縁では表→裏面へ粗い剥離により作出。 | 黒色頁岩 | 重 92.3 |
| 24—15 | 磨石 | 長 2.0 | 表土 | 円礫。全面に磨滅が及ぶ。二次焼成を受けている。 | 輝石安山岩 | 重 208.3 |
| 24-16・17<br>12-16・17 | 敲石<br>磨石 | 長 4.2<br>厚 3.9 | 表土 | 先端部に打痕が認められる。下半部欠損。石器の表裏とも擦痕有。16は受熱。 | 安山岩質凝灰岩 | ⑯重 470<br>⑰重 230 |
| 24—18 | 磨石 | 長 4.0 | J—16 | 扁平な自然石。側縁部を除く全面に擦痕。 | 輝石安山岩 | 重 580 |

## (2)　平安時代の遺物

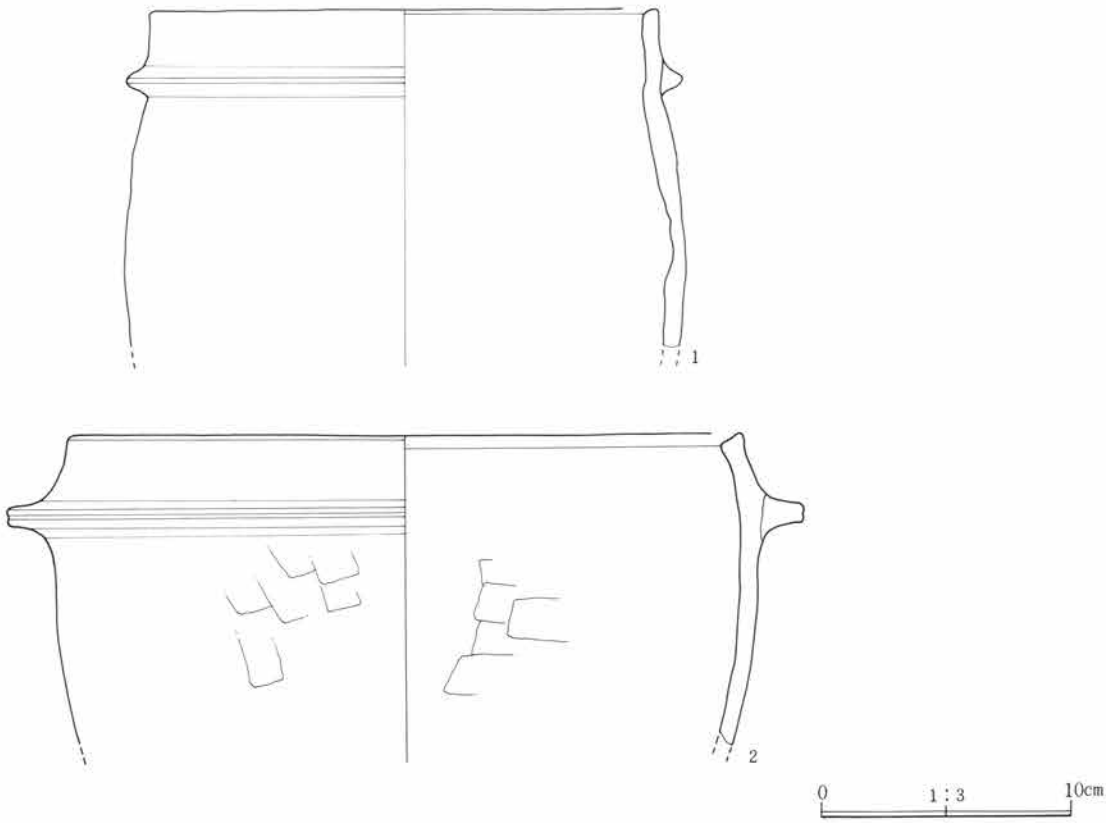
名胡桃城の「遠見」と呼ばれる地点（Ⅳ区、F―23グリッド・暗褐色土層中）より一括して出土した。当初、この暗褐色土の落ち込みを土坑として調査を行ったが、平面の形状、坑底の状態等から遺構としては認定することはできなかった。本遺跡からは他に同時期と考えられる遺構・遺物は検出されなかった。

第25図，１・２は、いずれも羽釜の口縁部から胴部上半にかけての破片で、１・２とも酸化焼成焔焼成である。

１は、全体に風化・磨滅が著しい。口縁部は短く直立し、口唇は若干の凹面をもつ平坦面を形成する。鍔は三角形状を呈する。胴部中位に最大径をもつ。胴部外面は縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラケズリが施される。

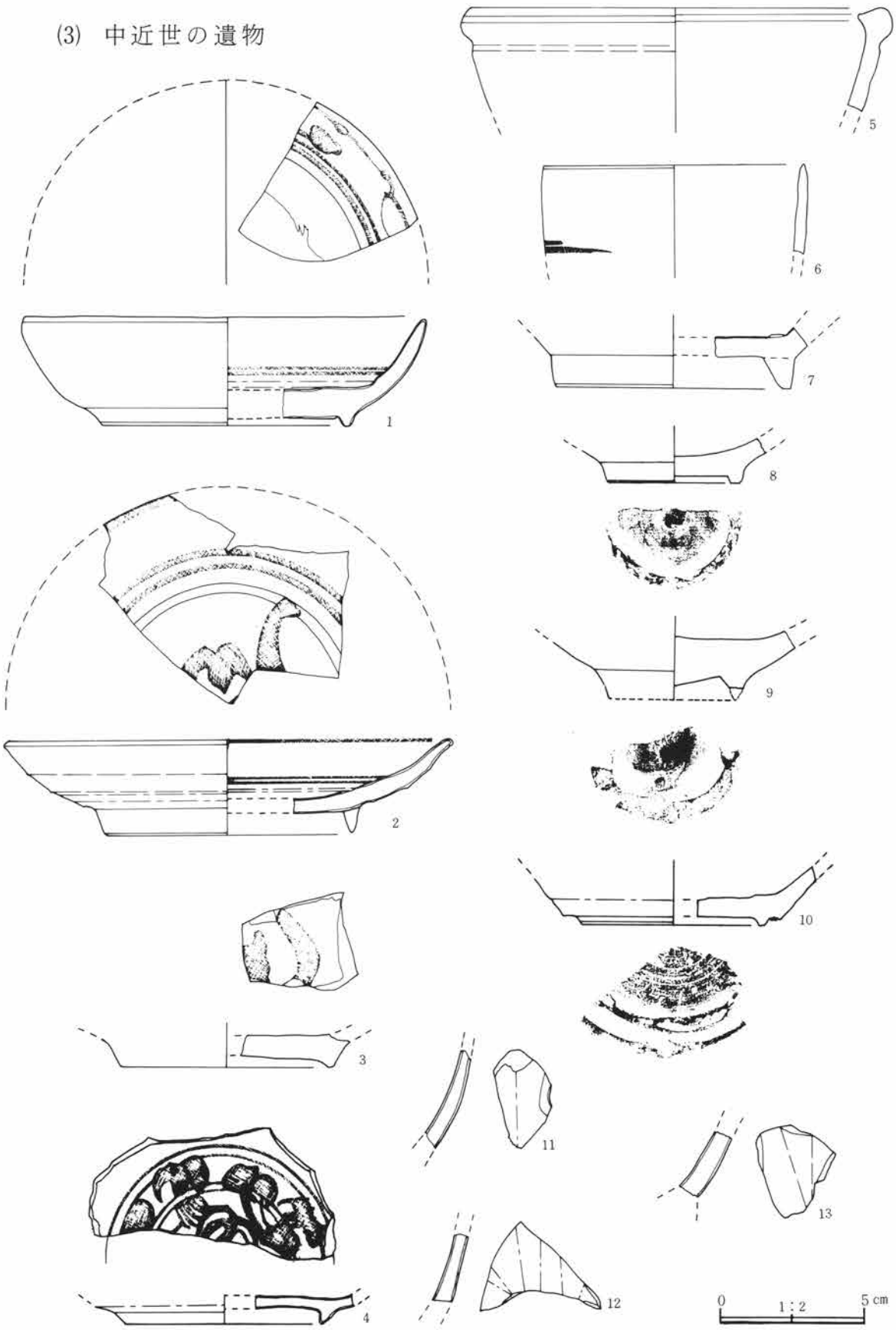
２は、口縁部は短く内傾し、口唇には若干の凹面をもつ平坦面を形成する。鍔は三角形状を呈し、一条の沈線が施されている。胴部は若干窄まる形状を呈し、鍔の部分に最大径をもつ。胴部外面は下から上方向へのヘラケズリ、内面は横位のヘラケズリ後、ナデを施す。

**註**　名胡桃平では月夜野バイパス建設に伴う今年度調査地・村主遺跡より検出された集落が同時期のものである。
「大原Ⅱ・村主遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984

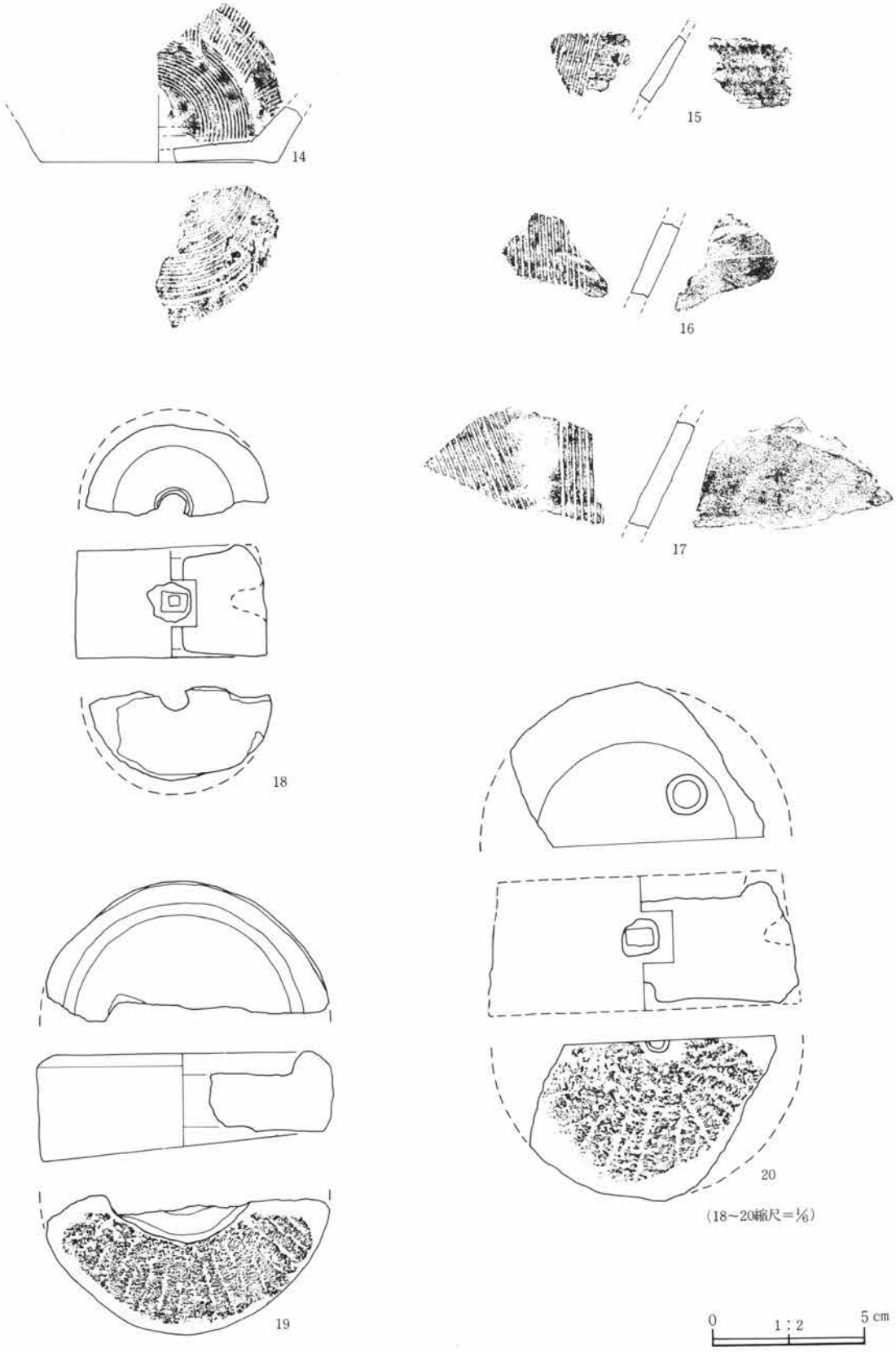



第25図　遺構外の出土遺物（３）

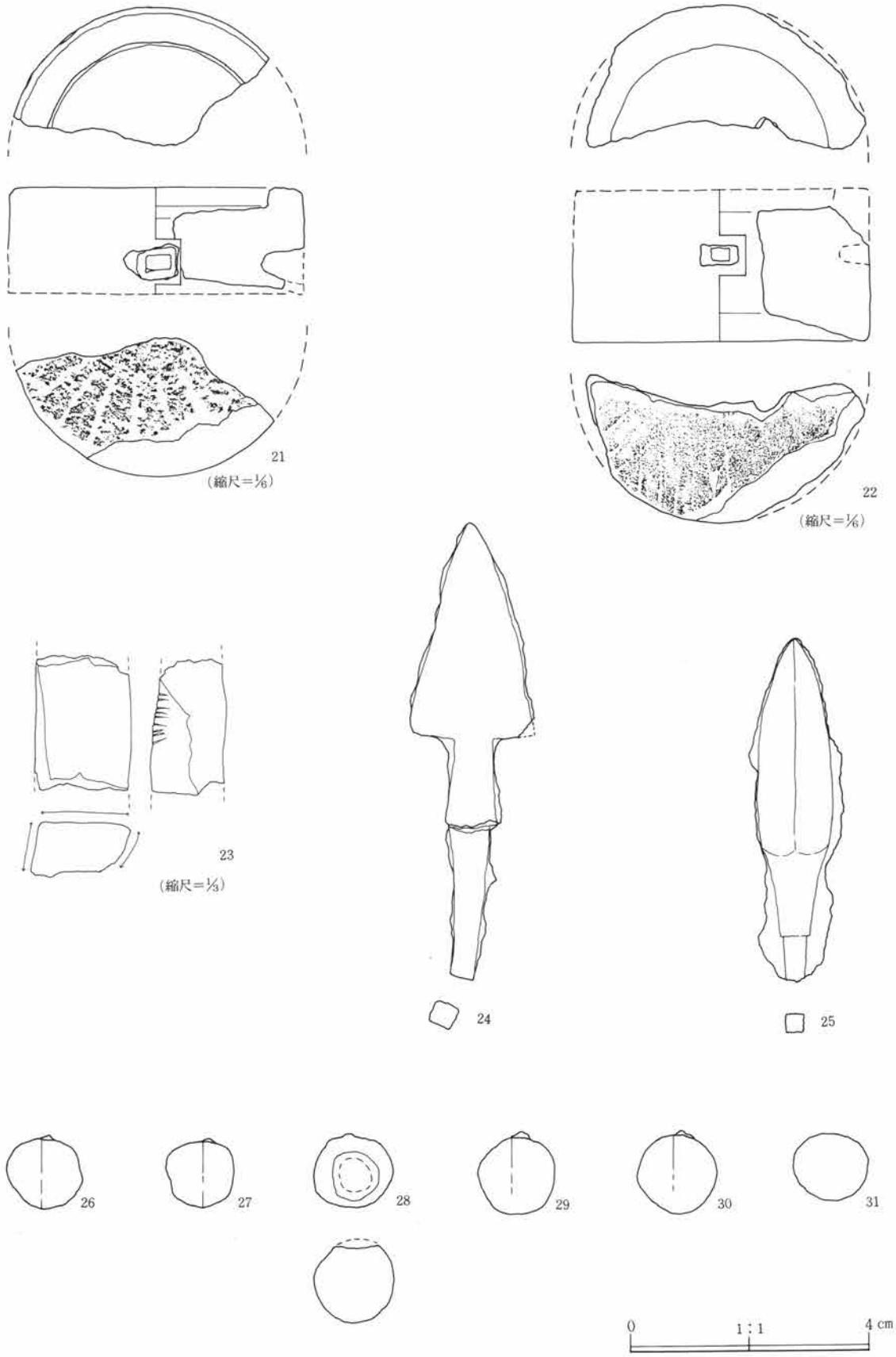
## (3) 中近世の遺物



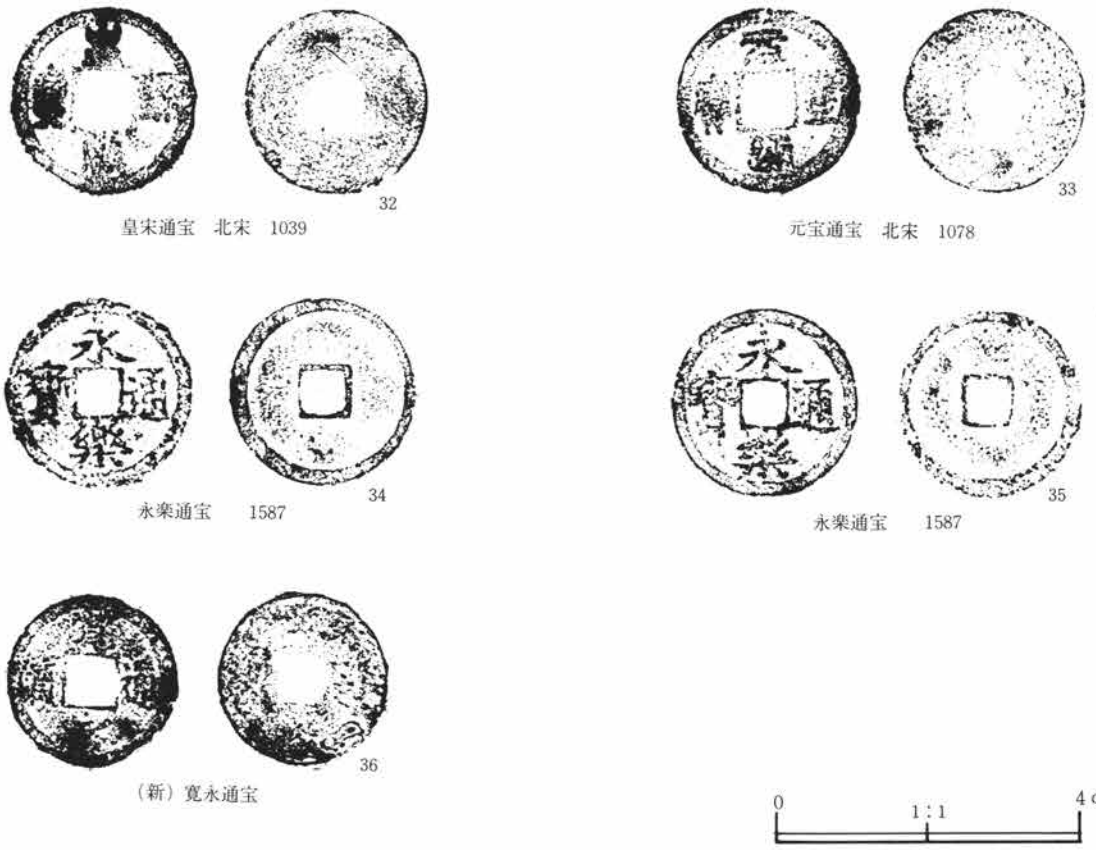

第26図　遺構外の出土遺物(４)




第27図　遺構外の出土遺物(５)




第28図　遺構外の出土遺物(6)




第29図　遺構外の出土遺物（７）

**遺物観察表(1)**　　（第26図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 焼物種<br>器種 | 量目 | 釉色・胎土 | 特徴 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 26—1<br>13—1 | 磁器　染付皿 | 口 14.2<br>高 3.3 | 釉 淡青色<br>胎 白色 | 高台端部と、見込の蛇目部分を除いて施釉。蛇目部に重焼痕あり。染付は山呉須を用いたすんだ青色で、草花を描く。見込中央に、こんにゃく判あり。くらわんか皿。 | 伊万里系（波佐見焼か）<br>江戸中期 |
| 26—2<br>13—3 | 陶器　皿 | 口 15.2<br>底 8.7<br>器 3.3 | 釉 淡黄色<br>胎 黄灰色 | 体部外面上半から、見込全面に施釉。見込に重焼きの痕跡あり。口唇、体部内面中位に２条圏線、中央に鉄絵施文あり。灰釉。 | 美濃焼<br>17C前半 |
| 26—3<br>13—4 | 陶器　皿 | 底 7.5 | 釉 淡黄色<br>胎 黄灰色 | 内面に施釉あり。見込中央に鉄絵あり。灰釉高台は付高台。 | 美濃焼<br>17C前半 |
| 26—4<br>13—2 | 染付　皿 | 底 3.4 | 釉 青色<br>胎 白色 | 青花で釉は、生掛け。高台部を除いて、全面施釉。釉は、明るい青色を呈する。文様は、玉追獅子か。 | 中国・明代16C |
| 26—5<br>14—14 | 陶器　鉢 | 口 14.2 | 釉 淡黄色<br>胎 灰色 | 内外に施釉。口縁部は内側にかえる。片口鉢か。 | |

**遺物観察表(2)**　（第26・27図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 焼物種<br>器種 | 量目 | 釉色・胎土 | 特徴 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 26－6<br>14－13 | 陶器　茶碗 | 口 9.1 | 釉　淡黄色<br>胎　黄灰色 | 内外面に施釉あり。細かい貫入が生じる。外面に絵付あり。 | 京焼系<br>江戸前期 |
| 26－7<br>13－6 | 陶器　皿 | 底 8.2 | 釉　淡黄色<br>胎　黄灰色 | 内面のみ施釉。貫入あり。器形の形成は型押し、トチンの痕跡あり。 | 美濃焼<br>時代不明 |
| 26－8<br>13－5 | 陶器　茶碗 | 底 4.6 | 釉　淡黄色<br>胎　黄灰色 | 高台端部、内面を除いて施釉。釉調は灰色。釉中に貫入あり、高台は削り出し高台。素地はざんぐりしている。 | 美濃焼<br>江戸前期 |
| 26－9<br>13－8 | 陶器　碗 | 底 4.6 | 釉　焼締<br>胎　灰色 | 内外面に釉は見られない。高台は削り出し高台。 | 江戸前期 |
| 26－10<br>13－7 | 陶器　皿 | 底 6.4 | 釉　淡黄色<br>胎　黄灰色 | 高台内面を除き施釉。釉は灰釉。高台は削り出し。 | 美濃焼<br>江戸前期 |
| 26－11<br>13－10 | 青磁　碗 | —— | 釉　青色<br>胎　淡灰色 | 内外面施釉。釉調は砧手の発色を呈す。外面に鎬手蓮弁の劃花文あり。 | 龍泉窯系、南宋<br>13C |
| 26－12<br>13－9 | 青磁　碗 | —— | 釉　灰青色<br>胎　淡灰色 | 体部に鎬手蓮弁文を劃花する。内外施釉。釉調は乳青灰色をおび、乳濁する。 | 龍泉窯系、南宋<br>13C |
| 26－13<br>14－11 | 青磁　碗 | —— | 釉　青色<br>胎　淡灰色 | 内外面施釉。外面に鎬手蓮弁劃花文あり。発色は緑がかった灰色を呈す。 | 龍泉窯系、南宋<br>13C |
| 27－14<br>14－17 | 陶器　擂鉢 | 底 11.6 | 釉　茶色<br>胎　灰色 | 内・外鉄施釉。底面糸切り。内面に15＋α本のおろし目あり。 | 美濃焼<br>江戸前期 |
| 27－15<br>14－12 | 陶器　擂鉢 | —— | 釉　焼締<br>胎　灰色 | 内面におろし目あり。外面に自然釉がかかる。 | 常滑焼<br>16C～17C |
| 27-16・17<br>14-15・16 | 陶器　擂鉢 | —— | 釉　茶色<br>胎　黄灰色 | 内外鉄釉。内面に16＋α本を単位としたおろし目あり。内外面に轆轤目あり。さらに、外面は、ヘラ削り調整される。 | 美濃焼<br>江戸前期 |

# 第VI章　成果と問題点

## 第1節　中・近世の出土遺物について

馬出堀出土遺物は、その埋没の過程に伴い中世終末から、江戸時代後期までの遺物が存在している。本報告では、江戸時代中期以降の遺物は除外したが、中期以降も、この周辺に生活の継続と存在を示唆する陶・磁器類の出土はあった。

中世終末の一群は第13図１、第14図20がある。第13図１は大型碗の底部片である。見込中央に舶載青磁碗風の花文を印花し、細貫入の目立つ灰釉が施されている。素地はざんぐりとした特徴から美濃焼に見える。美濃焼における大型碗に舶載青磁風の印花文を施す手法は、見込に鉄絵の草文を描く白磁染付写し手法の現われる以前に製作の主体があるため、第13図１は、美濃焼に印花文の現われる大窯Ⅰ～Ⅳ段階の間に位置づけられている。年代観は16世紀の初頭から16世紀後半中頃に限定され、出土層位が馬出堀最下層[(1)]である点を考慮すれば、名胡桃城存続中に直接、関連した可能性が高い。第14図20の塗椀も、前者と同じ層位にある。椀の見込部は黄茶色の特有な色調を呈し、その後に、黒色漆を施している。黒色漆は純黒色を呈し下塗りは施していない。漆芸では、黄茶色であっても広義の朱塗の範疇に入れており、この場合、外面黒塗、内面朱塗と見て差し支えないであろう。製作工程は、原木→輪切（？）→刳り込み→轆轤削り→内面黄茶色漆塗→外面黒色漆塗と類推される。素地は一般の塗椀が、クリ・クヌギ・ブナなど、春材部に大きな道管が配列され、夏材部に小さな道管が配列される特徴的環孔材を材料として用いているが、この椀は年輪が不明瞭で、トチ・ハンノキ・ブナ・カツラ・ホウなど目の詰んだ樹種と考えることができる。塗椀が中世末に製作されたとして他遺跡出土の塗椀と形態を比較してみると、例えば、東京都青戸葛西城址では飯・汁椀の口縁部の立ち上がりは第14図20よりも強く、形態上に差異が認められ、その差をもって、地域的[(2)]であるとも考えられる。利根地域において量産的な塗椀が現われた段階を推考すれば、沼田城下における城下町形成に伴い、以前に自給的、小規模な単位で製作されていた道具類生産の一部が専業化し、商業化の道に進んでいったと類推される。それ以前の生産状況をこの塗椀の特徴である一般的でない材料を用いていること、形態上地方的であること、作調が優れていないなどに反映しているとすれば、一般的でない材料であることは、大量生産物でないことを示唆し、形態上地方的であること、作調が優れていない点からは、量産的、画一化した中から生まれる完成度の高さと全く相反する側面を窺うことができるのである。要するに自作農として存在していた一騎の地侍か、その複合体である地衆を単位とした生活圏の中での自給的な生産規模による所産と見なされるのである。一般的に塗椀の製作は木地師を中心に考えられているが、仮にこうした自給的な塗椀が製作されている地域に訪れた場合の木地師らの製作領域は在地で自給されている器種を除く、高級品や特殊器種を製作してこそ、初めて介入できたであろうし、存在の意義が生ずるのである。以上２点が名胡桃城の存続期とかかわる遺物である。

馬出堀からはこの他、江戸時代初頭と考えられる美濃焼鉄絵皿（第13図５・７・９）美濃焼皿（第13図８）があり、江戸時代前期の遺物として美濃焼擂鉢（第14図12・13・15・17）、京焼系（第13図３）があり、江戸時代中期の遺物として伊万里系皿・碗（第13図11・４）がある。これらは、馬出堀埋土の下位から上位にかけ出土し、中世末期から江戸時代中期以降まで、脈々と続き、生活の存続を窺うことができる。この中に、中世遺物も含まれている。第14図14の鉢、美濃・瀬戸焼の鉢（第14図16）がそうである。この他、穀臼、鉄

砲玉、煙管の出土がある。

遺構外で注目される遺物に舶載の中国磁器がある。第26図11～13は、いずれも龍泉窯系の鎬手蓮弁碗片である。３点とも色調は砧手色を呈し、出来の優れた製品である。製作年代は南宋代で鎌倉時代である。当遺跡より南方300mの地点から板碑が既出しており、周辺に、鎌倉・南北朝期の遺構が考えられ、この青磁も、名胡桃城に伴う伝世物ではなく、前代の遺構に関連した可能性があろう。

第26図４は、中国明代、景徳鎮窯系の青花皿である。発色は澄んだ青色を呈し、県内出土の青花の中では良い色合いである。近年、青花の出土は、大胡城址から１点、歌舞伎遺跡から１点、浜町屋敷内遺跡から８点、後田遺跡から１点出土し、類例は徐々に増加しつつも[(3)]、30遺跡を越えた[(4)]中国陶磁の出土遺跡数[(3)]から見れば、占める割合[(5)]は少ない。製作の年代は16世紀後半で、城平地区の掘立柱建物群の一角から出土し、名胡桃城の存続していた頃の所産で、掘立柱建物群とのかかわりを示す資料かもしれない。

この他、遺構外出土の陶・磁器も馬出堀の埋没土と同様に江戸時代初頭から、中期以降まで続き、生活の存続を知ることができる。江戸時代初頭は、美濃焼では第26図2・3に鉄絵皿があり、前期として美濃焼皿第26図８・10、擂鉢第27図14・16・17がある。江戸時代中期として伊万里系、見込み蛇目の染付皿第26図１などがある。

次に石臼類について考えたい。石臼は馬出堀で（第15図）上臼１点、下臼１点、遺構外の出土に上臼５点（第27・28図）の出土がある。石材は多孔質の輝石安山岩で穀類の粉砕を行うための穀臼である。目溝の分割は第15図20・21の場合、６分割で左廻り、第28図22で左廻り、分割単位、回転方向は一般的である。群馬における石臼の材料は多孔質輝石安山岩、輝石安山岩が主な原材料で、赤城山、浅間山などを給源[(7)]とする火成岩である。群馬県における中世の石材利用の原料は五輪塔であるならば、凝灰岩、角閃石安山岩、安山岩などであり、機能によって石材種が異っていることが判る。このことは、例えば石工自体が五輪塔から石臼作りに至るまで幅の広い多角的な生産を行ってはいないことを示すようである。石材が限定されることは、石臼作りの集団の存在をある程度示唆することになろうし、その場合、上野の地方的な形態[(6)]もありうるとして今後考慮する必要があろう。

武具類には、矢の穂先、鉄砲玉がある。鉄砲玉は第15図22、第28図26～31の計７点の出土があった。このうち第28図26・27が銅製で他は鉛製である。製作過程が判る例として第26図26・27・29・30に、鋳型合せの浅い条痕と湯注ぎのヘソ状の痕跡が残る。第28図28は、鉄砲玉が硬い物に当った際に生じた圧痕が残る。このうち鉛製玉は、一般の狩猟等に常用されるが、銅製玉は戦時体制における製作と考えられ、名胡桃城に伴う戦時遺物の可能性が高い。

以上、名胡桃城址に関連した遺物を中心に取り上げたが、一括性は馬出堀から出土した碗片と塗椀の２点の組合せであったが、その他、明染付をはじめとし、中世遺物の一様相を知ることができた。利根・吾妻地域における、中世遺構の本格的な取り組みは、本例が最初であり、そこからもたらされた意義は大きいとしなければならないであろう。

（大江正行）

註

(1)　檜崎彰一「美濃古陶のながれ」『美濃古陶』　1980

(2)　（葛西城址調査会）　『青戸・葛西城址調査報告II』1974　『青戸・葛西城址調査報告III』1975　『青戸・葛西城址II区調査報告』1976　『青戸・葛西城址調査報告IV』1976　『青戸・葛西城址調査報告V』1978

(3)　（群馬県立歴史博物館）　『関東の中国陶磁』1982

(4)　（群馬県埋蔵文化財調査事業団）　『歌舞伎遺跡』1982

(5)　（群馬県埋蔵文化財調査事業団）　『後田遺跡見学会資料』1982

(6)　津金沢吉茂氏によるところが大きい。

(7)　三輪茂雄『石臼の謎』1975

# 第2節　名胡桃城について

山　崎　　一

## 1.　名胡桃築城の必然性とその時機

名胡桃城は利根郡誌には沼田上野介景國の三男景久の築城ならんとあるが、沼田系図によれば、景國・景久は同一人物で、景久の子景冬を名胡桃三郎としている。景冬の子が景夏で、共に興味ある名のりと思われる。

永享十二年（1440）、嘉吉元年（1441）の結城合戦に玉井の首をあげたと、鎌倉大草紙にのせられている沼田三郎四郎は景冬のことと思われるので景冬築城説が出たのであろうか。結城合戦には、関東将士の多くが攻防両軍に分れて戦うこと一年、城郭の効果を痛感した人々によって各地に築城が起された時代だからである。

しかし、この城の構造は戦国時代の山城で築城の時期については次のように考察される。

名胡桃城は、沼田城の西北4.5キロ、利根川、赤谷川の合流点に近く、二つの川を別々に渡河できる位置にあり、その上、赤谷川谷の隘路口を抑え、更に南西に中山に越える金比羅峠と、権現に越える榛名峠（千貫峠）を控えた要点にある。

そこに築城された時点は、その必要性に迫られるか、必要が予測された時でなければならない。つまり、この城は、居住地の防護が目的のものではなく、作戦本位の城だということである。

永享・文明以来の動乱に、越後上杉の後援に依存して関東の経略に当っていた山の内上杉氏にとって、三國峠経路は生命線であった。当時は、白井城が確保されていたので、名胡桃は尚、重要な地点ではなかったであろう。

16世紀の半ば頃、上杉謙信が沼田を根拠地として北条氏に対抗し、武田信玄が岩櫃城を占領した頃も、中山・猿ケ京を前線としていた謙信にとり、名胡桃はまだ要点ではなかった筈である。

ところが天正6年（1578）3月、謙信が急死し、その後嗣をめぐって二人の養子、景虎・景勝の間に激しい争い（御館の乱）が起った時、景虎救援に向った北条氏が沼田城に進駐したことにより、名胡桃が要点として浮び上ってきた。北条勢は三國峠を越えて越後國に入ったが、その後方連絡線の赤谷川谷と月夜野の渡河点が確保されなければならないからである。

殊にその年5月、北条との同盟関係にあって景虎に味方していた武田勝頼が、上杉景勝の必死の工作により懐柔されて景勝側に寝返ってしまうと、事態は切迫した。景勝・勝頼の間に、上野國は勝頼に委せる旨の契約が成立し、勝頼は5月下旬には早くも沼田城略取に着手している。新治村布施の原沢氏所蔵文書に次のものがある。

定

一、拾五貫文　原沢杢助

一、拾五貫文　同藤右衛門尉

一、拾五貫文　同弥次郎

一、拾五貫文　田村惣右衛門尉

一、拾五貫文　延沢次郎右衛門尉
右忠節在所退出之由候之間沼田本意之上如斯被下置之由
被仰出者也　仍如件
天正六年戊寅五月廿三日　（竜印）
跡部大炊助奉之
右六人衆

同じ日付の勝頼印判状、山口孫右衛門、沢浦隼人、原沢孫三郎、原沢惣兵衛宛のものもあって、これら新治地衆は既に勝頼方に投じているのである。跡部勝資の奉書になっているが、真田昌幸の招きに応じたのであった。

この結果、越後に進出した北条勢の活動は不活発となり、翌天正7年（1579）3月、景虎の敗亡によって御館の乱は幕を閉じる。

その後も北条方は沼田城に止っていたが、ここで初めて、なくるみの名が古文書の上に登場する。

今度於奈胡桃敵一人討捕候高名感悦候弥々可走廻候　仍而如件
十一月十日　（氏直花押）　塚本仁兵衛殿

これは塚本文書中のものであるが、雞肋編には同日付小河池左京亮宛の、全く同文の感状写しがのせられている。これにより両文書の正当性と、この時の戦の実在が証されるが、沼田根元記では、「天正七年……一説に去年より北条安房守氏邦守護として、前々のごとく藤田能登守城代……小河、奈胡桃、中山、山名杯在番し、……其頃小河・なくるみ沼田にそむく……この由小田原え聞へければ、早々川西へ沼田勢はたらき候。」とあり、加沢記には、「天正七年……昌幸公出張ありて中山・尻高、名胡桃、山名、発知以下降参之由北条氏直聞給て不易とて、其勢五千余騎を以て……。」といずれも天正7年のこととしている。天正8年5月には、沼田は武田の手に帰したので、それ以後この戦が起る筈はなく、天正17年の猪俣邦憲、名胡桃城略取の時には、塚本仁兵衛は肥前守と改めているのでこの感状は該当しない。

新田町の金井氏の所蔵文書に次のものがある。

（龍印）定
阿佐美陰謀則時言上別而抽忠勤条神妙被聞召候武州御本
意之上一所可被宛行候仍為堪忍分名胡桃一方之内五十貫
文之所被下置候猶依戦功可有御重恩旨被仰出者也　仍如
件
天正八年庚辰十二月九日　真田安房守奉之
金井外記

この阿佐見は中山氏で、その陰謀を速かに報告した金井外記に与えられた感状である。阿佐見の陰謀はどんなものであったか、また中山氏に対する処断はどうだったかは伝えられていない。只、加沢記に記されている天正17年の中山九兵衛の陰謀をにおわせるものがあろう。この文書も尚、名胡桃城の存在を実証しない。

名胡桃城に関する文書は、諸州古文書中に次のものがある。

書立

百五拾貫文　黛之郷

此内

百貫文　鉄炮衆弐十人之扶持給但一人四貫文之給壱貫之扶持也合五貫文宛

五十貫　文権現山在城就申附自分ニ預ケ置

此着到

壱本　小旗

壱挺　鉄炮

二本　鑓

一騎　騎馬

以上五人

合百五十貫文

一、比度権現山在城就申附右積を以黛郷預ケ置候彼着到無々沙汰召連(しか)ゝ与可在城候

彼口本意ニ付而者右知行之替可遣間黛之郷をハ可返置事

一、名胡桃三百貫之所出置候本意次第可知行事

一、比上奉公依忠信何分ニも可引立事

以上

右万端如下知無々沙汰可走廻者也　仍如件

戊子五月七日　　邦憲（花押）

吉田新左衛門殿

吉田新左衛門は、武州榛沢郡桜沢の士で、猪俣邦憲に属し、天正16年（1588）戊子、名胡桃の南西3キロの権現山の城を守り、「本意次第名胡桃三百貫を与える」と予約されたのである。

この前年、邦憲は、林治部左衛門に榛名峠城法度というのを出している。

榛名峠城法度

(カ)一、比番御番替之時者小旗与張弓鉄炮鑓相備建武具を以可有番替事

付御着到不参有間敷事并弐十之内之者着到之人衆ニ入間敷事

(カ)一、番替毎度掃除之儀上下之番親子兄弟間成共下番以心得請取渡有間敷事

(カ)一、当番衆着到之内之者構私用罷下間敷候若無拠所用ニ付而者番頭并林治部左衛門手判を以罷下其日ニ立帰

後手判林所へ則可返候毎度可為此分候若当番衆之内林無手判而罷下者見合候者不及届ニ於此方可生害事

一(カ)、戸張明立之事朝五ツ打而可明之晩景ハ七ツ太鼓同前ニ可立之事

一(カ)、戸張之明立并毎晩役所賦番衆事当番頭林罷出置時其夜之用心堅可申付事

一(カ)、風雨之日者番頭同道諸曲輪巡見破損普請当番衆へ可申断事

一(カ)、夜中之番有油断間敷候当番頭并城主(カ)一夜ニ三度宛ハ其曲輪見廻用心可被申付事

一(カ)、夜中於番所謡小うた一圓令停止候夜中ハ拍子木を打一時番夜廻用心一三昧可有之事

一(カ)、如何様之意趣遺恨有之共当番中致堪忍帰番之上可承候若背此下知於番所覃相論者理非無糺明双方之儀ハ不及申ニ妻子等迄可及死罪事

一(カ)、盗賊方之事纔之儀成共堅可糺明并(ママ)傳奕双六惣別かけの勝負ハ於役儀一圓有之間敷候若隠而も有之由自今以後聞届候者当人之(カ)儀者妻子共はりつけニかけ候ハハ当番衆頭城主共ニ可有其過失事

一(カ)、□曲輪向於丸山毎日従早朝極晩迄遠候可被指置事

一(カ)、敵足軽出候由及聞候者幾度も狼煙を可被立候□見届与而分別立を以有油断間敷候東西へ出候足軽之(ママ)傍に被知間敷事

一(カ)、敵足軽出候時者兼而如仕置役所賦虎口を固其上当番頭城主見積次第人衆を可出事大形者此方物先見届次第人数を出可然事

以上

右大形仕置可為此分候大細吉凶共ニ当番頭申合日夜之用心火之廻此両条ニ極候猶自分指引ならさる儀をハ節々心(カ)得下知又此書付番替之毎度当番頭へ可被為披見者也　仍如件

追而御番普請之儀ハ諸城大途如御法度当番之日数相定(カ)御番普請可有之候國法如此ニ候

以上

亥極月廿七日　　邦憲（花押）

林治部左衛門殿

この榛名峠城と権現山の城とは同一のものである。城名については当時尚固定していなかった。(現在でも

きまった城名はない。）現に天正16年５月21日、北条氏が北条氏邦に出したこの城の掟書には権現堂之城となっており、同年10月13日の同城武備書立には、権現山有之城と呼んでいる。

他の城でも同様なものは稀ではなく、今の片岡根小屋城などは、「山名鷹の巣間の新城」と甲陽軍鑑に記され、城名が定まらなかった感がある。一般に根小屋城、古城、新城、寄居などと呼ばれているものは同様なものが多い。

里見の雉ケ尾城が安中側では八重巻の砦と呼ばれているのと同じように、榛名峠（千貫峠）の所にあるので、榛名峠城と呼ばれ、権現山にあるので権現山城と呼ばれ、権現堂がある権現の集落がこの城の根小屋であったため権現堂之城ともなったのである。

榛名峠城法度の内容を見ると、その守則に厳重な制裁が附され、敵と間近く対戦している城である事がわかり、「敵足軽出候時」とあるのは、その敵が城砦内に居ることを示す。敵城は名胡桃城で、それが存在したことを証する。

これにより名胡桃城は、天正７年（1579）５月から天正15年（1587）12月までの間に築かれたことが確実で、おそらくその時期は７年５月に近い方であろうと推定される。

## 2．小田原役発端史話の真相

天正10年(1582)、武田氏滅亡、滝川一益退去後も尚、沼田、吾妻は真田昌幸が保持したが、その年６月末、津久田城攻撃に中山右衛門尉が敗死し、中山城まで進出して沼田、吾妻の間に楔入した北条氏は、中山城に、沼田顕泰の子で下野の赤見氏を継いだ赤見山城守を入れて沼田の将士を味方に招いた。

そのため、中山衆、沼田衆、須川衆中多数の人々が応じた。この時北条氏の築いた別城が今の中山城で、中山氏時代の城は、宿の東に遺る中山古城である。

真田昌幸は、上杉景勝の支援を得、岩櫃、沼田間の連絡を保持するため、新治の諸城と名胡桃城を固めた。名胡桃城の現遺構の成ったのはこの時であろう。

北条氏はしきりに沼田城を攻撃し、殊に天正12年（1584）10月には、徳川家康の上田城攻めに呼応し、氏直自ら大軍を率いて攻め立てたが、上田では昌幸が徳川勢を破り、沼田では城代矢沢頼綱が北条勢を撃退した。

同14年（1586）９月になると、昌幸方の林弾左衛門らが中山城を襲って奪いとり、赤見山城守は討死した（吾妻記）。

昌幸は弾左衛門に中山城を守らせ、金比羅峠経由の名胡桃城連絡路を啓開したが、北条方は尚、中山古城を保ち、権現山城（榛名峠城）を強化して名胡桃城に匕首を擬した。この方面の北条方は、長井坂に在城した猪俣邦憲の指揮下にあって、榛名峠城法度が出されたのはその頃である。

天正17年（1589）になると、豊臣秀吉の北条氏直上洛要請から、秀吉の仲介で沼田地方を昌幸から氏直に渡したが、名胡桃城だけは昌幸の手に残された。伝えられるところは、昌幸の強い希望によるという理由よりほかにない。

この名胡桃城が、秀吉の天下統一を大成させる小田原の役の発火点となったのである。

沼田根元記には、「一、此年なぐるみにて、鈴木主水、中山九兵衛にたばかられ、城をとられ申由、中山九兵衛信州へ参じ、いかなる所存か逆心をくわだて、姉聟主水方へ、此度信州より只今罷帰り候、房州様何御用やらん御密談あそばすべき由、御意ニ候、早々しのびやかに御越し尤の由申候、鈴木不審ニ存、今何御用や有べきと更にこころへず案じ居たるニ、重々申越ス、こじうとあれハ身頼之して、良郎(カ)等十余人召つれ、

用心万事申付、しのびて奈(ママ)胡桃を出、吾妻指て参る所ニ、はや猪俣人数をなぐるミのようがいに引入、弓、鉄炮くばりして城をかため、飛脚をもって鈴木方へ、我ら安房守殿ニ恨御座候儘別心して小田原へ兼参ず、最早なぐるみへは寄申まじ、是非御越候はば一矢仕らん、同クハそれより信州へ参れよかし、と申送、鈴木内々不審に存つるが、口惜や縁に引かれたばかられ……。」とあり、主水はそれから沼田の正覚寺へ行って切腹することになっている。

加沢記でもほぼ同様記しているが、主水が名胡桃を立った日を10月22日とし、末尾に、「鈴木……四十二を最後として失にけり、扨鈴木が女房子息は般若曲輪に押篭られけるが、家の子高橋主計が情により、其夜俵に入れて般若曲輪を落しければ、漸く落行きて小川島原沢が許に尋行……」と主水妻子脱出のことをつけ加えている。

これら地元の伝説に対し、関八州古戦録には、「猪俣思ひけるは、北条家年久しく競望他に異なりし上野一國適(ママ)残なく南方の掌握と成りし所に、吾妻郡呉桃(ママ)の堡障一ケ所支配に泄るゝ事遺念なきにあらず、所詮乗捕らんに仔細あらしと思案し手勢を率て彼堡障へ押寄短兵急に攻立ければ留主居の番衆不意に被襲、其上僅の人数なれば、姑くは支へたれ共、竟に踏され散々に落行けり。」と記され、つづいて、「当所は真田安房守、武田入道より恩賜せられ父祖の墳墓を建置たる地なれば、是非共に人手には亘すましきと堅く抱へ保ちける故」と昌幸が、この城に固執し、ここだけがその手に残された理由をのべているが、この事情は全くの誤りである。武田信玄が、元亀2年（1571）末、尻高、中山の両氏を降し、小川の広田弾左衛門も来属したことは次の文書で明らかといえよう。

定

退在所御幕下ニ参条神妙之仁(カ)被思召候因茲小川之内
弾左衛門惣領分之内弐拾貫文所被下置候然者沼田筋計策
可為肝要者也　仍如件

元亀三年壬申閏正月廿七日（竜印）　土屋奉之

広田弾左衛門殿

しかし、信玄自身が中山まで馬を進めた事実はなく、この年のうちに、中山、尻高とも長尾輝虎に帰属しているので、名胡桃が真田に与えられる筈がなく、その上、吾妻に進駐していたのは、安房守昌幸の父幸隆で、ここに真田氏が父祖の墳墓を建てたというのも事実無根である。

このように、諸戦記は史料としては取り上げ難いものなので、現存する文書から、名胡桃城略取前後の史実を検討してみる必要があろう。

先づ、秀吉の北条氏直上洛要求に関し次の文書がある。

1、（彦根後閑文書）

当方上洛之儀自京都依御催促此度及御返答之間後御挨
拶□ニ相叶ニ付而者来冬極月御隠居可為上洛候依之二
三ヶ条之筋目口上ニ申付候　仍如件

六月廿三日 (虎印)

後閑宮内大輔殿　後閑刑部少輔殿

2、(秩父内田文書)

十二日之一札今十四申刻披見

一、沼田吾妻之儀付而自是も申候キ一人衆者上下両手二千程可有之候歟自妙音院書立被越候

一、沼田ニ而もたいの儀者城下請取間者自元為如何自此方貸可有之候

一、妙音院明日明後日之間ニ当地迄可有着府候其上京衆小田原可通是非糺明候者可聞得候其上可申付与之儀候

一、京都へ召連者之事者自諸手五騎三騎ツゝ迄候我々一騎上ニ而済候多人数更不入候申付候分者ハ無由断御支度又奏者方へも弥可有下知候未百日之以後之事候間致何様候共遅々者有間敷候

一、沼田請取人之事者左衛門佐ニ昨日落着被申付候

一、沼田請取而より後之もたい貴所之外有間敷候間無由断御心懸専一候　恐々謹言

七月十四日　　氏政（花押）

安房守殿

この両文書によって、六月中既に北条氏政が上洛することを定めていたようであって、北条氏には豊臣に叛抗する意志のなかったことが察し得られる。但し、秀吉には、氏直の上洛を求めたのに隠居の氏政が上洛するようになった点、北条不信の念が強まったのではあるまいか。北条伐つべしの心が既に固まっていたのではないかと思われる。

次に加沢記の、猪俣邦憲の名胡桃城奪取を否定する二つの文書がある。

3、(真田文書)

來書披見候然者なくるみの事得其意候左候へ者其許之様子京都之両使被存候間則彼両人迄其方使者差上候定而披露可被申候将又菱喰十到來令悦喜候　猶榊原式部大輔可申也

十一月十日　　家康（花押）

真田源三郎殿

4、(河原文書)

追而彼書状早々吾妻へ御渡専一候

□吾妻之注進状□而被指越候早速□着祝着候仍其方(カ)仕置被申付両所□着早々吾妻御移尤(カ)候随而可然物主被相□鉄炮十五丁宛名胡桃へ早々可有御移候□不可有御油断委曲□田可申候　恐々謹言

霜(カ)月十二日　　昌幸（花押）

安房守

河(カ)左　鎌宮　湯三

3は、真田信幸の書状に対する家康の返書で、名胡桃城を真田の手に残すよう秀吉への進言を頼んだか、名胡桃城を猪俣邦憲が奪取したのを訴えたか、或は名胡桃城の危険な情報を得ての報告かの三様に考えられる。第一は信幸から申請される事がらではなく、昌幸から直接陳情したであろうし、この時では遅すぎて事情が合わない。また名胡桃を奪取されたのにしては、文に切迫性がないので、最後、名胡桃に危機切迫を報じ、家康からは、そのことを秀吉の派した両使に報告するように指示したのである。

おそらく信幸は、同じ事を在京の父昌幸にも知らせ、河原左京・鎌原宮内少輔、湯本三郎左衛門ら吾妻将士からも同じ報告があって、昌幸から4の指令が送られたのであろう。「鉄炮十五丁宛」と三士に命じているので四十五丁を増加することとなる。この日付は十二日なので途中四日を見積っても十六日に三士がこの指令を受けたこととなり、名胡桃失陥に間に合わなかったのではあるまいか。秀吉が猪俣の名胡桃奪取の報告を受けて激怒した次の文書は十一月二十一日付となっているから、この事態は十六・七日頃に起ったこととなるからである。

5、（真田文書）

其方相抱なくるみの城へ今度北条境目者共令手遣物主
討果彼用害北条方え法(のつとる)之旨候、此比氏政可致出仕由最前
依御請申縦雖有表裏其段不被相構先被差越御上使沼田城
被渡遣其外知行方以下被相究候処右動無是非次第候此上
北条於出仕申茂彼なくるみへ取懸討果候者共於不令成敗
者北条赦免之儀不可在之候得其意境目諸城共來春迄人数
入置堅固可申付候自然其面人数入候者小笠原河中島え茂
申遣候注進候て召寄彼徒党等可被留置候儀対天下抜公事
表裏仕重々不相届動於在之者何之所成共境目者共一騎懸
被仰付自身被出御馬悪逆人等可被為刎首儀案之事被思召
候間心易可存知候右之境目又ハ家中者共ニ此書中相見可
成競候北条一札之旨於相違者其方儀本知事不及申新知等
可被仰付候委曲浅野弾正少弼石田治部少輔可申候也

十一月廿一日　　（秀吉印）

真田安房守とのへ

この時点、秀吉は尚、北条の上洛を求め、猪俣らの処断だけで事態を拾収しようとしているように見える。

秀吉書状の内容からも、名胡桃城はだまし取られたのではなく、攻め取られたのが事実と知ることができよう。

それから三日後の十一月二十四日、秀吉は北条に対し宣戦し、十二月七日になって氏直から、富田、津田の両使と徳川家康に対して書を送り、名胡桃城を取ったのは、その城を北条氏に渡すという中山左衛門尉の遺言によったものだと、次のように弁明している。

6、（武家事紀）

條目

一、老父上洛遅候由御立腹ニテ到沼津御下向一昨日六日之御紙面案外候抑去夏妙音院一鷗軒下向之刻截流斎於罷上候ハ勿論候併当年ハ難成候來春夏之間可発足之由、条々雖御理候不可相叶旨頻承候公義ノ事ト不及了簡極月卒爾半途迄モ罷出正月中ニ可京着由ニ而候キ就中先年家康上洛之砌者被結御骨肉猶大政所ヲ三州迄御移ノ由承届候然而名胡桃仕合ニ付御腹立或永可被留置或國替カ様之惑説従方々申來候条一度帰國存切之由截流斎申候父子之國可過御察候依之妙音院一鷗軒招申縦此儘在京候トモ晴心中心易上洛為可申候更非別条候事

…（中略）…

一、此上モ無疑心至御取成者無猶豫截流斎可上洛旨申候間御両所有御分別可然様ニ所希候事

一、名胡桃之時一切不存候彼城主中山書付進之候既真田手前相渡候間雖不及取合候越後衆半途打出、信州川中島ト知行替之由申候間御糺明之上従沼田其以來加勢之由申候越後之事ハ不成一代古敵彼表へ相移候へハ一日モ沼田安泰可在候哉乍去彼申処実否不知候従家康モ先段々承候間尋キワメ為可申即進候キ二三日中ニ定而可申來候努々非表裏候ナクルミノ至時百姓屋敷淵底以前前下向之砌可有御見分歟事

一、以前渡給候吾妻領、真田以取成百姓等押払一人モ不置候剰号中條地其儘人前旨臺詰不相渡箇様少事可申達無之候間打指置候猶名胡桃之事ハ対決上何分ニモ可任承意候事　　以上

十二月七日　　氏直

富田左近将監殿　津田隼人正殿

7、（武家事紀）

従京都御書付給候并御添状具披見内々之通一々雖不及貴答指還相似慮外候歟之間先令閉口候畢竟自最前趣貴老渕底御存知之前委細被抑披者可為本懐候尚罪之被糺実否候様所希候一両日以前以使申候キ津田富田方へ申進五ヶ条入御披見上重説雖如何候猶申候名胡桃努々従当方不乗取候中山書付遺之候キ御糺明候者可聞召届事

一、上洛遅延之由露御状候無曲存候当月之儀正二月ニモ相

移候歟依惑説妙音一鷗相招可晴胸中由存候処去月廿四
日御立腹之御書付誠驚入候可有御勘辨事右之趣御執成
所仰候　　恐々謹言
　　十二月七日　　氏直
　　徳川殿

或は、名胡桃城は中山城主中山右衛門尉の持城になっていたのかも知れないが、その書付（遺之候キとあるので遺言か）を真田に渡したという事情も不明で、両方の認識の間に大きな隔りがあるらしいことが感じられ、上杉景勝のことも介在して問題は複雑だったように思われる。

この小城が只一つ、何故に真田の手に残されたか、猪俣邦憲が、一見無謀にもこの城をなぜ奪取しなければならなかったかを、今尚明確にし得ないが、いずれにしても、小田原の役は名胡桃城事件を口火として勃発したのである。

強いて穿鑿すれば、真田昌幸と豊臣秀吉が結託してうった天下統一劇一幕の拍子木だったということになるかも知れない。

我々は一歩でも真実に迫りたい。それには史料の示唆、遺跡の表情とその発掘解剖による結果の観察が手段となるが、それに立ち向うとき我々は、先入観を一掃し、正邪善悪等の規範を脱し、資料を遺した人々の心理にまで立入って考察しなければならない。

それでも尚、研究者自身の、自覚していない時代的偏向や、性格の傾斜が考察結果の差異を惹き起すのをまぬがれ得ない。

我々は、次第に消滅してゆく遺跡、遺構の姿をできるだけ客観的に描写し、資料としてのこし、後進に託さねばならない。

### 3.　名胡桃城の遺構

名胡桃城は利根川右岸の段丘端に築かれた崖端城だが、この段丘は川岸からの高さ50メートル（以下mで表わす）、それを深く穿って流れる湯舟沢とその北の小沢との間に嘴状に突き出した所に主要部を構えているので、山城に多く見られる並郭式構造である。その西に、西北一東南の長さ250m、幅140mの平城部が附く。平城部の北面、西面の道路となっている所は堀の跡であろう。

平城部の南側、７m下に水の手の小郭があり、主要部の北には、深い自然壕を隔てて般若曲輪がある。

徳富蘇峯書の名胡桃城の碑の立っている所の本丸は、西北一東南の長さ60m、最大幅25mの小郭で、東南部は細くなり、堀切りの南に３m程低くささ曲輪（仮称）がつく。堀切りには土橋と井戸跡がある。

ささ曲輪は、南北の長さ30m、幅８mで、東西両側に高さ１m余の土居が盛ってある。この土居は最初はかなり高く、城外からの遮蔽を目的としたものであったろう。谷を隔てた東120m、西200m辺は、この郭面より高いからである。

ささ曲輪の東西には段下りに二つの小さい袖郭が続き、その更に下、堀切向うに、物見曲輪があり土橋で通じている。この郭まで出ないと段丘斜面を見通すことができない。

本丸の西北側には、深い堀切りの向うに二の丸がある。この堀切りにも土橋があり、堀切両端は堅壕とはならず、少さい腰郭状の小郭が構えられている。

二の丸は、西北一東南60m、幅35m、むしろこの方が本郭だったかとも思われる。西面の虎口は逆の喰違い

構造で三の丸との間の堀切りに土橋を通じている。この堀切りも土橋のところで堀幅だけ喰違う。

三の丸は、南北25m、幅13mの小郭で西の虎口には、西面に顕著な丸馬出しがある。昭和五十六年、附近をバイパスが通るため発掘調査が行われた。ここの原地形は城の主要部と般若曲輪との間の深い自然壕となっている沢が、北東から入り込み、西微北に向って転向する屈曲部であって、発掘の結果、沢底の黒色土や、径1m内外の岩塊数個が発見され、その部分はそのままに馬出し堀北半の底を形成することがわかった。

馬出しを構築する時、沢の一部が埋め立てられ、この沢と、南の湯舟沢から東北に向って直角に掘り込まれた堀切りとの間に丸馬出しの主体部が構えられたのである。

馬出し堀は、通例のとおり本堀より2mも浅い。もとの沢には、西微北140mの谷頭に湧水点があり、今も水のわく池が認められる。

第5・6図のように、この馬出しが有柄鏡状に三の丸から突出した形に設計されたのは、原地形に制約されたからで、柄状の部分の両側には、廊下橋のように塀が立てられて通路を遮蔽し、丸馬出しからの出撃路は架け橋で、敵に面した一側には塀がつけられていたと思われる。

発掘調査で、馬出し堀の中からの銃丸が発見されたことは、ここで戦闘のあったことを証し、北条氏がこの城を奪った時の戦いではなかったかと思わせる。

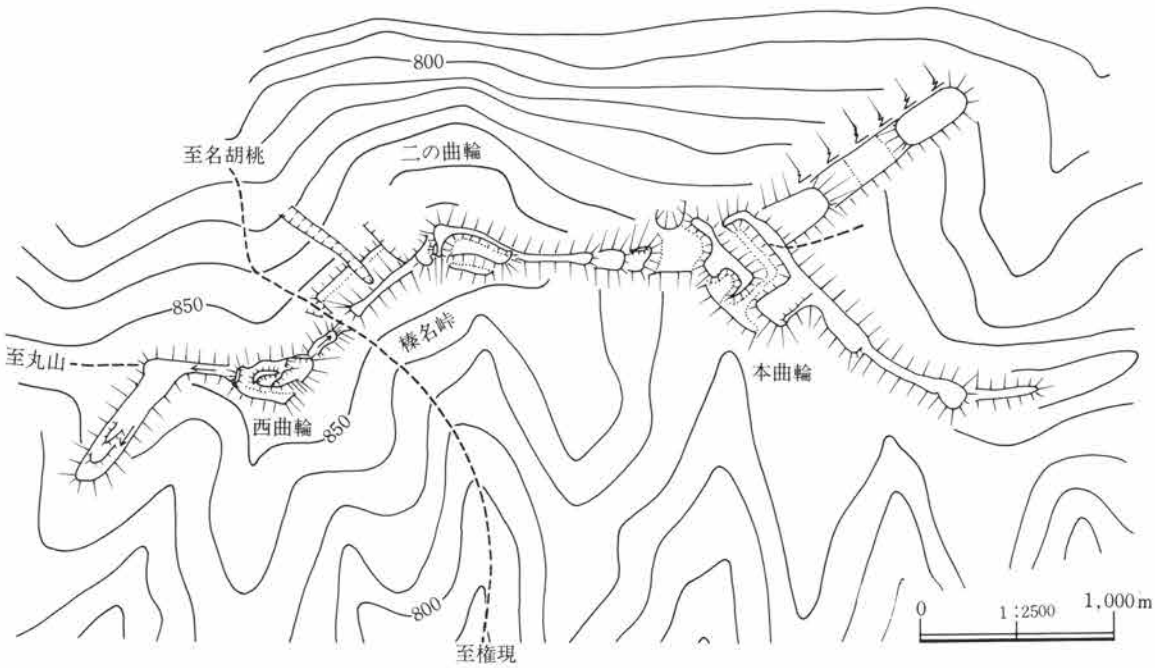
水の手曲輪は、平城部の郭面より7m程低い空堀状の郭面と、その南西部の丸山と呼ばれる高さ5mの堆土から成る。丸山は基底30m×25m、上面10m×5mで、高1.5m以下の腰石垣があって、東面では石垣上に幅1mあまりの犬走りが設けられている。頂に崩れた石宮が建っている。これら遺構の多くは江戸時代のものであろう。

空堀状の部は、幅13m、総長60mの馬蹄形で、南面8m下に腰部がつき、それから西に、長さ50mの堀を隔てて帯郭があり、更に外側下方に湯舟沢が流れている。この堀は、城の水の手だったと言い伝えられている。湯舟沢の名は「風呂」の語を連想させる。前橋城の風呂川、蒼海城の風呂沼、平井金山城の風呂谷、宮崎城の風呂等、皆水の手で「湯舟」も亦「風呂」と同意と考えられる。

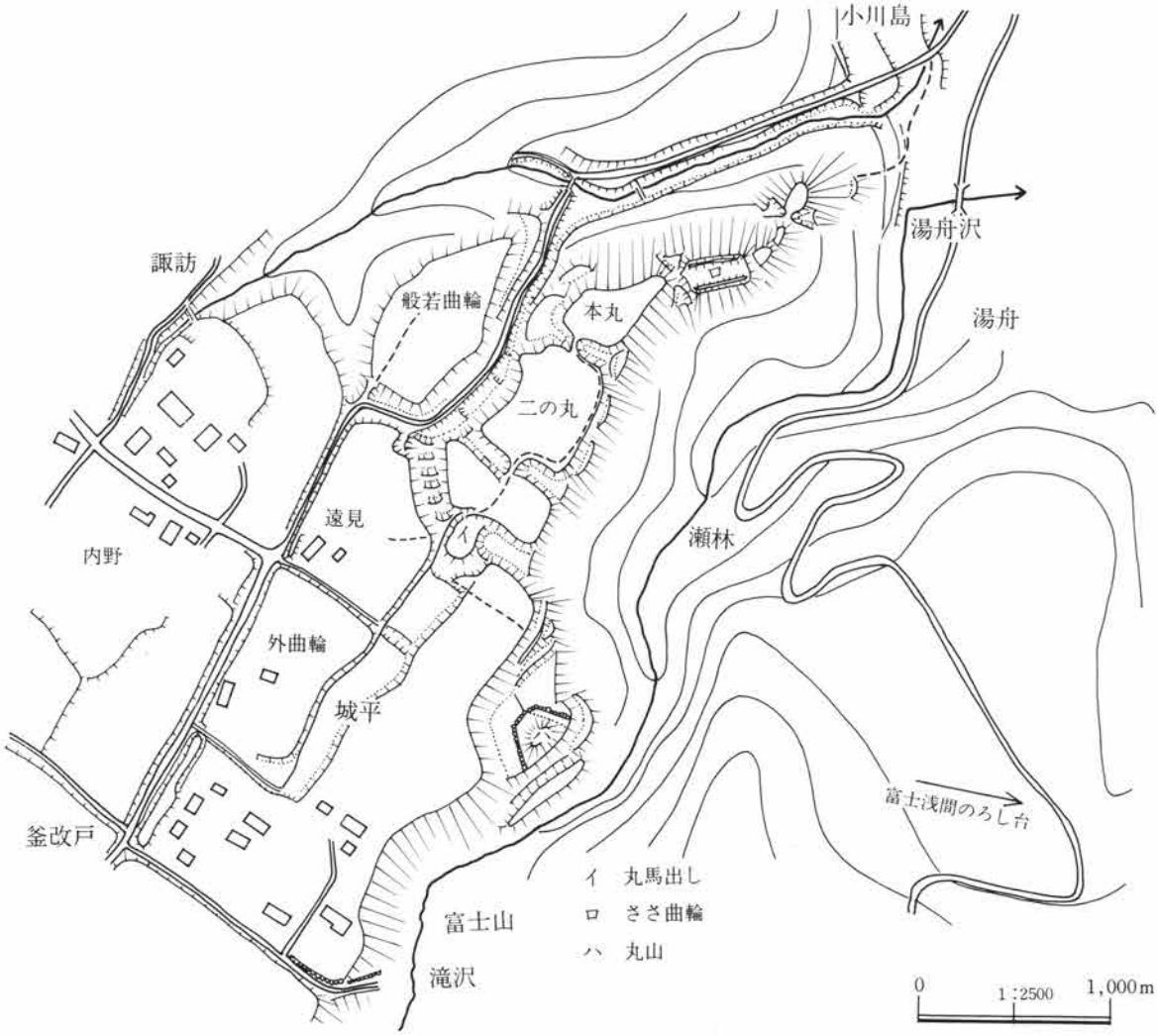
般若曲輪は、平城部の東端との間の、長さ75m、深さ5m乃至10m、幅8mの堀切りに土橋で通じる袋郭で、東西100m、南北50mある。天正十八年猪俣邦憲が名胡桃城を奪ったとき、鈴木主水の妻子をここに押し込めたが、高橋主計の援けで脱出できたと伝えられているが、ここは北郭であって、城主の家族は最初からここに居り、城が襲われた時、のがれたのであろう。

この城の南1キロに、城より190m高い天狗山が聳えている。その頂から城内は一望である。この弱点を名胡桃城は、のろし台として抑えていた。天狗山伏が騰烽師であったのでこの山の名が起ったのであろうか。城内平城部に「遠見」と呼ばれている家が現存するが、そこに遠見やぐらか、のろし台が設けられて天狗山に対応し、天狗山からは西南4.5キロの中山峯城を間にし、尻高、嵩山両城を経て岩櫃城に連絡していたと考えられる。

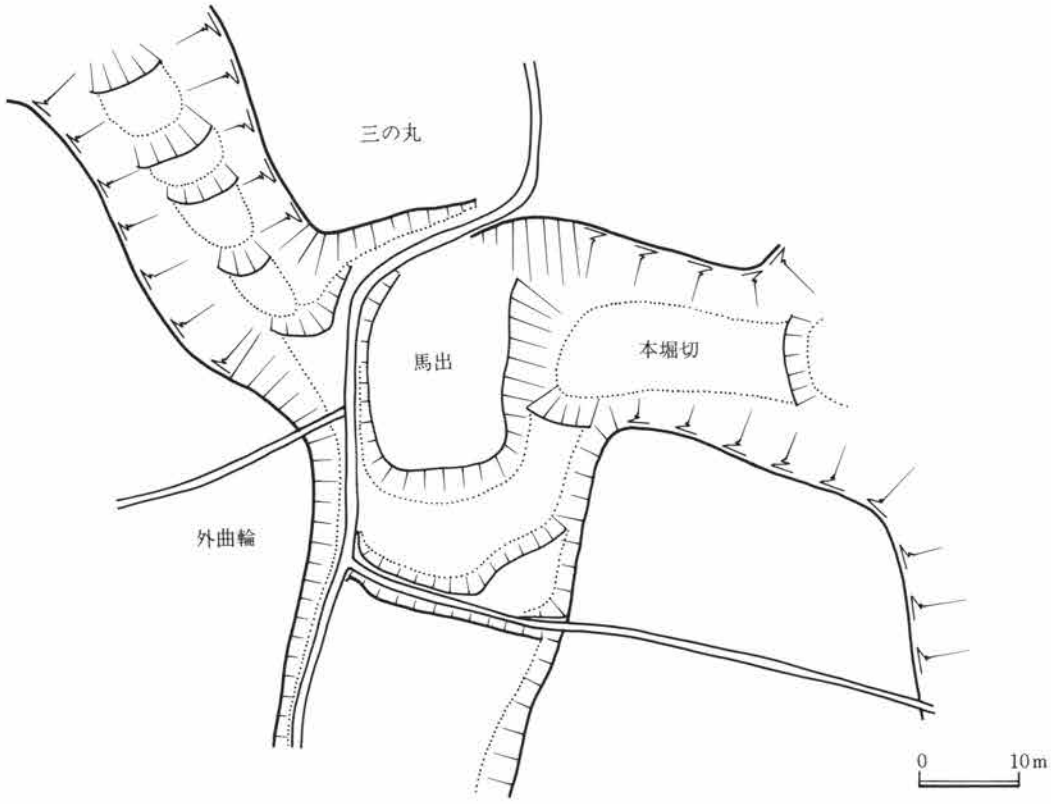
天正十八年十二月七日、北条氏直が富田、津田両使に送った書状中に「ナクルミノ至時百姓屋敷渕底以前前下向之砌可有御見分歟」と記しているのは、この城の普請造作をまざまざと表現しつくしている。その百姓屋敷同然の名胡桃城が天下一統の大合戦の発火点となったことを思えば、ここが記念すべき史蹟であることを誰もが肯定するであろう。



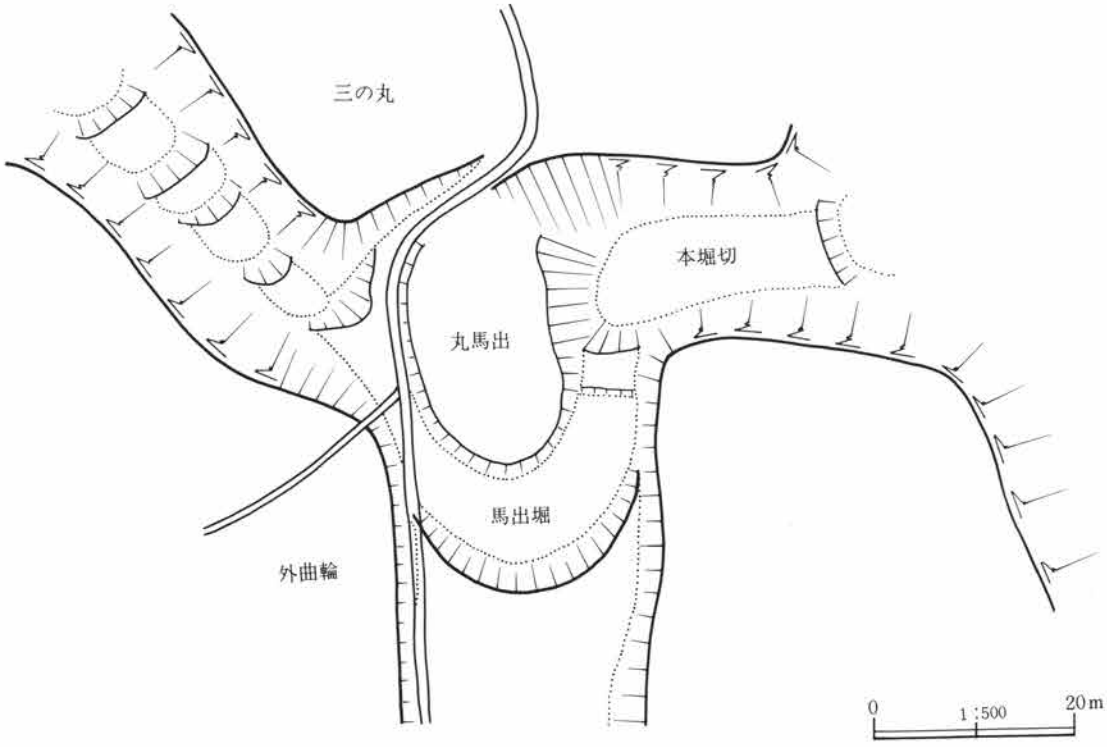

第30図　榛名峠城址



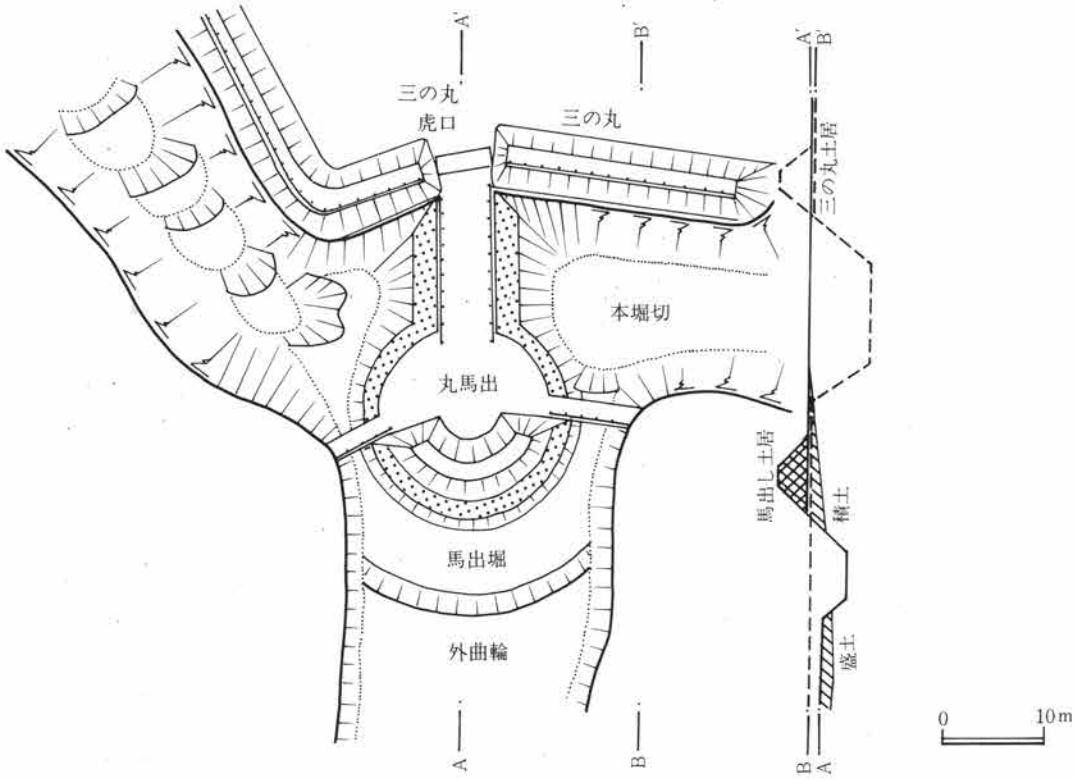

第31図　名胡桃城址



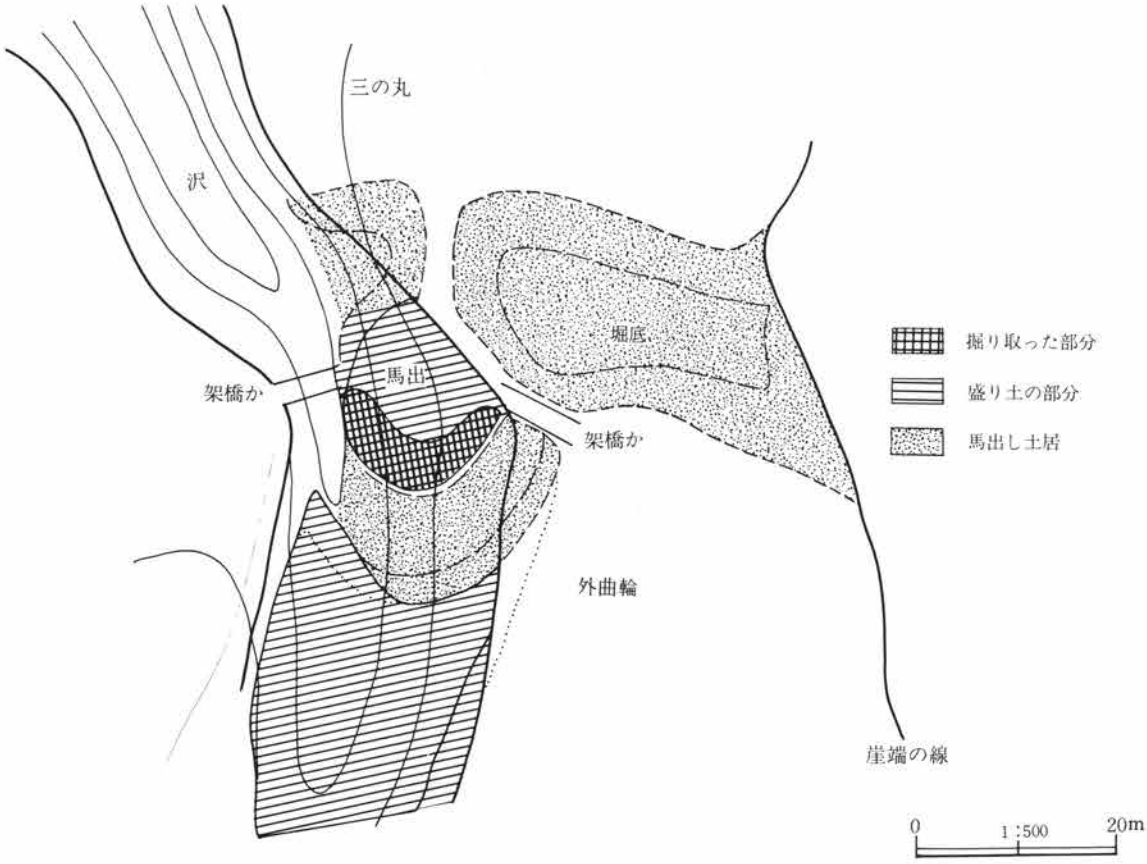

第32図　名胡桃城馬出跡（発掘調査前の状態）




第33図　名胡桃城馬出発掘見取図




第34図　名胡桃城丸馬出縄張り推定図




第35図　名胡桃城馬出普請推定図

## 第3節　周辺採集遺物

(1)　発見地及び発見状況

本稿で取り上げる板碑7基並びに五輪塔1基は、地元住人である原沢助治氏によって昭和57年11月10日に発見されたものである。発見地は同氏所有の畑であり、月夜野バイパス建設用地内の緩斜面にあたり、その地籍は月夜野町字瀬森808―1番地である。当地は名胡桃の南約300m程の地点で湯舟沢を挟み名胡桃城の南対岸にあたる。発見者からの知見では現地表面下約30cm程から板碑と五輪塔が相接して出土し、また付近から長さ約30～40cm程の鉄剣1点と人骨片が出土していたという。しかし、これだけでは出土状況を把握することはできず、現存するものが板碑と五輪塔のみであることからもこれらの遺物が共伴関係にあるものか、また、何らかの遺構に伴うものかを確認することは不可能である。しかし、同一地点かは板碑7基及び五輪塔が検出されたことは、絶対数の少ないこの地域においては大変重要な問題であり、かつ貴重な資料となるものと思われる。

(2)　板碑について

第37図1の板碑は、出土した7基の板碑のうち比較的遺存状態が良好なものであるが、碑面はかなり磨滅している。高さ50cm、幅18cm、厚さ3cmを測り、左上及び左下の一部分を欠損してはいるもののほぼ完形に近い。石材は雲母、石英を若干含む緑泥片岩を用いている。主尊は明瞭で、キリーク（阿弥陀如来）の一尊種子の下に蓮座（蓮台）を置く。種子及び蓮座の彫り方は断面がU字形を呈する竹彫りと呼ばれる彫り方で、彫り込みは浅く碑面の磨滅を考慮に入れても製作当初からさほど深い彫り込みを有していなかったものと思われる。また蓮座の形態も図様化（簡略化）の様相が見られる。紀年銘は磨滅が著しく判読が困難であり、その他、偈文、被供養者名、願文、造立趣旨等の銘文及び華瓶等の装飾についてもやはり磨滅のためその有無さえ確認できない。二条線についても確認できず、これは線刻（線彫り）の二条線の浅い彫り込みが磨滅したものとも考えられるが、碑面の状況や種子、蓮座の図様化とも考え合わせると二条線は退化し造立当時から刻まれていなかったものと思われる。全体の形状についてであるが、基部（根部）は左側の半分程欠損しているものの右側残部から察するとかなり鋭角の基部を持っていたと思われ、差し込み用の突起部を持たない地面に直接差し込むタイプのものと思われる。また頂部は、一般に山形（三角形）を呈するのが武蔵型板碑の特徴とされているが、この板碑の場合は丸味をおびており、磨滅を考慮に入れてもかなり鈍角な三角形を呈していたものと思われる。後に記載の他の板碑についても同様の頂部形状を呈していることから、これらの板碑は製作時においてすでに頂部を三角形に成形するという意識がかなり薄れていたものと思われる。以上のことからこの板碑の造立年代を推定するに、板碑の小型化、二条線の衰退、頂部の形状、種子の刻字法、蓮座の図様化（簡略化）などから考えてほぼ14世紀末から15世紀末頃に造立されたものであろうと思われる。

第37図2の板碑は高さ55cm、幅19.5cm、厚さ3cmを測り、石材は雲母が筋状に入り石英を若干含む緑泥片岩（絹雲母片岩に近い）を用いている。碑面は磨滅が著しく、主尊のキリーク一尊種子と蓮座の一部が僅かに残るだけで紀年銘等は判読できない。二条線についても刻まれておらず、全体の形状は第37図1の板碑とひじょうに類似している。

第37図4の板碑は高さ53.5cm、幅18.5cm、厚さ3.5cmを測り、石材は第37図2の板碑と同様の緑泥片岩を用いている。碑面はやはり磨滅が著しく、主尊のキリーク一尊種子の一部が僅かに判読できるのみで、その他の紀年銘等は判読できない。二条線についても刻まれておらず、全体の形状は第37図1・2の板碑と同様である。

第37図5の板碑は高さ57cm、幅21.5cm、厚さ2.5cmを測り、石材は雲母が筋状に入り、その含有量は他の板

碑より若干多い絹雲母片岩を用いている。碑面はやはり磨滅が著しく、主尊のキリーク一尊種子の一部が僅かに判読できるのみで、紀年銘等は判読できない。二条線は刻まれておらず、全体の形状については第37図１・２・４の板碑とほぼ同様であるが、基部の先端が鋭角ではなくやや丸味をおびている。

第37図３・６・７の板碑は３基とも上半部を欠損しているものの残存する基部の大きさ及び形状を他の板碑とほぼ同じくし、また石材も同様の緑泥片岩を用いていることから、他と同様の板碑であったと思われる。

(3)　五輪塔について

第36図の五輪塔は空風火水地の五輪塔のうち空風輪を一石で造成するという四石造成(四石彫成)の五輪塔であるが、発見当時から水輪を欠損し三石しか残存していない。石材は角閃石安山岩を用いているが板碑と同様に磨滅が著しく種子はその有無さえ確認できない。五輪塔の造立年代については小型化、四石造成、火輪の形状などの点から推定すると14世紀末から16世紀初頭の造立であろうと思われる。

(4)　まとめ

板碑の７基および五輪塔について個々に記述したがここで簡単にまとめてみたい。まず７基の板碑についてであるが、その大きさ及び形状がほぼ同じであり、かつ石材に近似したものを用いていることなどから、これら７基の板碑は同じ産出地で産出、加工（製作）されたものであり、その造立年代もほぼ同時期であろうと思われる。また五輪塔についても板碑とほぼ同時期の造立と考えられるため、ここにあげた板碑７基及び五輪塔１基は伝え聞く出土状態及び磨滅の状態から他所から搬入し廃棄されたものではなくかなり長い年月の間当地に造立されていたものが風化（磨滅）し、造立の位置にそのまま埋没したものすなわち共伴関係にあったものと思われる。

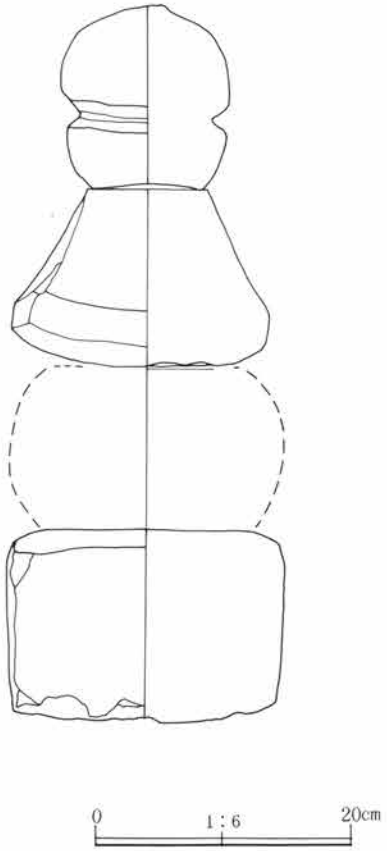
さて、ここで問題になることは、誰がこの板碑や五輪塔を造立したかということであるが、この点に関しては板碑に刻まれる被供養者及び造立者名（逆修の場合は同一人物）が磨滅しているため詳らかではないが、板碑や五輪塔を造立し得る階層の人々（思想面、経済面などから、土豪等の富有者階級の人々と考えられる)が、当地に存在していたことだけは明らかである。また、板碑、五輪塔の絶対数が少ない地域であるだけに、板碑７基及び五輪塔１基[(2)]を造立した人々は当地において14世紀末から15世紀末頃にかけて強い勢力を持っていた[(1)]であろうと思われる。

（新倉明彦）

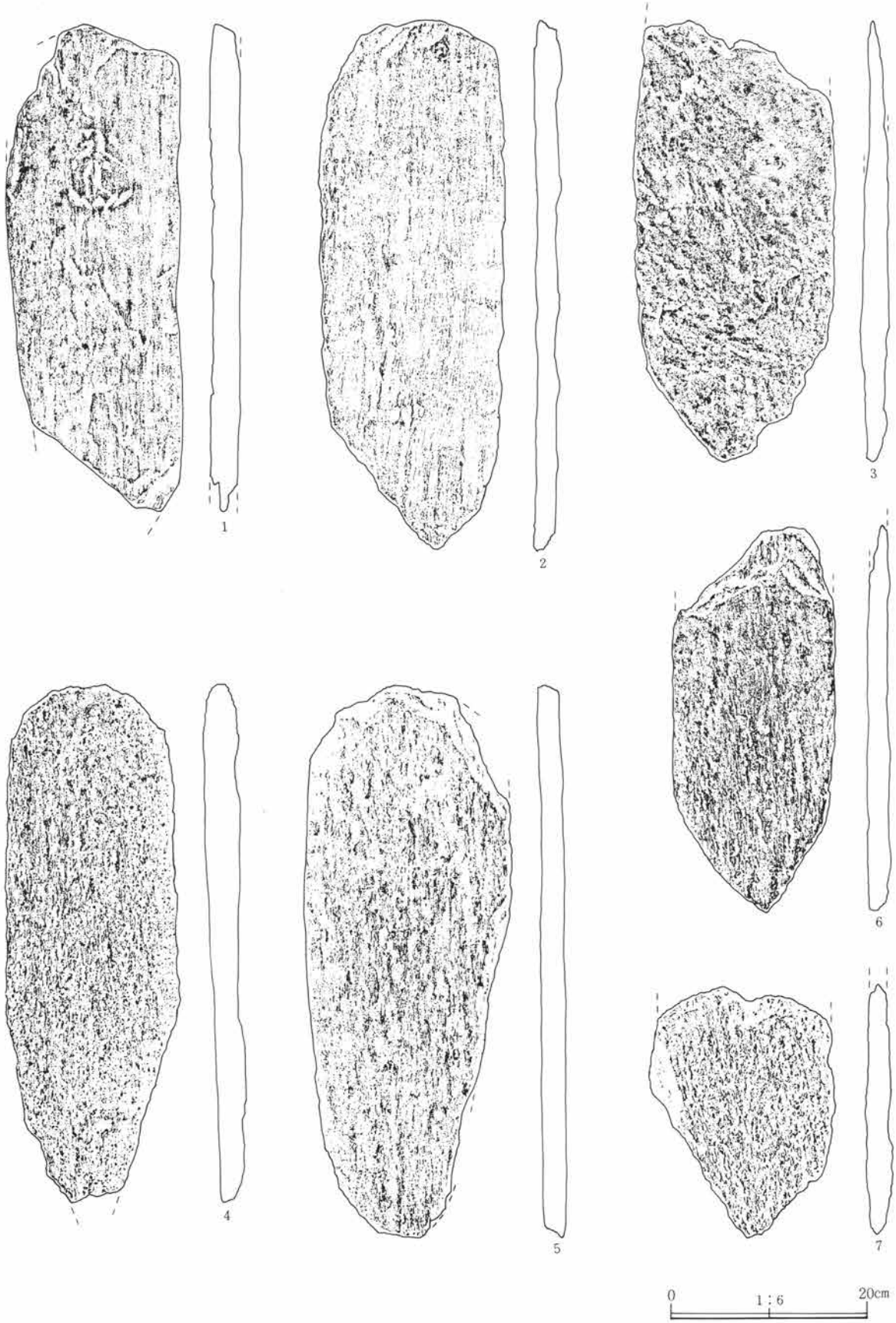
註

(1)　月夜野所在（現在）の板碑数については津金澤吉茂氏のまとめによると年代不明の板碑を含め10基を数える。（この10基は本稿で取り上げた７基を含まない）
○坂詰秀一編『板碑の総合研究』（地域編一昭和58年）

(2)　板碑造立の場合、五輪塔、宝篋印塔等の石塔にくらべ簡易であることから社会的階層の下がった人々による造立と考える説もあるが、石材産出地からの交通事情、距離に伴なう運搬等を考えると五輪塔等の造立とほぼ同じ階層の人々による造立であると考えられる。




第36図　五輪塔実測図




第37図　板碑実測図

# 諏訪遺跡

# 第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

諏訪遺跡は利根郡月夜野町大字下津字諏訪3376番地他に所在する。周辺の地域は、遺跡の西側に標高900m前後の山々が連なり、これらの山々の山麓には各所に小規模な扇状地地形が認められる。また、付近一帯は通称「名胡桃平」と呼ばれる平坦な台地形が広がっている。この「名胡桃平」と呼ばれる地域は、利根川の支流のひとつである赤谷川によって形成された河岸段丘の最上位面にあたる。現在は、「ため池」利用の水田と桑畑、果樹園として土地利用されている。遺跡の東側には赤谷川と利根川[(1)]によって形成された沖積地[(3)]と微高地が広がり、沖積地は「用水」利用の水田となっている。

遺跡は「名胡桃平」と呼ばれる台地の末端部に位置する。台地は小規模な河川によって開析され、特に、台地末端部では地形変換点となっており、河川の浸蝕力が最大となっている。このため、遺跡付近では、約10m前後を測る深いV字谷が形成されている。遺跡の範囲は舌状の台地全体に及ぶものと思われる。

赤谷川の右岸地域でこの段丘に遺跡のほとんどが確認されており、これまでの調査[(2)]でも明らかになっている。

**註**

(1)　本遺跡より西方約1.5kmにある村主神社付近では、2ないし3の段丘となっていることが観察されるが、本遺跡付近ではみられない。

(2)　清水和夫他「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」群馬県教育委員会　1973
　　能登　健他「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」群馬県教育委員会　1975

(3)　17C頃、真田氏によって行われた新田開発時に多くのため池が作られた。

# 第Ⅱ章　調査の方法と経過

## 1.　調査の方法

諏訪遺跡における調査は、すべて城平遺跡での調査方法と同様である。調査の基本となるグリッドの設定にあたっても、城平遺跡で設定した基準線（Hライン）をそのまま延長し、グリッドの呼称法も同一のものとした。

## 2.　調査の経過

7月下旬より調査を開始した。当初は未買収地が調査区北側に残っていたために、調査区南側について予備調査を実施し、層序・遺構・遺物の状況の把握に努めた。その結果、部分的に包含層が残存していたが、大部分はローム層上面まで耕作が及んでいることが明らかになったため、重機を用いてローム層上面まで排土を行った。古墳時代の住居址3軒、縄文時代の土坑8基、中世の土坑2基、溝状遺構1条の調査を8月下旬に終了した。

調査区北側については、10月に入って未買収地の土地問題が一応の地主側の承認が得られたため調査を開始した。調査区南側同様、耕作がローム層上面にまで及んでいたので、重機を用いて排土を行った。住居址3軒、土坑40基を調査した。なお、調査区にトレンチを設定し、ローム層中の調査を行ったが、遺物は検出されなかった。12月23日をもって全作業を終了した。

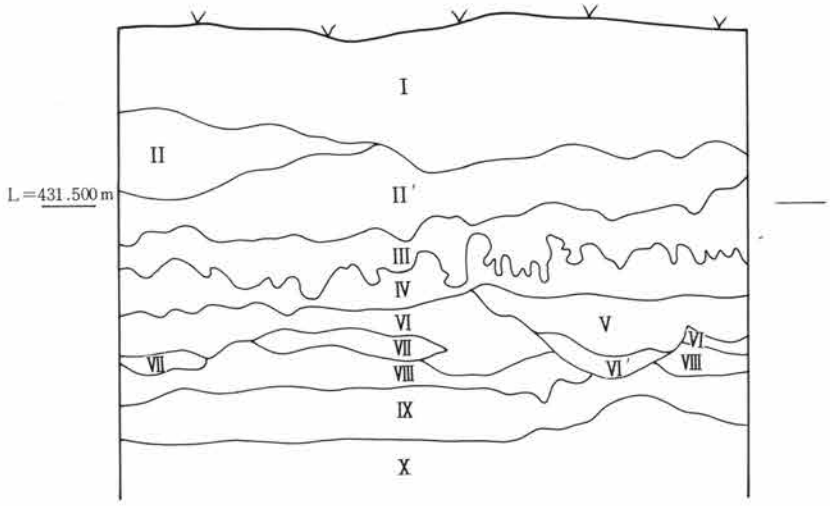
# 第III章　基　本　土　層

諏訪遺跡では、調査区北東付近で土層の堆積状態が良好であった他は、ローム層上面まで耕作が及び、耕作坑や溝により遺構の一部が切られていた。

II層は粘性の強い黒褐色土で、II層中に弥生時代の生活面が考えられる。ローム層はIII・IV層、及び、XXI層は安定して堆積しているが、V層からIX層にかけてはブロック状に白色粘土が観察され、通常の風性堆積とは異っている。IV層中、V層中に観察された白色パミスは浅間・白糸パミスの可能性が強い。((註))名胡桃平一般に見られるB・P（板鼻褐色軽石層）については認められなかった。

したがって、白糸パミスの降下以前に一時的にローム層の堆積が不安定となる要因が存在したものと思われる。

**註**　関越道関連　房谷戸・勝保沢中ノ山遺跡他での群馬大学教授、新井房夫氏による教示。




I層　表　土　層
II層　黒褐色土層　粘性・しまり共に強い。II層はしまりの強い暗褐色土層。
III層　暗黄褐色土層　くすんだ色調を呈し、下面は激しいクラック体をなす。
IV層　黄褐色ローム層　白色パミス混入。
V層　黄褐色ローム層　IVよりも多く白色パミスを混入。
VI層　赤褐色ローム層　黄褐色ローム土をブロック状に混入。
VII層　赤褐色ローム層　白色粒土をブロック状に混入。
VIII層　赤褐色ローム層　部分的に鉄分の沈着がみられる。
IX層　茶褐色ローム層　粘性が非常に強い。
X層　白色粘土層

0　1 m

第38図　諏訪遺跡基本土層図

第39図　諏訪遺跡全体図

# 第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

## 第１節　縄文時代の遺構と遺物

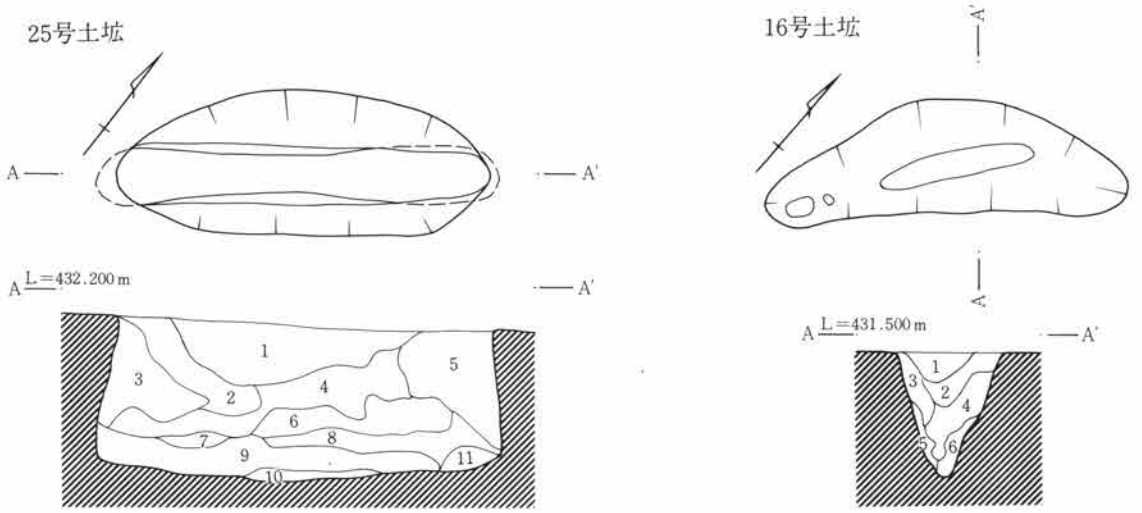
### (1)　土　　坑

**Ⅰ　類**　溝状を呈するものを一括した。Ⅰ類に分類された土坑は下総台地、多摩丘陵などの地域にも若干の報告例はあるがその数は少ない。分布の主な中心は東北、北海道地方に知られているものである。検出されたⅠ類の土坑は総計６基で、いずれも調査区北東部分に分布している。路線調査であり、全体の分布状況は不明である。

35・37・38・39号土坑の坑底は40・48号土坑の坑底が平坦であるのに対して、いずれも一定の坑底のあり方を示していない。平面の形状は長楕円形を呈し、断面形はロート状を呈す。長短軸比は５：１以上の比率である。深さは確認面下1.00mから1.40mを測るものが多い。

埋土は暗褐色土を主体とした自然堆積状態を示していた。

遺物は20号土坑埋土中より土器片（第41図）が２点出土している。



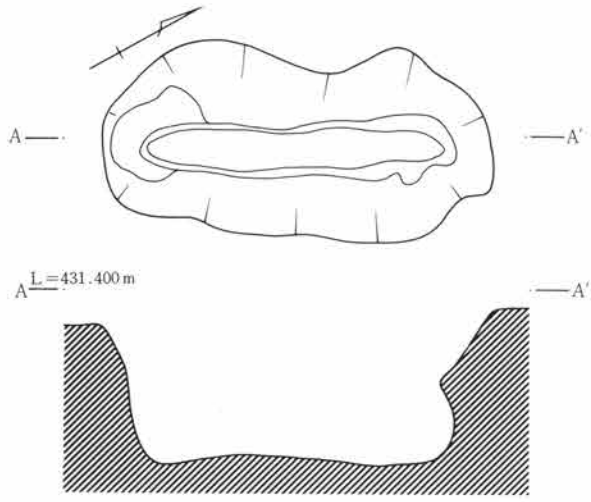

1　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　暗褐色土層　ロームブロック混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
5　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
6　暗褐色土層　ロームブロックを多く混入。
7　暗褐色土層　ロームブロック混入。６層よりも明るい色調を呈す。
8　暗褐色土層　ローム粒子混入。
9　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。粘性・しまり共に強い。
10　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。粘性・しまり共に強い。
11　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性。

1　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。２層よりも明るい色調を呈す。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。４層よりも明るい色調を呈す。
6　褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。粘性に富む。

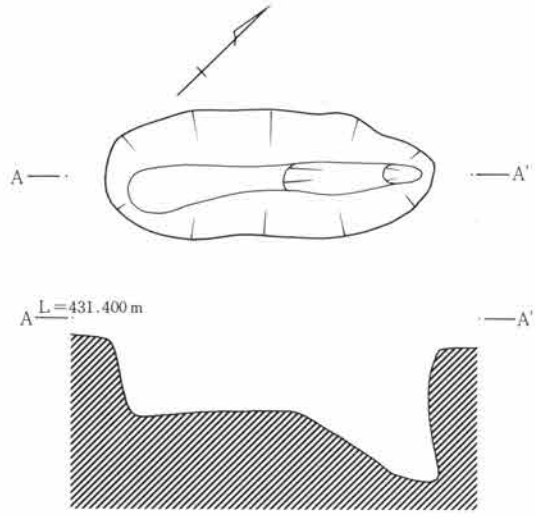
0　1:40　1 m

第40図　16・25号土坑実測図

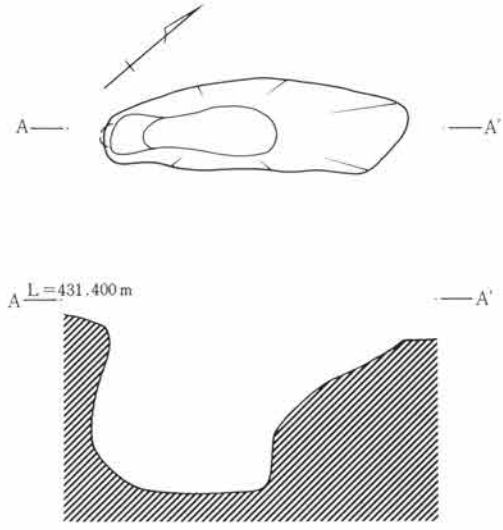
21号土坑



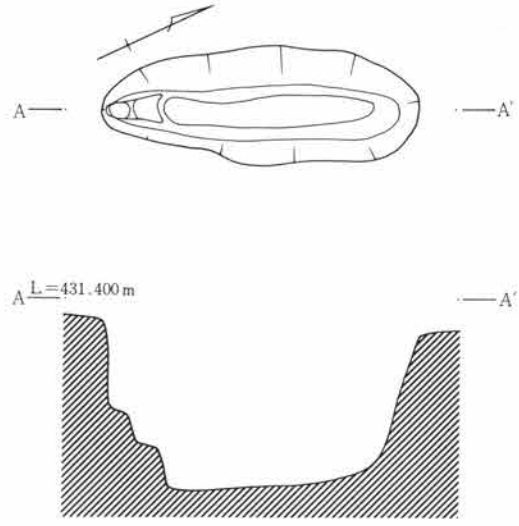

19号土坑

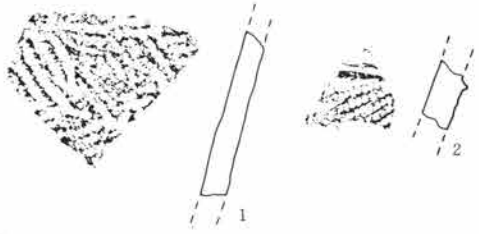



20号土坑

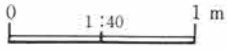



18号土坑




（縮尺＝½）



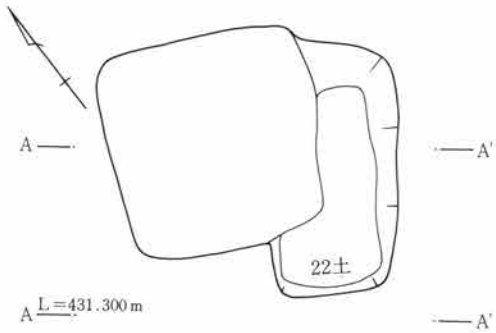

第41図　18・19・20・21号土坑実測図

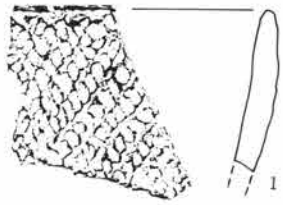
**II－a　類**　平面形は長方形、ないし、楕円形状を呈し、坑底にピットをもたないものを一括した。検出されたII－a類の土坑は２基で、調査区北側部分に分布している。規模は長軸1.2～1.8m、短軸0.8～1.0m、深さ0.6mを測り、平面形は略長方形となっている。

22号土坑は耕作坑により約3分の１の形状を失っている。埋土は暗褐色土を主体として自然堆積状態を示していた。出土遺物は埋土中より土器片（第42図）がある。

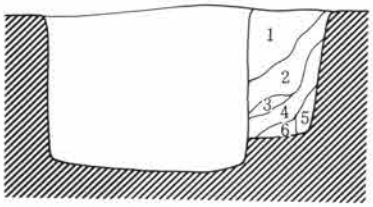
42号土坑は上半の約３分の２を５号住居址によって切られている。埋土は暗褐色土を主体として自然堆積状態を示していた。遺物は検出されなかった。

22号土坑



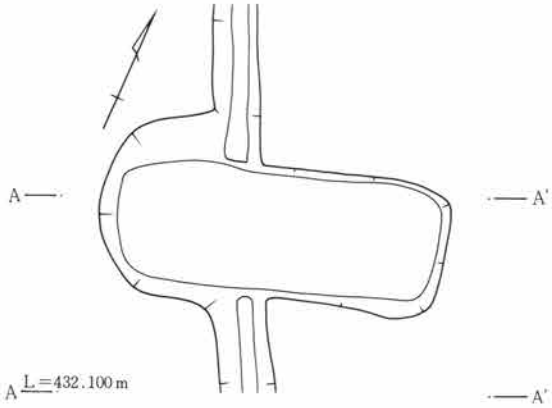



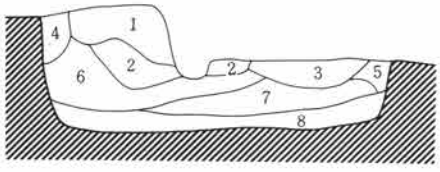

（縮尺＝½）




1　黒褐色土層
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。２層よりも明るい色調を呈す。
4　褐色土層　ローム粒子を多く混入。
5　褐色土層　ローム粒子を多く混入。４層よりも明るい色調を呈す。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

42号土坑




1　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。１層よりも明るい色調を呈す。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性に富む。
7　黒褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性に富み、しまりは弱い。
8　黒褐色土層　ローム粒子を混入。粘性・しまり共に強い。

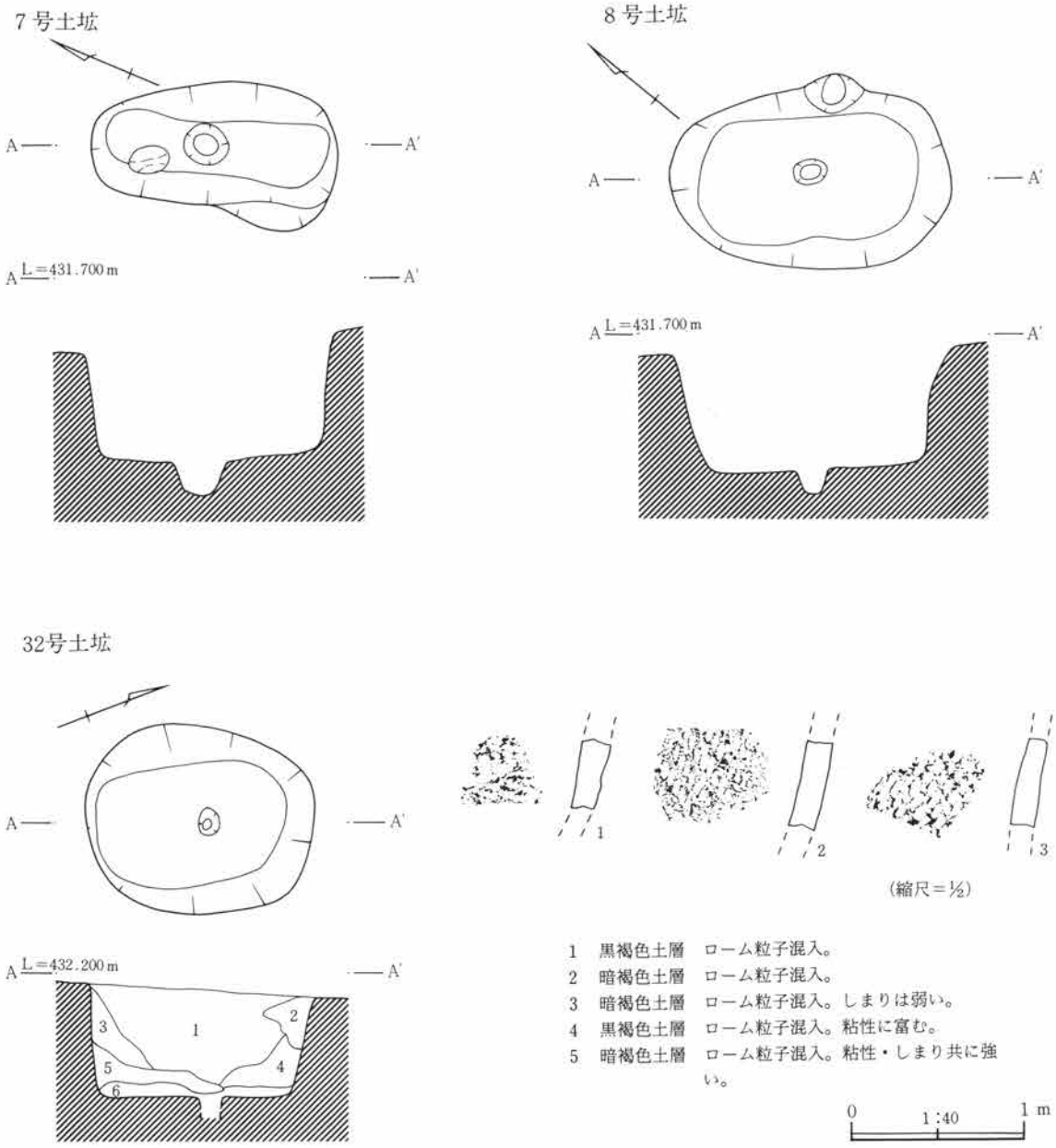
0　1:40　1 m

第42図　22・42号土坑実測図

**II－b　類**　長方形、ないし、楕円形状を呈し、坑底に1個のピットをもつものを一括した。II－b類に分類された土坑は総計10基で、調査区全体に分布している。大部分の土坑は長・短軸比が2：1を示すのに対して、6・7・33号土坑については、長・短軸比が3：1を示し、若干細身の形態を示している。したがって二つの形態が存在していることになり、さらに細分される可能性をもっている。坑底のピットはその中央に穿たれているものが多い。

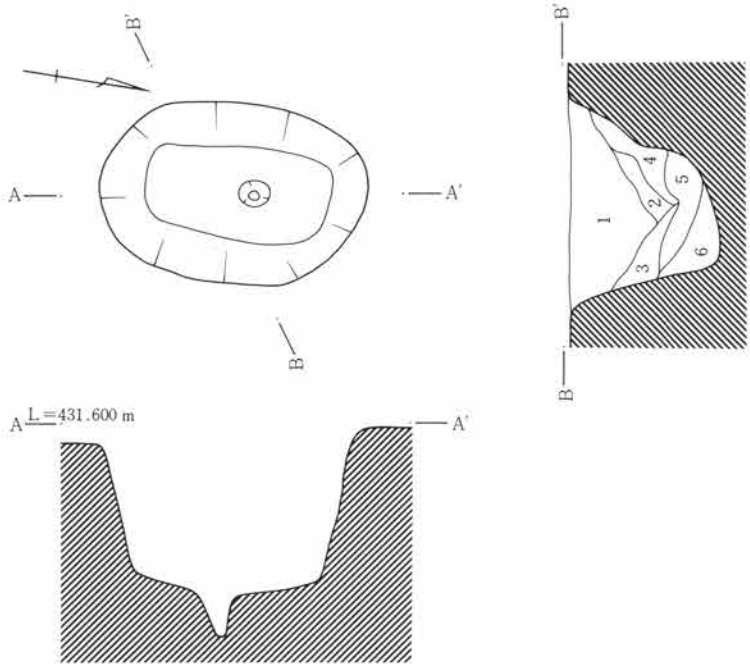
埋土は31号土坑にローム粒子、ブロックを主体とする人為的埋土が観察されたが、その他の土坑については、暗褐色土を主体として自然堆積状態を示していた。

遺物は、7号土坑埋土中より人頭大ほどの自然石が、31・32号土坑埋土中より土器片（第43・46図）が出土している。



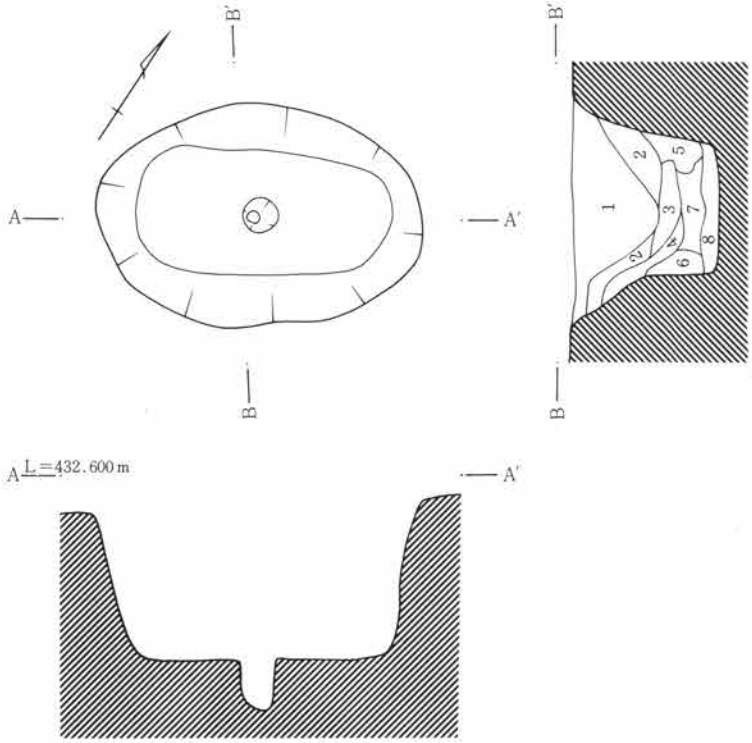

第43図　7・8・32号土坑実測図

２号土坑




1　黒褐色土層　ローム粒子混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
3　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子を混入。粘性に富む。
5　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。粘性・しまり共に強い。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

３号土坑

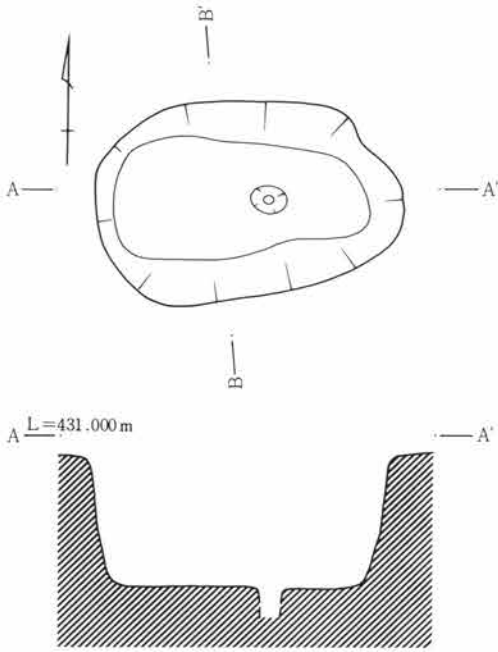


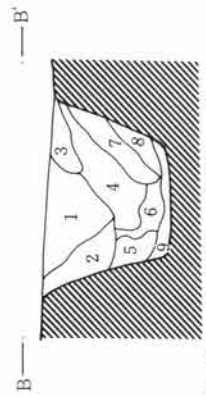

1　黒褐色土層　ローム粒子混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子混入。6層よりやや暗い色調を呈す。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。
7　褐色土層　ロームブロックを多く混入。
8　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。粘性しまり共に強い。

0　1:40　1 m

第44図　２・３号土坑実測図

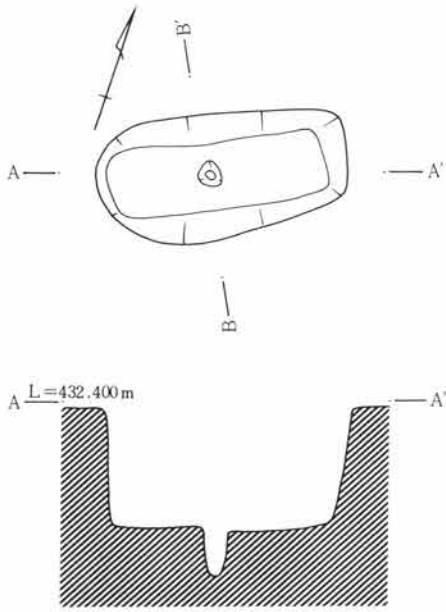
15号土坑

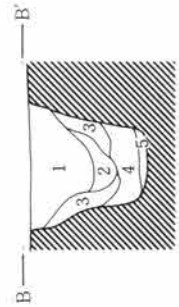



1　暗褐色土層　ローム粒子混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。1層よりも明るい色調を呈す。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。
4　褐色土層　ローム粒子混入。3層よりやや暗い色調を呈す。
5　褐色土層　ローム粒子を多く混入。
6　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
7　褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
8　褐色土層　ローム粒子を多く混入。
9　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

33号土坑



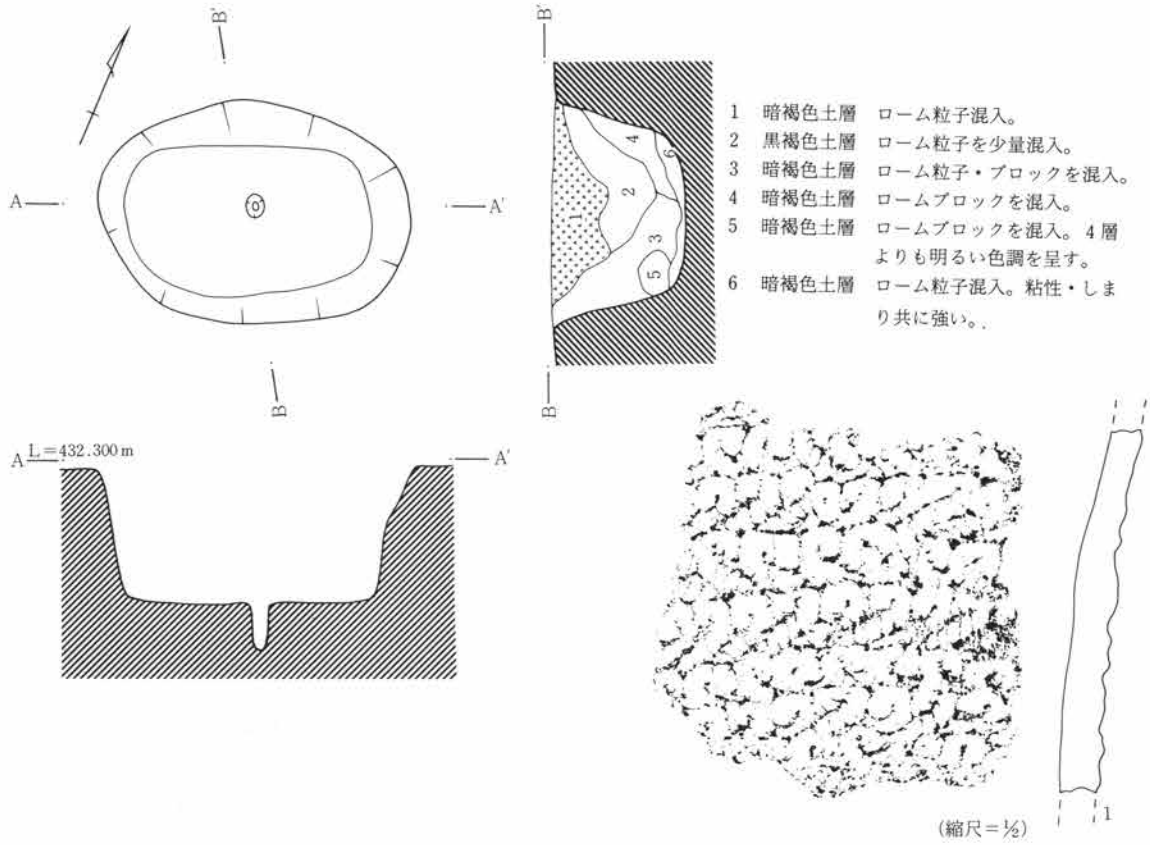




1　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　黒褐色土層　ローム粒子混入。
3　褐色土層　ロームブロックを多く混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

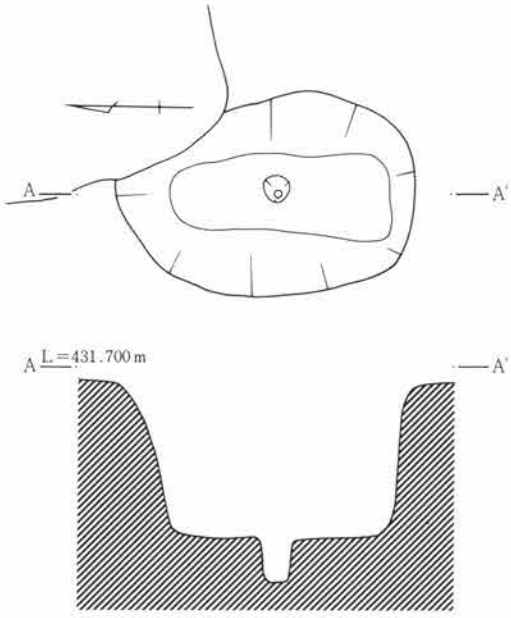
0　1:40　1 m

第45図　15・33号土坑実測図

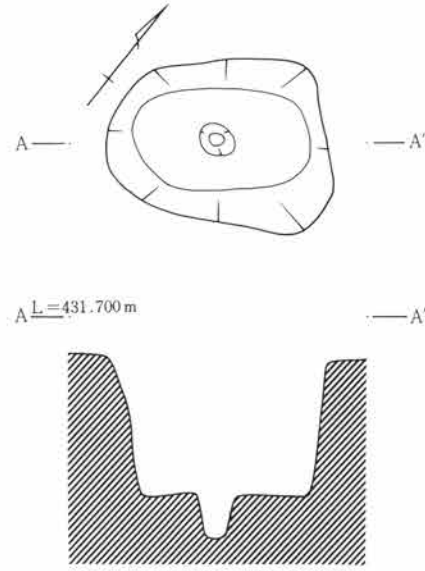
31号土坑




6号土坑




5号土坑



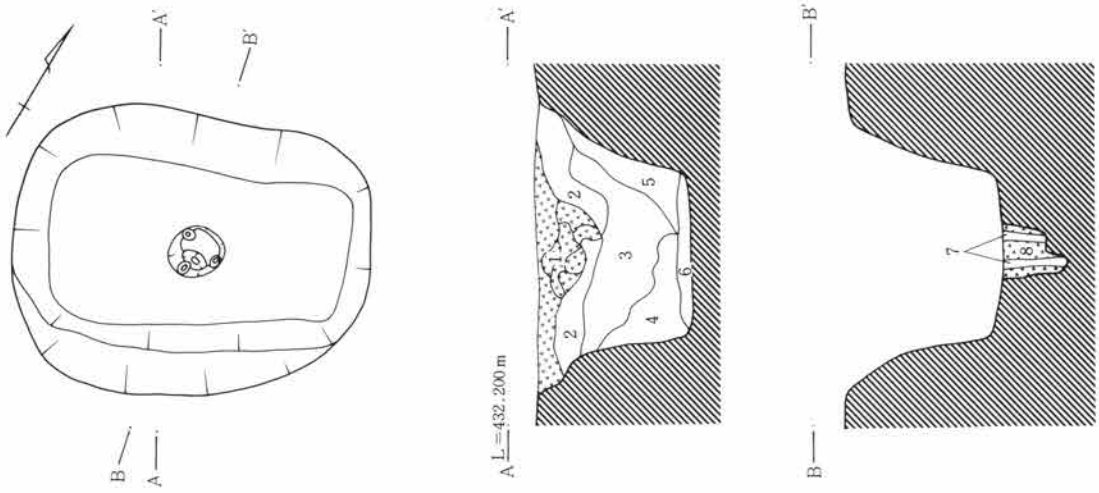

0　1:40　1 m

第46図　５・６・31号土坑実測図

**II－c　類**　平面形は長方形、ないし、楕円形状を呈し、数個の小ピット痕が集中して認められたものを一括した。この小ピット痕の集中する部分は最終的には1個の大ピットとして掘り上げられてしまうものである。

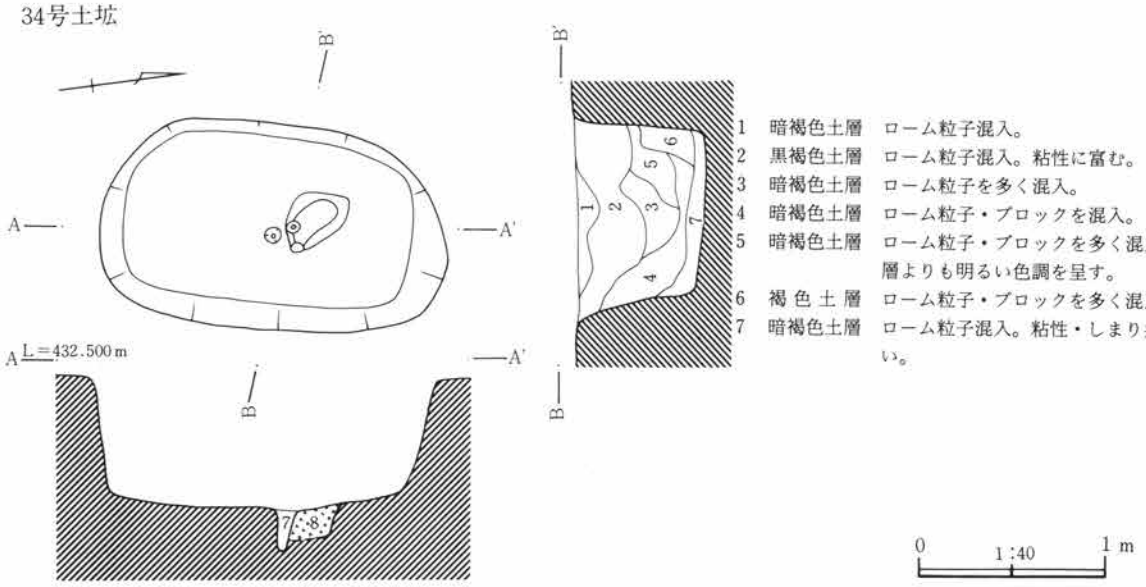
27号土坑は坑底に4個の小ピット痕が認められた。ピットの断面観察の結果はピット内にローム土が充塡されていた。埋土は暗褐色土を主体として自然堆積状態を示すが、埋土上部には、ローム粒子、ブロックを主体とする人為的埋土が観察された。58号土坑は坑底に2個の小ピット痕が認められた。埋土は暗褐色土を主体とした自然堆積状態を示す。遺物は検出されなかった。

11号土坑




1　褐色土層　ローム粒子・ブロックの混土層。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。粘性に富む。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。
7　黒褐色土層　ローム粒子混入。有機質土層。
8　褐色土層　ローム粒子・ブロックの混土層。

34号土坑



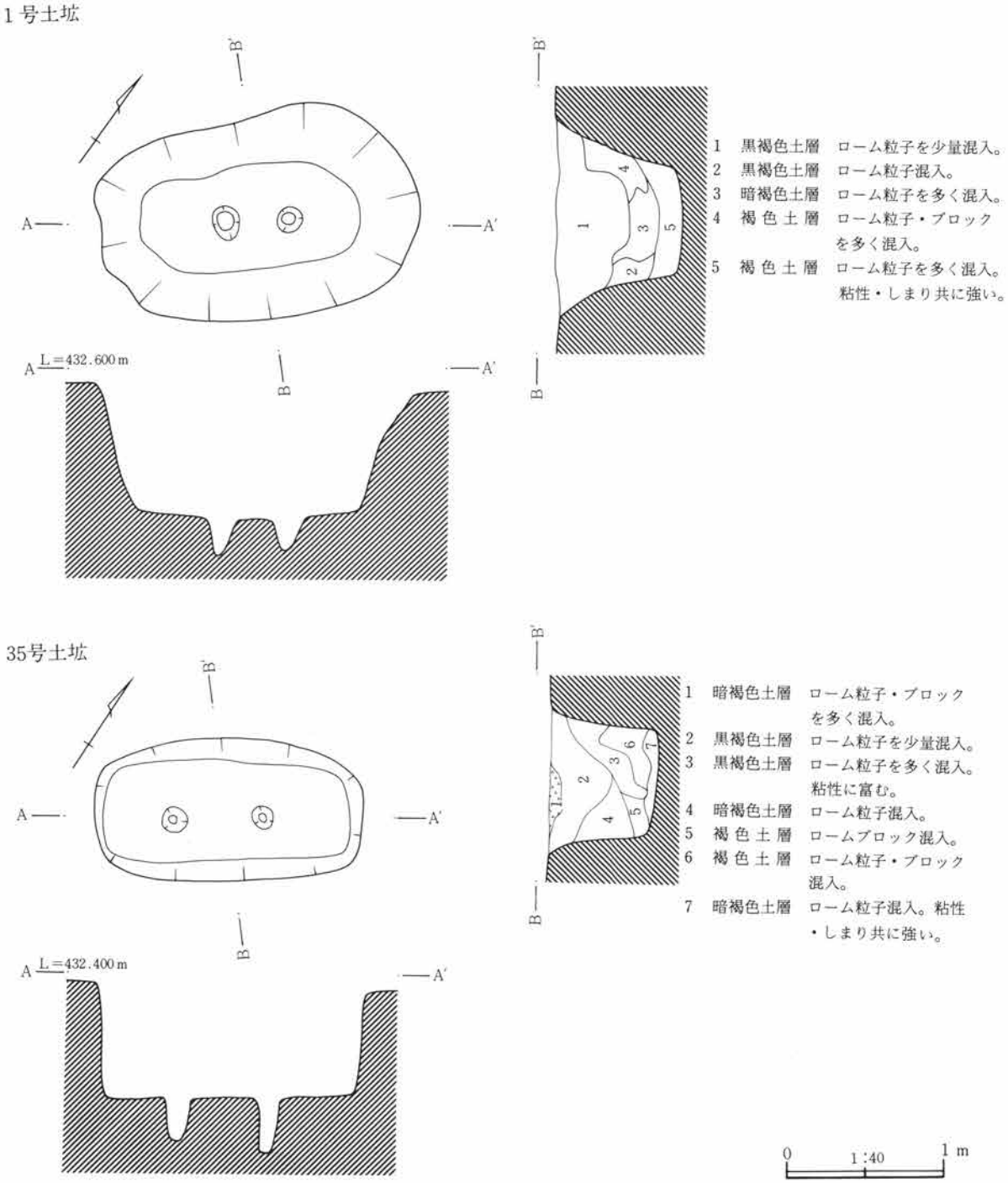

1　暗褐色土層　ローム粒子混入。
2　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
3　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。4層よりも明るい色調を呈す。
6　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
7　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

第47図　11・34号土坑実測図

**Ⅱ－ｄ　類**　平面形は長方形、ないし、楕円形状を呈し、坑底に２個のピットをもつものを一括した。Ⅱ－ｄ類に分類された土坑は２基である。

１号土坑は長軸2.05m、短軸1.2m、深さ0.8mを測る。坑底のピットは中央にやや寄った位置に検出された。埋土は暗褐色土を主体とした自然堆積状態を示す。遺物は出土しなかった。

35号土坑は長軸1.7m、短軸0.9m、深さ0.7mを測る。埋土はローム粒子、ブロックを主体とした人為的埋土が上層に認められた。遺物は出土しなかった。




第48図　１・35号土坑実測図

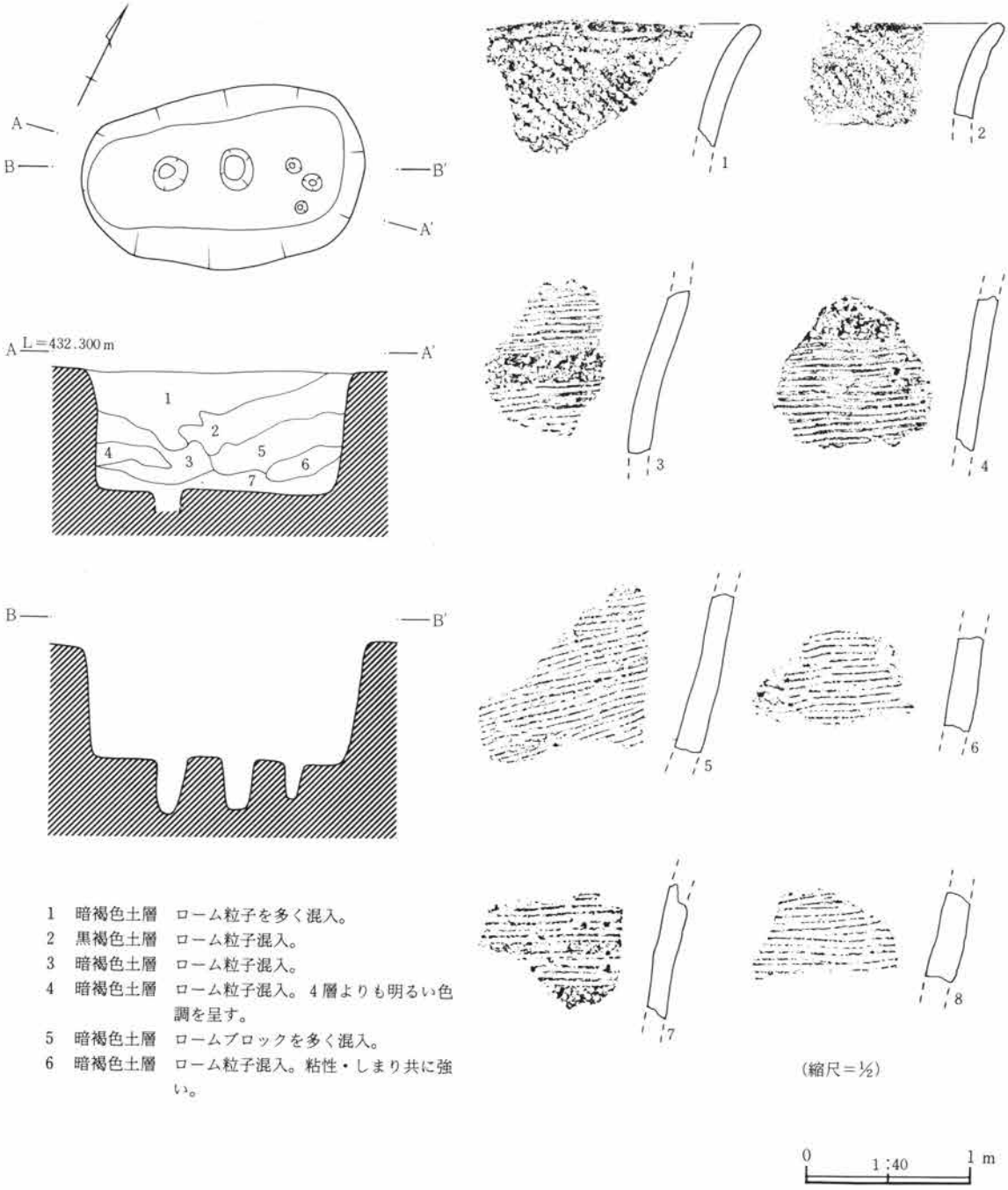
**II－e　類**　平面形は長方形、ないし、楕円形状を呈し、坑底に3個以上のピットをもつものを一括した。II－e類に分類された土坑は3基で、いずれの土坑も調査区北側に分布している。

いずれの土坑の坑底のピットとも、その配列に規則性は認められず、わずか数cmのものも見られた。

埋土は暗褐色土を主体とした自然堆積状態を呈するが、46号土坑の埋土上位にローム粒子、ブロックを主体とする人為的埋土が観察され、当初は「風倒木痕」と思われたほどであった。

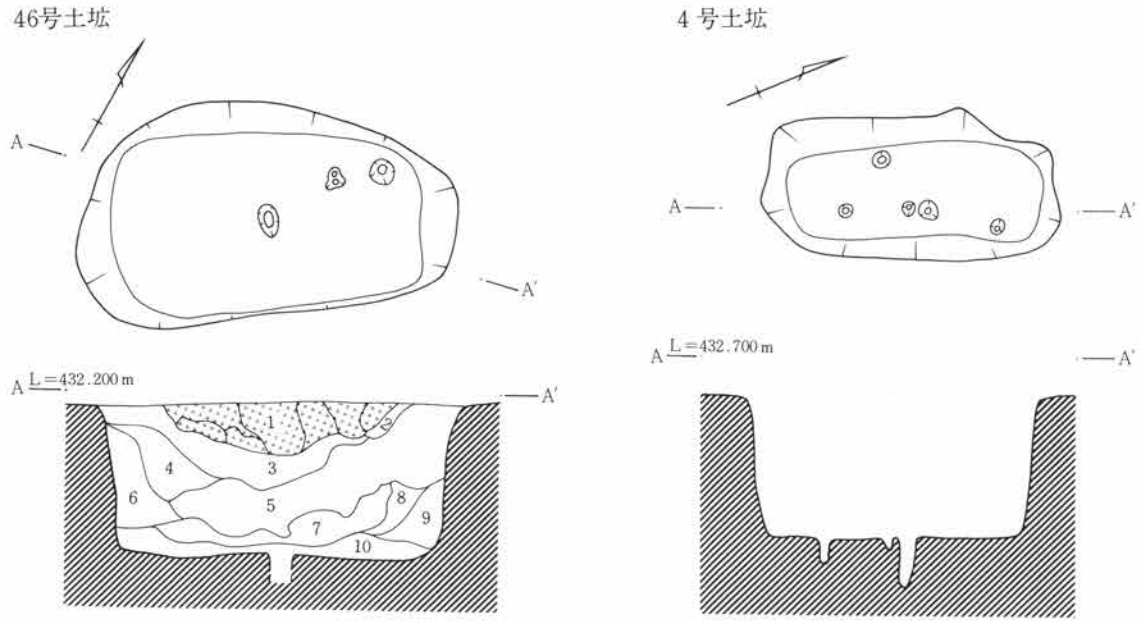
遺物は30号土坑埋土中より土器片（第49図）が出土している。

30号土坑




1　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
2　黒褐色土層　ローム粒子混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。4層よりも明るい色調を呈す。
5　暗褐色土層　ロームブロックを多く混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

第49図　30号土坑実測図




1　褐色土層　ローム粒子・ブロックの混土層。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
5　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
6　褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
7　暗褐色土層　ローム粒子混入。
8　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。粘性に富む。
9　褐色土層　ロームブロック混入。
10　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

0　1:40　1 m

第50図　4・46号土坑実測図

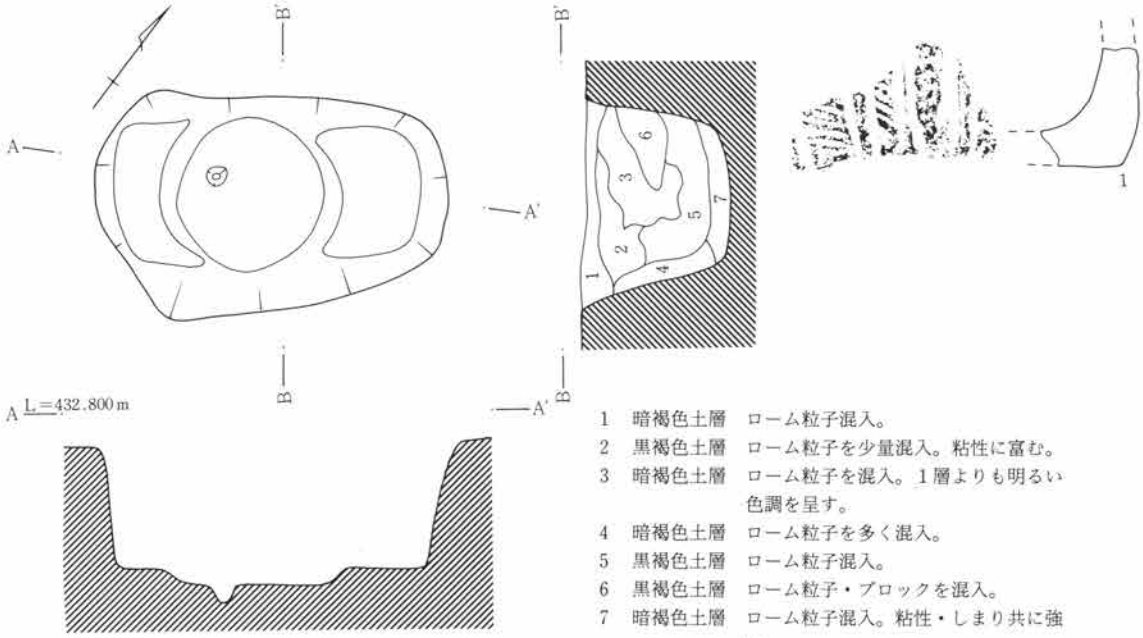
**II－f　類**　平面形は長方形、ないし、楕円形状を呈すが、坑底中央部で一段掘り窪むもの（9号土坑）と、逆に一段盛り上がるもの（17号土坑）の二つの形態の土坑を一括した。いずれの土坑も調査区北側に分布している。

9号土坑は坑底の中央部付近を円形状に約10cm程掘り下げており、中に1個のピット痕が検出されている。埋土は暗褐色土を主体とした自然堆積状態を示していた。出土遺物は土器片（第51図）がある。

17号土坑は坑底の中央部付近を楕円形状に掘り残したもので、2個のピット痕が検出されている。埋土は暗褐色土を主体とした自然堆積状態を呈すが、埋土上位にはローム粒子、ブロックを主体とする人為的埋土が観察された。出土遺物は埋土中より土器片（第51図）がある。

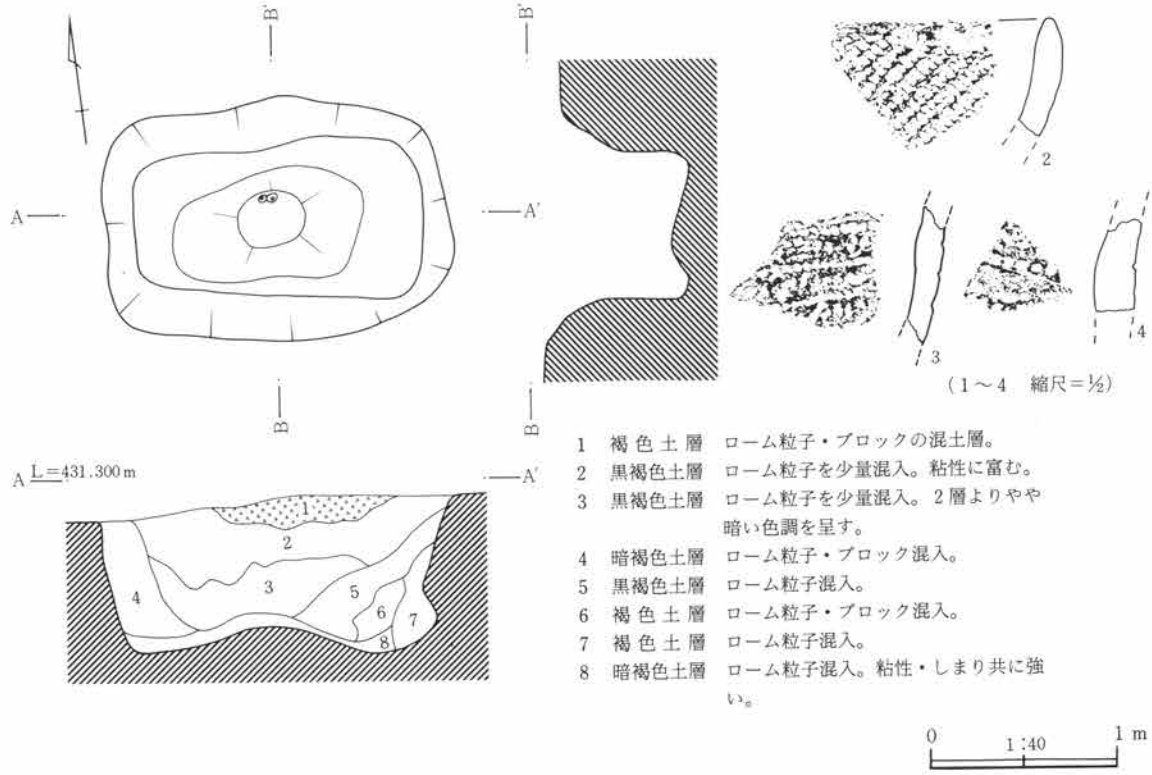
II－f類に分類された土坑は他に類例が見られず、現段階では、意図的に存在したか否かは不明とせざるを得ない。

9号土坑




1　暗褐色土層　ローム粒子混入。
2　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。粘性に富む。
3　暗褐色土層　ローム粒子を混入。1層よりも明るい色調を呈す。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
5　黒褐色土層　ローム粒子混入。
6　黒褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
7　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

17号土坑




1　褐色土層　ローム粒子・ブロックの混土層。
2　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。粘性に富む。
3　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。2層よりやや暗い色調を呈す。
4　暗褐色土層　ローム粒子・ブロック混入。
5　黒褐色土層　ローム粒子混入。
6　褐色土層　ローム粒子・ブロック混入。
7　褐色土層　ローム粒子混入。
8　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

第51図　9・17号土坑実測図

**土坑間の切り合い関係**　検出された土坑は総計46基である。このうち、土坑間に切り合いの関係が確実に認められたものは２例、４基の土坑に関してである。

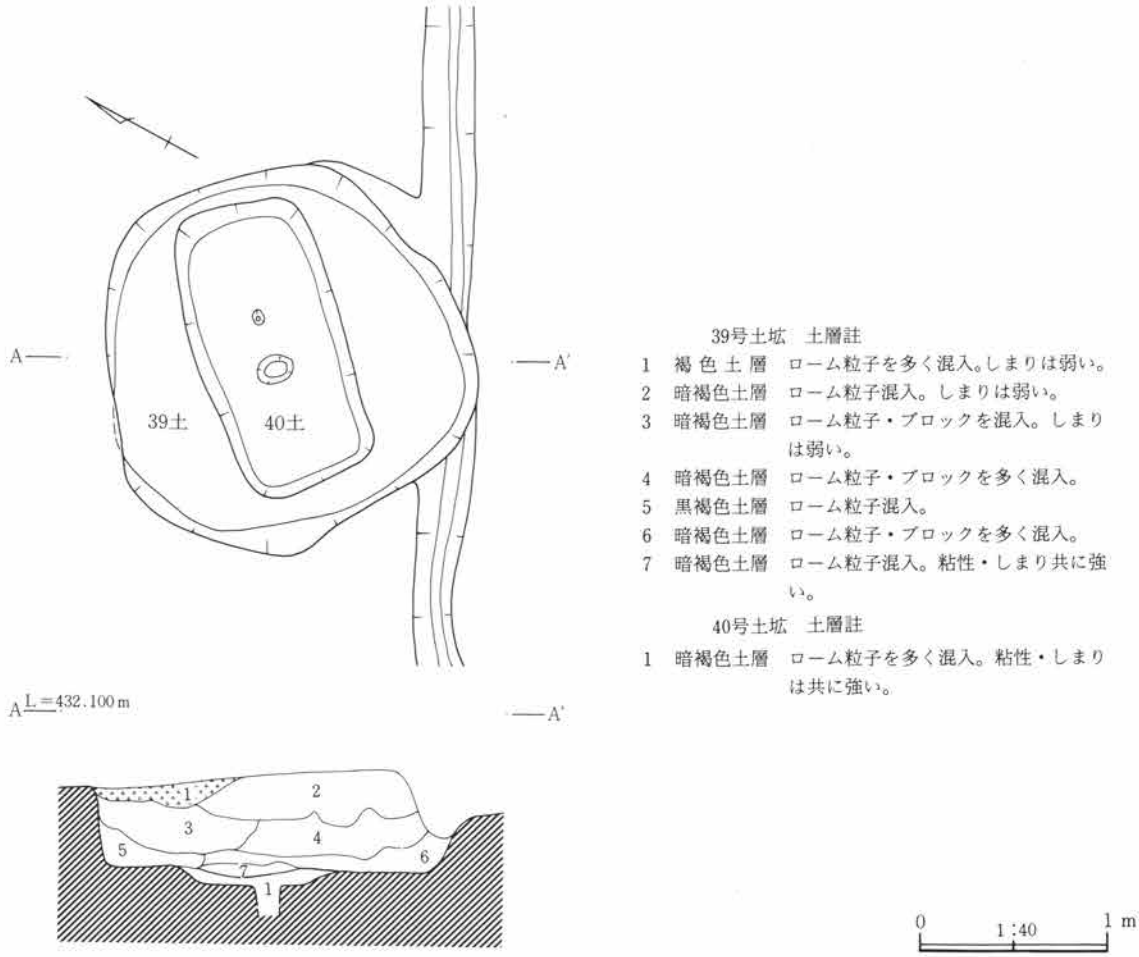
39号土坑―40号土坑、II－d類とIII類の切り合いである。新旧関係は40号土坑（旧）→39号土坑（新）の順である。

39号土坑はIII類に分類された土坑の中で最大規模をもつもので壁はほぼ垂直に立上がる。一部を５号住居址に切られている。埋土は暗褐色土を主体とした自然堆積状態を示していたが、埋土上位にローム粒子、ブロックを主体とする人為的埋土が認められた。遺物は検出されていない。40号土坑は39号土坑に切られているために、坑底の形状を把握できたにすぎない。坑底に２個のピットが検出されている。遺物は出土していない。

12号土坑―13号土坑、II－f類とIII類の切り合いである。新旧関係は13号土坑（旧）→12号土坑（新）の順である。

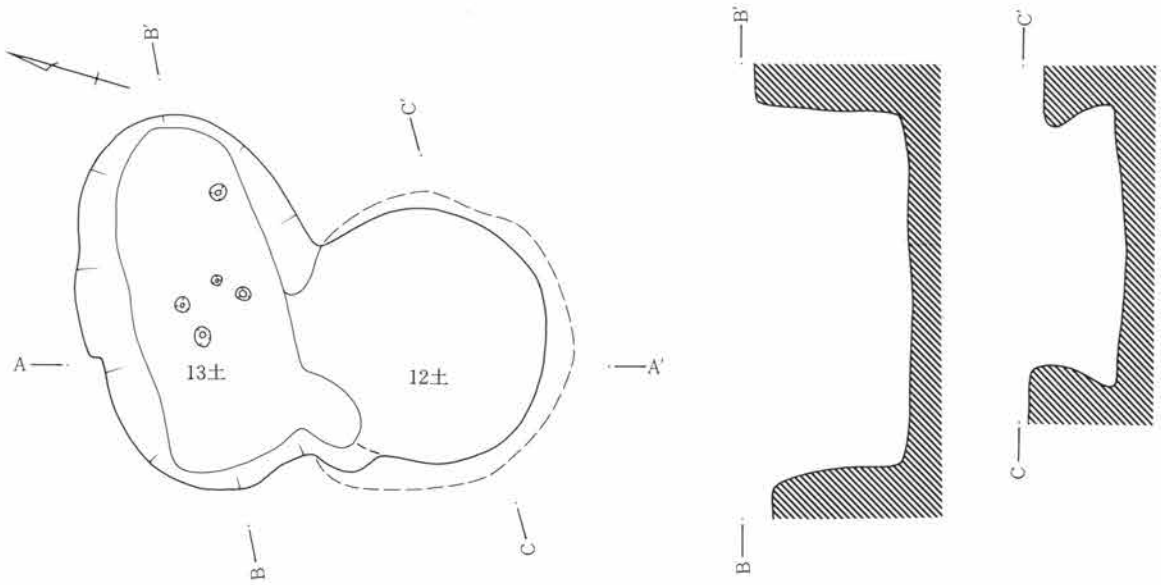
12号土坑は典型的なフラスコ状の土坑である。埋土中より土器片（第53図）が出土している。13号土坑は楕円形に近い形状を呈し、坑底に５個の小ピット痕が検出されている。小ピット痕は坑底の中央部に集中する傾向がある。埋土は暗褐色土を主体として、自然堆積状態を示していた。遺物は出土していない。

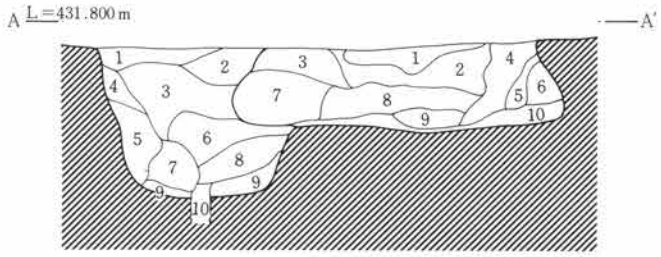
39・40号土坑

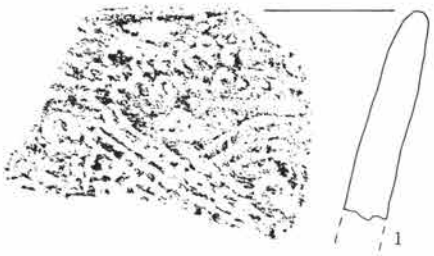



第52図　39・40号土坑実測図

12・13号土坑



(縮尺＝½)

12号土坑　土層註

1　暗褐色土層　ローム粒子混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。1層よりも明るい色調を呈す。
3　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。粘性に富む。
4　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
5　暗褐色土層　ローム粒子混入。
6　褐色土層　ローム粒子を多く混入。
7　黒褐色土層　ローム粒子を混入。
8　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
9　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
10　暗褐色土層　ローム粒子・ブロック混入。粘性・しまり共に強い。

13号土坑　土層註

1　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。1層よりも明るい色調を呈す。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
5　褐色土層　ロームブロックを多く混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
7　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
8　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
9　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。
10　暗褐色土層　ローム粒子混入。有機質土。

0　1:40　1 m

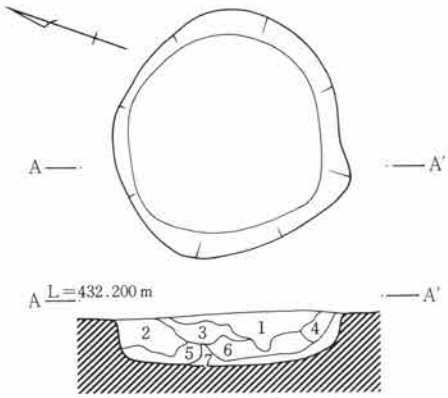
第53図　12・13号土坑実測図

**Ⅲ　類**　平面形が円形を基調とするものを一括した。Ⅲ類に分類された土坑は総計17基で、いずれの土坑も調査区北側に分布している。土坑の規模は径0.9～1.2m前後の小形のものと径1.6～2.2mを測る大形のもの（12・39号土坑）とに分けることが可能である。小形のものは比較的群をなす傾向が強い。また、断面形がフラスコ状を呈するものも特徴的に認められるが、やや大形のものに多い傾向はあるようである。

埋土は暗褐色土を主体とした自然堆積状態を示すが、45号土坑の埋土上位には人為的埋土が認められた。

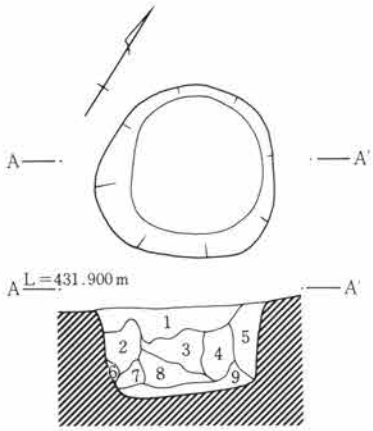
遺物は14・37号土坑埋土中より礫が、12・38号土坑埋土中より土器片（第52・57図）が出土している。

10号土坑



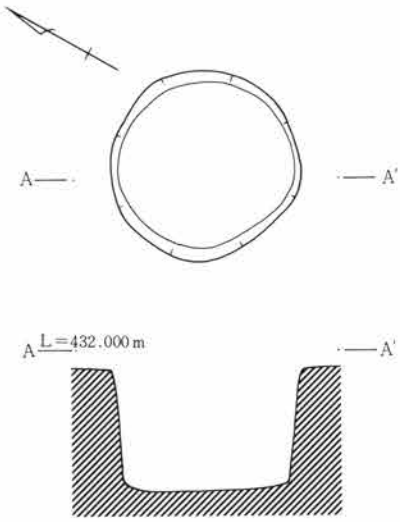

1　黒褐色土層　粘性に富む。
2　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。３層よりも明るい色調を呈す。
5　暗褐色土層　ローム粒子・ブロック混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。しまりは強い。
7　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。

23号土坑




1　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子を混入。１層よりやや暗い色調を呈す。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
7　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
8　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
9　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。粘性・しまり共に強い。

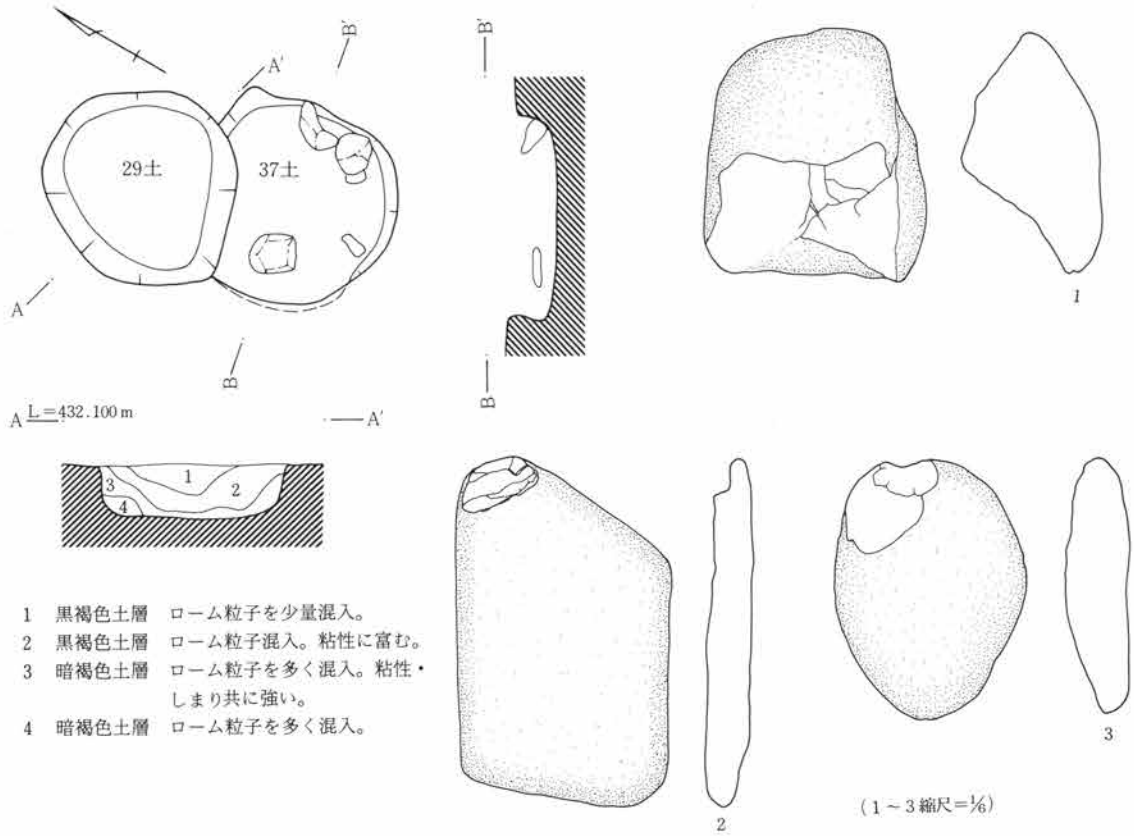
41号土坑




0　1:40　1 m

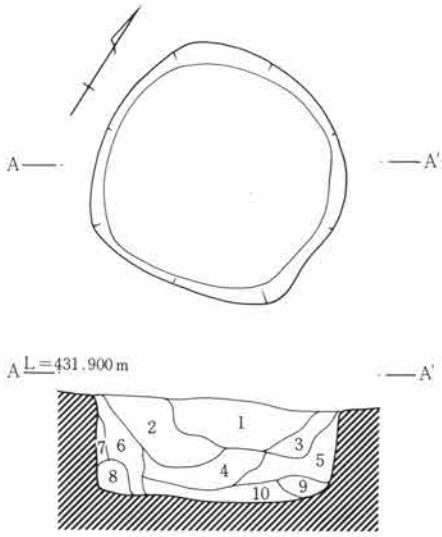
第54図　10・23・41号土坑実測図

29・37号土坑




1　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
3　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性・しまり共に強い。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。

24号土坑

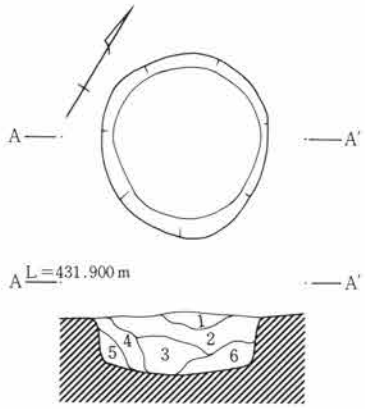



1　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。1層よりやや暗い色調を呈す。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。3層よりも明るい色調を呈す。
5　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
7　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
8　暗褐色土層　ローム粒子混入。
9　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性に富む。
10　黒褐色土層　ロームブロックを少量混入。粘性・しまり共に強い。

0　1:40　1 m

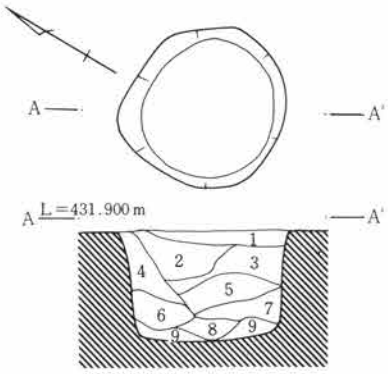
第55図　24・29・37号土坑実測図

26号土坑



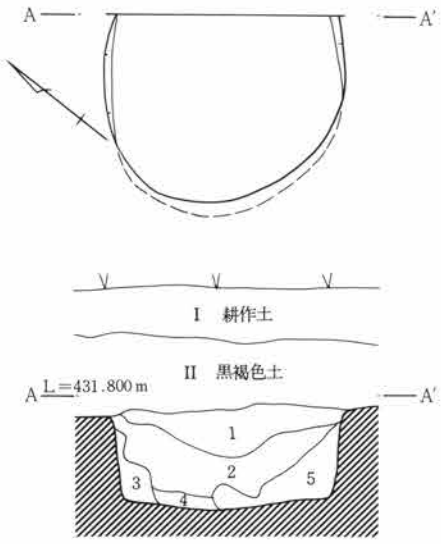

1　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。１層よりも明るい色調を呈す。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。３層よりやや暗い色調を呈す。
5　暗褐色土層　ローム粒子混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

27号土坑



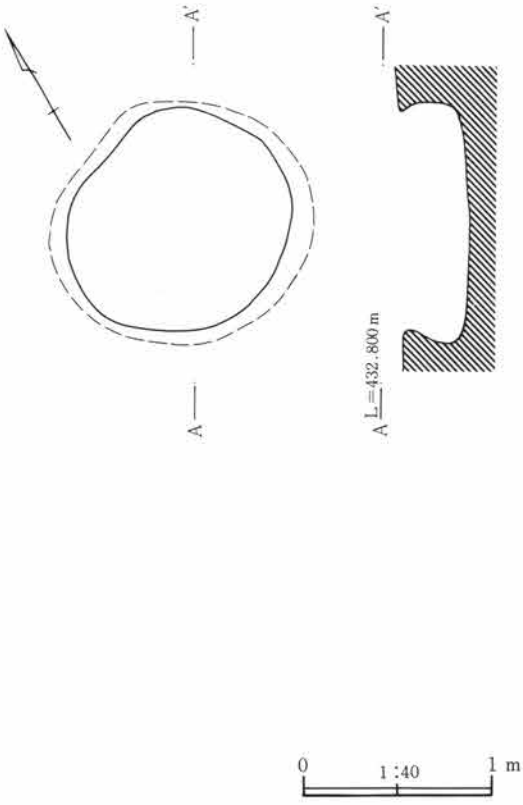

1　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。２層よりやや暗い色調を呈す。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子混入。
6　褐色土層　ロームブロック混入。
7　褐色土層　ロームブロックを多く混入。
8　黒褐色土層　ローム粒子混入。
9　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。

43号土坑



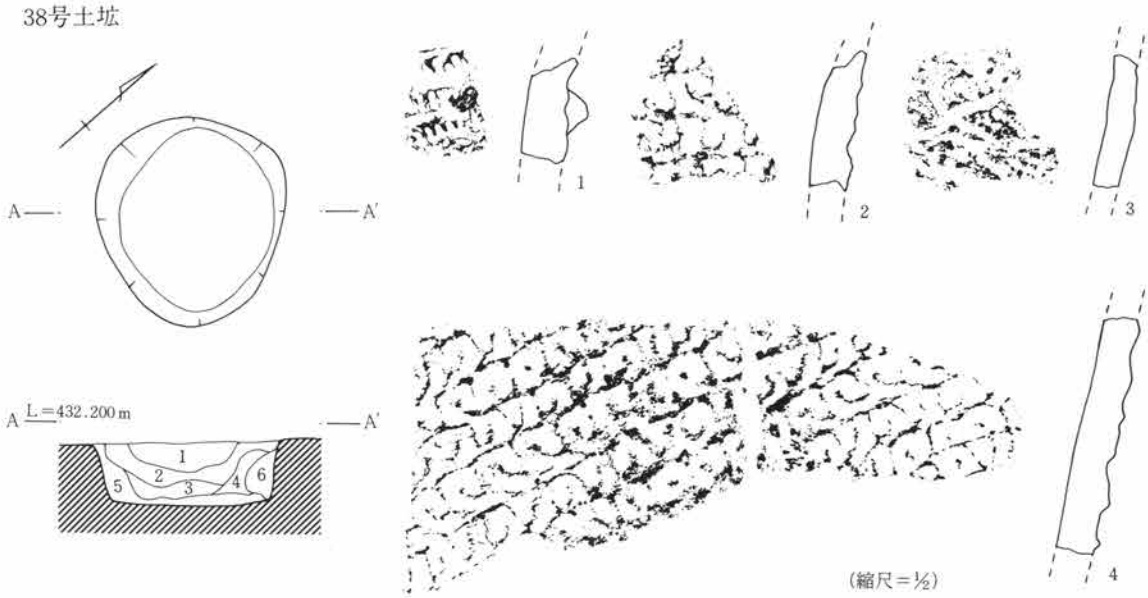

1　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
4　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
5　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性・しまり共に強い。

44号土坑



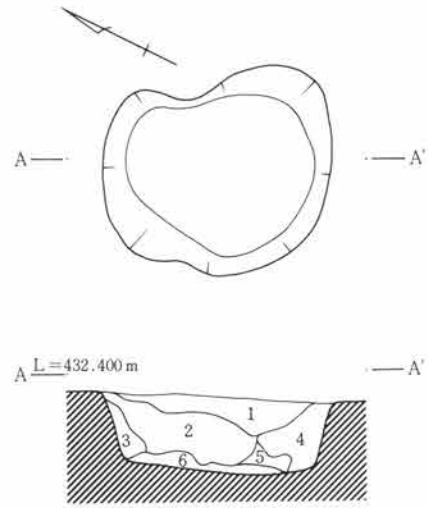

第56図　26・27・43・44号土坑実測図

38号土坑




1　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　黒褐色土層　ローム粒子混入。1層よりやや明るい色調を呈す。
3　黒褐色土層　ローム粒子混入。しまりは強い。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。粘性・しまり共に強い。
6　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。

36号土坑

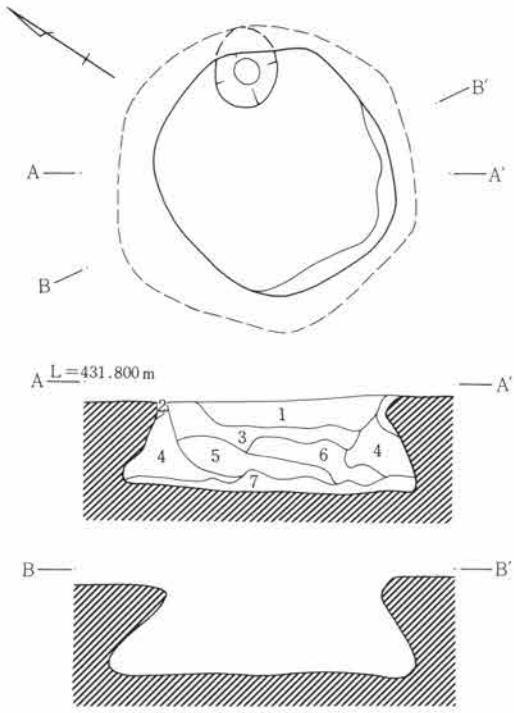


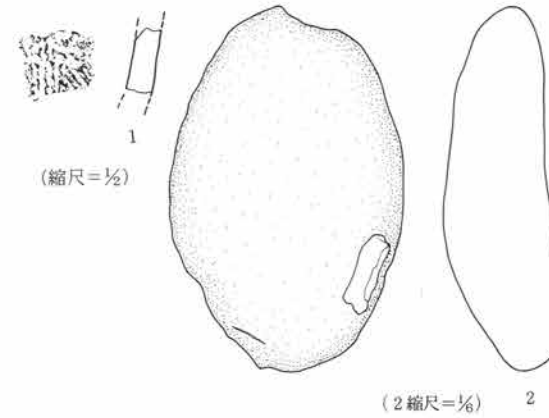

1　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　黒褐色土層　ローム粒子混入。1層よりやや暗い色調を呈す。
3　褐色土層　ローム粒子を多く混入。明るい色調を呈す。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。

0　1:40　1 m

第57図　36・38号土坑実測図

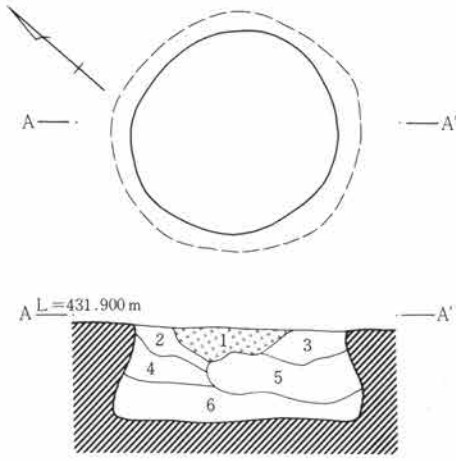
14号土坑



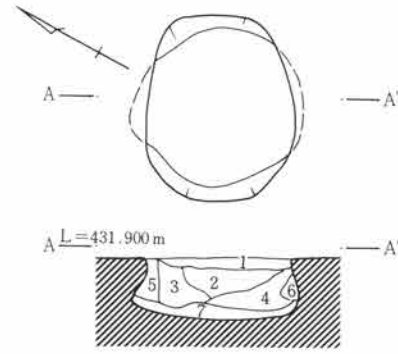

1　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
2　褐 色 土 層　ローム粒子を多く混入。しまりは強い。
3　黒褐色土層　ローム粒子混入。
4　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性に富む。
5　黒褐色土層　ローム粒子を多く混入。
6　褐 色 土 層　ローム粒子・ブロックを混入。
7　暗褐色土層　粘性・しまり共に強く、明るい色調を呈す。

45号土坑




1　褐 色 土 層　ローム粒子・ブロックの混土層。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。明るい色調を呈す。
5　暗褐色土層　ローム粒子混入。
6　黒褐色土層　粘性・しまり共に強く、混入物をほとんど含まない。

28号土坑




1　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
2　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。１層よりやや暗い色調を呈す。
3　黒褐色土層　ローム粒子を少量混入。
4　黒褐色土層　ローム粒子混入。３層よりも明るい色調を呈す。
5　暗褐色土層　ローム粒子混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
7　黒褐色土層　ロームブロック混入。粘性・しまり共に強い。

0　1:40　1 m

第58図　14・28・45号土坑実測図

**遺物観察表(1)**　（第41・42・43・46・49・51図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 部位 | 出土位置 | 文様・整形の特徴 | ①胎土 ②色調<br>③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 41－1<br>29－1 | 深鉢 | 胴部 | 20土 | 結束第一種（ＲＬ $r^3$ ＋ＬＲ $\ell^3$）横位により羽状縄文を施す。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 41－2<br>29－1 | 深鉢 | 胴部 | 20土 | 波状の沈線文をもつ隆線文がめぐる。ＬＲ横位。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 42－1<br>29－3 | 深鉢 | 口縁部 | 22土 | ＲＬ、ＬＲ横位により羽状（ヒシ形）縄文を施す。器内外面ともよく整形されている。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 43－1<br>29－4 | 深鉢 | 胴部 | 32土 | ＲＬ、ＬＲ横位により羽状縄文を施す。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 43－2<br>29－5 | 深鉢 | 胴部 | 32土 | ＲＬ横位。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 43－3<br>29－6 | 深鉢 | 胴部 | 32土 | ＲＬ横位。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 46－1<br>29－21 | 深鉢 | 胴部 | 31土 | LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 49－1<br>29－7 | 深鉢 | 口縁部 | 30土 | ＲＬ横位。口唇部は丸味を帯びやや外反する。縄文は粗く条に乱れがみられる。石英粒を含む。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 49－2<br>29－8 | 深鉢 | 口縁部 | 30土 | ＲＬ横位。口唇部は丸味を帯びやや外反する。内面はよく整形されている。石英粒が目立つ。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 49－3<br>29－9 | 深鉢 | 胴部 | 30土 | 櫛状施文具による条線を横位に帯状に施し、その間に同施文具による縦位の連続刺突を施している。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 49－4<br>29－10 | 深鉢 | 胴部 | 30土 | 横走する条線文上に連続刺突文帯がめぐる。器内外面ともよく整形されるが、繊維がやや露出する。石英粒が目立つ。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 49－5<br>29－11 | 深鉢 | 胴部 | 30土 | 櫛歯状工具（３本１単位）による条線文が横走する。内面はよく整形されるが、繊維がやや露出する。石英粒が目立つ。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 49－6<br>29－12 | 深鉢 | 胴部 | 30土 | 横走する条線文は比較的深い。内外面はよく整形されるが、繊維がやや露出する。石英粒が目立つ。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 49－7<br>29－13 | 深鉢 | 胴部 | 30土 | 横走する条線文間に幅狭の無文部がめぐる。櫛歯状工具による刺突文が一部にみられる。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 49－8<br>29－14 | 深鉢 | 胴部 | 30土 | 条線文は前出のものに比べやや幅広で深い。内面には繊維が露出し、石英粒が目立つ。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 51－1<br>29－15 | 深鉢 | 底部 | ９土 | 刻目をもつ隆線文および沈線文により文様を構成する。 | ①雲母を含む。<br>②褐色 ③良好 | |
| 51－2<br>29－17 | 深鉢 | 口縁部 | 17土 | ＬＲ横位。器内外面ともよく整形されている。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 51－3<br>29－18 | 深鉢 | 胴部 | 17土 | 附加条第２種。軸縄は不明瞭である。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |

## 遺物観察表(2)　（第51・53・57図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 部位 | 出土位置 | 文様・整形の特徴 | ①胎土 ②色調<br>③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 51－4<br>29－16 | 深鉢 | 胴部 | 17土 | 円形の刺突文が横位に施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 53－1<br>29－19 | 深鉢 | 口縁部 | 13土 | 連続爪形文により横位、ワラビ手状文により文様帯が構成され、部分的に円形文が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 53－2<br>29－20 | 深鉢 | 胴部 | 13土 | LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 57－1<br>30－22 | 深鉢 | 胴部 | 38土 | 刻目をもつ隆線文、貼付文により、文様構成される。隆線文の下部に不明瞭であるが撚糸圧痕文がみられる。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 57－2<br>30－23 | 深鉢 | 胴部 | 38土 | LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 57－3<br>30－24 | 深鉢 | 胴部 | 38土 | 器面が極めてあれているため不明瞭であるが、附加条第３種が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 57－4<br>30－25 | 深鉢 | 胴部 | 38土 | LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |

## 土坑一覧表

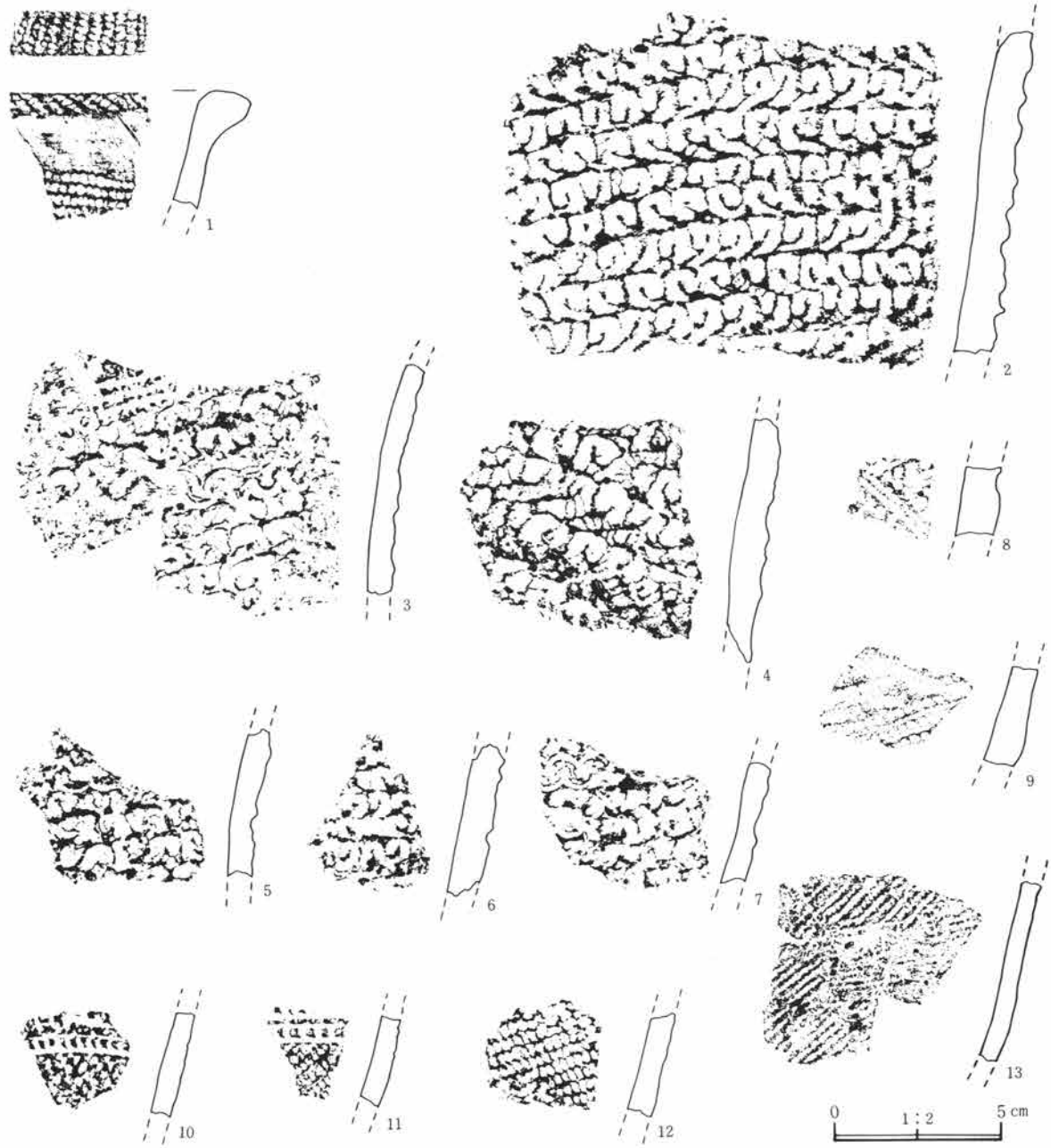
| No. | 長軸 | 短軸 | 深さ | 形態 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2.08 | 1.40 | 0.24 | II－d | |
| 2 | 1.44 | 1.00 | 0.24 | II－b | |
| 3 | 1.74 | 1.20 | 0.26 | II－b | |
| 4 | 1.60 | 0.80 | 0.30 | II－e | |
| 5 | 1.20 | 0.92 | 0.24 | II－b | |
| 6 | 1.60 | 1.10 | 0.24 | II－b | |
| 7 | 1.42 | 0.84 | 0.20 | II－b | |
| 8 | 1.64 | 1.10 | 0.16 | II－b | |
| 9 | 1.90 | 1.20 | 0.82 | II－f | |
| 10 | 1.34 | 1.30 | 0.30 | III | |
| 11 | 1.90 | 1.54 | 0.34 | II－c | 人為的埋土 |
| 12 | 1.34 | 1.30 | 0.80 | II－f | |
| 13 | 2.00 | 1.40 | 0.80 | II－f | |
| 14 | 1.30 | 1.30 | 0.50 | III | |
| 15 | 1.66 | 1.10 | 0.68 | II－b | |
| 16 | 1.90 | 0.60 | 0.62 | I | |
| 17 | 1.90 | 1.30 | 0.76 | II－f | 人為的埋土 |
| 18 | 1.70 | 0.62 | 0.88 | I | |
| 19 | 1.74 | 0.64 | 0.74 | I | |
| 20 | 1.64 | 0.50 | 0.90 | I | |
| 21 | 2.10 | 1.40 | 0.86 | I | |
| 22 | 1.30 | 0.70 | 0.90 | II－a | |
| 23 | 1.00 | 0.92 | 0.50 | III | |

| No. | 長軸 | 短軸 | 深さ | 形態 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 1.46 | 1.40 | 0.54 | III | |
| 25 | 2.00 | 0.74 | 0.80 | I | |
| 26 | 1.00 | 0.90 | 0.32 | III | |
| 27 | 0.90 | 0.87 | 0.60 | III | |
| 28 | 1.00 | 0.80 | 0.44 | III | |
| 29 | 1.60 | 1.20 | 0.28 | III | |
| 30 | 1.72 | 1.10 | 0.34 | II－e | |
| 31 | 1.70 | 1.18 | 0.24 | II－b | 人為的埋土 |
| 32 | 1.34 | 1.10 | 0.14 | II－b | |
| 33 | 1.34 | 0.70 | 0.24 | II－b | |
| 34 | 1.90 | 1.10 | 0.70 | II－c | |
| 35 | 1.70 | 0.90 | 0.34 | II－d | 人為的埋土 |
| 36 | 1.22 | 1.12 | 0.40 | III | |
| 37 | 1.10 | 1.00 | 0.28 | III | |
| 38 | 1.20 | 1.10 | 0.40 | III | |
| 39 | 2.10 | 2.00 | 0.40 | II－f | |
| 40 | 1.56 | 0.82 | 0.60 | II－f | 人為的埋土 |
| 41 | 1.20 | 1.00 | 0.64 | III | |
| 42 | 1.90 | 1.20 | 0.68 | II－a | |
| 43 | 1.30 | — | 0.56 | III | |
| 44 | 1.20 | 1.20 | 0.34 | III | |
| 45 | 1.10 | 1.10 | 0.50 | III | 人為的埋土 |
| 46 | 2.40 | 1.20 | 0.82 | II－e | 人為的埋土 |

## (2)　グリッド出土遺物

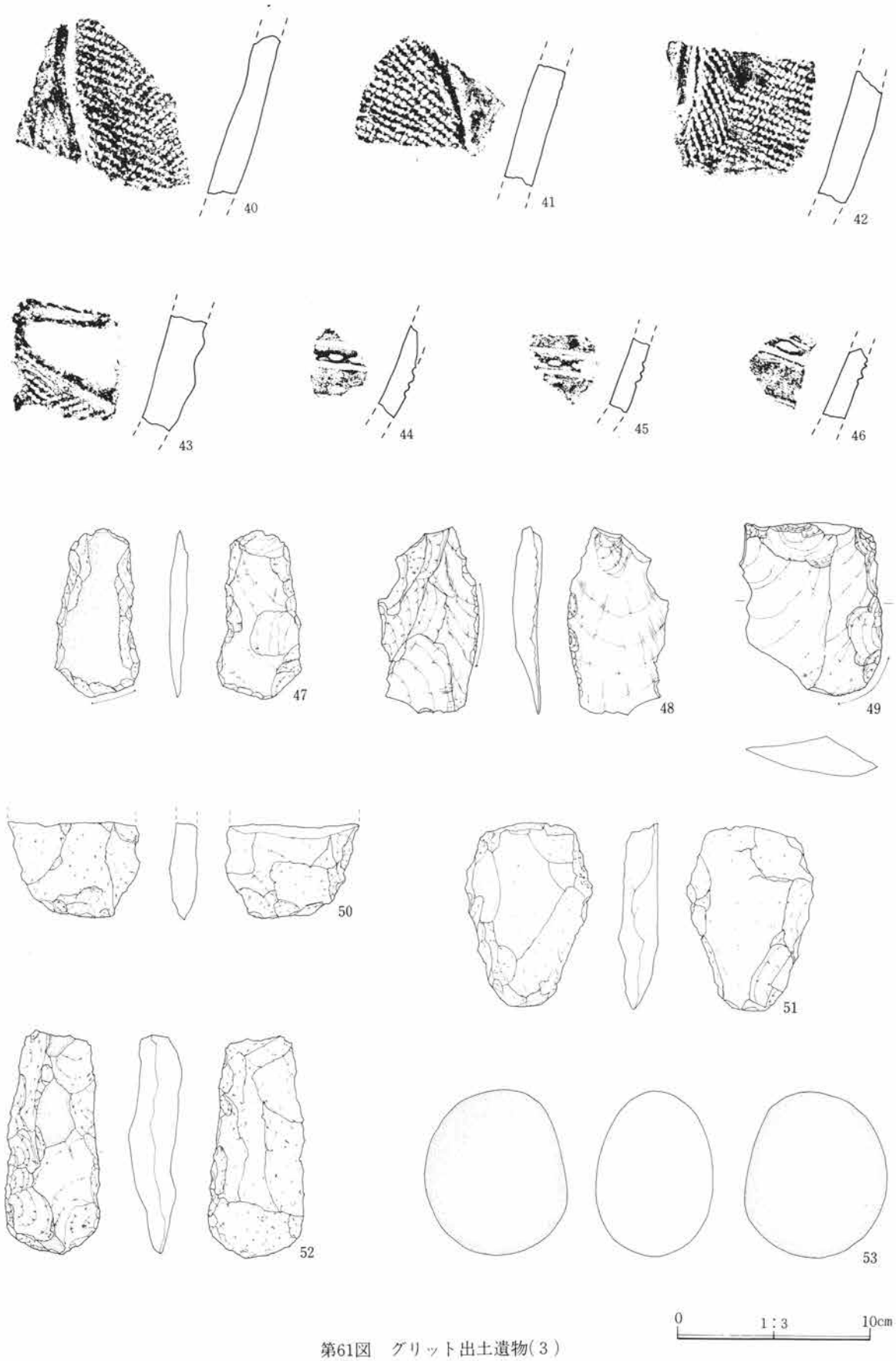
調査区の大半に耕作が及んでおり、遺物の包含層は一部を除いてほとんど見られず、いずれも耕作土を除去した後の遺構確認作業の段階で出土したものである。なお、明らかに時期の異なる遺構から出土したものについてはグリッドに置き替えている。

出土した土器は縄文前期中葉から後期にかけてであり、各々の分布は若干のまとまりが見られた。調査区北側の土坑が集中する部分には前期の、調査区南側（G―64グリッド付近）からは中期の土器片が比較的まとまって出土している。石器は打製石斧をはじめとして縦長の剝片を素材としたものが若干出土している。石鏃は全く出土していない。




第59図　グリット出土遺物(１)

第60図　グリッド出土遺物(２)




第61図　グリット出土遺物(３)

**遺物観察表(1)**　（第59・60図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 部位 | 出土位置 | 文様・整形の特徴 | ①胎土 ②色調<br>③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 59－1<br>30－1 | 深鉢 | 口縁部 | Ｉ－73 | 肥厚した口唇部外面にはＬＲ横位、上面にはＬＲ斜位および胴部にはＲＬ斜位が施される。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | 井草 |
| 59－2<br>30－2 | 深鉢 | 胴部 | Ｉ－72 | LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－3<br>30－3 | 深鉢 | 胴部 | Ｌ－71 | 刻目をもつ平行線文がめぐり、その上に円形文が施される。地文は LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位、コンパス文が１条ある。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－4<br>30－4 | 深鉢 | 胴部 | Ｌ－71 | LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－5<br>30－5 | 深鉢 | 胴部 | Ｌ－71 | LOOP(ＬＲ、ＲＬ)横位交互施文。コンパス文が１条認められる。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－6<br>30－6 | 深鉢 | 胴部 | Ｌ－71 | LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。３の LOOP と酷似する。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－7<br>30－7 | 深鉢 | 胴部 | Ｉ－74 | LOOP(ＬＲ、ＲＬ)横位交互施文。コンパス文が１条認められる。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－8<br>30－8 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | LOOP（ＬＲ、ＲＬ）横位交互施文。コンパス文が１条めぐる。３と同一個体と思われる。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－9<br>30－9 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | 器面に附加条第１種（ＲＬ＋Ｌ）横位が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－10<br>30－10 | 深鉢 | 胴部 | Ｉ－75 | 連続爪形文をもつ平行線文が１条めぐる。胴部にはＲＬ横位が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－11<br>30－11 | 深鉢 | 胴部 | Ｉ－75 | 連続爪形文をもつ平行線文がめぐる。ＬＲ横位。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－12<br>30－12 | 深鉢 | 胴部 | Ｉ－75 | ＬＲ、ＲＬ横位により羽状縄文が施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 59－13<br>30－13 | 深鉢 | 胴部 | Ｉ－74 | ＬＲ横位。施文方位はやや不規則で、条走向に乱れがある。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60－14<br>30－14 | 深鉢 | 胴部 | Ｊ－74 | 単軸絡条体第１類。Ｒが密に巻かれる。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60－15<br>30－15 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | ＲＬ横位。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60－16<br>31－16 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | ＲＬ横位。原体、施文とも粗い。openend がみられる。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60－17<br>31－17 | 深鉢 | 胴部 | Ｌ－71 | 結束第１種（ＲＬ＋ＬＲ）横位による羽状縄文を施す。結節文が１条めぐる。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60－18<br>31－18 | 深鉢 | 胴部 | Ｌ－71 | ＲＬ$^{3}$ 横位。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 60－19 | 深鉢 | 胴部 | Ｌ－72 | 平行線文、斜行線文がみられる。肋骨文を構成か。ＲＬｒ$^{3}$ 横位。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |

**遺物観察表(2)**　（第60図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 部位 | 出土位置 | 文様・整形の特徴 | ①胎土 ②色調<br>③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 60—20<br>31—19 | 深鉢 | 底部 | I—73 | 平行沈線文により肋骨文を構成し、円形文が施される。RL横位。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—21<br>31—20 | 深鉢 | 口縁部 | 表土 | 連続爪形文をもつ平行線文、斜行線文および曲線文により文様帯を構成する。円形文が部分的に施される。 | ①含繊維 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—22<br>31—21 | 深鉢 | 口縁部 | J—71 | 波状口縁。口唇部上面および口縁部に波線文による文様が構成される。RL横位。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—23<br>31—22 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | LR横位。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—24<br>31—23 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | 結束第1種（LR＋RL）横位により羽状縄文を施す。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—25<br>31—24 | 深鉢 | 胴部 | K—72 | LR縦位？ | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—26<br>31—25 | 深鉢 | 胴部 | K—72 | RLが施されるが、方位は不規則である。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—27<br>31—26 | 深鉢 | 胴部 | K—72 | 不規則なRL横位が施される。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—28<br>31—27 | 深鉢 | 胴部 | K—72 | RLが施される。施文方位は不規則で条走向に乱れがある。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—29<br>31—28 | 深鉢 | 胴部 | L—72 | 平行沈線により同心円文が施される。 | ①含雲母 ②褐色<br>③良好 | 阿玉台 |
| 60—30<br>31—29 | 深鉢 | 胴部 | L—71 | 半截竹管により曲線文が施され（4条1単位）、櫛歯状工具（3本）による刺突文が配される。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—31<br>31—30 | 深鉢 | 胴部 | L—72 | 30と同様の文様描出方法である。刺突文が配されない部分に平行沈線が垂下する。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—32<br>31—31 | 深鉢 | 胴部 | L—72 | 30、31と類似する文様描出方法をとるが、曲線文の接点に円形文が配される。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—33<br>31—32 | 深鉢 | 胴部 | L—72 | 曲線文と刺突文による文様構成。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—34<br>31—34 | 深鉢 | 胴部 | L—72 | 曲線文と刺突文による文様構成。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—35 | 深鉢 | 胴部 | L—72 | 横位の粗い条線を施す。内面は丁寧に整形されている。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—36<br>31—35 | 深鉢 | 胴部 | L—72 | 曲線文と刺突文による文様構成。 | ①砂粒混 ②褐色<br>③良好 | |
| 60—37<br>32—36 | 深鉢 | 胴部 | J—72 | 隆線および沈線による渦文が施される。隆線文は一部剝落している。 | ①含金雲母<br>②褐色 ③良好 | 阿玉台 |
| 60—37 | 深鉢 | 胴部 | J—72 | 沈線により文様が構成される。 | ①含金雲母<br>②褐色 | 阿玉台 |

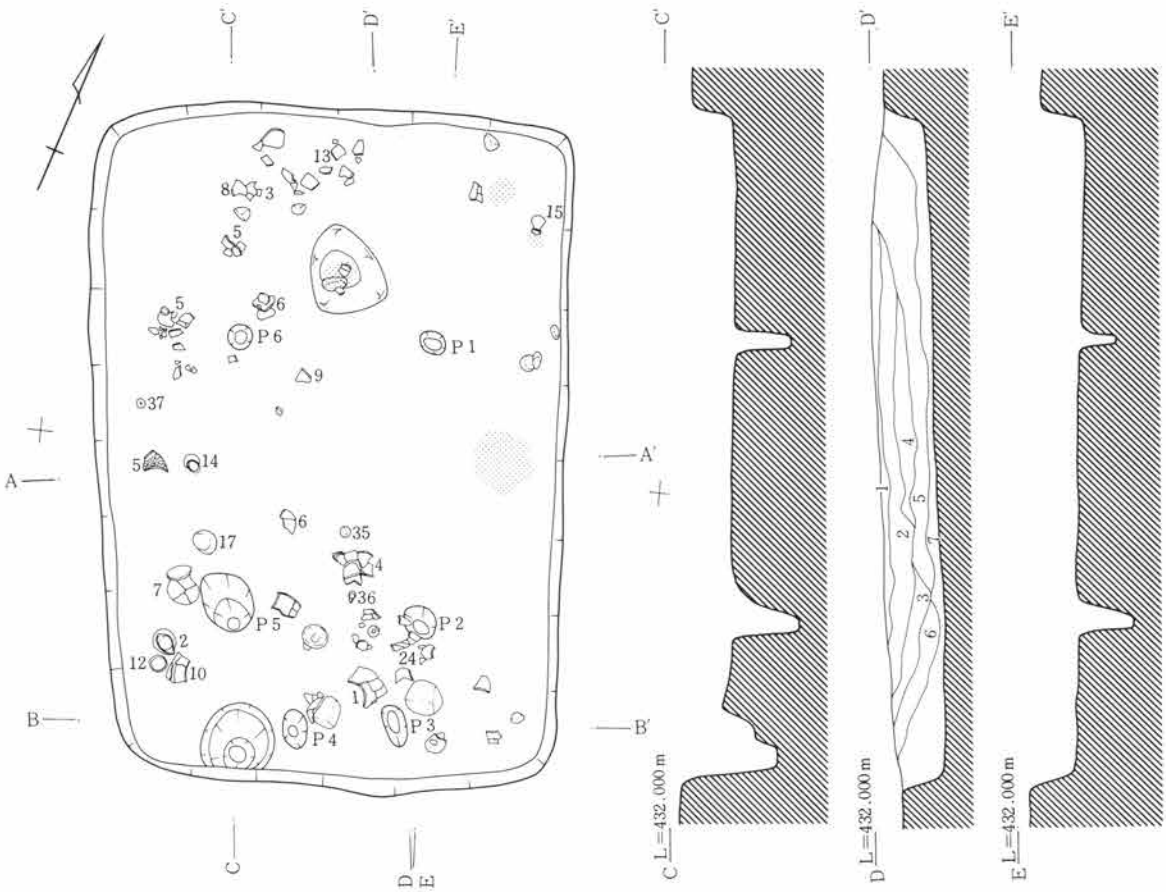
**遺物観察表(3)**　（第60・61図）

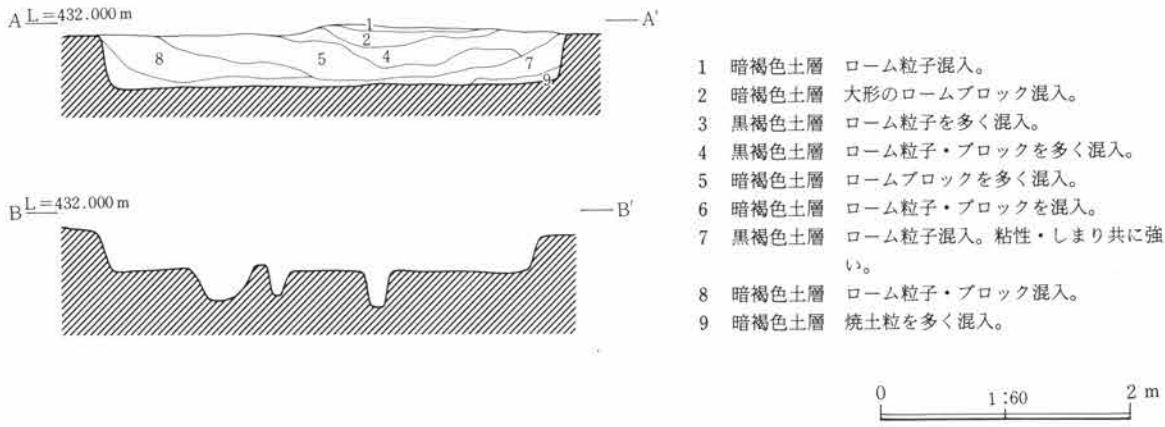
| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 部位 | 出土位置 | 文様・整形の特徴 | ①胎土 ②色調<br>③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 32−37 | | | | | ③良好 | |
| 60−39<br>32−38 | 深鉢 | 胴部 | J−72 | 平行沈線文、曲線文および隆線文により文様構成される。 | ①含金雲母<br>②褐色　③良好 | 阿玉台 |
| 61−40<br>32−39 | 深鉢 | 胴部 | I−67 | 微隆起線による区画文内に、LR（横位・縦位）同寸原体を用いた羽状縄文が構成される。 | ①砂粒混　②褐色<br>③良好 | 加E 4 |
| 61−41<br>32−40 | 深鉢 | 胴部 | I−67 | 微隆起線による区画文内に、LR縦位が施される。 | ①砂粒混　②褐色<br>③良好 | 加E 4 |
| 61−42<br>32−41 | 深鉢 | 胴部 | I−67 | 微隆起線による区画文が一部にみられる。縄文はLRが用いられ、施文方位の変化により条の変化（羽状）が認められる。 | ①砂粒混　②褐色<br>③良好 | 加E 4 |
| 61−43<br>32−42 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | 微隆起線による区画文が施される。縄文はLRが用いられ、施文方位が不規則であるため、羽状を呈する。 | ①砂粒混　②褐色<br>③良好 | 加E 4 |
| 61−44<br>32−43 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | 平行沈線文間に棒状工具による刺突文が施される。 | ①砂粒混　②褐色<br>③良好 | 加B 2 |
| 61−45<br>32−44 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | 平行沈線文間に刺突文が施される。 | ①砂粒混　②褐色<br>③良好 | 加B 2 |
| 61−46<br>32−45 | 深鉢 | 胴部 | 表土 | 平行沈線文間に刺突文が施される。 | ①砂粒混　②褐色<br>③良好 | 加B 2 |

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 形状・調整加工の特徴 | 石質 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 61−47<br>33−47 | 打製石斧 | 長 8.7<br>厚 1.5 | L−72 | 短冊形。断面D字状を呈す。刃部は細かな調整加工により作出されており、磨滅が見られる。 | 黒色頁岩 | 重　51.9 |
| 61−48<br>33−48 | 打製石器<br>（削器） | 長 9.6<br>厚 1.5 | 表土 | 縦長の不定形剥片を素材とする。石器表面、右側縁には微細な剥離痕が連続する。断面三角形。 | 黒色頁岩 | 重　68.3 |
| 61−49<br>33−49 | 打製石器<br>（削器） | 長 8.7<br>厚 2.9 | 表土 | 幅広な縦長剥片を素材とする。石器表面、右側縁には微細な剥離痕が連続して認められる。 | 黒色頁岩 | 重　181.6 |
| 61−50<br>33−51 | 打製石斧 | 長(4.8)<br>厚 1.5 | 表土 | 分銅形か。石器上半部を欠損。断面D字状を呈す。刃部は細かな剥離により作出されている。 | 黒色頁岩 | 重　(73.7) |
| 61−51<br>33−50 | 打製石器 | 長 9.6<br>厚 2.1 | 表土 | 先端部に近い両側縁に微細な剥離痕が見られるが先端部を作出するといった意図は認められない。 | 黒色頁岩 | 重　154.3 |
| 61−52<br>33−52 | 打製石斧 | 長11.4<br>厚 2.4 | M−78 | 短冊形。断面D字状を呈す。刃部は交互剥離により作出。側縁は粗い剥離により形状を作出している。 | 黒色頁岩 | 重　137.5 |
| 61−53<br>33−53 | 磨石 | 長 8.4<br>厚 6.3 | 表土 | 全般に磨滅が認められるが、とりわけ石器周縁に認められる。 | 細粒閃緑岩 | 重　578 |

# 第2節　弥生時代の遺構と遺物

## (1) 住　居　址

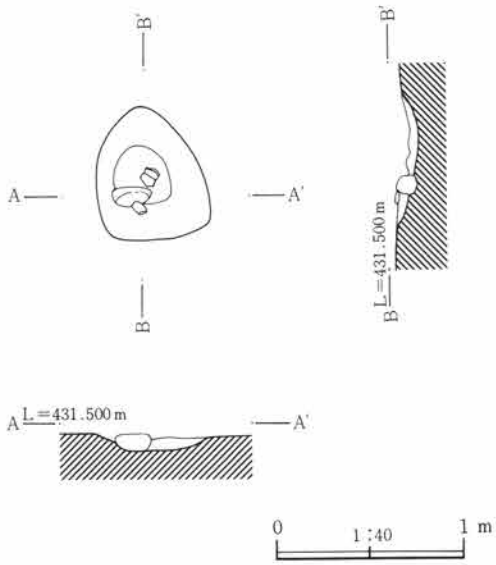



1　暗褐色土層　ローム粒子混入。
2　暗褐色土層　大形のロームブロック混入。
3　黒褐色土層　ローム粒子を多く混入。
4　黒褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く混入。
5　暗褐色土層　ロームブロックを多く混入。
6　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
7　黒褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。
8　暗褐色土層　ローム粒子・ブロック混入。
9　暗褐色土層　焼土粒を多く混入。

0　1:60　2 m

第62図　1号住居址実測図




第63図　１号住居址炉実測図

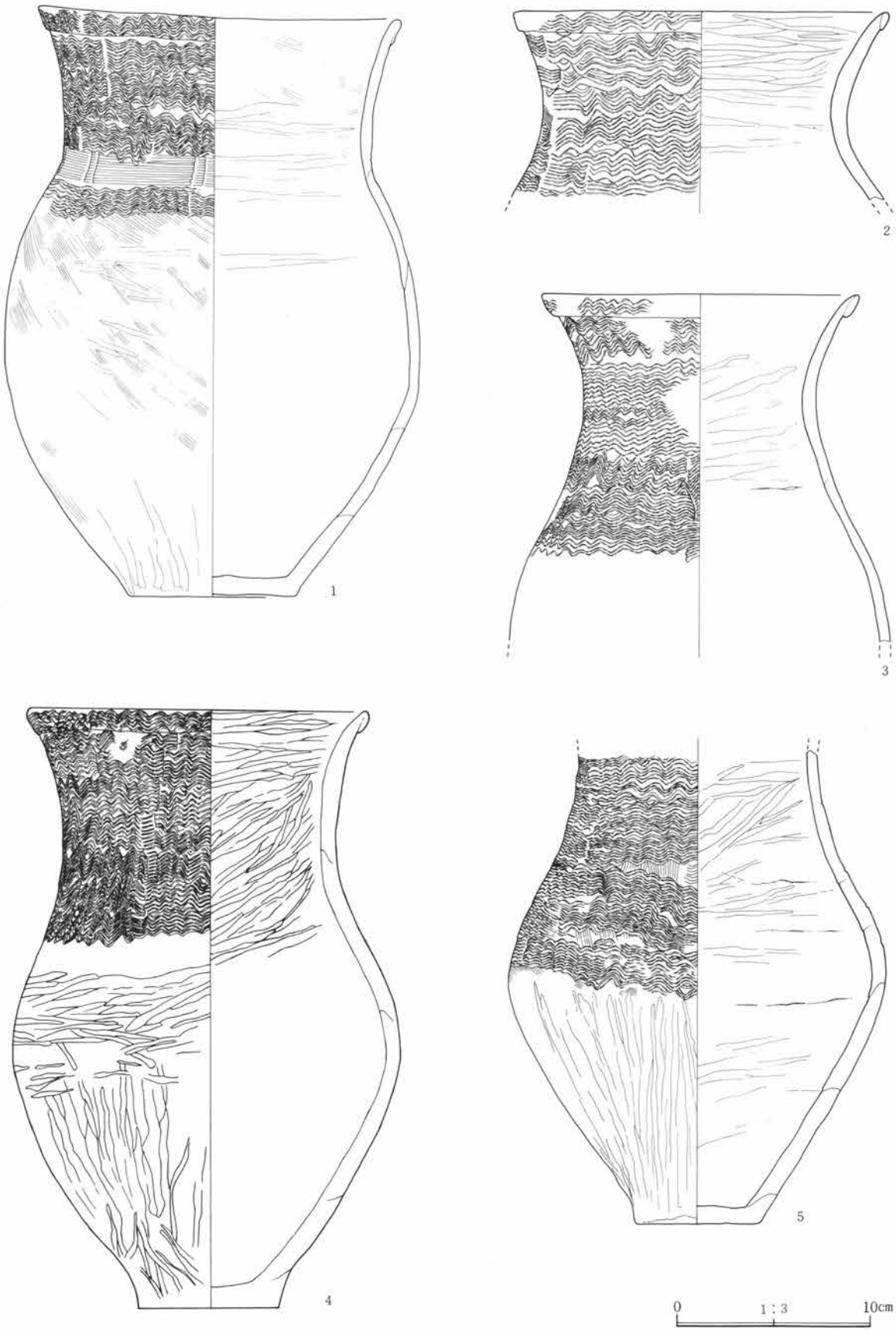
１号住居址

本住居址は一部路線外にかかって、ローム層上面で確認された。住居の掘り込み自体はII層（黒褐色土）中にあるものと思われる。路線外にかかる部分については借地し、完掘した。

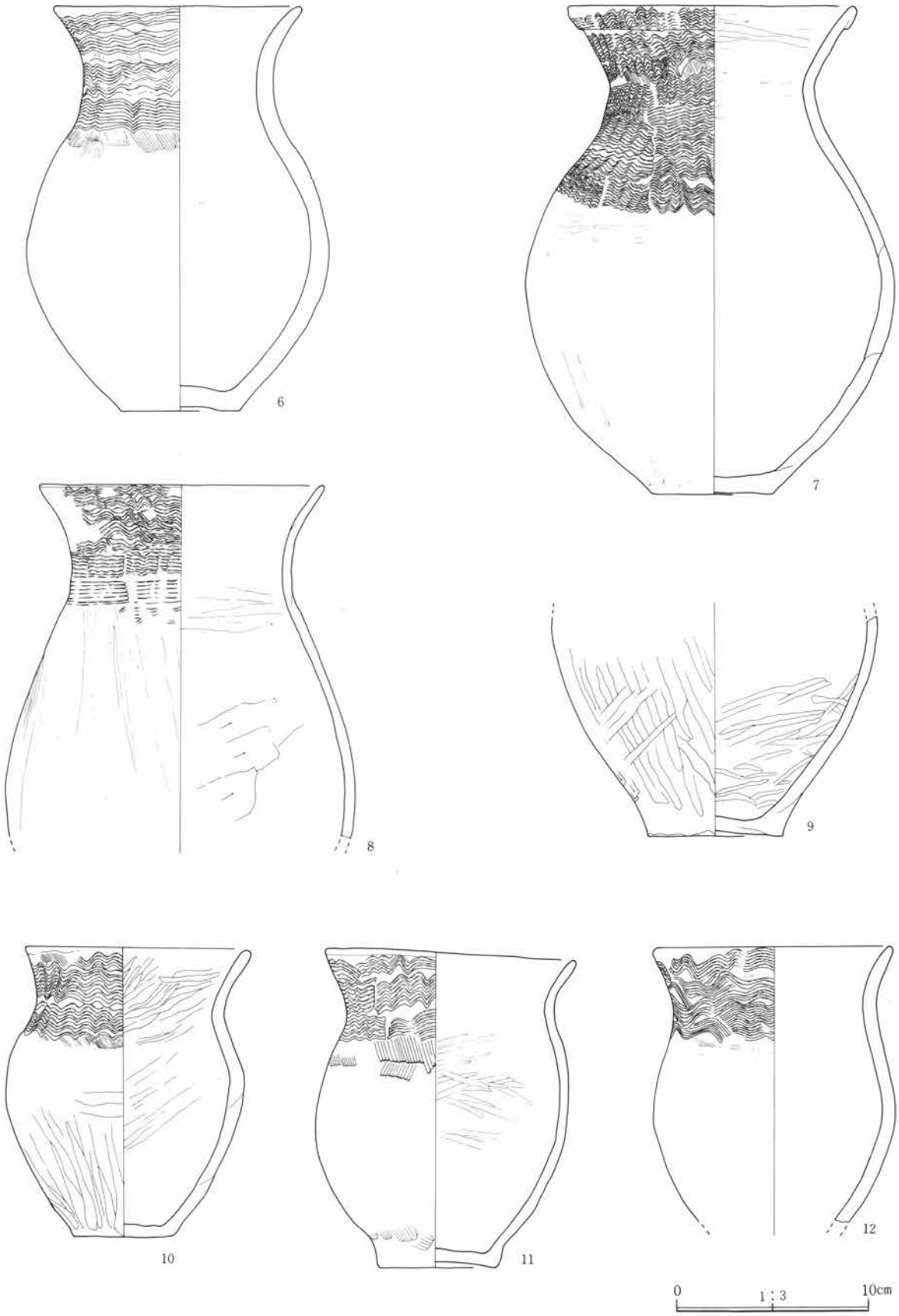
住居址は調査区北側のＬ―71・72グリッドに位置する。住居址の規模、および、平面形は長軸5.45m、短軸3.80mを測る南北に長い長方形を呈す住居址である。主軸方位はＮ―23.5°―Ｗを測る。壁高は28～42cmを測り、ほぼ垂直に立上る。床面はローム層を掘り込んで南壁際で高くなっているが、他の部分ではほぼ平坦に構築されている。壁際部分は比較的軟かいが、住居址中央部付近は固く踏み固められており、良好な状態で検出された。東壁に近い床面上、および北東コーナー付近の床面上に焼土が厚く堆積していた。周溝は検出されなかった。柱穴は総計６本が検出されており、$P_1$・$P_2$・$P_5$・$P_6$の４本が住居の主柱穴である。深さは各々30cm・43cm・45cm・52cmを測る。柱穴間の距離は$P_1$～$P_2$・2.15m、$P_5$～$P_6$・2.25m、$P_1$～$P_6$・1.55m、$P_2$～$P_5$・1.50mを測る。南壁側の$P_3$、$P_4$は出入口部施設に伴うものと思われる。調査時の所見では黒色の有機質土が斜めに堆積し、周辺をローム粒子、ブロックを主体とする褐色土を充填している状態を確認している。また$P_4$に近接する位置にあるピットは径60cm、深さ25cmを測り、埋土はローム土混りの黒色土であった。ピットの性格については不明である。炉址は住居址の北側に寄った部分に確認された。地床炉である。平面形は部分的に直線状を呈すが、概ね、楕円形に近い。規模は長軸70cm、短軸55cm、深さ12cmを測る。底面は良く赤化していた。また、この炉址に伴って炉址の床面上に自然石１個が検出されている。この自然石は全面に良く焼けており、本住居址の炉址とともに機能していたものと考えられる。

住居址埋土は８層よりなる。ローム粒子を混入する粘性・しまりの強い７層を除いて、すべて指頭大程度の大きさのロームブロックを多く混入する黒色土、または、暗褐色土がレンズ状に堆積しており、黒色土の一次堆積ののちに、ロームブロックを混入する黒色土、暗褐色土が比較的短い期間のうちに流入、埋没したものと理解される。

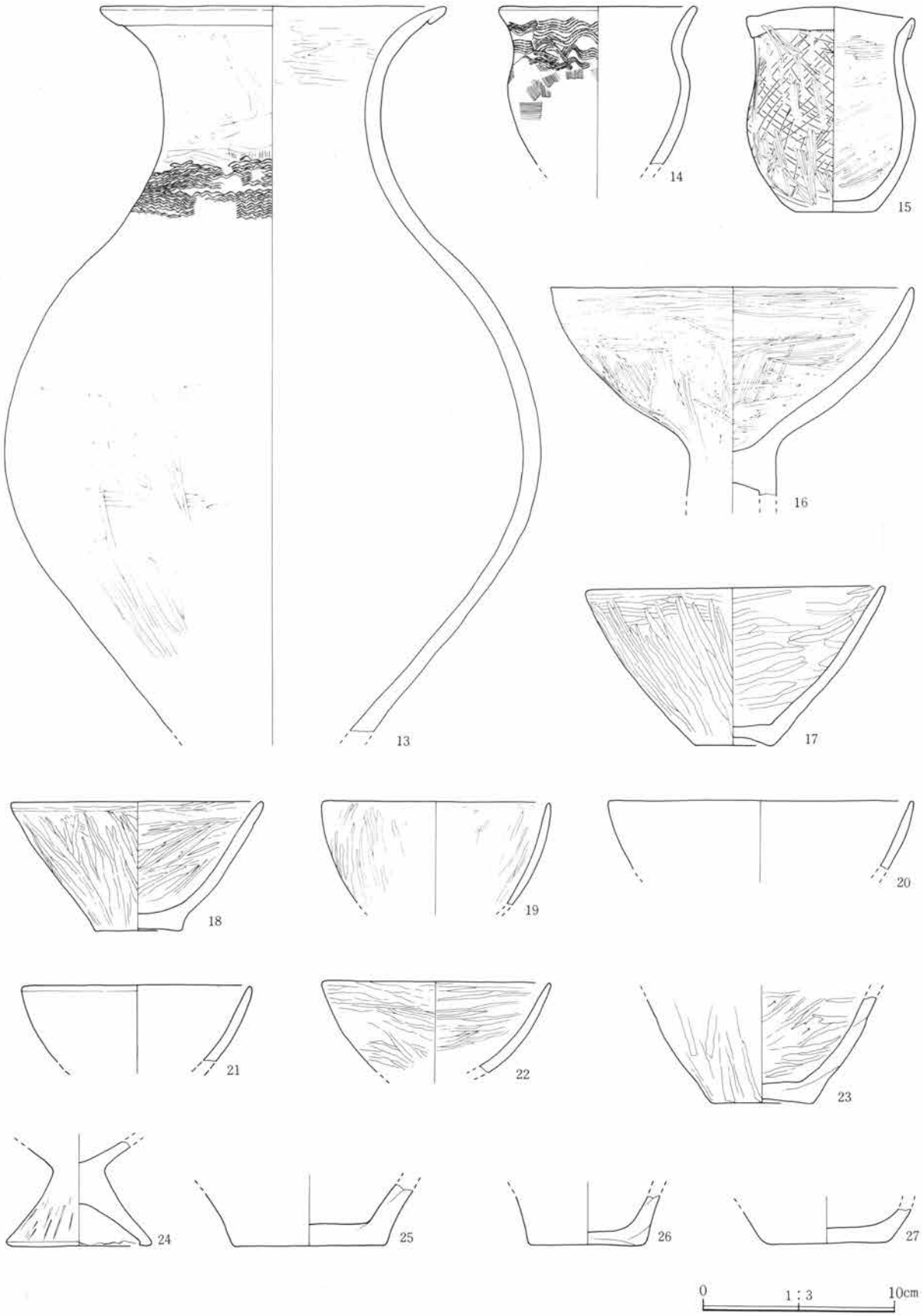
遺物は住居址の南側半分に集中しており、甕形土器15（うち、台付甕１）・壺形土器１・高坏形土器１・坏形土器、碗形土器７個体の他、片口土器１、匙状土製品１、土製紡錘車２個体が出土している。また、これらの遺物は、住居址の北側、および、南側の壁際では10cmから20cm程浮いた状態で、住居址中央部付近では床面から若干浮いた状態で出土している。北壁側の床面より約15cm浮いて出土した甕形土器（第65図８）は床面直上から出土した胴部破片と接合関係にあるなど、先述した住居址の埋没土層のあり方が、極めて短い期間のうちに埋っていると考えられること、壁際から出土した遺物と床面直上の遺物が接合することなどが本住居址の性格を暗示しているものと思われ、住居の廃棄直後に多量の一括遺物が窪地に投げ込まれたものと考えられる。なお、鉄片１（図版34―23）が床面直上より出土しているが、性格等については明確にし得なかった。



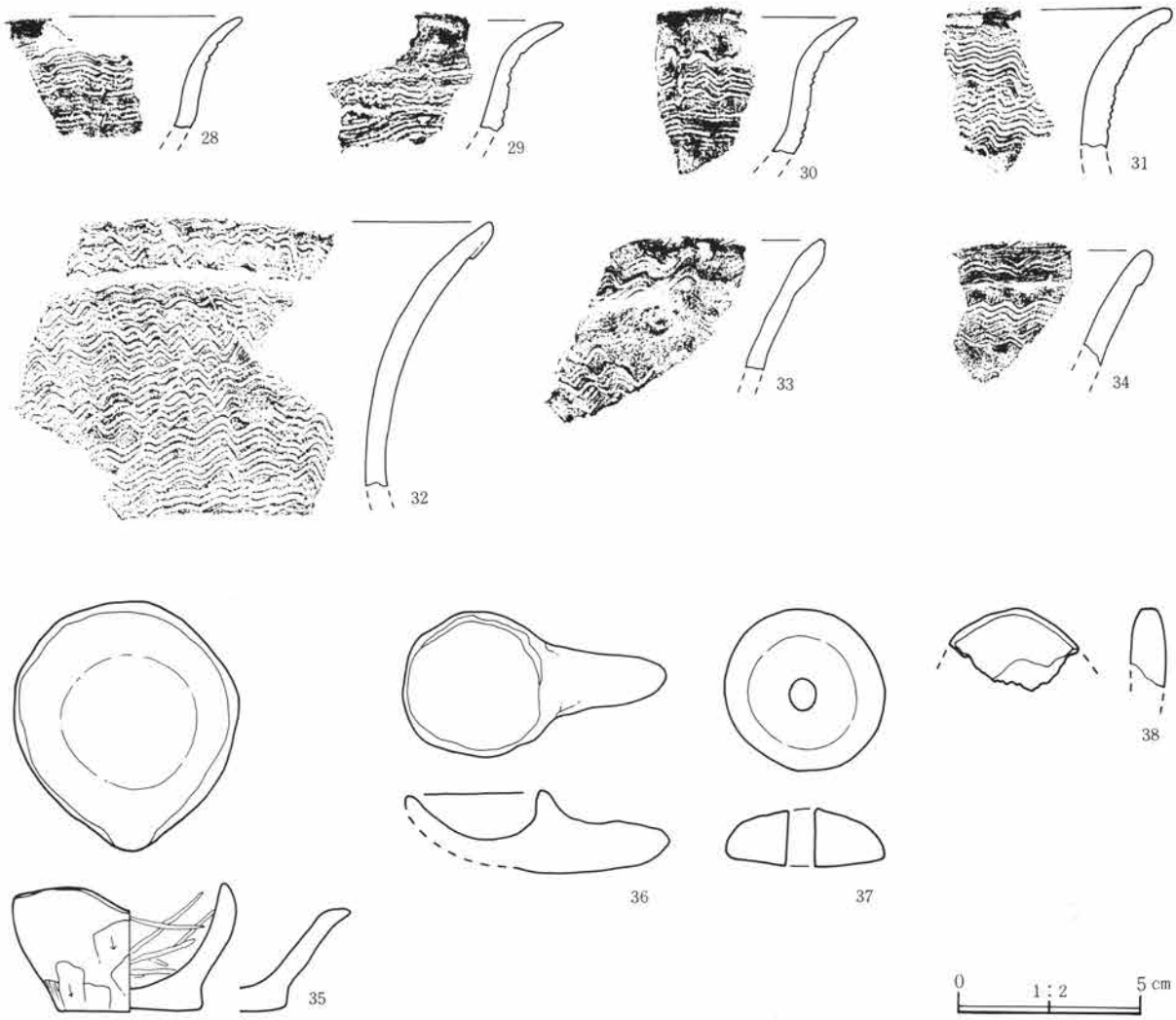

第64図　1号住居址出土遺物(1)




第65図　１号住居址出土遺物（２）




第66図　1号住居址出土遺物(3)




第67図　１号住居址出土遺物(１)

**遺物観察表(1)**　　(第64図)

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 64－1<br>33－2 | 甕 | 口 18.8<br>底 8.7<br>高 30.0 | 覆土 | 折り返し口縁。頸部のくびれは弱く、胴部は「棗」形。<br>口頸部に６帯の横走櫛描波状文、頸部下位に１帯の簾状文、肩部に１帯の横走櫛描波状文。波状文の継ぎ目５ヶ所以上。簾状文９区画２連どめ。上から順に施文。右まわり。 | **外** 口頸部ナデ、胴部斜ハケメ→施文。<br>**内** 斜ハケメ→横ハケメ→横ミガキ。 | **胎** 石英などの砂粒を多く含む。<br>**色** 暗褐色～赤褐色<br>**焼** 焼成やや不良 | 胴下半⅓欠。器表一部剝離。頸部に煤付着。 |
| 64－2<br>34－13 | 甕 | 口 19.6<br>底 ——<br>高 —— | 床面 | 折り返し口縁。頸部は緩い曲線でくびれる。<br>口頸部に９帯以上の横走櫛描波状文。櫛歯数７本。継ぎ目６ヶ所。下から順に施文。右まわり。 | **外** ナデ？→施文。<br>**内** ケズリ→ナデ→横ミガキ。 | **胎** 小砂粒を多く含む。<br>**色** 暗黄褐色<br>**焼** 良好 | 口頸部破片。<br>内外面に煤付着。 |

**遺物観察表(2)**　（第64・65図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 64－3<br>33－6 | 甕 | 口 16.4<br>底 ——<br>高 —— | 床面 | 折り返し口縁。頸部は緩い曲線でくびれ、肩部がやや張る。<br>口頸部に8帯の横走櫛描波状文。櫛歯数10本。継ぎ目は4ヶ所以上。下から順に施文。右まわり。 | 外 縦ケズリ→ナデ→施文→肩部→横ミガキ。<br>内 斜ケズリ→横ナデ→粗い横ミガキ。 | 胎 砂粒を含む。<br>色 褐色<br>焼 良好 | |
| 64－4<br>33－3 | 甕 | 口 17.7<br>底 7.2<br>高 30.7 | 床面 | 折り返し口縁。頸部は長く弱い曲線でくびれ、肩部やや張る。底部は突出。<br>口頸部に8～9帯の横走櫛描波状文。櫛歯数9本。継ぎ目5ヶ所。下から順に施文し、1区画のみ上から施文。右まわり。 | 外 縦ケズリ→口頸部ナデ→施文→ミガキ。<br>内 ケズリ？→ミガキ | 胎 大砂粒を多く含む。<br>色 外面黒～暗褐色。内面明褐色。<br>焼 良好 | 完形。<br>口縁～肩部に煤付着。<br>胴部片面に黒斑。 |
| 64－5<br>33－5 | 甕 | 口 ——<br>底 6.5<br>高 —— | 床面 | 口頸部は長く、肩部は強く張り出す。頸肩部に8帯以上の横走櫛描波状文。櫛歯数は13本。継ぎ目は4ヶ所以上。上から施文。右まわり。 | 外 頸部縦ハケメ・胴部ケズリ→施文→胴部ミガキ。<br>内 斜ハケメ→ミガキ。 | 胎 砂粒を含む。<br>色 暗褐色<br>焼 良好 | |
| 65－6<br>34－8 | 甕 | 口 13.0<br>底 6.2<br>高 20.9 | 床面 | 口縁は外湾し、頸部は比較的強くくびれる。「棗」形の胴部にやや上げ底気味の平底。<br>口頸部に横走櫛描波状文を5帯施す。櫛歯数12本。下から施文。継ぎ目は4～5ヶ所。右まわり。 | 外 口縁部～頸部縦ハケメ→施文→胴部縦ミガキ。<br>内 ケズリ→横ミガキ | 胎 白色砂粒を多く含む。<br>色 外面は暗灰褐色、内面は黄褐色。<br>焼 良好 | 完形。<br>胴部中位全体に煤の付着。 |
| 65－7<br>33－1 | 甕 | 口 15.0<br>底 6.3<br>高 25.2 | 埋土中 | 折り返し口縁。頸部は強い曲線でくびれ、胴部は球形状を呈す。底部はやや突出する。<br>口肩部に7～8帯の横走櫛描波状文。櫛歯数は8・10本の2種。継ぎ目は5～6ヶ所。下から順に施文。右まわり。 | 外 口頸部縦ハケメ→施文→胴部縦ミガキ・肩部横ミガキ<br>内 横ケズリ？→横ミガキ。 | 胎 小砂粒を多く含む。<br>色 暗褐色<br>焼 良好 | 完形。<br>口頸部外面に煤付着。 |
| 65－8<br>34－14 | 甕 | 口 14.8<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 口縁は外反し、頸部は比較的強くくびれる。やや大膨れで、胴部最大径を下位にもつ。<br>口頸部に6～7帯の横走櫛描波状文。櫛歯数は8本。継ぎ目は4ヶ所以上。上から施文。右まわり。 | 外 縦ハケメ→口頸部ナデ→施文→胴部縦ミガキ。<br>内 横ハケメ→横ミガキ。 | 胎 石英などの砂粒を多く含む。<br>色 外面は黒褐色、内面は黄褐色。<br>焼 やや不良 | 口縁部～胴部½破片。<br>内面下半に炭化物付着。 |
| 65－9<br>34－16 | 甕 | 口 ——<br>底 7.0<br>高 —— | 埋土中 | 胴部最大径を中位にもつ。「棗」形。大き目の底部から外反気味に立上る。 | 外 ケズリ→丁寧な縦ミガキ。<br>内 ケズリ→横ミガキ。 | 胎 小砂粒を含む。<br>色 赤褐色～暗褐色<br>焼 良好 | 胴下半部⅔破片。<br>外面2ヶ所に黒斑。 |
| 65－10<br>33－4 | 小形甕 | 口 11.9<br>底 4.8<br>高 15.2 | 床面 | 口縁は小さく外反し、頸部は強い曲線でくびれる。胴部は肩の張る「無花果」形。<br>口頸部に3帯の横走櫛描波状文。櫛歯数は11本。継ぎ目は4ヶ所。上から順に施文。右まわり。 | 外 ケズリ→頸部斜ハケメ・胴部ケズリ→施文→胴部縦ミガキ<br>内 ケズリ？→斜ミガキ。 | 胎 石英・白色砂など大粒の砂粒含む。<br>色 黄褐色～暗褐色<br>焼 良好 | 完形。<br>器表剥落激しい。<br>片側2次焼成痕。 |

**遺物観察表(3)**　　(第65・66図)

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 65—11<br>34—9 | 小形甕 | 口 13.2<br>底 6.2<br>高 16.5 | 埋土中 | 口縁は小さく外反する。胴部は「棗」形を呈し、底部は突出する。口頸部に3帯の横走櫛描波状文。櫛歯数は8本。継ぎ目は5ヶ所。上から順に施文。右まわり。 | 外 縦ハケメ→口頸部ナデ→施文→胴部縦ミガキ。<br>内 横ハケメ→横ミガキ。 | 胎 大粒砂粒を多く含む。<br>色 黄褐色～暗褐色<br>焼 やや不良 | 口縁一部欠。胴下半に煤付着。 |
| 65—12<br>34—7 | 小形甕 | 口 10.4<br>底 ——<br>高 —— | 床面 | 口縁は小さく反外し、頸部のくびれは弱い。胴部最大径をやや上位にもつ。<br>口頸部に4～5帯の横走櫛描波状文。櫛歯数7・8本の2種類の工具。継ぎ目は5～6ヶ所。上から順に施文。右まわり。 | 外 縦ハケメ・胴部ケズリ？→施文→胴部縦ミガキ。<br>内 横ケズリ→横ミガキ。 | 胎 砂粒を多く含む。<br>色 外面暗褐色、内面黄褐色<br>焼 不良 | 底部欠。胴下半の器表剝落。 |
| 66—13<br>34—10 | 壺 | 口 18.2<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 口縁は大きく外反し、小さな折り返し口縁。肩部はなだらかで胴部最大径を中位にもつ。<br>頸部と肩部の境に2帯の横走櫛描波状文。櫛歯数は11本で、幅は1.8cmを測る。継ぎ目は3～4ヶ所。上から順に施文。右まわり。 | 外 粗いハケメ→施文→口頸部・胴下位縦ミガキ・胴中位横ミガキ。<br>内 ケズリ→ミガキ。 | 胎 小砂粒を多く含む。<br>色 黄白色を呈し、口唇部と頸部及び胴部の一部に黒斑がみられる。<br>焼 良好で堅緻。 | 胴部の約5/6を欠く。 |
| 66—14<br>34—12 | 小形甕 | 口 10.4<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 口縁は外反し、口唇は丸味をもつ。頸部は強い曲線でくびれ、肩の張る胴部へ続く。<br>頸部に2～3帯の横走櫛描波状文。櫛歯数は8本。継ぎ目は4ヶ所。右まわり。 | 粘土紐積み上げによる成形で、口縁部は指頭圧痕を残し、歪みが激しい。<br>外 口縁部横ナデ・胴部ケズリ→頸部ハケメ→施文→胴部粗いミガキ。<br>内 口縁部ハケメ→横ナデ・胴部ミガキ。 | 胎 大小の砂粒を多く含む。<br>色 黒灰褐色<br>焼 ややあまく脆い。 | 胴下半～底部を欠く。 |
| 66—15<br>34—11 | 小形甕 | 口 9.1<br>底 4.6<br>高 10.6 | 床面 | 折り返し口縁。口縁はやや外反し、頸部のくびれは弱い。胴部最大径を中位よりやや上にもつ。底部は大き目の凹凸のある平底。口縁の歪み大。<br>頸部以下に1本の篦沈線による斜格子文。篦の先端は鋭利。 | 内面に粘土紐積上げ痕あり。<br>外 ハケメ→口縁部ヨコナデ→施文→頸部以下に丁寧な縦ミガキ。<br>内 ケズリ→横ミガキ。 | 胎 雲母・石英などの砂粒を含む。<br>色 赤褐色～黒褐色<br>焼 焼きむらがあり一部が脆い。 | 完形。 |
| 66—16<br>34—18 | 高坏 | 口 18.8<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 坏部は内湾して開く。口唇部は尖り、強い曲線を描いて脚部へ続く。 | 外 縦ケズリ→縦ミガキ→口縁部横ミガキ。<br>内 縦ミガキ→横ミガキ。 | 胎 雲母・石英などの大粒の砂粒を含む。<br>色 赤褐色<br>焼 良好 | 脚部を欠く。<br>口縁3ヶ所に黒斑。 |
| 66—17<br>34—19 | 鉢 | 口 15.7<br>底 4.1<br>高 8.2 | 埋土中 | 口唇部はやや丸味をもち、体部はやや内湾して開く。底部は不安定な上げ底。 | 外 横ケズリ→口縁部ミガキ→体部横ミガキ。<br>内 ケズリ→横ミガキ | 胎 石英・赤色砂粒を含む。<br>色 赤褐色<br>焼 良好 | 口縁部1/4欠。 |

## 遺物観察表(4)　（第66図）

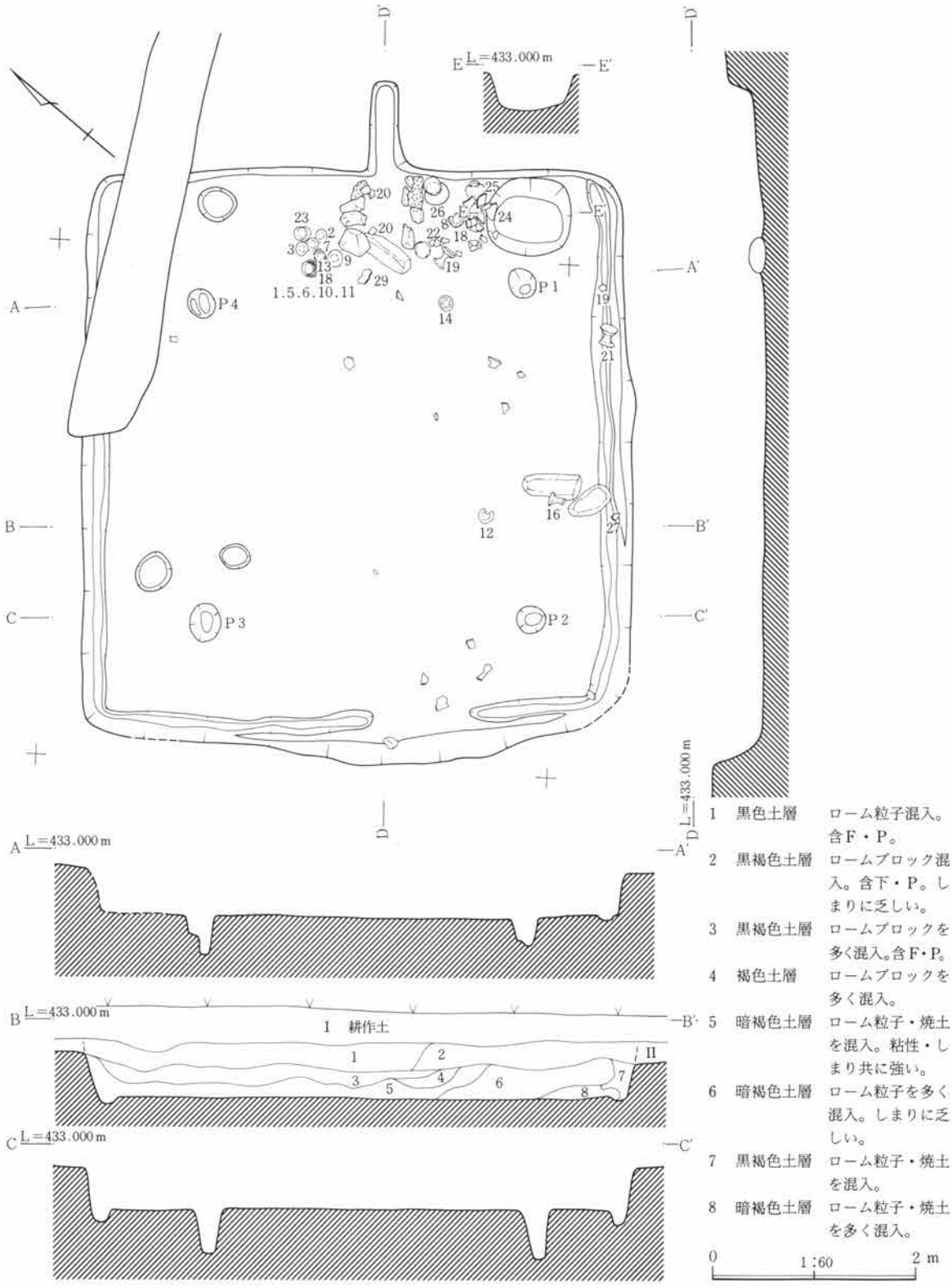
| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 66—18<br>34—20 | 鉢 | 口 13.1<br>底 4.5<br>高 6.7 | 埋土中 | 体部は直線上に開き、口縁部はやや内湾する。外面に弱い稜をもつ。底部はやや突出気味の平底。 | 外 口縁部斜ハケメ→体部縦ミガキ→口縁部横ミガキ。<br>内 斜及び横ミガキ。 | 胎 雲母・石英などの砂粒を含む。<br>色 淡褐色<br>焼 良好 | 体部⅙欠。 |
| 66—19<br>34—21 | 鉢 | 口 12.0<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 体部は内湾して開く。 | 外 縦ミガキ。<br>内 口縁部横ミガキ→縦ミガキ。 | 胎 石英などの小砂粒を含む。<br>色 淡黄色<br>焼 良好 | 体部¼破片。 |
| 66—20 | 鉢 | 口 15.9<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 体部はやや内湾して開く。口唇は尖る。 | 内外面とも粗いミガキか？ | 胎 小砂粒を含む。<br>色 淡褐色<br>焼 良好 | 口縁部約⅛破片。 |
| 66—21<br>34—21 | 鉢 | 口 12.0<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 体部が内湾して開き、口唇は尖る。口縁外面に弱い稜線。 | 内外面ともケズリ→横ミガキ。 | 胎 小砂粒を多く含む。<br>色 淡褐色<br>焼 良好 | 口縁部約⅛破片。 |
| 66—22<br>34—22 | 鉢 | 口 12.0<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 体部は内湾して開き、口唇部でやや外反する。 | 内面に粘土紐積上げ痕あり。<br>外 横ケズリ？→横ミガキ。<br>内 ケズリ？→横ミガキ。 | 胎 雲母・石英などの小砂粒を含む。<br>色 暗赤褐色<br>焼 良好 | 体部⅓破片。<br>内面の一部に二次加熱痕。 |
| 66—23<br>34—17 | 甕 | 口 ——<br>底 5.3<br>高 —— | 埋土中 | 上げ底気味の安定した底部で、胴部下半はやや内湾して立ち上がる。 | 外 縦ケズリ→縦ミガキ。<br>内 斜ケズリ→斜・横ミガキ。 | 胎 石英・赤色砂粒など大砂粒を含む。<br>色 外面は黒褐色～赤褐色<br>焼 良好 | 底部～胴部下半½破片。 |
| 66—24<br>34—15 | 台付甕 | 口 ——<br>底 ——<br>高 7.6 | 埋土中 | 脚台部は大きく開く截頭円錘形で強い曲線を描いて胴部へつづく。 | 外 縦ケズリ→斜ミガキ。<br>内 ナデ。胴底面ミガキ。 | 胎 石英・雲母などの砂粒を含む。<br>色 暗褐色<br>焼 良好 | 脚台部破片。二次加熱痕。 |
| 66—25 | 甕 | 口 ——<br>底 8.0<br>高 —— | 埋土中 | 安定した大きな平底で外反して立上がる。 | 外 縦ハケメ→粗いミガキ。<br>内 ケズリ→ミガキ。 | 胎 砂粒を多く含む。<br>色 暗褐色<br>焼 良好 | 底部⅛破片。粘土紐接合面に籾痕。 |
| 66—26 | 甕 | 口 ——<br>底 6.5<br>高 —— | 埋土中 | 安定した平底で、胴部は外反気味に立上る。 | 外 ハケメ？→粗いミガキ。<br>内 ナデ→ミガキ。 | 胎 小砂粒を多く含む。<br>色 黒褐色<br>焼 良好 | 底部¼破片。 |
| 66—27 | 甕 | 口 ——<br>底 6.2<br>高 —— | 埋土中 | 安定した平底で、胴部は内湾気味に立上がる。 | 外 ケズリ→粗いミガキ。<br>内 ケズリ？→ミガキ | 胎 白色の小砂粒を多く含む。<br>色 外面は黒色、内面は黄褐色。 | 底部⅙破片。 |

**遺物観察表(5)**　　(第67図)

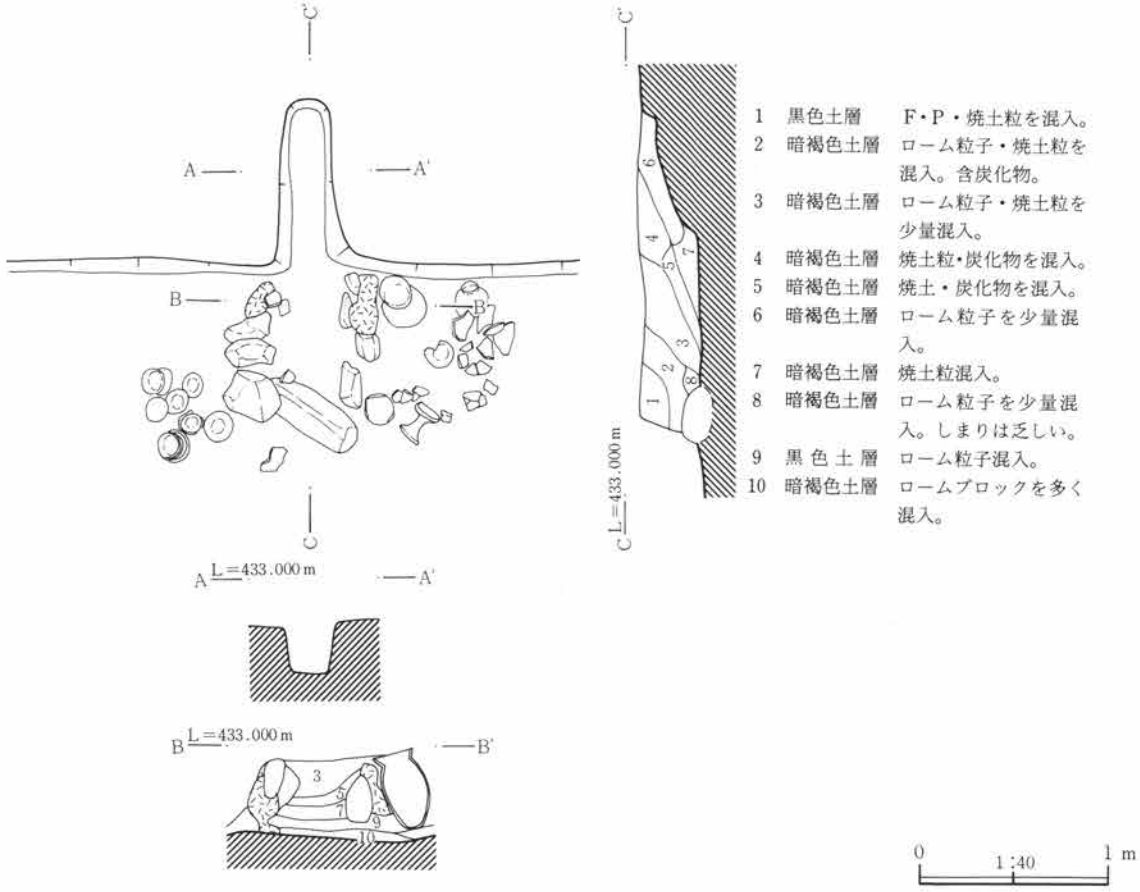
| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 67—28<br>35—28 | 小形甕 | 口 ——<br>底 —— | 埋土中 | 胴部はやや直立し、口縁は外反。胴部に横走櫛描波状文。櫛歯数7本。右まわり。 | 外 ナデ→施文。<br>内 横ケズリ→口縁部横ナデ→横ミガキ。 | 胎 大砂粒を含む。<br>色 明褐色<br>焼 良好 | 口縁部破片。<br>台付甕？ |
| 67—29<br>35—29 | 小形甕 | 口 ——<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 体部は直立し、口縁は強く外反。体部に横走櫛描波状文。櫛歯数7本。 | 外 ナデ→施文。<br>内 横ケズリ→口縁部横ナデ→横ミガキ | 胎 大砂粒を含む。<br>色 明褐色<br>焼 良好 | 口縁部破片。<br>5と同一個体か？ |
| 67—30<br>35—30 | 小形甕 | 口 ——<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 体部は直立し、下半ですぼまる。口縁強く外反。櫛歯数7本。右まわり。 | 外 ナデ→施文。<br>内 横ケズリ→口縁部横ナデ→横ミガキ。 | 胎 砂粒を多く含む。<br>色 明褐色<br>焼 良好 | 口縁部破片。<br>3・5と同一個体か？ |
| 67—31<br>35—31 | 甕 | 口 ——<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 口縁部は曲線を描いて外反。横走櫛描波状文。櫛歯数8本。 | 外 ナデ？→施文。<br>内 ナデ→横ミガキ。 | 胎 石英などの砂粒を多く含む。<br>色 外面明褐色、内面黒色。<br>焼 良好 | 口縁部片。 |
| 67—32<br>35—32 | 甕 | 口 ——<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 折り返し口縁。頸部長く曲線を描き外反。<br>口縁～頸部に7帯以上の横走櫛描波状文。櫛歯数9本。上から順に施文。右まわり。 | 外 ナデ→施文。<br>内 斜ケズリ→ナデ→粗い斜ミガキ。 | 胎 砂粒を多く含む。<br>色 外面黒褐色、内面明褐色。<br>焼 良好 | 口頸部片。<br>外面に煤付着。 |
| 67—33<br>35—33 | 甕 | 口 ——<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 折り返し口縁。<br>口縁～頸部に横走櫛描波状文。櫛歯数5本。 | 外 斜ハケメ？→ナデ→施文。<br>内 横ミガキ。 | 胎 砂粒を含む。<br>色 暗灰色<br>焼 良好で堅緻。 | 口縁部片。 |
| 67—34<br>35—34 | 甕 | 口 ——<br>底 ——<br>高 —— | 埋土中 | 弱い折り返し口縁。横走櫛描波状文。櫛歯数4本。 | 外 ナデ→施文。<br>内 横ミガキ。 | 胎 砂粒を多く含む。<br>色 暗灰褐色。<br>焼 良好で堅緻。 | 口縁部片。 |
| 67—35<br>35—26 | 片口鉢 | 口 4.0<br>底 2.6<br>高 2.2 | 床面 | 小さな「わん」形の体部に安定した大きめの平底。 | 手づくね成形。<br>外 ケズリ→粗いナデ・ミガキ。<br>内 ケズリ→横ミガキ | 胎 砂粒を多く含む。<br>色 黄褐色。<br>焼 やや不良。 | 完形。片側に黒斑。 |
| 67—36<br>35—24 | 匙状土製品 | 長 4.8 | 床面 | 小さな「わん」形に棒状の把手がつく。 | 手づくね成形。<br>内外面とも粗いミガキ。 | 胎 白色小砂粒を多く含む。<br>色 黒褐色<br>焼 不良 | 下面剝離。<br>重 29.0 |
| 67—37<br>35—25 | 紡錘車 | 長 2.9<br>高 1.4 | 床面 | やや歪んだ円形で、軸孔は中心よりずれる。 | 粗いナデ・ミガキ。 | 胎 白色小砂粒を多く含む。<br>色 暗褐色<br>焼 やや不良 | 一部黒斑。<br>重 27.9 |
| 67—38<br>35—27 | 紡錘車 | 長 (2.4)<br>高 (1.0) | 埋土中 | 歪んだ円形と思われる。 | 粗いミガキ。 | 胎 白色小砂粒を多く含む。<br>色 暗褐色<br>焼 不良 | 重 (5.2) |

# 第3節　古墳時代の遺構と遺物

## (1) 住　居　址




第68図　2 a 号住居址実測図




第69図　２ａ号住居址竈実測図

２ａ号住居址（第68図）

２ａ号住居址は調査区南側に位置し、一部路線外にかかって検出された。そのため、住居址の全様を把握すべく、路線外にかかる部分については借地し、完掘した。本住居址の検出された地点は、比較的良好に層序の堆積が見られ、住居の掘り込み自体はII層中にあるものと思われる。

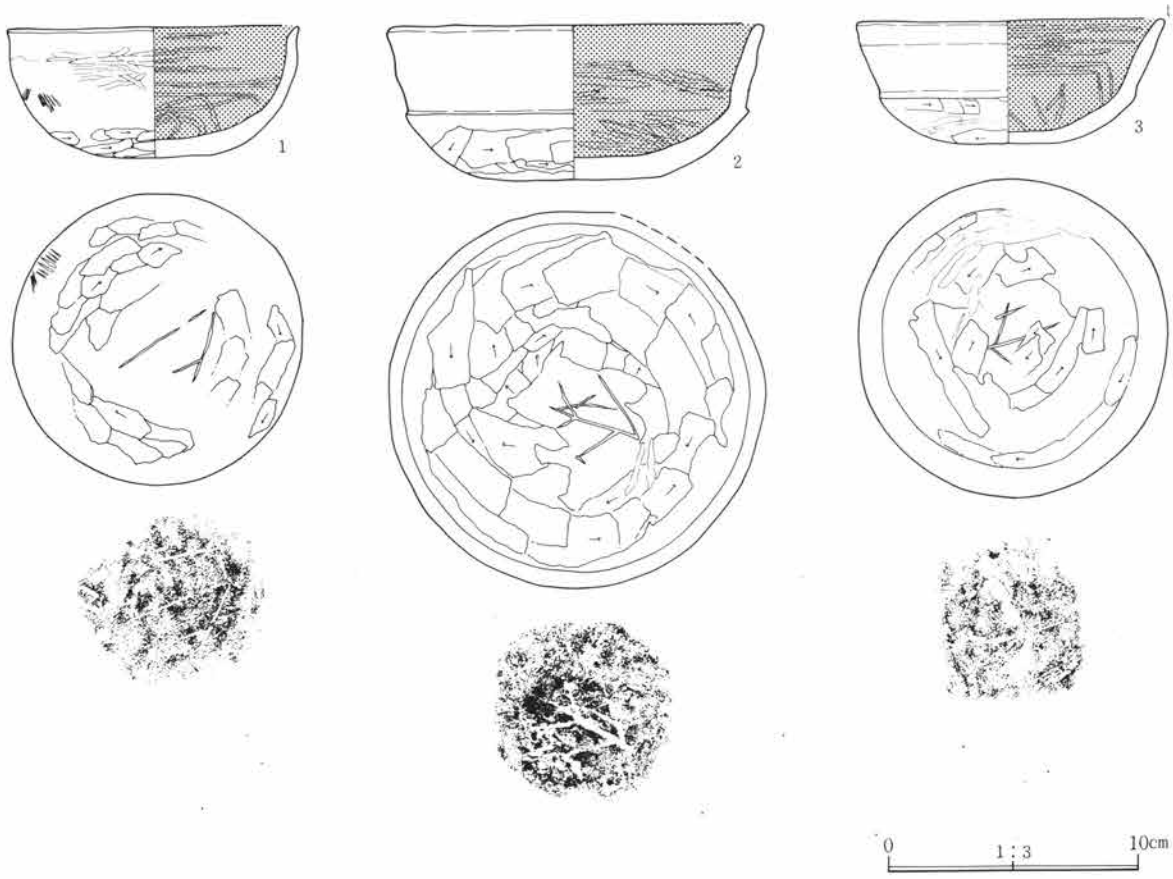
本住居址はＧ－63グリッドを中心に位置し、北および東壁の一部を耕作坑により切られている他は良好な状態で検出された。住居址の規模、および、平面形は南北方向5.30m、東西方向5.35mを測り、南壁中央付近でややふくらむ他は、概ね、方形状を呈す。主軸方位はＮ－52°－Ｗを測る。壁高は35～45cmを測り、西壁側で若干高くなっている。各辺の壁ともほぼ垂直に立上がる。周溝は東壁、および、西壁の中央部付近を除いて検出されている。幅15～20cm、深さ５～12cmを測る。床面はロームブロックを主体とする褐色土と黒色土の混合土により平坦に貼床されている。また、南壁中央付近では多量の焼土、灰が黒色土に混って貼床されていた。竈周辺から住居址中央部にかけては良好な状態で検出された。柱穴は総計７本が検出されている。このうち、住居址の主柱穴と考えられるものは位置的に見て$P_1$・$P_2$・$P_3$・$P_4$の４本であると思われる。各々の柱穴の深さは28cm・45cm・43cm・38cmを測る。柱穴間の距離は$P_1$～$P_2$・3.20m、$P_3$～$P_4$・3.10m、$P_1$～$P_4$・3.15m、$P_2$～$P_3$・3.20mを測り、$P_1$がやや外側に寄った位置にある。貯蔵穴は南東コーナー部付近に検出されている。貯蔵穴の規模、および、平面形は長軸83cm、短軸75cm、深さ35cmを測り、概ね、楕円形状を呈す。埋土は灰・焼土を混入する黒色土を主体とした自然堆積状態を呈していた。遺物は出土していない。

竈（第69図）は東壁中央より若干右に寄った位置に検出され、比較的良好な遺存状態で検出された。袖部は壁とほぼ直角に構築されており、燃焼部は住居址内にある。袖部は安山岩質の角礫を芯に、その外側を灰白色粘土を用いて被覆していたものと思われ、やや内傾して構築されている。袖部内面は良く焼けて赤化していた。燃焼部の規模、および、平面形は奥壁52cm、焚口57cm、奥行1.02mを測り、概ね、長方形状を呈する。火床は床面よりも12cm程高くなっている。煙道は住居壁を途中から掘り込み、緩く傾斜して、ほぼ垂直に立上がる。長さ86cm、幅28cm、深さ30cmを測る。

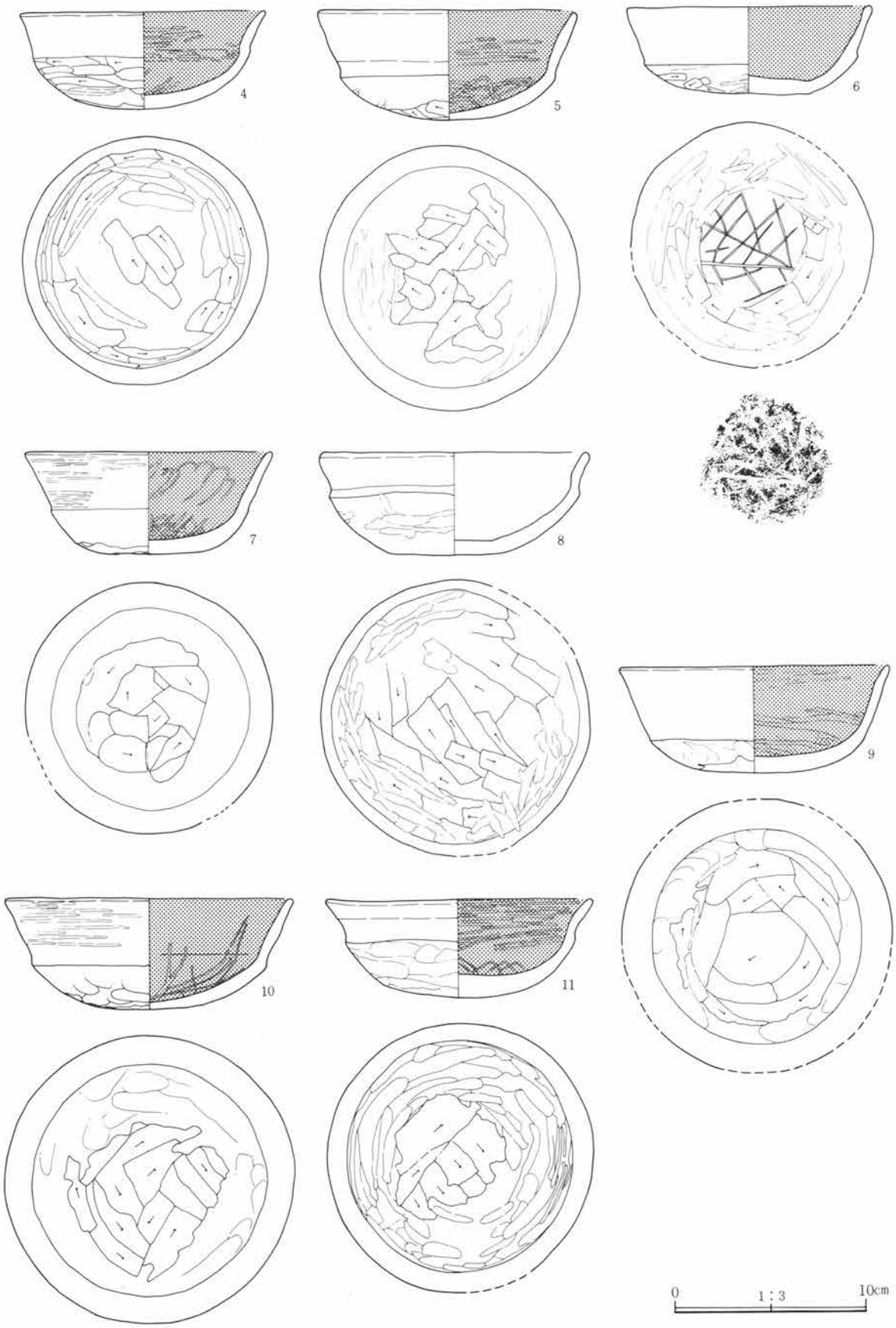
住居址の埋土は、指頭大のロームブロックを混入する黒色土（F・P を若干混入する）を主体とした自然堆積状態を示しており、比較的短期間に埋没したものと思われる。

遺物は竈周辺を中心として総計30点程出土している。出土状態は極めて良好で、高坏形土器（第73図21）の１点を除いてすべての床面直上からの出土であり、竈周辺の空間の利用のあり方を示す好例となるものと思われる。竈の右側には、袖部にたてかけられて甕形土器（第73図26）が、また、小形壺形土器（同25）の他、高坏形土器、鉢形土器が出土している。一方、竈の左側には、坏形土器が集中して出土しており、とくに、５個体（第70図１、第71図５・６・10・11）は重ねられた状態で出土している。他に砥石（第74図30）が１点出土している。形状は角柱状を呈し、砥面はいずれも研ぎ減りが著しい。また側面には溝状の条痕が縦横に見られる。酸性凝灰岩製。

なお、本住居址の竈内より出土した甕形土器の一括遺物が出土しているが、２ｂ号住居址の項で記すように本住居址の貼床埋土中より、出土する土器片と接合関係にあるため、２ｂ号住居址出土遺物として扱った。

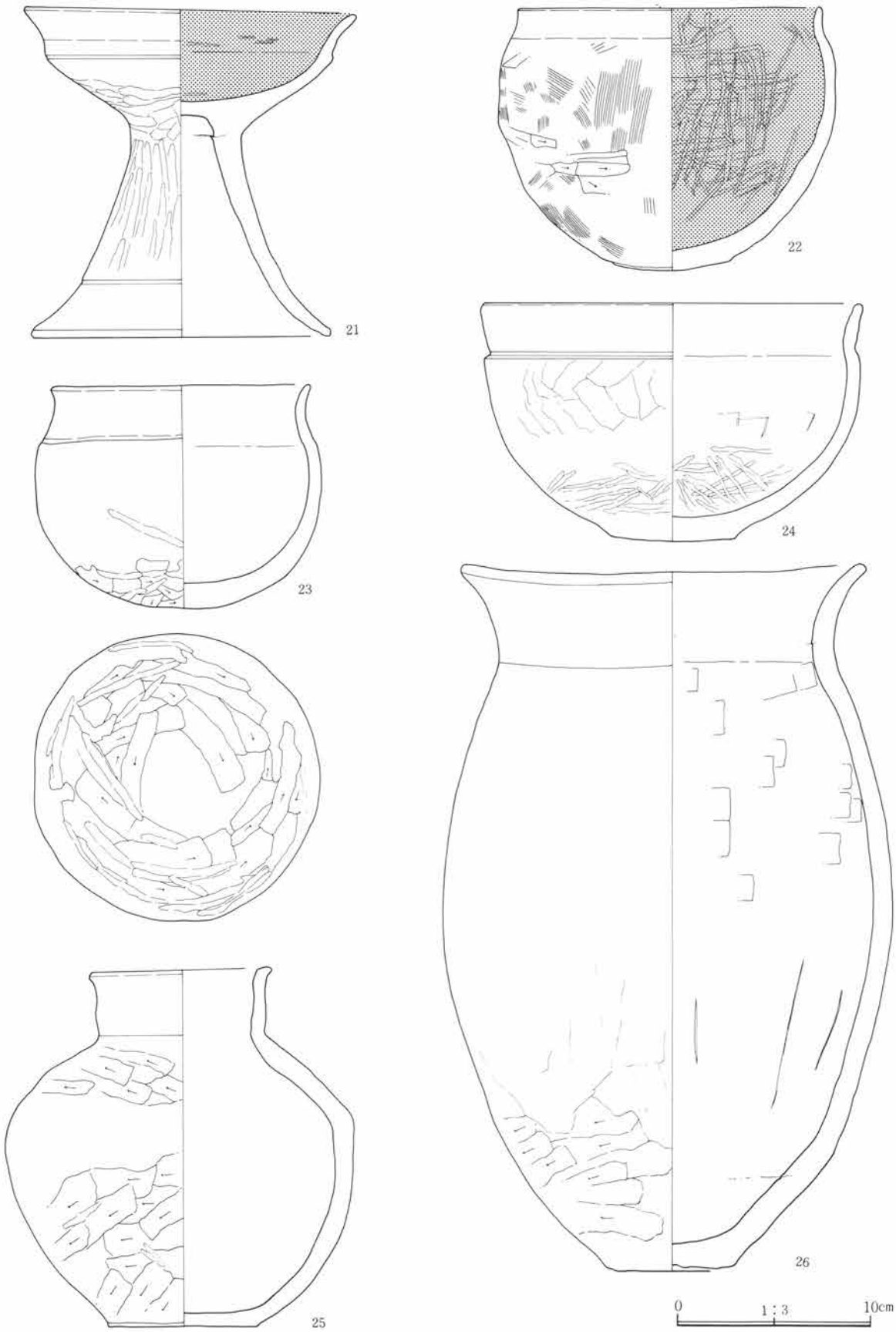



第70図　２ａ号住居址出土遺物（１）

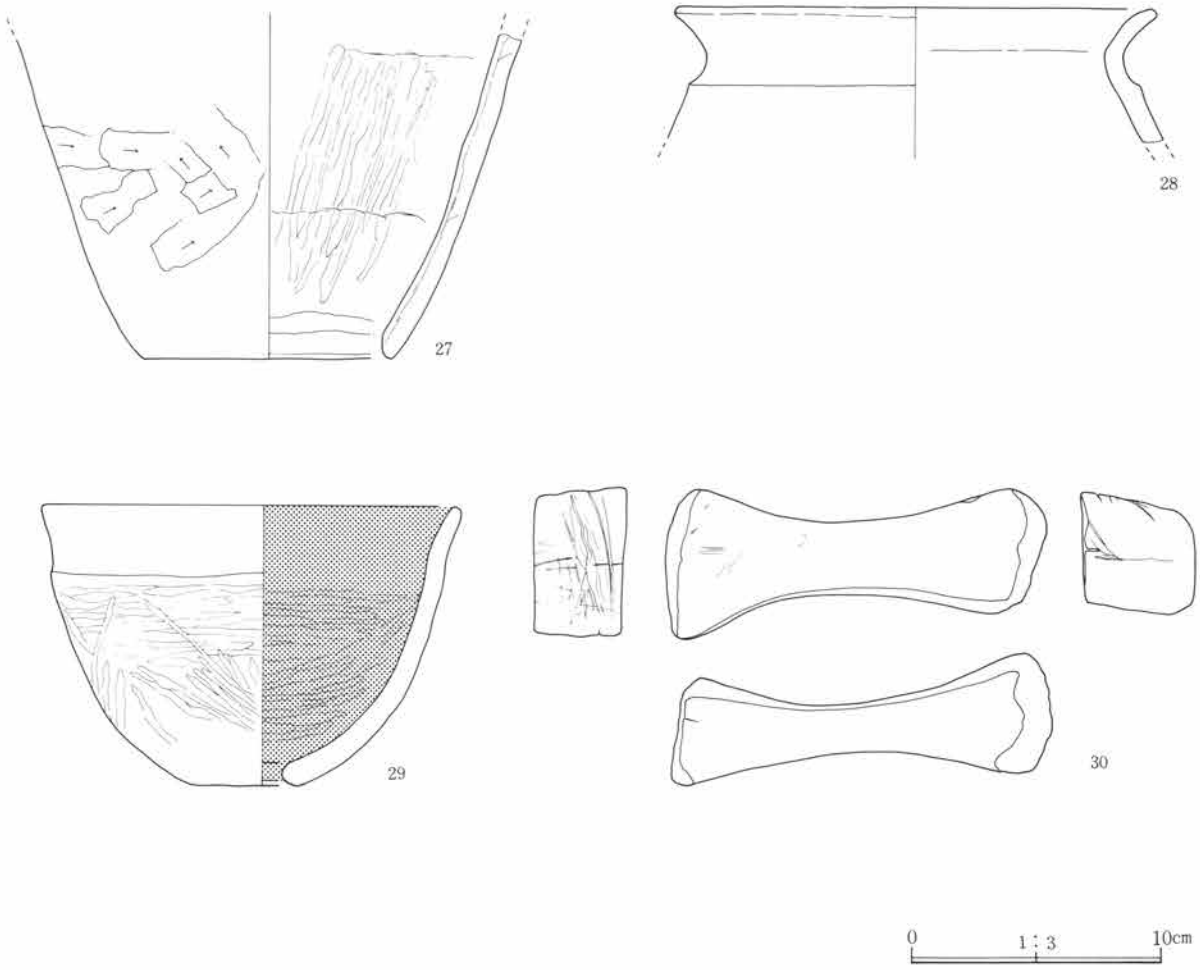



第71図　２ａ号住居址出土遺物（２）

第72図　2 a 号住居址出土遺物( 3 )




第73図　２ａ号住居址出土遺物（４）




第74図　2 a 号住居址出土遺物( 5 )

**遺物観察表(1)**　（第70図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器　種 | 法　　量 | 出土位置 | 器 形 の 特 徴 | 成 形 ・ 整 形 の 特 徴 | 胎土・色調・焼成 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 70－1<br>36－1 | 坏 | 口　11.6<br>底　—<br>高　5.2 | 床面 | 底部は丸底で体部は内湾して立上る。口縁部はわずかに短く、外反する内面に明瞭な稜線をもつ。 | **外**　体部下半は右まわりのケズリ体部上半はケズリ後、横方向のナデ・ミガキ。部分的に粗いハケメを残す。<br>**内**　ナデ後、全面にミガキ。 | **胎**　黄色砂粒子混入<br>**色**　外面褐色<br>**焼**　良好 | 完形<br>木葉痕<br>内面黒色処理 |
| 70－2<br>36－2 | 坏 | 口　15.1<br>底　—<br>高　6.1 | 床面 | 底部は平底に近い。外稜は明瞭である。口縁部は、わずかに外反する。 | **外**　体部は基本的に左まわりのケズリ。体部上半はケズリ後ナデ。<br>**内**　ナデ後、全面にミガキ。 | **胎**　砂粒子混入<br>**色**　外面赤褐色<br>**焼**　良好 | 完形<br>木葉痕<br>内面黒色処理 |
| 70－3<br>36－3 | 坏 | 口　12.4<br>底　—<br>高　4.9 | 床面 | 底部は平底で、外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に外反する。 | **外**　体部は基本的に左まわりのケズリ。ヘラ状工具によるナデ・粗いミガキ。<br>**内**　ナデ後、全面にミガキ。 | **胎**　砂粒子混入<br>**色**　赤褐色<br>**焼**　良好 | 完形<br>木葉痕<br>内面黒色処理 |

**遺物観察表(2)**　（第71・72図）

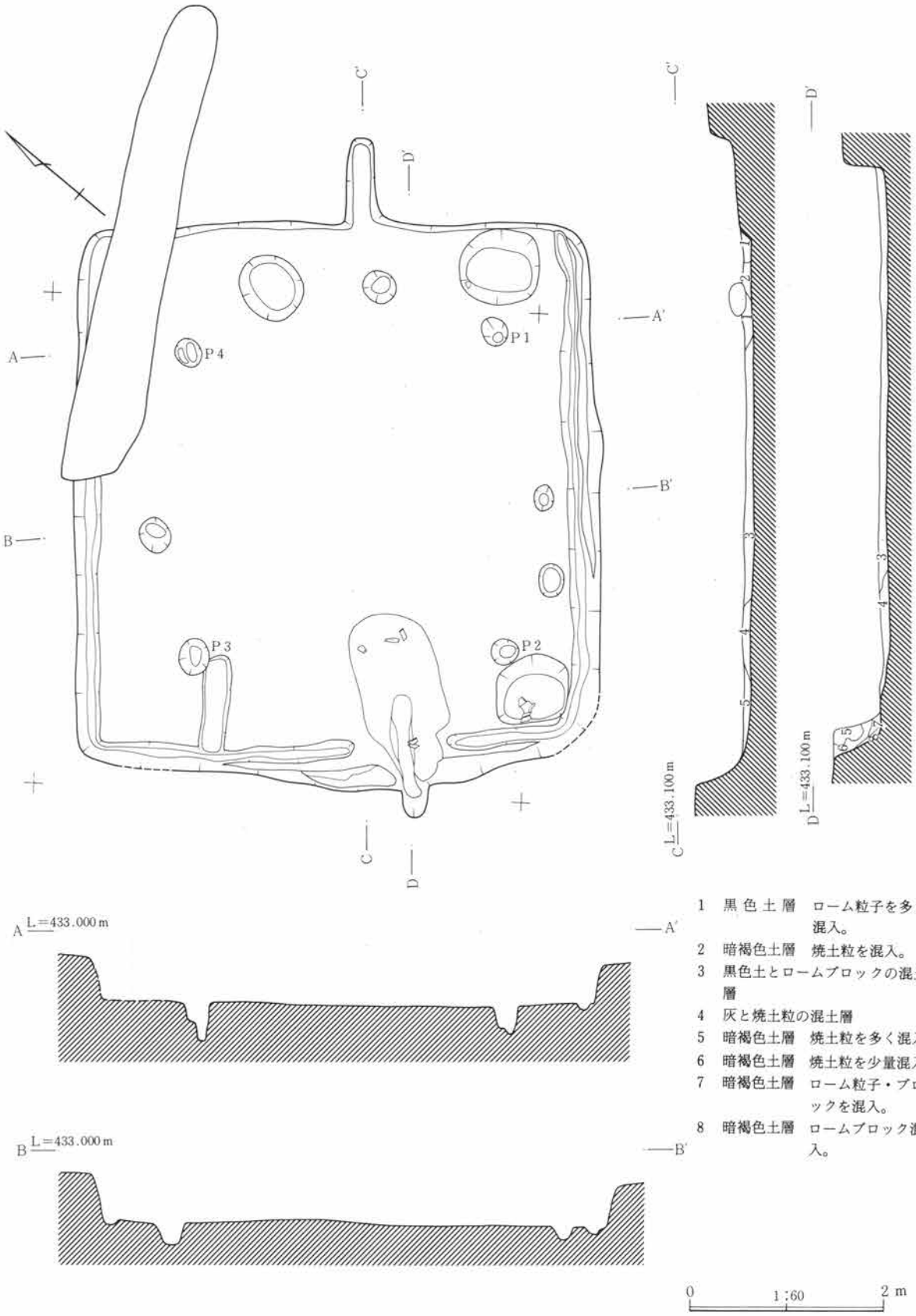
| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 71—4<br>36—4 | 坏 | 口 12.9<br>底 —<br>高 5.1 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に外反する。 | 外 体部は左まわりのケズリ。体部上半はケズリ後、ミガキ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 71—5<br>36—5 | 坏 | 口 13.6<br>底 —<br>高 5.7 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部はわずかに外反する。 | 外 体部下半は不定方向のケズリ、体部上半は右まわりのケズリ後、ミガキ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面赤褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 71—6<br>36—6 | 坏 | 口 12.6<br>底 —<br>高 4.6 | 床面 | 底部は平底で、外稜は明瞭である。口縁部はわずかに外反する。 | 外 体部は左まわりのケズリ後、ヘラ状工具によるミガキ。<br>内 ナデ後、全面に粗いミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面赤褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 71—7<br>37—7 | 坏 | 口 13.0<br>底 —<br>高 5.3 | 床面 | 底部は平底に近い。外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に外反する。 | 外 体部下半は、基本的に左まわりのケズリ。体部上半はケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面赤褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 71—8<br>37—8 | 坏 | 口 14.2<br>底 —<br>高 5.4 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に外反する。 | 外 体部下半は不定方向のケズリ。体部上半はケズリ後、粗いミガキ。口縁部は横ナデ後、粗いミガキ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 くすんだ褐色<br>焼 良好 | ほぼ完形 |
| 71—9<br>37—12 | 坏 | 口 14.1<br>底 —<br>高 5.5 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に外反している。 | 外 体部下半は基本的には、左まわりのケズリ。体部上半はケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 71—10<br>37—10 | 坏 | 口 15.2<br>底 —<br>高 5.8 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に外反する。 | 外 体部下半は不定方向のケズリ。体部上半は左まわりのケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。体部のミガキは放射状になっている。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面赤褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 71—11<br>37—11 | 坏 | 口 13.9<br>底 —<br>高 5.1 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部は直立気味に立ち上り、中位より外反する。 | 外 体部はケズリ後、ナデ・ミガキ。特に体部上半のミガキは丁寧である。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 72—12<br>38—13 | 坏 | 口 14.4<br>底 —<br>高 6.4 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は明瞭である。口縁部は直立気味に立上り、中位で外反する。 | 外 体部下半は基本的に左まわりのケズリ。上半はケズリ後、ナデ・ミガキ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面赤褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 72—13<br>38—14 | 坏 | 口 12.4<br>底 —<br>高 4.8 | 床面 | 底部は平底に近く、外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に外反する。 | 外 体部下半不定方向のケズリ。体部上半はケズリ後、ヘラ状工具による粗いミガキ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面黒褐色<br>内面褐色<br>焼 良好 | ほぼ完形 |
| 72—14 | 坏 | 口 14.2<br>高 6.8 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は認められない。口縁部は、わずかに外反する。 | 外 体部下半は右まわりのケズリ。体部上半はケズリ後、ナデ。<br>内 ナデ後、全面にミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 外面褐色<br>焼 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |

## 遺物観察表(3)　（第72・73図）

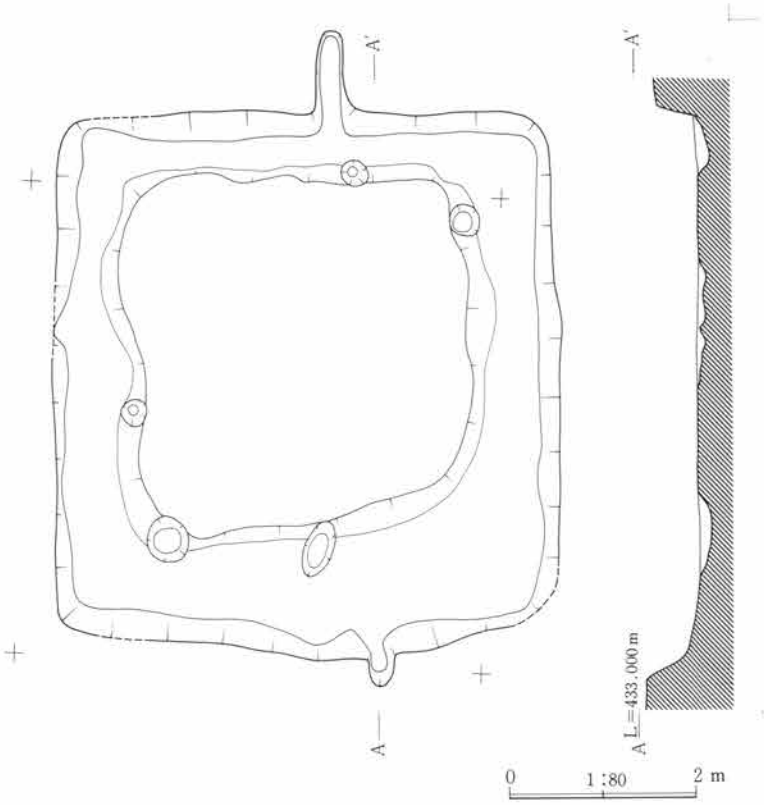
| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 72—15<br>38—15 | 坏 | 口 10.5<br>底 —<br>高 6.7 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部はやや内傾して立上がる。 | **外** 体部上半は右まわりのケズリ後、粗いミガキ。体部下半はケズリ。<br>**内** ナデ後、全面にミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 72—16<br>38—16 | 高坏 | 口 16.0<br>底 14.2<br>高 15.6 | 床面 | 脚部はなだらかに外反。袖部との境は不明瞭。坏部の外稜は不明瞭で口縁部は直立気味に立上り、中位より外反する。 | **脚外** 脚部はケズリ後、ミガキ。袖部は横ナデ。<br>**脚内** 接合痕、巻上げ痕残。横方向のナデ。<br>**坏外** 体部はケズリ後、ナデ・ミガキ。口縁部は横ナデ。<br>**坏内** ナデ後、全面にミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 明るい褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 72—17<br>38—17 | 高坏 | 口 —<br>底 14.0<br>高 — | 床面 | 脚部は「ハ」の字状。袖部との境に段を有す。坏部の外稜は不明瞭で、口縁部は直立気味に立上り、中位より外反する。 | **脚外** 脚部はケズリ後、ミガキ。袖部は横ナデ。<br>**脚内** 接合痕、巻上げ痕残。横方向のナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 明るい褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 72—18<br>38—18 | 高坏 | 口 15.8<br>底 14.0<br>高 16.6 | 床面 | 脚部はなだらかに外反。袖部との境は不明瞭。坏部の外稜は不明瞭で口縁部は直立気味に立上り、中位より外反する。 | **脚外** 脚部はケズリ後、ミガキ。袖部は横ナデ。<br>**脚内** 接合痕残。横方向のナデ。<br>**坏外** ケズリ後、ナデ・ミガキ。口縁部は横ナデ。<br>**坏内** ナデ後、全面にミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 外面赤褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 72—19<br>38—19 | 高坏 | 口 16.0<br>底 14.2<br>高 15.6 | 床面 | 脚部は「ハ」の字状。なだらかに袖部へ移行。坏部の外稜は明瞭で口縁部は外反する。 | **脚外** 脚部はケズリ後、ナデ。袖部は横ナデ。<br>**脚内** 接合痕、巻上げ痕残。横方向のナデ。<br>**坏外** 体部はケズリ後、ナデ。口縁部は横ナデ。<br>**坏内** ナデ後、全面にミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 72—20<br>38—20 | 高坏 | 口 —<br>底 13.5<br>高 — | 竈 | 脚部は「ハ」の字状に外反する。袖部との境は不明瞭である。 | **脚外** 脚部はケズリ後、粗いミガキ。袖部は横ナデ。<br>**脚内** ケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 完形 |
| 73—21<br>38—21 | 高坏 | 口 17.3<br>底 15.6<br>高 16.8 | 埋土中 | 脚部はなだらかに外反。袖部との境は不明瞭。坏部の外稜は不明瞭で口縁部は直立気味に立上り、中位より外反する。 | **脚外** 脚部はケズリ後、ミガキ。袖部は横ナデ。<br>**脚内** 接合痕残。横方向のナデ。<br>**坏外** 体部はケズリ後、ミガキ。口縁部は横ナデ。<br>**坏内** ナデ後、ミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 外面明るい褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |
| 73—22<br>38—22 | 鉢 | 口 16.0<br>底 6.3<br>高 13.5 | 床面 | 底部は丸味をもち、体部は半球状を呈す。外稜は不明瞭で、口縁部は直立する。 | **外** 底部はケズリ後、ヘラナデ。体部はケズリ後、ハケ状工具による縦位の整形。胴部中位は横位のミガキ。<br>**内** ナデ後、縦→横位ミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部欠損<br>内面黒色処理 |

**遺物観察表(4)**　（第73・74図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 73—23<br>38—23 | 甕 | 口 13.5<br>底 —<br>高 11.5 | 床面 | 球形状の体部。外稜は不明瞭である。口縁部は内湾気味に立上り、中位で外反する。 | **外** 体部上半はケズリ後、ナデ・ミガキ。胴部下半はケズリ。<br>**内** ナデ後、粗いミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 完形 |
| 73—24<br>38—24 | 鉢 | 口 19.8<br>底 6.4<br>高 12.2 | 床面 | 底部は平底で、外稜は明瞭である。口縁部は直立する。 | **外** 底部、ケズリ。胴部下半はケズリ後、ナデ・ミガキ。上半はケズリ後、ナデ。口縁部は横ナデ。<br>**内** ケズリ後、丁寧にナデ・ミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 完形 |
| 73—25<br>38—25 | 壺 | 口 9.2<br>底 7.5<br>高 18.4 | 床面 | 底部は平底。最大径を胴部上半にもち、肩が張る。口縁部は直立し口唇部は外反する。 | **外** 底部、ケズリ。胴部下半は斜位ケズリ。胴部上半は横位ケズリ。口縁部は横ナデ。<br>**内** ヘラ状工具によるナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 完形 |
| 73—26<br>38—27 | 甕 | 口 20.0<br>底 6.6<br>高 35.9 | 床面 | 底径が小さく、安定感に欠ける。胴部中位に最大径を有し、胴部下半にススが付着。口縁部は外反する。 | **外** 底部はケズリ後、ナデ。胴部下半は横方向ケズリ。胴部上半は縦方向ケズリ後、ヘラ状工具による横位のナデ。口縁部は横ナデ。<br>**内** 横位のナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 完形 |
| 74—27<br>39—2 | 甑 | 口 —<br>底 9.9<br>高 — | 床面 | 胴部は直線的に立上り、器壁はほぼ均一した厚みをもつ。孔はヘラ状工具により二段に作出される。 | **外** 胴部下半は斜位のケズリ後、ナデ。<br>**内** ナデ後、縦位のミガキ。厚さ約２～３㎜の精選された粘土を上塗りしている。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 胴下半のみ |
| 74—28<br>38—26 | 甕 | 口 19.3<br>底 —<br>高 — | 床面 | 口縁部は短く、肩のやや張る器形を呈する。器壁は荒れている。 | **外** ヘラ調整による稜をもつ。口頸部横ナデ。<br>**内** 横位ナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 明るい褐色<br>**焼** 良好 | 胴部中位以下欠損 |
| 74—29<br>39—1 | 甑 | 口 16.8<br>底 —<br>高 11.5 | 床面 | 鉢形の器形を呈す。外稜は不明瞭で、口縁部はわずかに外反する。孔は上下両方向からヘラ状工具により作出される。 | **外** 体部はケズリ後、丁寧なミガキ。口縁部横ナデ。<br>**内** ナデ後、横位ミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |




第75図　2 b号住居址実側図




第76図　２ａ・ｂ号住居址掘方実測図

２ｂ号住居址

本住居址は２ａ号住居址の床下調査の際に２ａ号住居址床面より約６～８cm下に検出されたものであり、当初は２ａ号住居址の路線内の調査を先行させたため２ｂ号住居址の確認が遅れる原因となった。

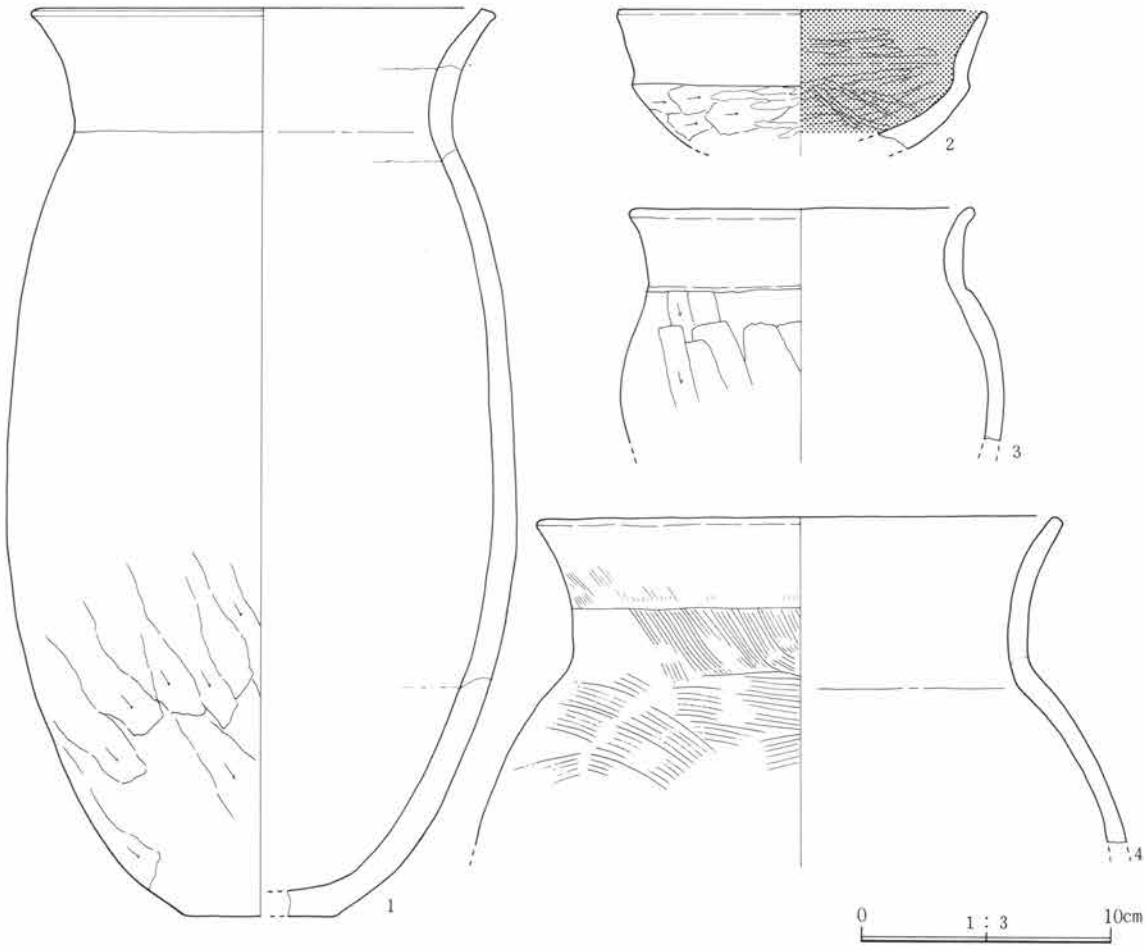
本住居址はＧ－63グリッドを中心にして位置する。住居址の規模、および、平面形は南北方向5.30m、東西方向5.35mを測り、南壁中央部の竈付近でややふくらむほかは、概ね、方形状を呈す。主軸方位はＮ－128°－Ｗを測る。壁高は42～52cmを測り、西壁側で若干高くなっている。各辺の壁ともほぼ垂直に立上がる。周溝は東壁、および、西壁の中央付近を除いて検出されている。幅15～20cm、深さ３～６cmを測る。また、北西コーナー付近の西壁から$P_3$にかけて間仕切り状の溝が一条検出されている。床面は住居址中央部付近では良く踏み固められており、良好な状態で検出された。柱穴は総計９本があるが、主柱穴として把握できるのは$P_1$・$P_2$・$P_3$・$P_4$の４個である。貯蔵穴は南西コーナー部付近に検出されている。貯蔵穴の規模、および、平面形は長軸75cm、短軸72cm、深さ40cmを測り、部分的に丸味をもつ方形状を呈している。埋土はロームブロックを主体とする褐色土、および、粘土・灰層を多量に混入する黒色土が充塡されていた。遺物は甕形土器（第77図３）が埋土中より出土している。

竈はすでにその大部分が壊されており、わずかに竈掘方から竈は壁に対してわずかに傾いていたものと思われる。掘方は長軸118cm、短軸93cmを測る。煙道はわずかにその立上がりの部分が確認されたのみで、床面からほぼ水平に掘り込まれたものと思われる。埋土はロームブロックを主体とする褐色土と黒色土の混合土よりなり、明らかな人為的堆積状態を示していた。

遺物は甕の破片が貼床埋土中より出土している。これらは、２ａ号住居址竈中より出土した甕形土器（第77図１）と接合関係にある。その他に坏形土器（第77図２）が出土している。

住居址の掘方（第76図）は住居址中央付近はローム層をそのまま床面としているのに対して、壁際ではさらに10～15cm程掘り下げており、全体として台状を呈している。

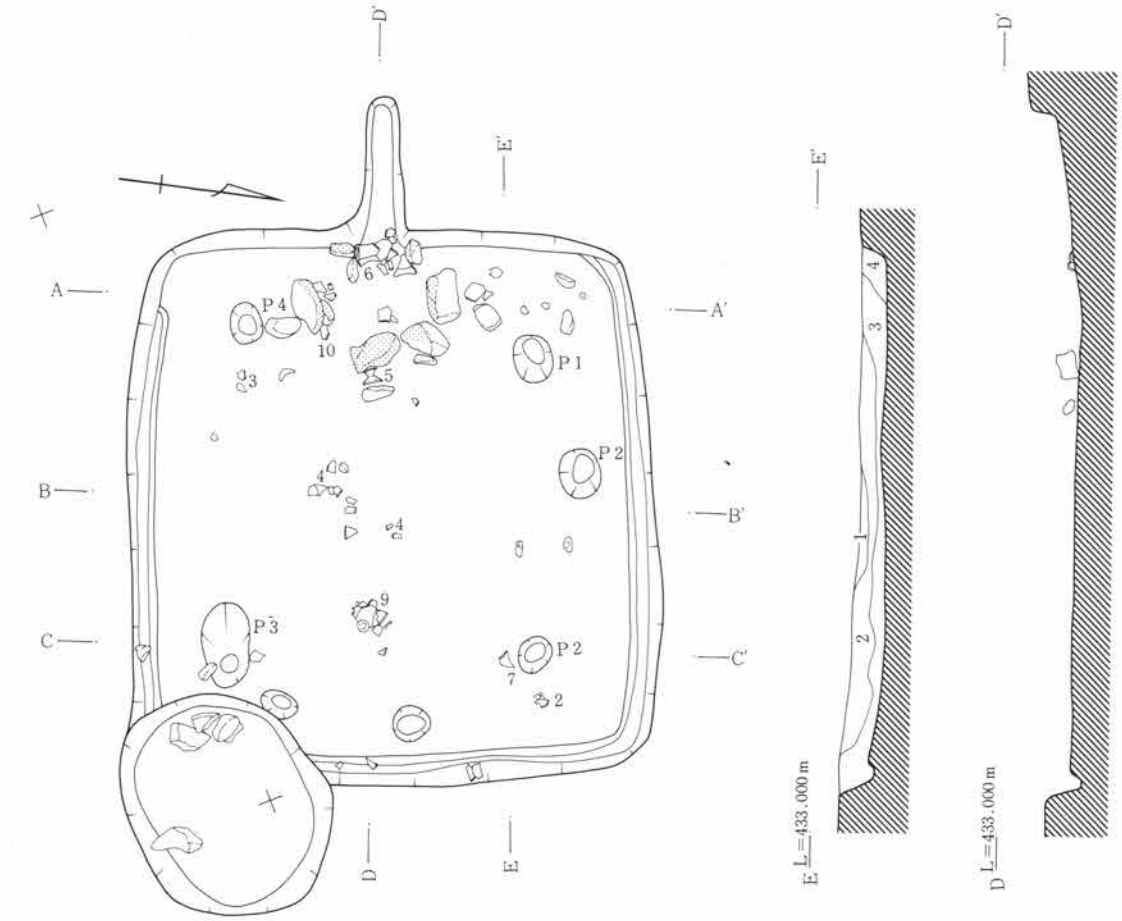
２ａ号住居址、および、２ｂ号住居址は、主柱穴が同一であること、２ｂ号住居址の床面は明らかな人為的埋土により覆われ２ａ号住居址の床面が構築されていること、その他、竈・貯蔵穴のあり方より、何らかの原因によって住居址の建て替えが行われたものと考えられる。

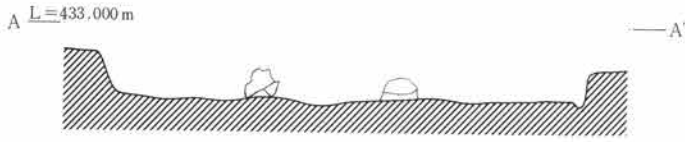


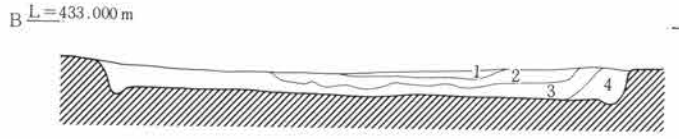

第77図　２ｂ号住居址出土遺物

**遺物観察表**　（第77図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 77－1<br>39－3 | 甕 | 口 18.6<br>底 6.2<br>高 36.0 | 埋土中 | 底径は小さく、胴部中位に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。 | **外** 底部はケズリ。胴部下半は縦位のケズリ。胴部上半はケズリ後、丁寧なナデ。<br>**内** ヘラ状工具による横位のナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 胴部⅓欠損 |
| 77－2<br>39－1 | 坏 | 口 14.8<br>底 －<br>高 － | 埋土中 | 底部は丸底？外稜は明瞭で、口縁部は直線的に外反する。 | **外** 体部上半は右まわりのケズリ後、部分的にミガキ。<br>**内** 横位のナデ後、全面に粗いミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 底部欠損<br>内面黒色処理 |
| 77－3 | 甕 | 口 13.8<br>底 －<br>高 － | 貯蔵穴 | 胴部上半に最大径をもつ。口縁部は直立し、口唇部で緩く外反する。 | **外** 縦位のケズリ。<br>**内** 横位のナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 胴部下半欠損 |
| 77－4<br>39－2 | 甕 | 口 21.0<br>底 －<br>高 － | 埋土中 | 胴部はやや丸味をもち、口縁部は緩く外反する。 | **外** ハケメ後、ナデ。<br>**内** ヘラ状工具によるナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 胴部下半欠損 |



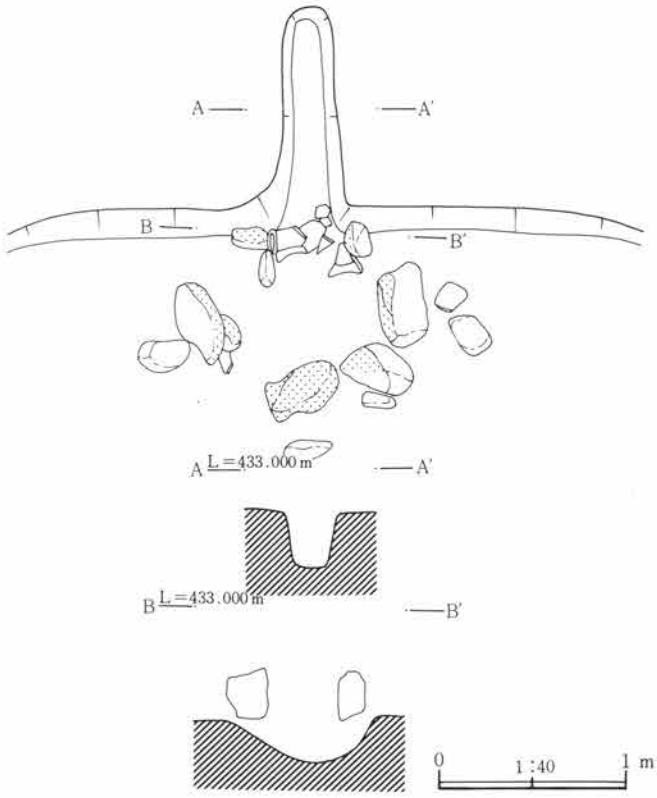



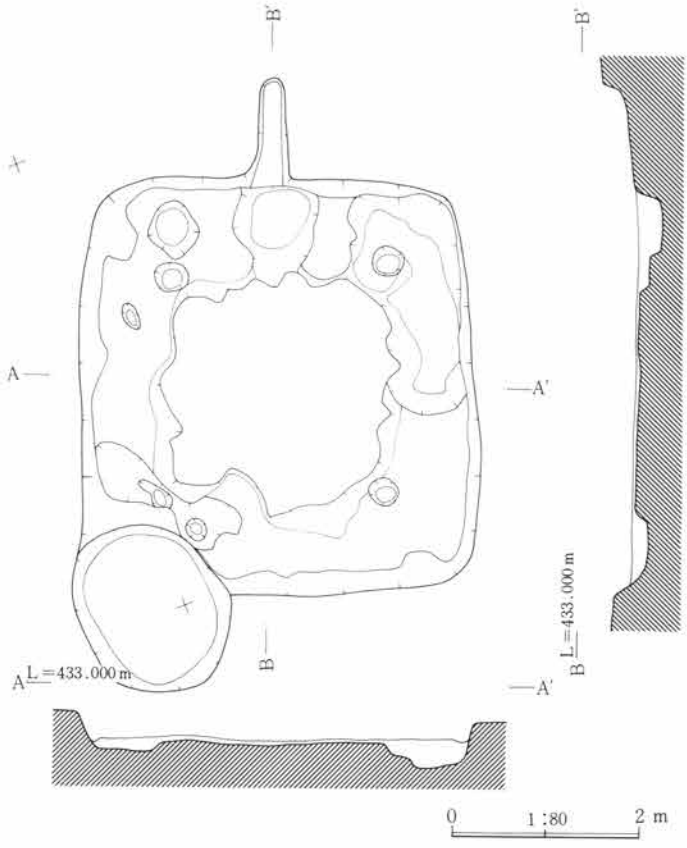
1　黒色土層　ローム粒子を多く混入。粘性・しまり共に弱い。
2　黒色土層　F・P・ローム粒子混入。
3　黒褐色土層　ローム粒子を混入。粘性に富み、含炭化物。
4　黒褐色土層　ローム粒子・ブロック混入。

0　1:60　2 m

第78図　3号住居址実測図




第79図　3号住居址竈実測図




第80図　3号住居址掘方実測図

3号住居址

本住居址はH－65グリッドを中心として位置する。南東コーナー部を耕作により攪乱を受けているが、良好な状態で検出された。

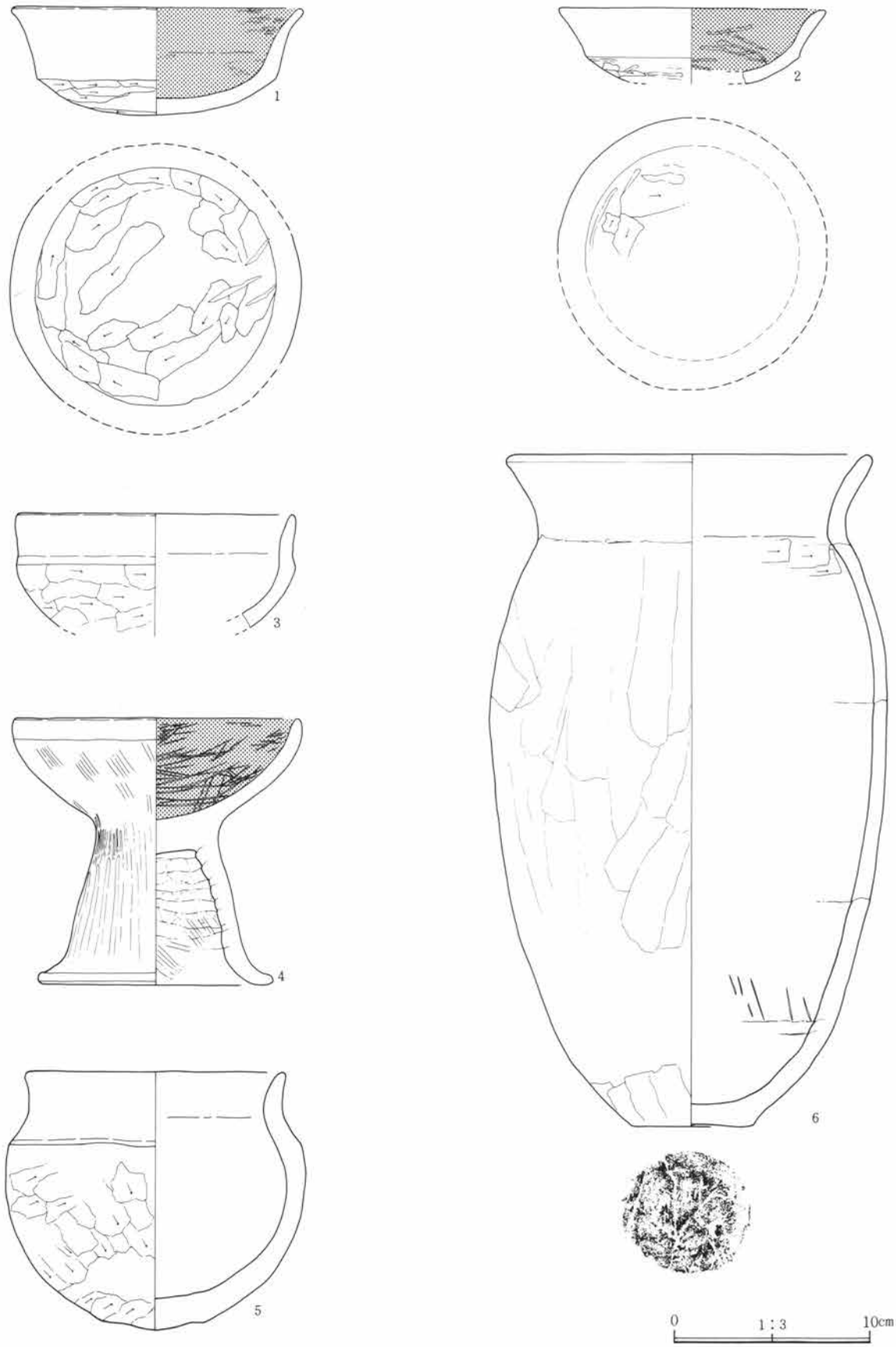
住居址の規模、および、平面形は東西方向4.28m、南北方向4.18mを測り、概ね、方形状を呈している。主軸方向はN－99°－Wを測る。壁高は25cm前後を測り、ほぼ垂直に立上がる。周溝は西壁、および、南壁の一部を除いて検出された。幅10～15cm、深さ5～10cmを測る。床面はロームブロックを主体とする褐色土と黒色土の混合土により貼床され、住居址中央部付近が若干低く、壁際では若干高くなっている。柱穴は総計7本が検出された。主柱穴と考えられるのは$P_1$・$P_2$・$P_3$・$P_4$の4本で、深さは各々40cm・48cm・38cm・35cmを測る。主柱間の距離は$P_1$～$P_2$・2.40m、$P_3$～$P_4$・2.70m、$P_1$～$P_4$・2.25m、$P_2$～$P_3$・2.45mを測り、$P_4$がやや外に寄った位置にある。貯蔵穴は床面の精査をくり返したが検出されなかった。

竈（第79図）は西壁のほぼ中央に検出された。赤化した安山岩質の角礫が西壁際から出土し、残存状況から袖部は角礫を用いて壁とほぼ直角に構築され、燃焼部を住居址内にもつものと思われる。煙道は住居址を床面から掘り込み、ほぼ垂直に立上がる。

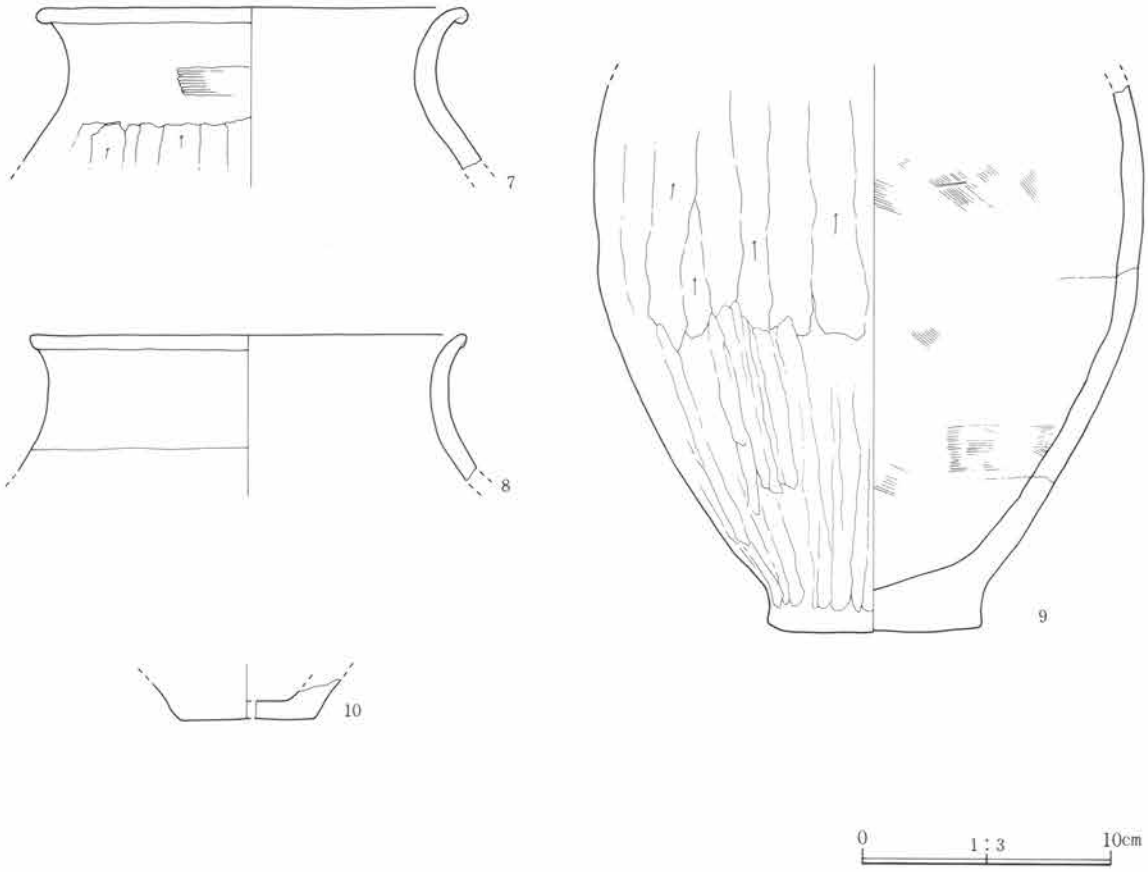
埋土はローム粒子を混入する黒色土を主体としている。

遺物は竈周辺、および、東壁際で出土したものは床面より15～20cm程浮いた状態で、住居址中央部付近で出土したものは5cm程浮いた状態で出土している。

住居址の掘方は壁際がより深い台状を呈している。




第81図　　３号住居址出土遺物（１）



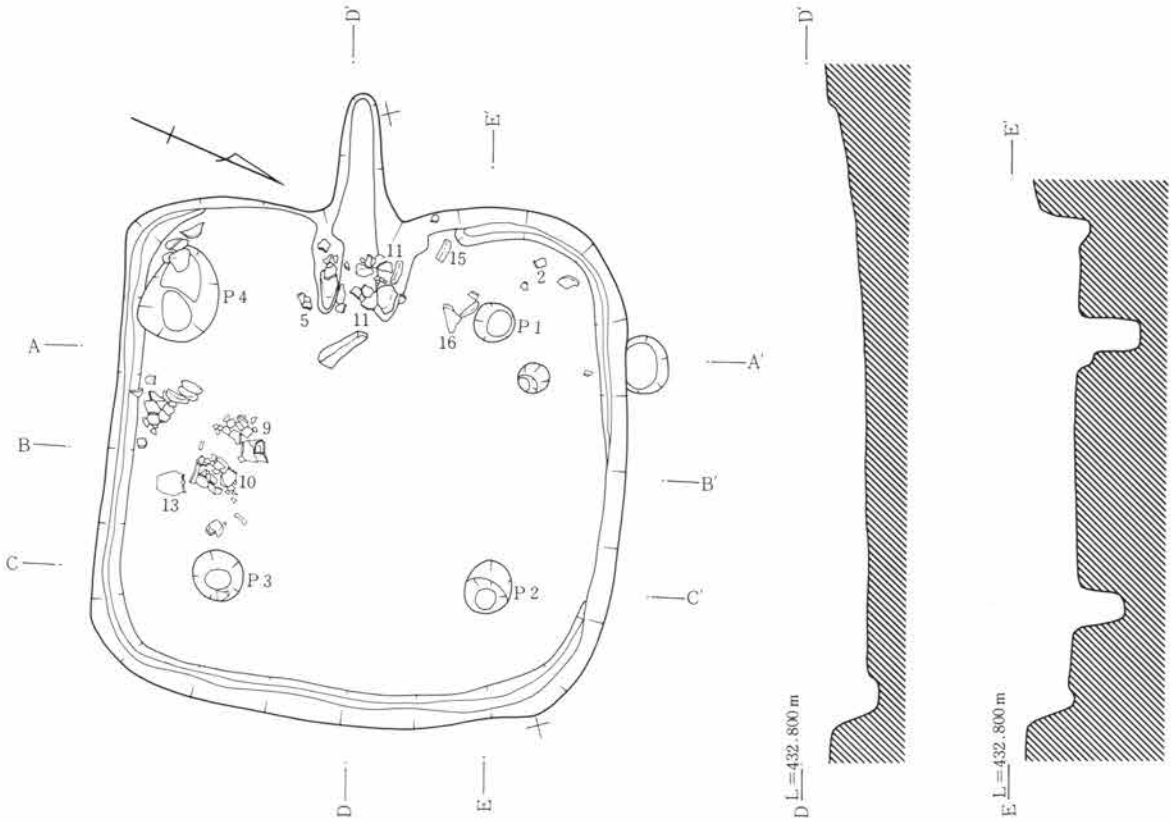

第82図　3号住居址出土遺物(2)

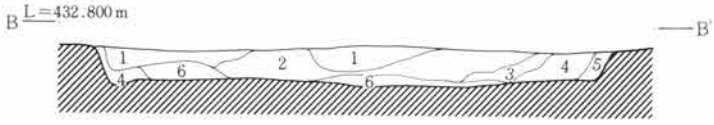
**遺物観察表(1)**　　(第81図)

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 81－1<br>39－1 | 坏 | 口 15.0<br>底 －<br>高 5.5 | 埋土中 | 底部は丸味で、外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に立上り、口唇部で著しく外反している。 | **外** 体部上半は右まわりのケズリ後、部分的にナデ。体部下半はケズリ。<br>**内** 横位のナデ後、全面にミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部½欠損<br>内面黒色処理 |
| 81－2<br>39－2 | 坏 | 口 13.6<br>底 －<br>高 － | 埋土中 | 外稜は不明瞭で、口縁部は直線的に外反する。 | **外** 体部上半は右まわりのケズリ後、ミガキ。体部下半はケズリ。<br>**内** ナデ後、丁寧なミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部¼<br>内面黒色処理 |
| 81－3<br>39－3 | 坏 | 口 14.3<br>底 －<br>高 － | 床面 | 外稜は不明瞭で、口縁部は直立気味に立上る。 | **外** 体部上半は右まわりのケズリ後、ナデ。<br>**内** ナデ後、粗いミガキ。 | **胎** 砂粒子を多く混入。<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓ |
| 81－4<br>40－1 | 高坏 | 口 13.3<br>底 －<br>高 13.1 | 埋土中 | 脚部は中膨みし、袖部は短く、脚部との境はなだらかである。 | **脚外** 脚部はケズリ後、ヘラ状工具によるミガキ。<br>**脚内** 巻上げ痕を明瞭に残す。<br>**坏外** ハケメ後、ナデ。<br>**坏内** ナデ後、全面にミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>内面黒色処理 |

**遺物観察表(2)**　（第81・82図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 81－5<br>40－2 | 甕 | 口 14.4<br>底 12.0<br>高 13.5 | 床面 | 丸底。体部は半球状を呈し、外稜は不明瞭である。口縁部は直立する。器壁外面は荒れている。 | **外** 体部はケズリ後、ナデ。口縁部横ナデ。<br>**内** 横位のケズリ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | |
| 81－6<br>40－4 | 甕 | 口 18.8<br>底 6.3<br>高 34.1 | 竈・床面 | 底径は小さくわずかに突出する。胴部中位に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。 | **外** 縦位のケズリ後、ヘラ状工具による横ナデ。<br>**内** ヘラ状工具による横位のケズリ後、ナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 完形<br>木葉痕 |
| 82－7 | 甕 | 口 17.3<br>底 —<br>高 — | 埋土中 | 口縁部は緩やかに外反し、口唇部は丸味をもつ。 | **外** 胴部上半はヘラ状工具による縦位のナデ。口縁部にハケメがわずかに残る。<br>**内** 横位ナデ。 | **胎** 砂粒子を多く混入。<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部 |
| 82－8 | 甕 | 口 17.4<br>底 —<br>高 — | 埋土中 | 口縁部は緩やかに外反し、口唇部は丸味をもつ。 | **外** 口縁部横ナデ。<br>**内** 横位ナデ。 | **胎** 砂粒子を多く混入。<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部 |
| 82－9<br>40－3 | 甕 | 口 —<br>底 —<br>高 — | 床面 | 胴部中位に最大径か。底部は突出し、安定感がある。 | **外** 底部、ケズリ後、ミガキ。胴部下半はヘラ状工具による縦位のナデ後、丁寧なミガキ。胴部上半はヘラ状工具によるナデ。<br>**内** 横位ナデ。ハケ状工具によるナデをわずかに残す。 | **胎** 砂粒子混入。<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 胴部上半欠損 |
| 82－10 | 甕 | 口 —<br>底 5.6<br>高 — | 埋土中 | 平底。やや上げ底状を呈する。 | **外** 底部は丁寧なミガキ。胴部下半はケズリ後、ミガキ。<br>**内** ナデ後、ミガキ。 | **胎** 砂粒子を多く混入。<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 底部 |

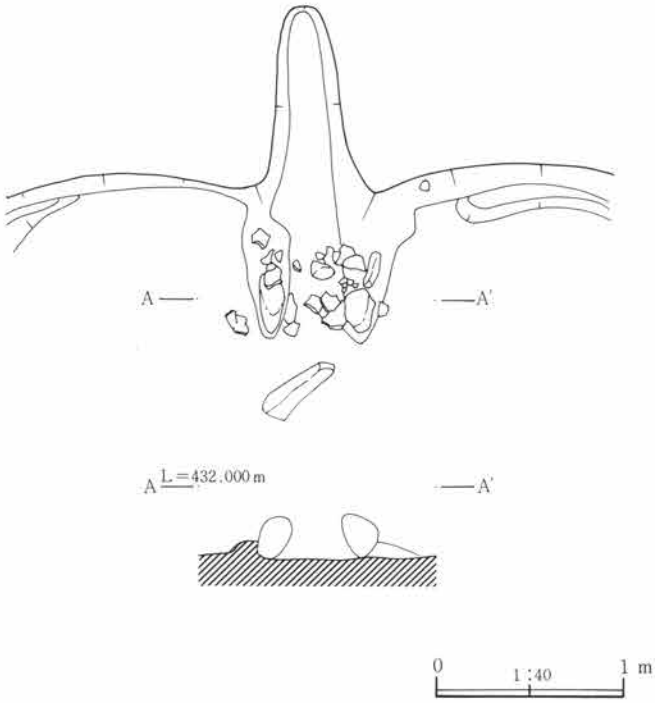




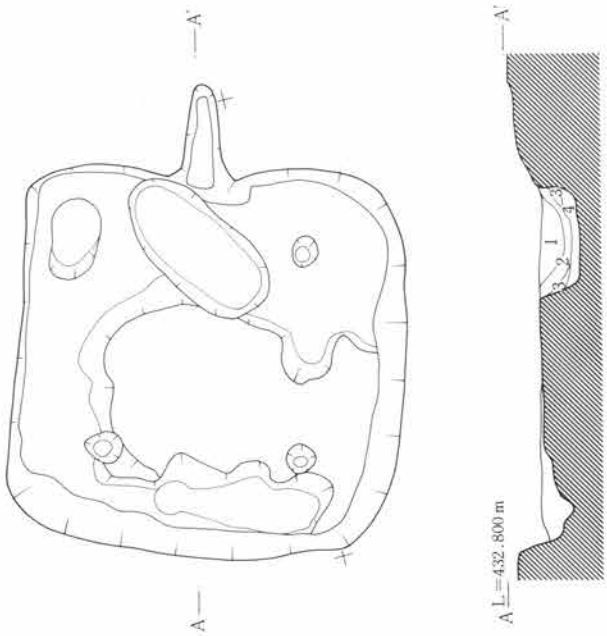
1　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
2　暗褐色土層　F・P・ロームブロックを混入。含焼土粒。
3　黒色土層　F・P・ローム粒子を混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。しまりは乏しい。
5　暗褐色土層　焼土粒を多く混入。
6　暗褐色土層　焼土粒・炭化物を多く混入。粘性に富む。

0　1:60　2 m

第83図　4号住居址実測図




第84図　4号住居址竈実測図




1　黒色土層　ローム粒子を少量混入。しまりは弱い。
2　黒色土とロームブロックの混土層
3　黒色土層　ローム粒子混入。
4　暗褐色土層　ロームブロック混入。粘性に富む。

0　1:80　2 m

第85図　4号住居址掘方実測図

第3節　古墳時代の遺構と遺物

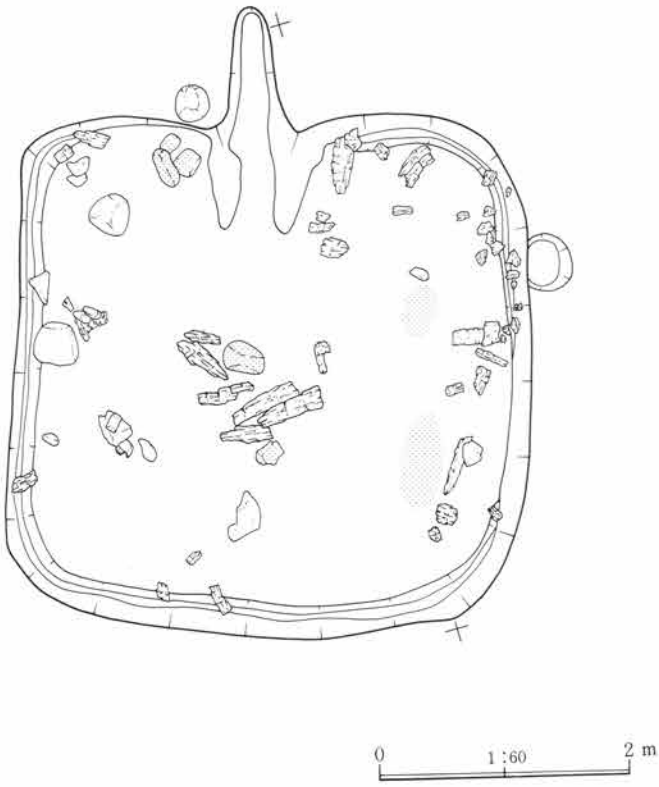
4号住居址

本住居址は調査区南側のI－66・67グリッドに位置する。住居址の規模、および、平面形は東西方向4.02m、南北方向4.15mを測り、南壁で直線状を呈すほかは若干丸味をもっている。ほぼ方形を呈す住居形態である。主軸方位はN－110°－Wを測る。壁高は30～35cmを測り、ほぼ垂直に立上がる。周溝は西壁の竈付近および北壁の中央部付近を除いて検出された。幅8～12cm、深さ5～10cmを測る。床面はロームブロックを主体とする褐色土と黒色土の混合土により貼床されており、わずかに凹凸がある。竈周辺から住居址中央部付近にかけては良好な状態で検出された。柱穴は総計5本が検出されている。このうち、主柱穴と考えられるのは$P_1$・$P_2$・$P_3$・$P_4$の4本である。深さは各々50cm・45cm・48cm・46cmを測る。柱穴間の距離は$P_1$～$P_2$・2.20m、$P_3$～$P_4$・2.15m、$P_1$～$P_3$・2.60m、$P_2$～$P_4$・2.15mを測り、$P_4$がやや外側に寄った位置にある。貯蔵穴は床面の精査を何度も試みたが検出されなかった。

竈（第84図）は西壁の中央部付近に検出された。袖部は壁とほぼ直角に礫および粘土を用いて構築されており、燃焼部は住居址内にある。煙道は床面から掘り込まれ、緩く傾斜して立上がる。長さ98cm、幅36cmを測る。

埋土は多量の炭化材を混入する黒色土で、通常の自然堆積状態とは若干の異りがある。

出土遺物は坏形土器、高坏形土器、甕形土器等があり、ほとんどの遺物は、竈内、その周辺、および西壁際からの出土であり、いずれも床面直上の出土である。また、西壁際に3個の棒状の礫が並べら

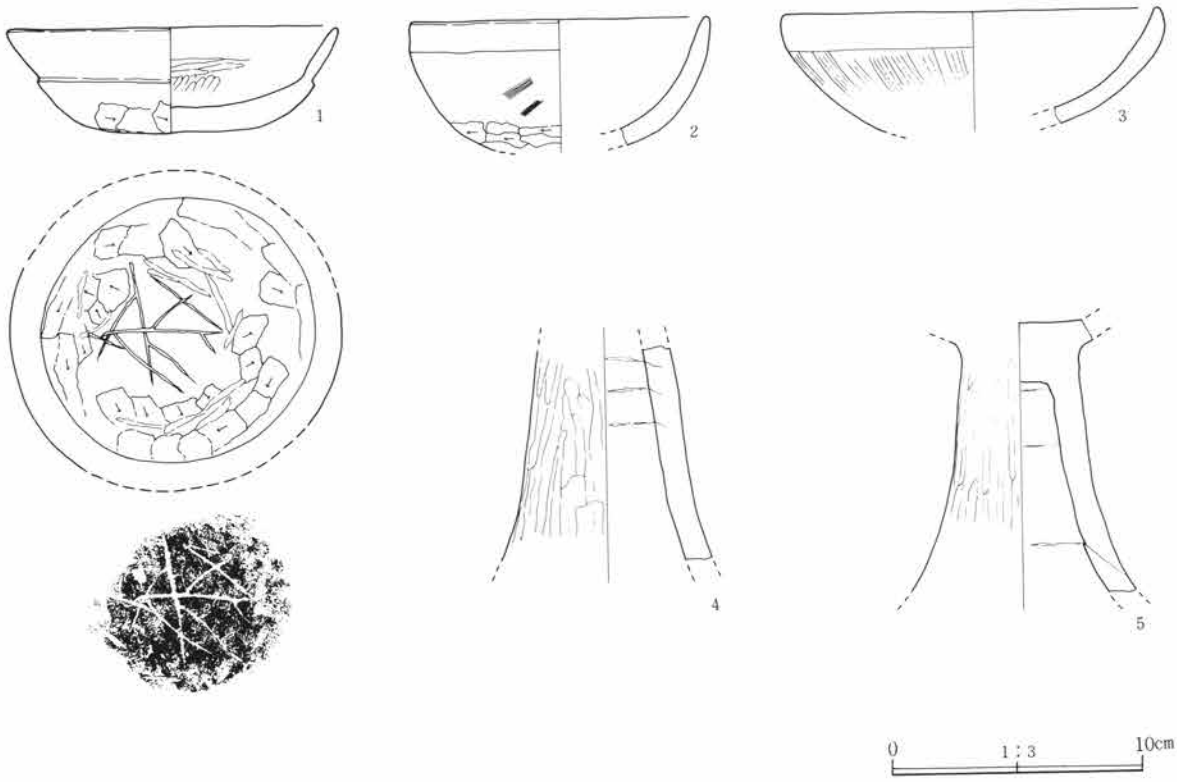



第86図　4号住居址炭化物出土状態実測図

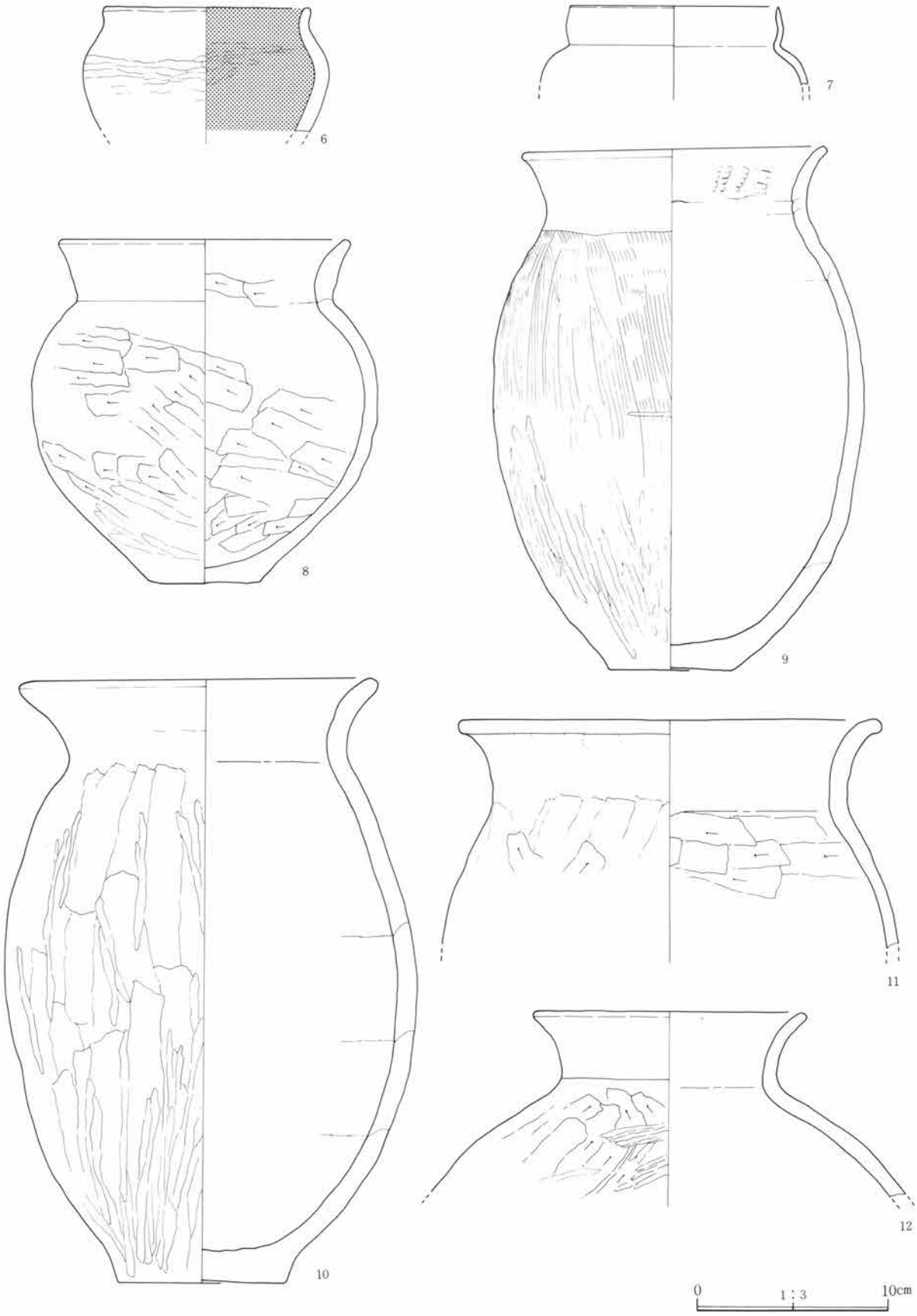
れた状態で出土している。この棒状の礫は安山岩質で重さは800～900gである。

住居址の掘方（第85図）は住居址中央部付近、および北壁際ではローム層をそのまま床面としているほかは、さらに18～38cm程掘り込んでいる。また、竈付近では長軸1.88m、短軸84cm、深さ45cm程の土坑状に掘り込んでいる。

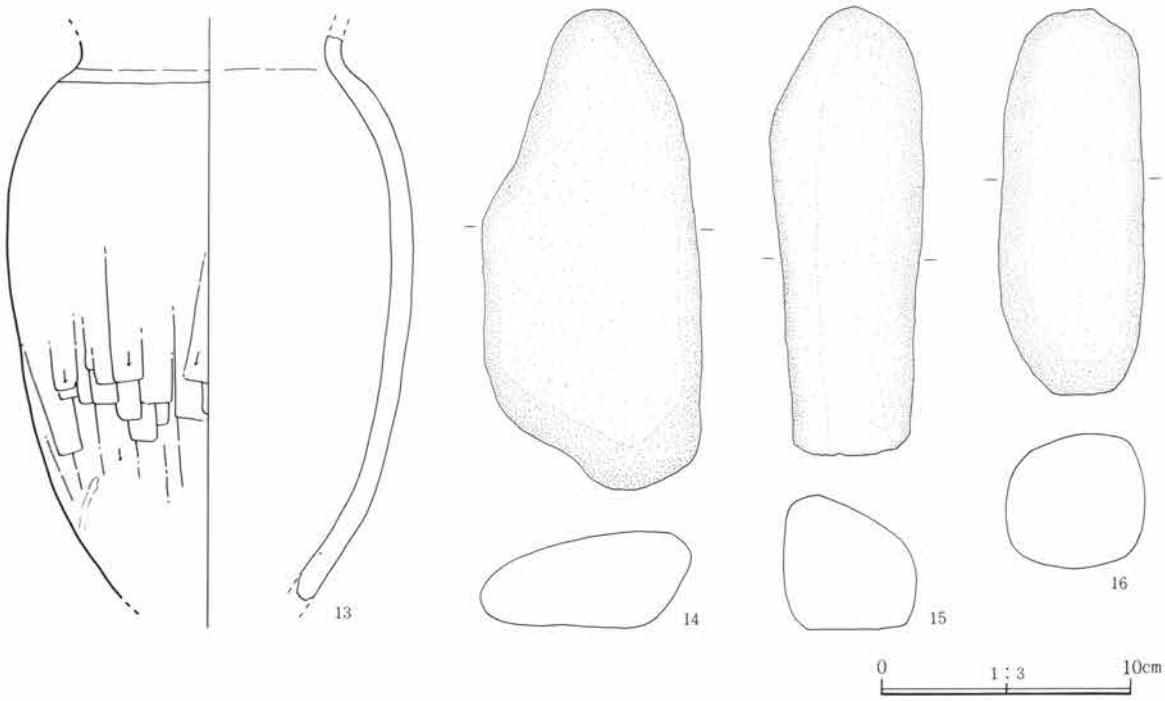
本住居址は所謂「火災住居」であり、埋土中、および床面直上から多量の炭化材、焼土（第86図）が出土している。出土した炭化材の状態から住居址の上屋の構造を復元することはできなかったが、同時に赤化した円礫が住居内だけでなく、住居外から出土しており、何らかの関連が考えられよう。




第87図　4号住居址出土遺物（1）




第88図　４号住居址出土遺物（２）



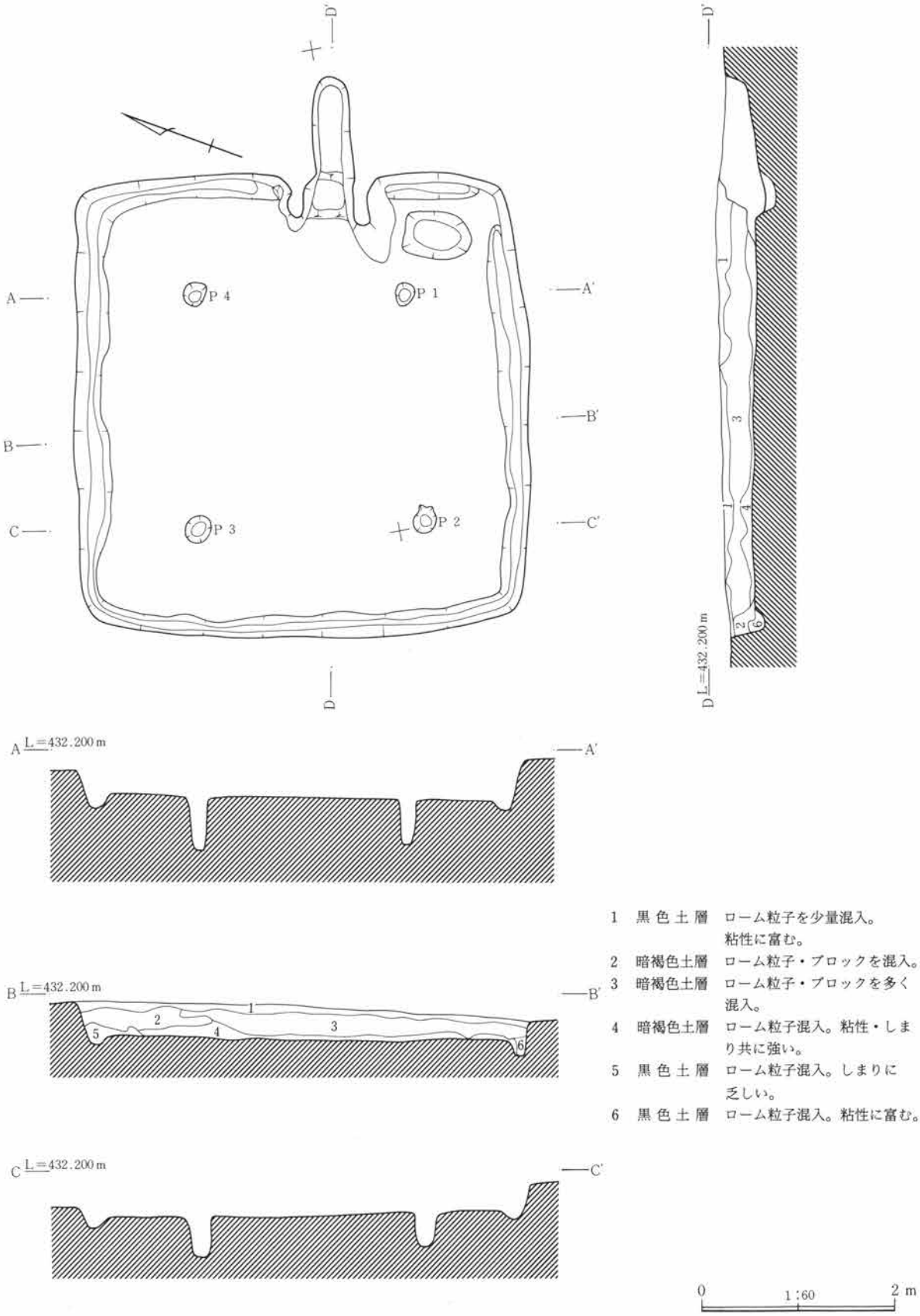

第89図　4号住居址出土遺物(3)

**遺物観察表(1)**　　(第87図)

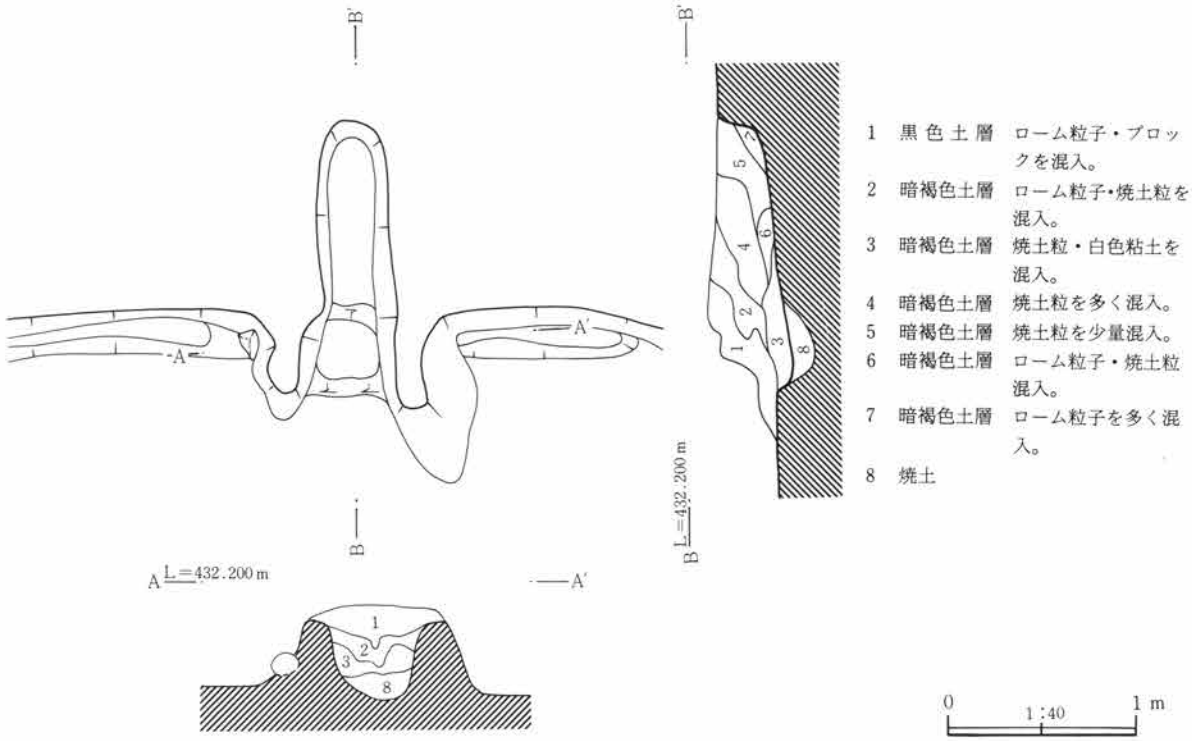
| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 87－1<br>40－1 | 坏 | 口 13.3<br>底 －<br>高 4.2 | 床面 | 底部は平底で、外稜は明瞭である。口縁部はほぼ直線的に外反している。 | **外** 体部上半は右まわりのケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。体部下半は同心円状のケズリ後、部分的にミガキ。<br>**内** ナデ後、全面にミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色～赤褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部½欠損<br>木葉痕<br>内面黒色処理？ |
| 87－2 | 坏 | 口 15.0<br>底 －<br>高 － | 床面 | 底部は丸底で、外稜は認められない。体部は内湾して立上り、口縁部は直立気味に立上っている。 | **外** 体部上半はケズリ後、ハケ状工具による整形。体部下半は左まわりのケズリ。<br>**内** ナデ後、粗いミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓ |
| 87－3 | 高坏 | 口 12.0<br>底 －<br>高 － | 床面 | 坏体部は内湾して立上り、口縁部は直立気味である。 | **坏外** ナデ後、ハケ状工具による整形。巻上げ痕を部分的に残す。<br>**坏内** ナデ後、全面にミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 坏部のみ<br>内面黒色処理？ |
| 87－4<br>40－3 | 高坏 | 口 －<br>底 －<br>高 － | 床面 | 脚部は「ハ」の字状を呈す。器壁は荒れている。 | **脚外** 縦位のケズリ後、全面に粗い縦位のミガキ。<br>**脚内** ヘラ状工具によるナデ。巻上げ痕を明瞭に残す。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 脚部のみ |
| 87－5<br>40－7 | 高坏 | 口 －<br>底 －<br>高 － | 埋土中 | 脚部は「ハ」の字状を呈す。器壁は荒れている。 | **脚外** 縦位のケズリ後、全面に粗い縦位のミガキ。<br>**脚内** ヘラ状工具によるナデ。巻上げ痕を明瞭に残す。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 脚部のみ |

**遺物観察表(2)**　（第88・89図）

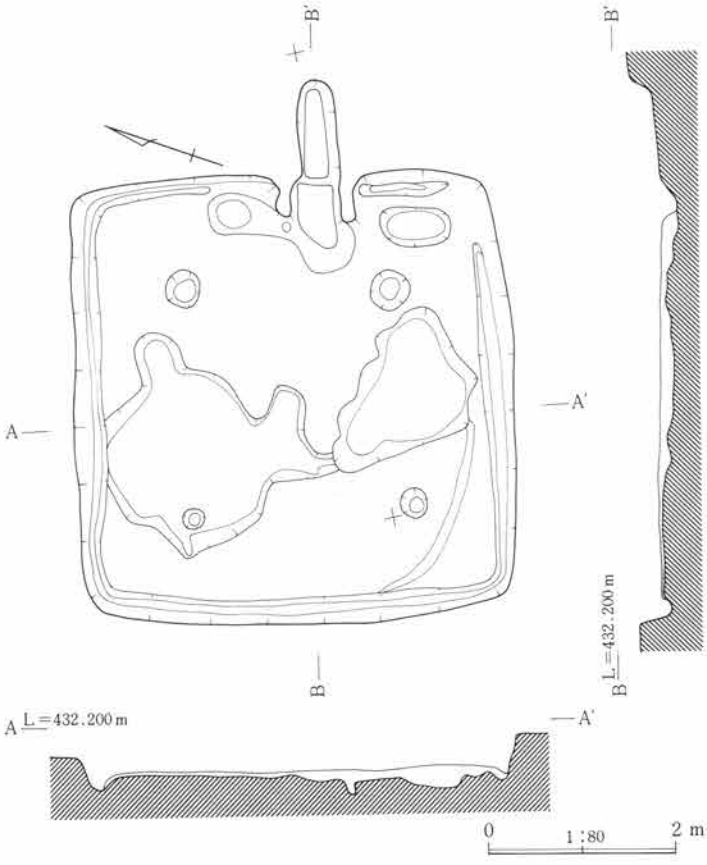
| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 88－6<br>40－5 | 短頸壺 | 口 11.0<br>底 －<br>高 － | 床面 | 胴部上半に最大径をもつと思われ、口縁部は短く、わずかに外反する。 | 外 体部はヘラ状工具によるナデ後、全面に丁寧なミガキ。ミガキは一部口縁部にも及ぶ。<br>内 ヘラ状工具によるナデ後、全面に粗いミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 赤褐色<br>焼 良好 | 体部上半⅓内面黒色処理 |
| 88－7<br>41－8 | 短頸壺 | 口 11.0<br>底 －<br>高 － | 床面 | 胴部上半に最大径をもつと思われ、口縁部は直立気味に立上る。器厚は非常に薄く、3～4㎜。口縁部から頸部に自然釉が見られる。 | ロクロ回転は右と思われる。<br>外 全面にカキ目状の細かな凹凸がある。<br>内 指頭状の細かな擦痕があるが明瞭でない。 | 胎 混入物少なく緻密。<br>色 セピア色。釉の色は白色味が強い。<br>焼 極めて良好 | 口縁部破片 |
| 88－8<br>40－6 | 甕 | 口 15.4<br>底 6.0<br>高 17.9 | 埋土中 | 底部は平底。胴部最大径をやや上半にもち、口縁部はほぼ直線的に外反する。器壁は荒れている。 | 外 基本的には、横位のケズリ後、ヘラ状工具による粗いミガキが部分的に見られる。<br>内 横位のケズリ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 くすんだ褐色<br>焼 良好 | 口縁部、胴部½欠損 |
| 88－9<br>41－12 | 甕 | 口 16.0<br>底 6.5<br>高 27.4 | 床面 | 底部は平底でやや突出気味である。胴部最大径を中位にもち、口縁部は「く」の字状に外反する。 | 外 底部はケズリ。胴部上半はケズリ後、粗いハケ状工具による整形。胴部下半はケズリ後、ヘラ状工具によるミガキ。<br>内 ヘラ状工具による横位のナデ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 くすんだ褐色<br>焼 良好 | 完形 |
| 88－10<br>40－13 | 甕 | 口 －<br>底 8.8<br>高 － | 床面 | 底部はやや上げ底気味の平底で、突出する。胴部最大径を中位にもち、口縁部は「く」の字状に外反する。内面は器壁の剝落が目立つ。 | 外 胴部上半はヘラ状工具による縦位のナデ。胴部下半は、ナデ後、ミガキ。<br>内 ヘラ状工具によるナデ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 くすんだ褐色<br>焼 良好 | 完形 |
| 88－11<br>41－9 | 甕 | 口 22.3<br>底 －<br>高 － | 埋土中 | 胴部最大径を中位にもつと思われ、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸味をもつ。 | 外 胴部上半はヘラ状工具による縦位のナデ。<br>内 横位のナデ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 褐色<br>焼 良好 | 胴部下半欠損 |
| 88－12<br>41－11 | 壺 | 口 －<br>底 －<br>高 － | 埋土中 | 胴部最大径を上位にもつと思われ、口縁部は「く」の字状に外反する。 | 外 胴部上半はヘラ状工具によるナデ後、全面に粗いミガキ。<br>内 ヘラ状工具による横位のナデ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 褐色<br>焼 良好 | 胴部上半⅓ |
| 89－13<br>41－10 | 甕 | 口 －<br>底 －<br>高 － | 床面 | 胴部最大径を上半にち、やや肩の張る器形を呈する。内面の器壁は荒れている。 | 外 胴部は縦位ケズリ後、胴部中位を除いて、ヘラ状工具によるナデを施す。<br>内 ケズリ後、ナデ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 赤褐色<br>焼 良好 | 胴部 |




第90図　5号住居址実測図




第91図　５号住居址竈実測図




第92図　５号住居址掘方実測図

５号住居址

本住居址は調査区北側のＩ―76グリッドを中心として位置する。住居址の遺存状態は良好であり、縄文時代の土坑(39・40・41・42号土坑）４基を切っている。

住居址の規模、および、平面形は東西方向4.72m、南北方向4.70mを測り、ほぼ方形を呈している。主軸方位はＮ―70°―Ｅを測る。壁高は20～25cmを測り、ほぼ垂直に立上がる。西壁側に比べて、東壁側で若干低くなっている。周溝は南東コーナー部付近を除いて検出されている。北壁側の周溝のプランは、わずかに乱れていた。幅12～24cm、深さ10～16cmを測る。床面はロームブロックを主体とする褐色土と黒色土の混合土によって貼床されていた。床面は住居址中央部付近で若干低くなっており、全体としてわずかな凹凸が見られた。竈周辺から住居址中央部付近にかけては良好な状態で検出されてい

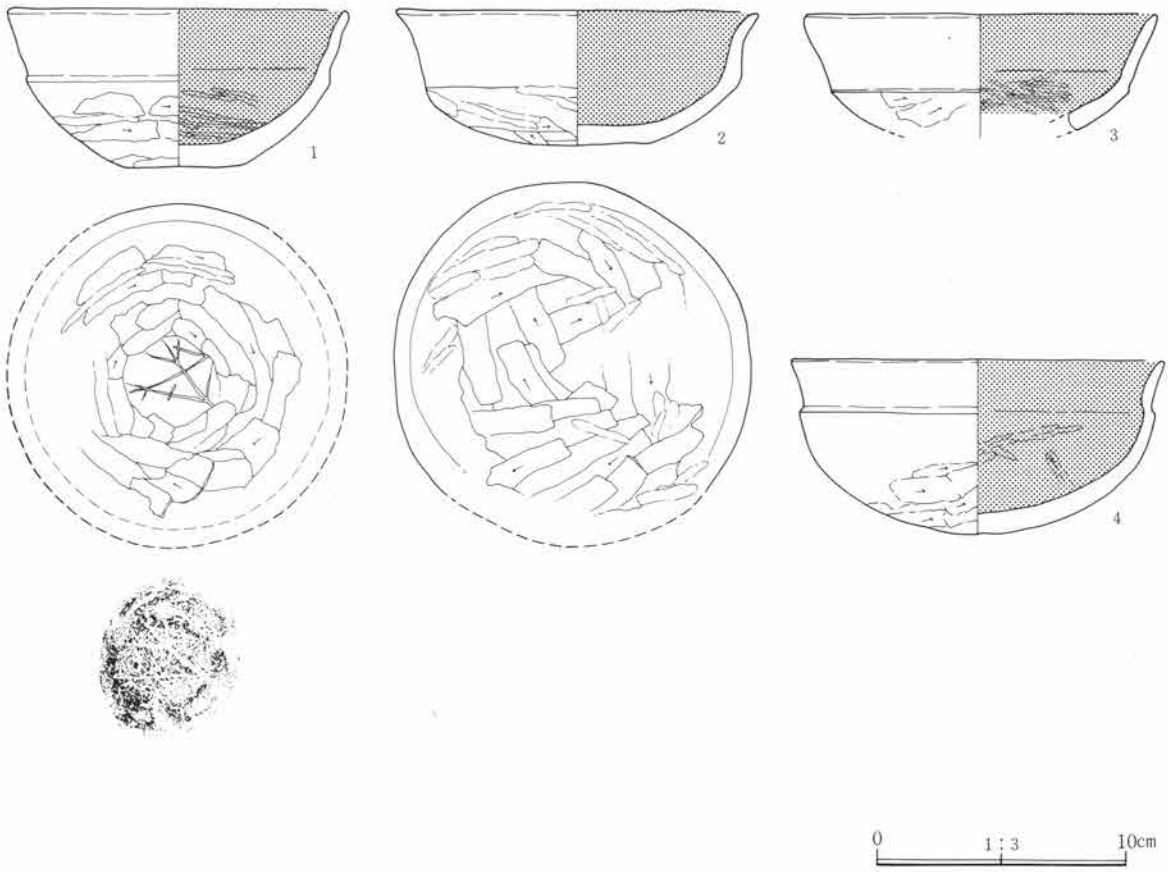
る。柱穴は4カ所検出された。各々の深さは$P_1$ 48cm・$P_2$ 34cm・$P_3$ 38cm・$P_4$ 52cmを測り、柱穴間の距離は$P_1$～$P_2$・2.35m、$P_3$～$P_4$・2.35m、$P_1$～$P_4$・2.15m、$P_2$～$P_3$・2.35mを測る。$P_1$が若干内側へ寄った位置にある。貯蔵穴は南東コーナー付近に検出され、長軸70cm、短軸48cm、深さ46cmを測り、概ね楕円形状を呈している。埋土はロームブロックを混入する黒色土であった。遺物は出土していない。

竈は東壁中央部より若干右に寄って検出されている。袖部は壁に対してほぼ直角に構築され、燃焼部を住居址内にもつ。袖部は地山（ローム層）を掘り残して袖芯としたもので、ほぼ垂直に立上がっている。残存状態は右袖が比較的良好であったのに対して、左袖はすでに大半が崩壊していた。火床は床面よりも若干低くなっている。煙道は住居壁を床面から掘り込んでおり、ほぼ垂直に立上がる。長さ96cm、幅40cmを測る。

住居址の埋土はローム粒子を混入する暗褐色土・黒色土（4・5層）の1次埋没後に、多量のロームブロックを混入する黒色土（2・3層）が認められ、これは明らかに人為的埋土と考えられるものであった。なお最上層の黒色土層（1層）は自然堆積状態を示していた。

遺物は埋土中より数個の坏形土器が出土したのみで、竈周辺、および床面直上からの遺物の出土は見られなかった。

住居址の掘方（第92図）は住居址の中央部付近を15～20cm程掘り下げているほかは、竈付近を掘り込む程度で若干の凹凸が見られるにすぎない。




第93図　5号住居址出土遺物

**遺物観察表**　（第93図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 93－1<br>41－1 | 坏 | 口 13.6<br>底 (4.9)<br>高 6.3 | 床面 | 底部は平底。外稜は明瞭で、口縁部は直線的に外反する。 | 外 体部上半は右まわりのケズリ後、ナデ。体部下半は右まわりのケズリ。口縁部横ナデ。<br>内 ナデ後、全面にヘラ状工具による丁寧なミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 赤褐色<br>焼 良好 | 口縁部½欠損<br>木葉痕<br>内面黒色処理 |
| 93－2<br>41－4 | 坏 | 口 14.5<br>底 —<br>高 5.4 | 竈 | 丸底の底部で、外稜は認められない。口縁部は直立気味に立上り、中位より緩く外反する。 | 外 体部上半はケズリ後、ヘラ状工具による粗いミガキ。体部下半は不定方向のケズリ。口縁部横ナデ。<br>内 ナデ後、全面に丁寧なミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 褐色<br>焼 良好 | 口縁部⅓欠損<br>内面黒色処理 |
| 93－3<br>41－3 | 坏 | 口 14.8<br>底 —<br>高 4.3 | 埋土中 | 底部は丸底で、外稜は明瞭である。口縁部は直線的に外反する。 | 外 体部は右まわりのケズリか？体部上半はケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。<br>内 ナデ後、全体に丁寧なミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 赤褐色<br>焼 良好 | 口縁部⅓<br>内面黒色処理 |
| 93－4<br>41－2 | 坏 | 口 14.2<br>底 —<br>高 — | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部は短く外反する。器壁は荒れている。 | 外 体部上半はケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。体部は右まわりのケズリ。<br>内 ナデ後、全面に荒いミガキ。 | 胎 砂粒子混入<br>色 くすんだ褐色<br>焼 良好 | 口縁部⅓<br>内面黒色処理 |

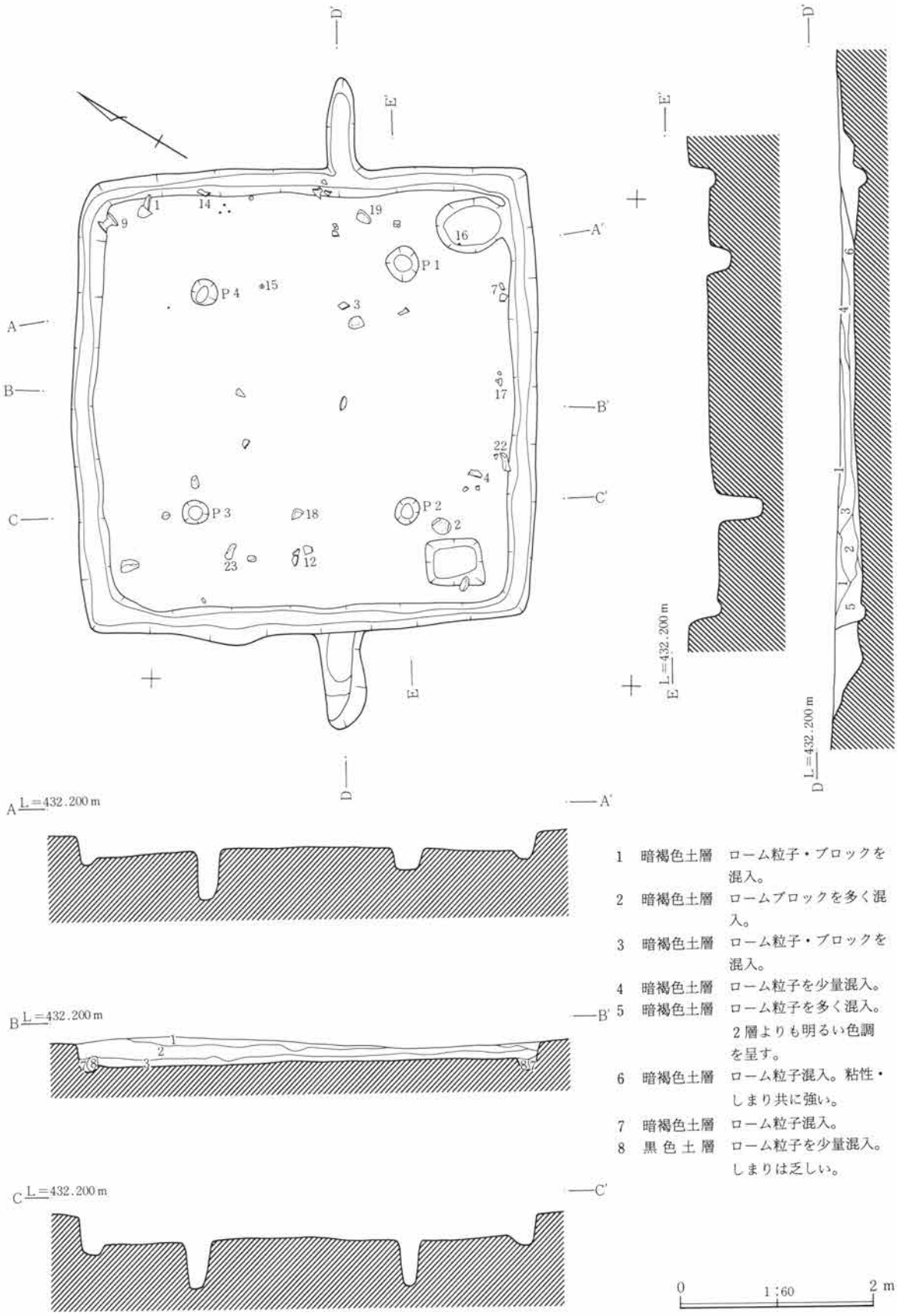
６号住居址

本住居址はＪ－72グリッドに位置する。住居址の規模、および、平面形は東西方向4.80m、南北方向4.85mを測り、ほぼ方形状を呈している。主軸方位はＮ－58°－Ｅを測る。壁高は22～32cmを測り、ほぼ垂直に立上がっている。壁は東壁に比べて西壁が約10cm程高くなっている。周溝は全周して検出されており、幅10～18cm、深さ６～12cmを測る。床面はロームブロックを主体とする褐色土と黒色土との混合土により貼床されており、若干の凹凸が認められたが、竈周辺から住居址中央部付近にかけては良好な状態で検出されている。柱穴は４本が検出され、深さは$P_1$ 26cm・$P_2$ 48cm・$P_3$ 46cm・$P_4$ 50cmを測る。柱穴間の距離は$P_1$～$P_2$・2.55m、$P_3$～$P_4$・2.25m、$P_1$～$P_4$・2.15m、$P_2$～$P_3$・2.25mを測り、$P_1$がやや外側に寄った位置にある。貯蔵穴は南東コーナー部、南西コーナー部に２カ所検出された。南東コーナー部の貯蔵穴は長軸75cm、短軸55cm、深さ40cmを測り、楕円形状を呈している。埋土はロームブロックを混入する黒色土を主体としていた。遺物は手捏ね土器（第98図16）が１点埋土中より出土している。南西コーナー部の貯蔵穴は長軸60cm、短軸48cm、深さ42cmを測り、長方形状を呈している。埋土は粘土・灰層を混入する黒色土を主体としていた。遺物は出土していない。

竈は東壁および西壁で検出された。東壁の竈は中央よりやや右に寄って検出され、付近に若干の焼土・粘土が確認された程度であった。一方、西壁の竈は煙道部が確認されたのみで、中央部よりやや左に寄って検出された。こうしたあり方は床面の相違はあるが、２ａ・２ｂ号住居址のあり方と同一である。

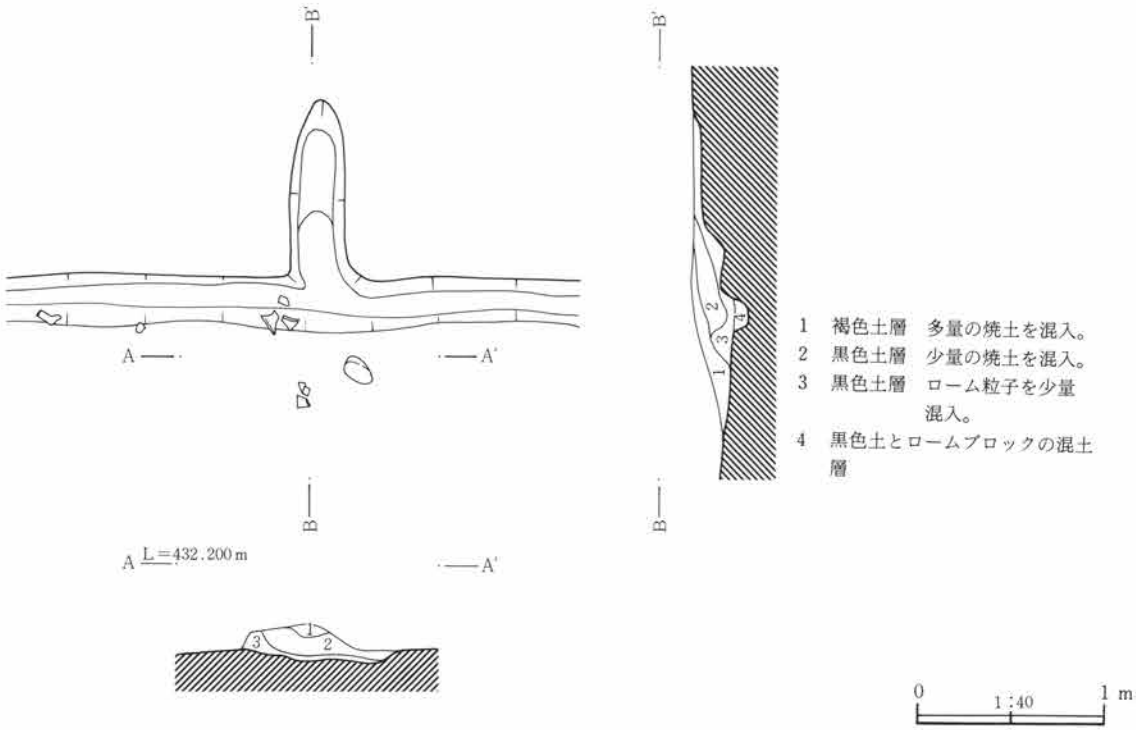
埋土はロームブロックを多く混入する黒色土を主体としているが、人為的埋土の可能性も考えられる状態であった。

遺物は坏類を中心として多く出土している。石製品は扁平礫と棒状礫（第98図17～23）が出土している。第98図18は使用痕のあり方から砥石の機能を果したものと考えられる。

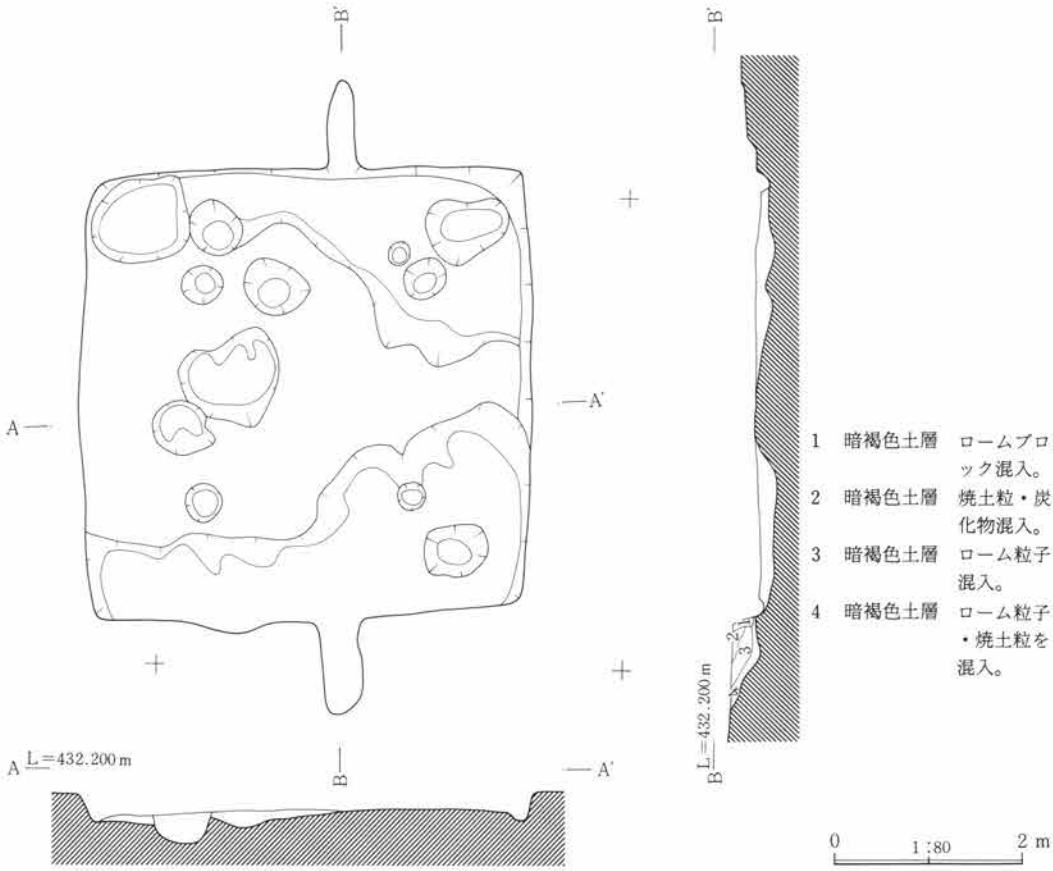



1　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
2　暗褐色土層　ロームブロックを多く混入。
3　暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを混入。
4　暗褐色土層　ローム粒子を少量混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。2層よりも明るい色調を呈す。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性・しまり共に強い。
7　暗褐色土層　ローム粒子混入。
8　黒色土層　ローム粒子を少量混入。しまりは乏しい。

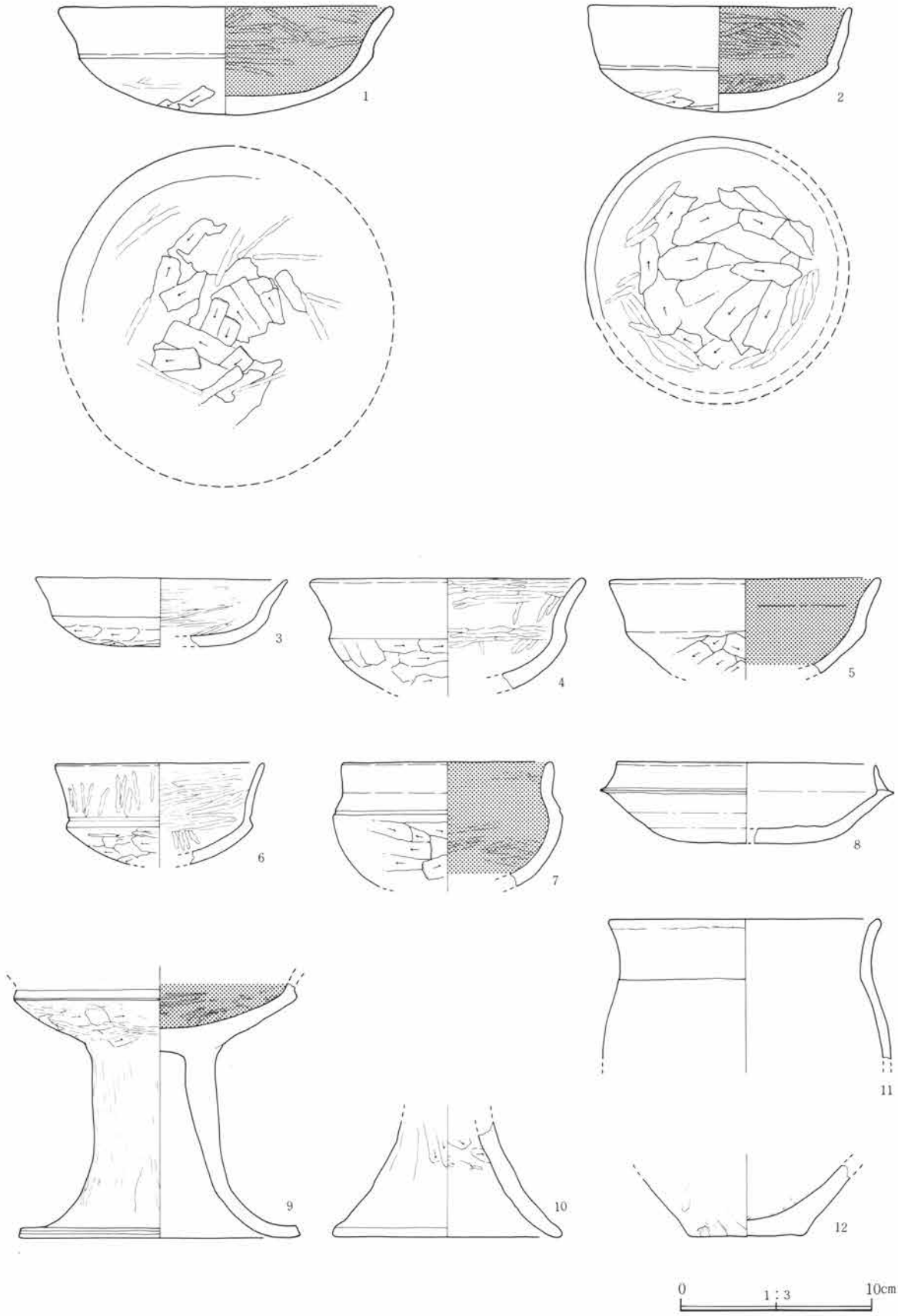
第94図　6号住居址実測図



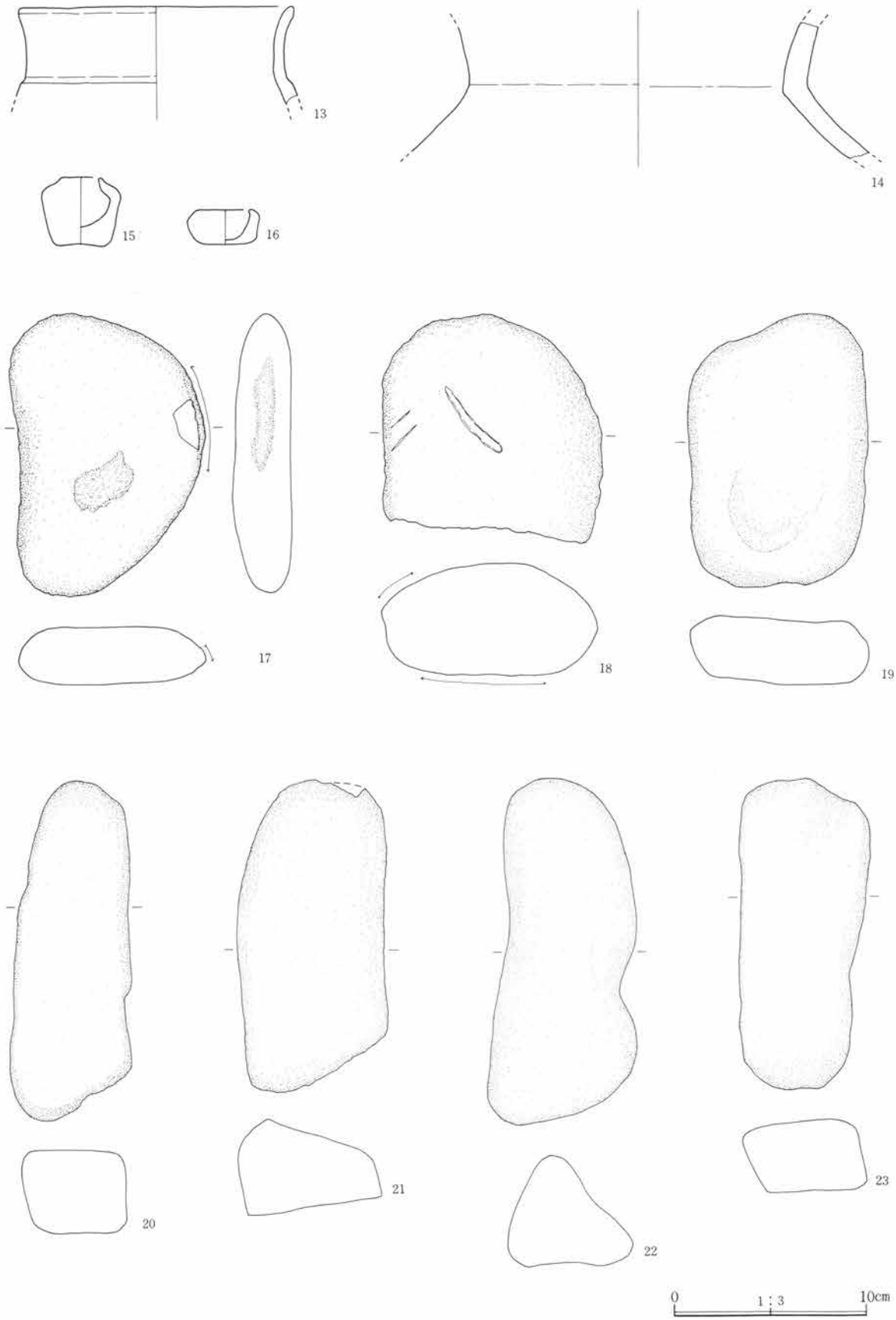

第95図　６号住居址竈実測図




第96図　６号住居址掘方実測図




第97図　6号住居址出土遺物(1)




第98図　６号住居址出土遺物（２）

**遺物観察表(1)**　　(第97図)

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 97－1<br>42－1 | 坏 | 口 17.4<br>底 —<br>高 5.6 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は明瞭である。口縁部は直立気味に立上り、中位より外反する。 | **外** 体部上半はケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。体部下半は不定方向のケズリ。口縁部横ナデ。<br>**内** ナデ後、全面に粗いミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓<br>内面黒色処理 |
| 97－2<br>42－2 | 坏 | 口 13.8<br>底 —<br>高 5.5 | 床面 | 底部は丸底で、外稜は不明瞭である。口縁部は直線的に外反する。内面に不明瞭な稜をもつ。 | **外** 体部上半は右まわりのケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。口縁部横ナデ。<br>**内** ナデ後、全面に丁寧なミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓<br>内面黒色処理 |
| 97－3 | 坏 | 口 13.2<br>底 —<br>高 3.5 | 埋土中 | 底部は丸底か？　外稜は不明瞭で、口縁部は内湾気味に外反する。 | **外** 体部は右まわりのケズリ。上半はケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。口縁部横ナデ。<br>**内** ナデ後、全面に丁寧なミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部¼<br>内面黒色処理 |
| 97－4<br>42－5 | 坏 | 口 14.4<br>底 —<br>高 — | 埋土中 | 底部は丸底か？　外稜は不明瞭で、口縁部は直立気味に立上り、中位でわずかに外反する。 | **外** 体部は右まわりのケズリ。口縁部横ナデ。<br>**内** ナデ後、ヘラ状工具による丁寧なミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓ |
| 97－5<br>42－4 | 坏 | 口 14.2<br>底 —<br>高 — | 埋土中 | 底部は丸底か？　外稜は不明瞭で、口縁部は直立気味に立上り、中位より外反。 | **外** 体部上半は右まわりのケズリ後、ヘラ状工具による粗いナデ。口縁部横ナデ。<br>**内** ナデ後、ヘラ状工具による粗いミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓<br>内面黒色処理 |
| 97－6<br>42－3 | 坏 | 口 10.9<br>底 —<br>高 — | 床面 | 底部は丸底か？　外稜は明瞭で、口縁部は直立気味に立上り、中位よりわずかに外反する。器壁は比較的薄い。 | **外** 体部はケズリ後、ナデ・ミガキ。口縁部横ナデ。<br>**内** ナデ後、ヘラ状工具による丁寧なミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓<br>内面黒色処理 |
| 97－7 | 坏 | 口 11.0<br>底 —<br>高 — | 床面 | 底部は丸底か？　体部は丸味をもち、外稜は不明瞭である。口縁部は直立気味に立上り、中位より外反する。器壁は荒れている。 | **外** 体部上半は、左まわりのケズリ後、ナデ。<br>**内** ナデ後、全面に丁寧なミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部¼<br>内面黒色処理 |
| 97－8<br>42－6 | 須恵器<br>坏 | 口 13.0<br>底 —<br>高 4.2 | 埋土中 | 底部は比較的平坦である。口縁部は強く内傾し、端部で若干直立気味になる。受部、口縁端部は尖る。 | ロクロ回転右の成形。<br>**外** 底部はロクロ右回転のヘラケズリ。<br>**内** 内面同心円状のロクロ痕が残る。 | **胎** 白色鉱物粒を若干混入<br>**色** 灰白色<br>**焼** 良好 | 口縁部破片<br>東海産か |
| 97－9<br>42－7 | 高坏 | 口 —<br>底 15.6<br>高 — | 床面 | 脚部は太く、柱状を呈し、袖部になだらかに移行する。端部は丸味をもつ。坏部の外稜は比較的明瞭である。 | **脚外** 縦位ケズリ後、ヘラ状工具によるミガキ。袖部横ナデ。<br>**脚内** 横位のナデ。巻上げ痕を残す。<br>**坏外** 右まわりのケズリ後、ヘラ状工具によるミガキ。<br>**坏内** ナデ後、全面に丁寧なミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 褐色<br>**焼** 良好 | 坏、口縁部欠損。<br>内面黒色処理 |

**遺物観察表(2)**　（第97・98図）

| 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 法量 | 出土位置 | 器形の特徴 | 成形・整形の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 97—10 | 高坏 | 口 —<br>底 12.0<br>高 — | 埋土中 | 残存部より「ハ」の字状を呈する高坏脚部と思われる。 | **脚外** 縦位のケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。袖部横ナデ。<br>**脚内** ヘラ状工具による横位のナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** 赤褐色<br>**焼** 良好 | 脚部⅓ |
| 97—11 | 甕 | 口 14.2<br>底 —<br>高 — | 床面 | 胴部中位に最大径をもつと思われ、口縁部はわずかに外反する。器壁は荒れている。 | **外** 器壁の剝落のため不明。口縁部は横ナデ。<br>**内** ヘラ状工具による横位のナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓<br>煤付着 |
| 97—12 | 甕 | 口 —<br>底 6.0<br>高 — | 埋土中 | 底部は平底。胴部は内湾気味に立上る。 | **外** 底部ケズリ。胴部下半はケズリ後、ヘラ状工具によるナデ。<br>**内** ケズリ後、丁寧なナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 底部½ |
| 98—13 | 甕 | 口 14.4<br>底 —<br>高 — | 埋土中 | 頸部から口縁部にかけて直立気味に立上り、中位よりわずかに外反する。器壁は荒れている。 | **外** 口縁部は横位のケズリ後、横ナデ。<br>**内** 横位のナデ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部⅓ |
| 98—14 | 甕 | 口 —<br>底 —<br>高 — | 床面 | 外稜は不明瞭で、口縁部は直立気味に立上り、中位より外反する。 | **外** 胴部はケズリ後、ナデ。口縁部横ナデ。<br>**内** ナデ後、丁寧なミガキ。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 底部½ |
| 98—15<br>42—8 | 手捏 | 口 2.2<br>底 3.0<br>高 3.5 | 貯蔵穴 | 底部は平底。胴部上半に最大径をもち、肩が張る。 | **外** 指頭によるナデ。<br>**内** 指頭によるナデ。指頭痕を残す。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 口縁部欠損 |
| 98—16<br>42—9 | 手捏 | 口 3.1<br>底 3.0<br>高 1.8 | 貯蔵穴 | 底部は平底。体部は直立気味。口縁部は内湾する。 | **外** 丁寧なナデ？<br>**内** 指頭によるナデ。指頭痕を残す。 | **胎** 砂粒子混入<br>**色** くすんだ褐色<br>**焼** 良好 | 完形？ |

# 第Ⅴ章　その他の遺構と遺物

## (1) 土　　坑

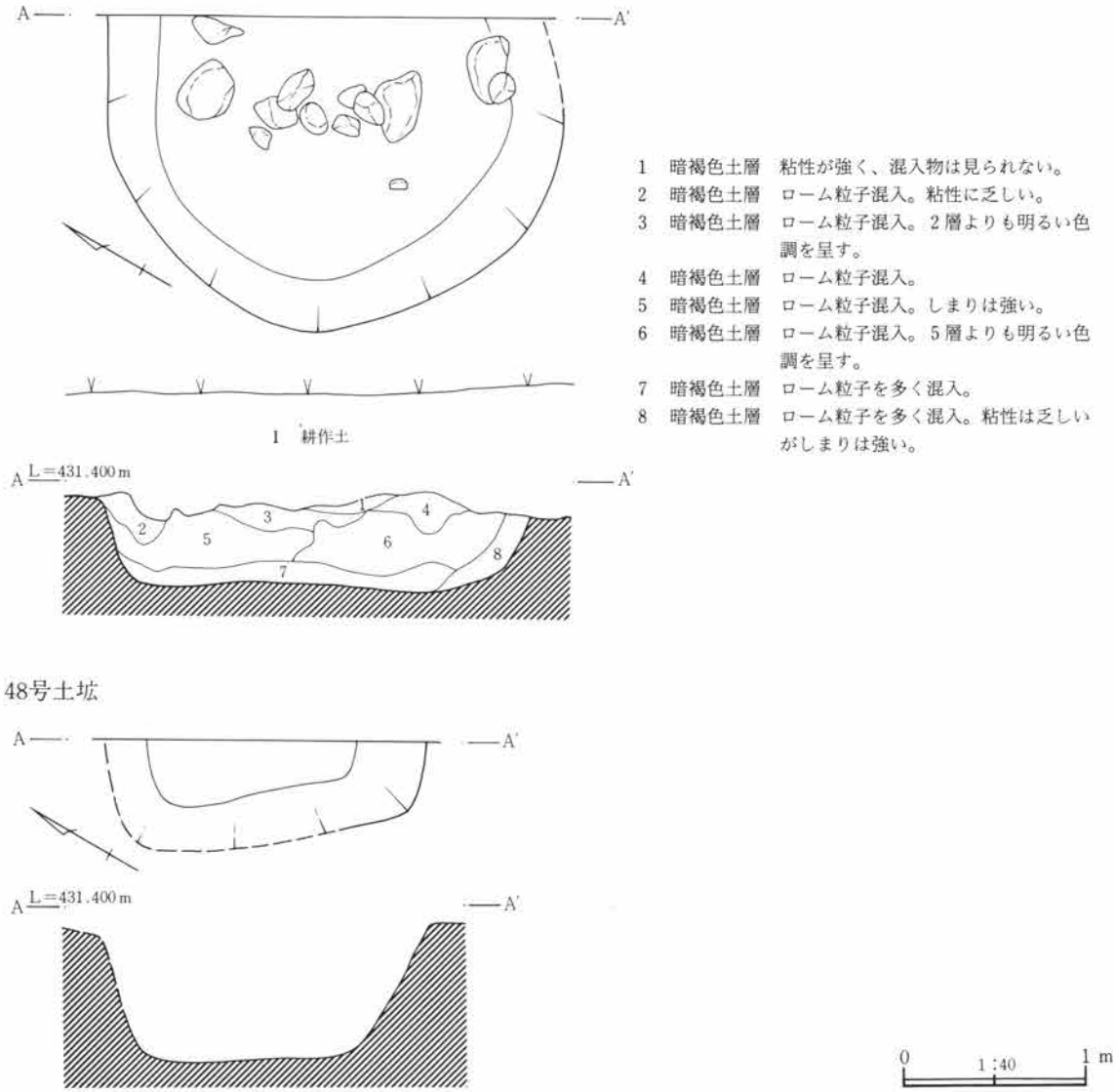
### 47・48号土坑

47・48号土坑は調査区東側のK－68グリッドに検出された。

47号土坑は楕円形ないし円形状を呈す土坑と思われる。土坑の規模は径2.56m、深さ42cmを測る。壁はほぼ垂直に立上がる。埋土は粘性の乏しい暗褐色土である。坑底より5～15cm程浮いた状態で円礫が多数出土している。遺物は図示することはできなかったが、常滑焼・甕の肩部破片が出土している。

48号土坑は47号土坑に切られており、平面形は長方形状を呈している。埋土は粒子の細かな暗褐色土である。

47号土坑



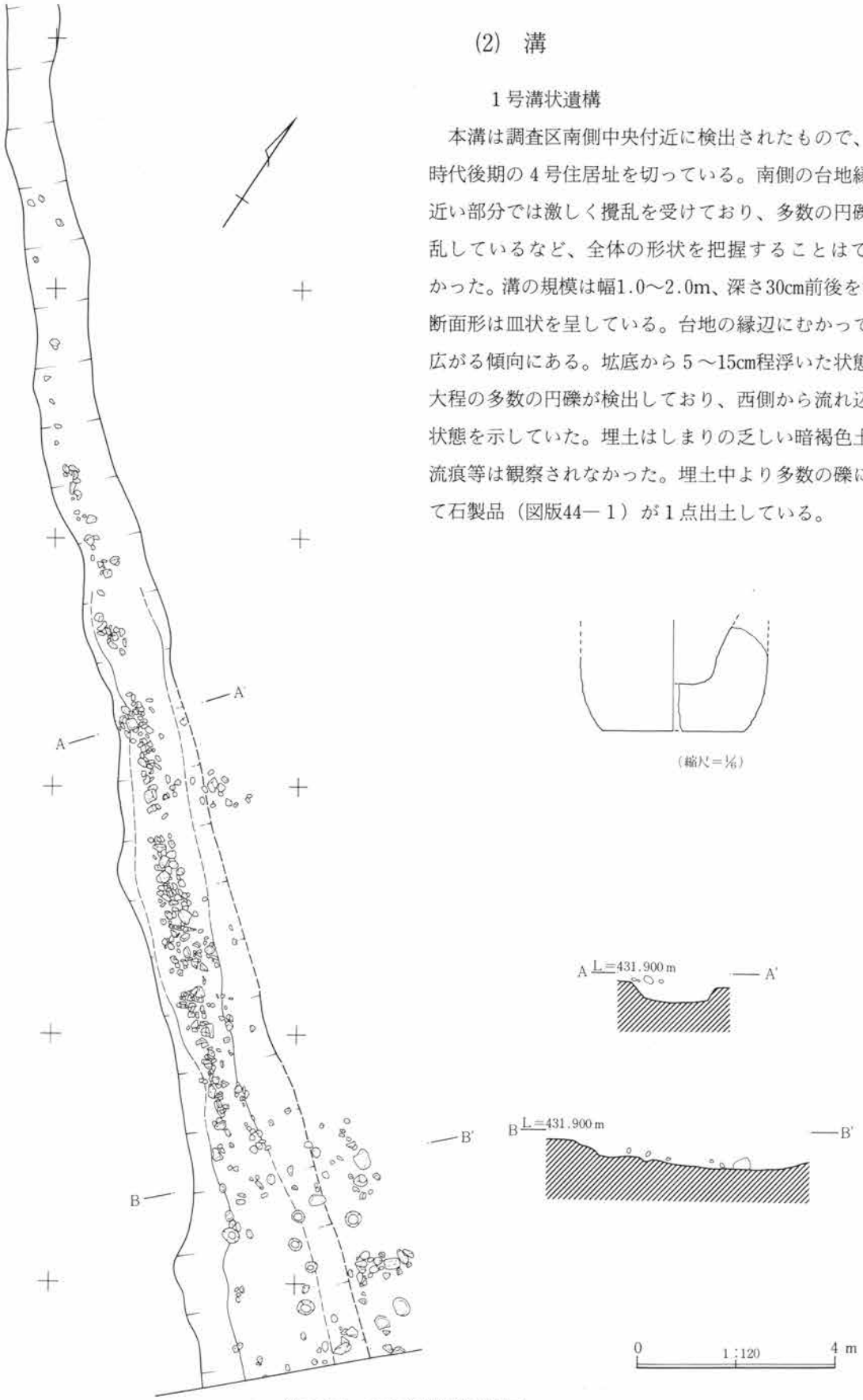

1　暗褐色土層　粘性が強く、混入物は見られない。
2　暗褐色土層　ローム粒子混入。粘性に乏しい。
3　暗褐色土層　ローム粒子混入。2層よりも明るい色調を呈す。
4　暗褐色土層　ローム粒子混入。
5　暗褐色土層　ローム粒子混入。しまりは強い。
6　暗褐色土層　ローム粒子混入。5層よりも明るい色調を呈す。
7　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。
8　暗褐色土層　ローム粒子を多く混入。粘性は乏しいがしまりは強い。

第99図　47・48号土坑実測図

## (2) 溝

### 1号溝状遺構

本溝は調査区南側中央付近に検出されたもので、古墳時代後期の4号住居址を切っている。南側の台地縁辺に近い部分では激しく攪乱を受けており、多数の円礫が散乱しているなど、全体の形状を把握することはできなかった。溝の規模は幅1.0～2.0m、深さ30cm前後を測り、断面形は皿状を呈している。台地の縁辺にむかって幅が広がる傾向にある。坑底から5～15cm程浮いた状態で拳大程の多数の円礫が検出しており、西側から流れ込んだ状態を示していた。埋土はしまりの乏しい暗褐色土で、流痕等は観察されなかった。埋土中より多数の礫に混って石製品（図版44―1）が1点出土している。

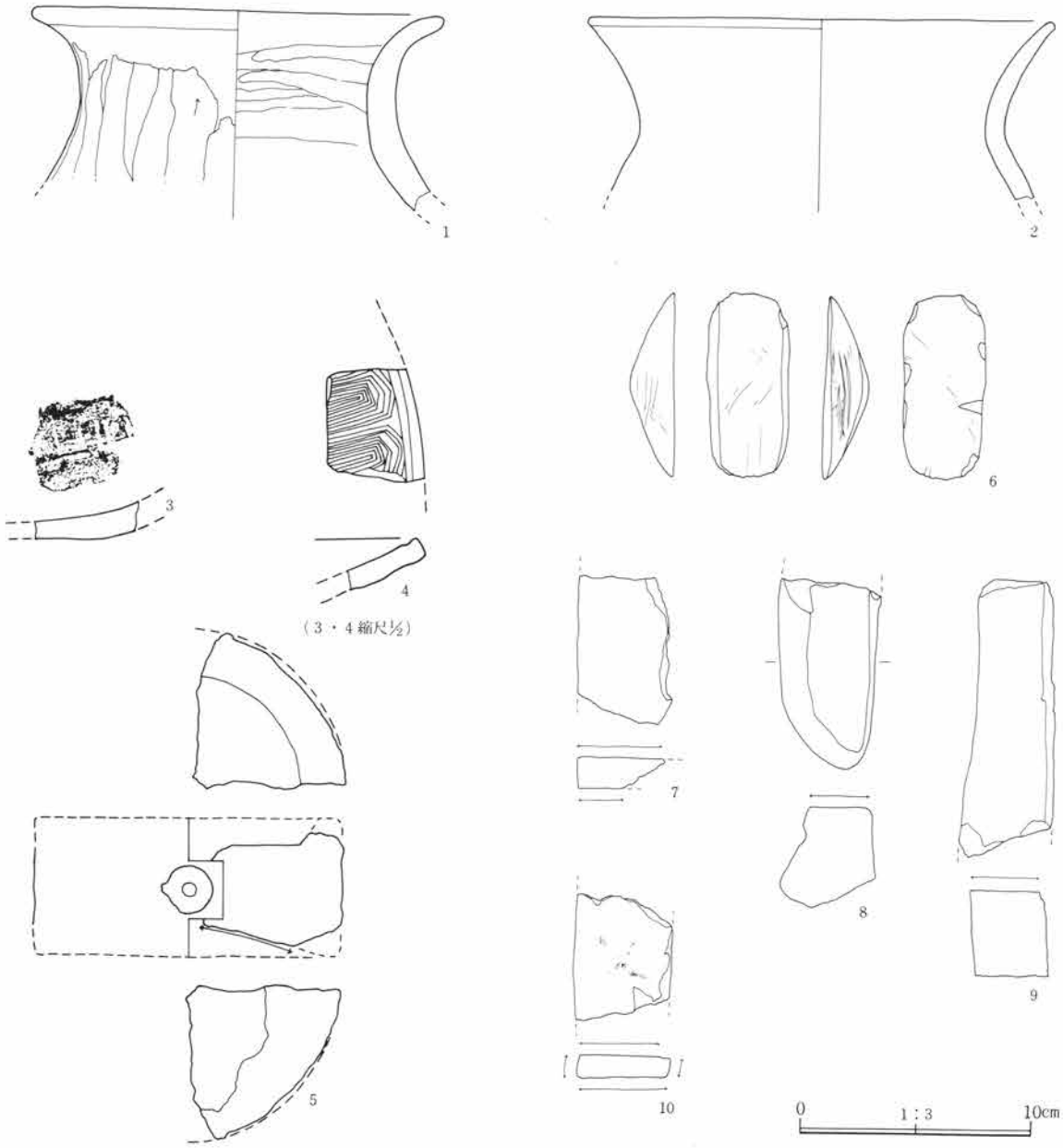



第100図　1号溝状遺構実測図

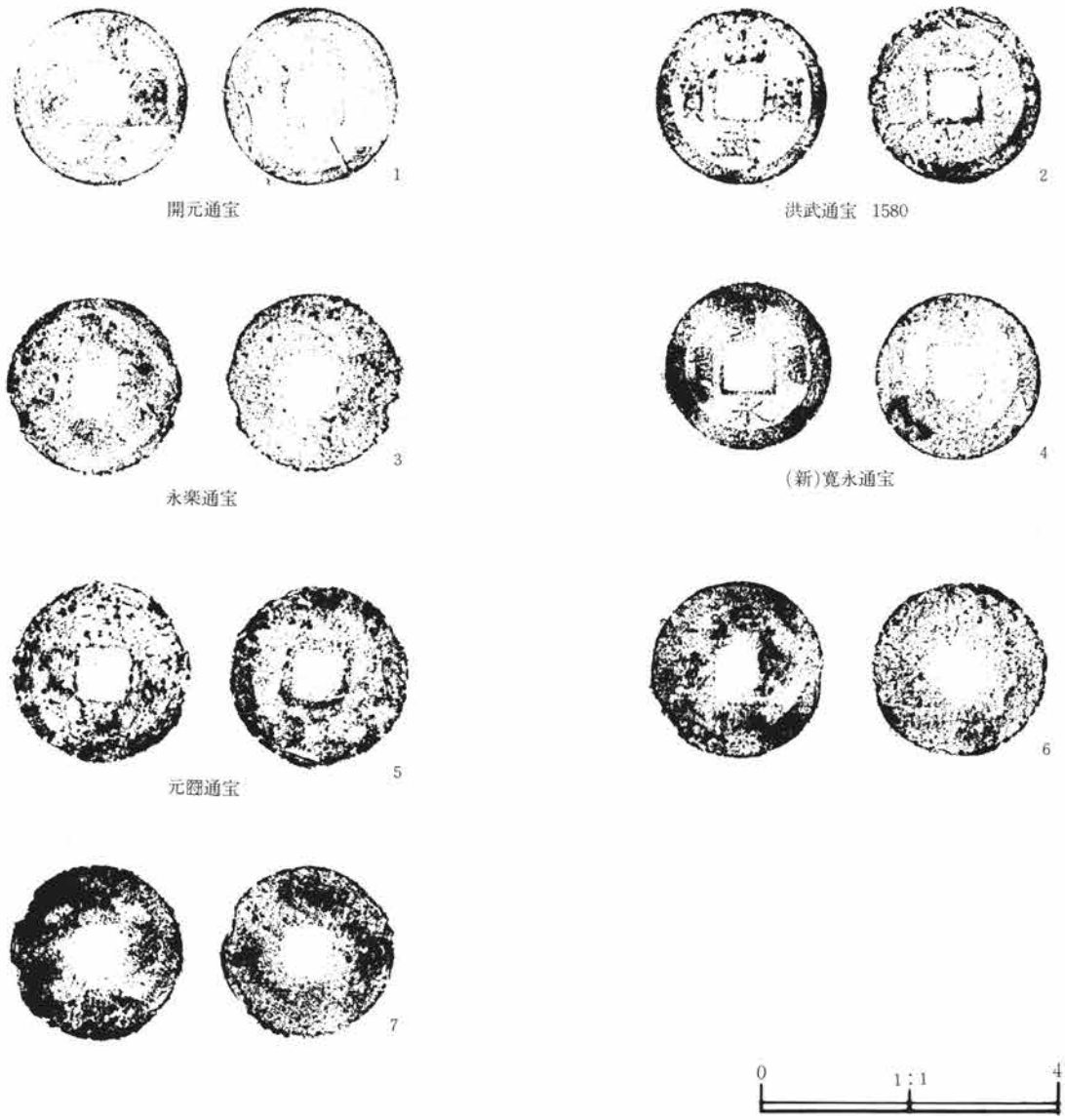
## (3) 遺　　物

本遺跡からは土層の堆積状態等を確認するために2×4mトレンチを設定して予備調査を行った段階で砥石をはじめとする石製品他が耕作土層中より出土している(図版44　2～15)。

1・2は土師器、甕形土器の口頸部破片で、1の外面は口唇近くまでナデが及んでいる。内面は横位のナデ。3は土師器、坏の体部下半の破片で内面に線刻が見られるが、焼成の前後については不明である。「二十一」か。4は陶器鉢の口縁部破片である。口径は10cmで、内面に剣頭状の印文をもつ。内外面施釉。焼成は硬で、胎土は縞状に素地が流れ、燕脂色を呈す。朝鮮製(16c～17c)か。5は輝石安山岩製の上臼である。6・7・8・9・10は砥石である。8・9は輝石安山岩製で、ほかは酸性凝灰岩製である。




第101図　遺構外の出土遺物(1)




第102図　遺構外の出土遺物(２)

# 第VI章　成果と問題点

## 第1節　土坑について

今回の調査で諏訪遺跡から検出された土坑は総計48基である。このうち、46基が縄文時代の土坑（1～46号土坑）と考えられるものであった。

### 形態分類

本遺跡から検出された土坑の形態はすでに述べたように3類に分類され、ある種のものはさらに細分が可能であった。その基準は大別段階では土坑の平面形により、細分段階では坑底等の構造によっている。

I類　溝状を呈すもの

II類　長方形ないし楕円形を呈すもの

II－a類　坑底にピットをもたないもの

II－b類　坑底に1個のピットをもつもの

II－c類　坑底に1個の大ピットをもち、中に数個の小ピット痕をもつもの

II－d類　坑底に2個のピットをもつもの

II－e類　坑底に3個以上のピットをもつもの

II－f類　坑底中央を掘残し、あるいは掘窪めているもの

III類　円形状を呈すもの

III－a類　断面形がフラスコ状を呈すもの

III－b類　断画形が凵状を呈すもの

### 分　布

検出された土坑の分布は各形態毎に一定の規則性が窺える。I類の土坑は等高線に対して直交し、数基が1つの群を形成するかのように分布している。II類の土坑は調査区北側の台地縁辺に集中する傾向は見られるが、調査区全体に分布している。II類に分類された土坑のうち、主体を占めるII－b・c類の土坑についても、同様な傾向を示している。土坑の長軸方向は台地縁辺では等高線に沿う傾向が見られるのに対して、台地中央では等高線に対して直交する傾向が見られる。III類の土坑は、いずれも調査区北側で検出されている。土坑は断面の形状によりさらに2分され、部分的に集中する傾向が見られ、相互に密接な関係を看取することができる。

### 土坑間の切り合い関係

検出された土坑（総計46基）のうち、土坑間の切り合いが2例4基（12・13号土坑、39・40号土坑）について確認された。いずれもIII類の土坑がII類の土坑を切っていることが確認されている。

### 土坑の埋没土層

検出された土坑のうち、ほとんどは暗褐色土を主体とする自然堆積状態を示していたが、7例（11・17・31・35・39・45・46号土坑）について、土坑の埋没土層上位にローム粒子、ブロックを主体とした褐色土が認められた。これは明らかに人為的埋土と考えられ、土坑が完全に埋没する前にこれらの褐色土を投棄したものと思われる。

出土遺物

各土坑から出土した遺物で、遺構自体の時期を決定するようなものは得られなかった。いずれの遺物も細片が主体を占め、ほとんどは縄文前期中葉から後葉のものであった。

ま と め

縄文時代の土坑の果した機能・用途については一応落ちついた感がある。住居址が廃屋墓として転用されている例があるようにすべてを一義的に意義づけることは困難であるが、一般的に、Ⅰ・Ⅱ類に分類された土坑は「陥し穴」に、Ⅲ類に分類された土坑は「貯蔵穴」として把握されている。「陥し穴」は、当初民族例から推察されたものであったが、現在では、動物遺体・棒状杭の検出等有利な材料もあってほとんどの研究者が「陥し穴」説を支持している。また、これらの有利な材料の検出によって、対象とした動物、あるいは狩猟法にまで言及[(1)]して報告している例もあるが、土坑自体の時期決定材料に乏しいうえに、食料獲得方法の変化に伴って狩猟体系の変化も充分推測され、より多角的な視点での検討が痛感される。近年刊行された『縄文文化の研究・2』に見られるように、その内容は考古学的遺構・遺物の枠を越えて生態学的成果を盛り込み、狩猟体系の復元[(2)]に向けての方向性を示唆している。

Ⅰ類の土坑は北海道・東北地方に主な分布域がある。一方、Ⅱ類の土坑は関東地方を中心として分布することが知られている。近年、両地域とも両形態の土坑が検出されているが、全体に対する各々の割合は少なく、その在り方は客体的である。したがって、Ⅰ・Ⅱ類の土坑の差は地域差として把えられるものと思われる。

時期的には、南関東地方では早期末から前期初頭として一般に把握されているが、北海道・東北地方では中・後期を下がる例が認められる。この事象が地域の実体を表わしていると仮定するならば、地域間の狩猟体系に差が生じた結果と考えられはしないだろうか。本遺跡の所在する利根地方は地理的には東北地方に近接し、両地域の接点とでもいうべき位置にある。Ⅰ類の土坑が比較的まとまったかたちで検出されたことは、そのことの一つの証左として把えることができるものと思われる。

本遺跡の調査は路線内の調査であり、台地全体における土坑の分布については知るすべもなく、ここで多くを述べることはできないが、今回の調査で明らかになったことを記して問題点の提起としたい。

検出された土坑は台地縁辺では谷に引かれる傾向にあり、その長軸方向は台地縁辺部を除いて規則性に欠ける。Ⅰ・Ⅱ類間の土坑には切り合いの関係は見られず、Ⅱ・Ⅲ類間の土坑に切り合いの関係が見られる。Ⅲ類の土坑は県下では前期集落によく伴うものである。『陥し穴は狩猟採集民が考案した種々の罠のうちのひとつ』であり、居住形態が移動性の高い段階から定着性の高い段階とではそのあり方も異なるものと推測され、より組織的なものへと変遷したことが予想される。微高地・古環境の復元をはじめとして、今後、そうした観点より狩猟法としての「陥し穴」の検討が必要となろう。

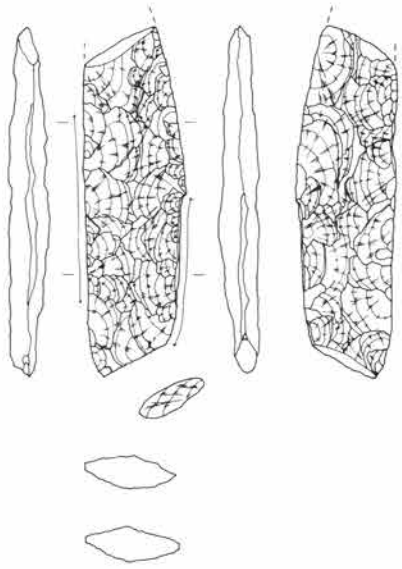
なお、58年度調査で、大原Ⅱ・村主遺跡[(3)]より「繭形・坑底に3～5本のピットをもつもの」が多数検出されており、そのあり方は注目される。

（岩崎泰一）

## 第2節　グリッド出土石器について

本資料（第103図）は後沢に面した調査区北側の台地縁辺にちかい、H—76グリッドより出土したものである。出土層位はIII層（軟質黄色ローム層）上位部分で、ほかに伴出する遺物は認められなかった。

石器の全体の形状は細身・柳葉形を呈しているが、左側辺は直線的形状を呈している。断面形はレンズ状で、横長剝片を素材としている。石器下端部の折れ口は折断に際して通常見られる〝ヨレ〟は認められず、シャープな平坦面を形成している。風化により明確にし得ないが、節理面での割れに近いものとして理解すべきものかもしれない。残存長6.8cm・幅2.0cm・厚さ0.6cm・重さ13.40gを測る。石材は黒色頁岩である。全体に風化が著しく進んでおり、調査時点での欠損部分（石器上端部）では約1㎜程の風化層が観察される程である。器体の調整加工は押圧剝離に近い手法で、器面全体に剝離が施されているが、器体中央には部分的な第1次剝離面を残している。



第103図　III層出土石器

本資料で特徴的な点は、器体の両側縁部（図上の↔で示された範囲）にトロトロに近い状態にまで著しい磨滅痕が見られることで、側縁部に施された微細な剝離はすべてこの磨滅痕によって切られており、器体の側縁部はこの磨滅痕によって、直線的な形状となっている。一方、器体中央の剝離面には、同様な磨滅痕は認められない。したがって、上述した理由から、本資料に認められる磨滅痕は器体着柄のためのものというよりも、使用の結果生じた磨滅痕として把えられるものと思われる。したがって、本資料は器体の側縁部に機能部をもつものであり、「側刃石器」とでも呼称すべきものである。

本資料側縁部に磨滅痕の見られる石器は、ほかに類似する報告例を知らないが、側縁部に機能部をもつ同様な形態を示す石器としては、所謂「植刃」をあげることができる。「植刃」は小瀬ケ沢洞窟遺跡等で注目され、命名された石器で、断面三角形の錐とともに渡来石器として把えられたものである。その使用形態は1個体、あるいは複数個体で用いられたとされている。その後、断片的に類似する資料の蓄積は若干見られるが、まとまった資料に恵まれず、同石器群のあり方を明らかにすることなく現在に至っている。県下でも、断片的な当該期資料の存在・地理的要因から小瀬ケ沢に特徴的な鋸歯縁をもつ有舌尖頭器を含む石器群の存在が想定され、今後好資料の摘出が期待される地域である。[(4)]

本資料は両側縁部の著しい磨滅痕を特徴とし、主機能部を側縁にもった「側刃石器」として把握されるものと思われる。そうした意味あいでは小瀬ケ沢洞窟遺跡出土の「植刃」の系譜の中に位置付けられるものと推察されるが、一方では、長大な尖頭器体を折断して作出するとされる「植刃」に対して、製作上の限界から現出する偶発的な所産、所謂「ハネモノ」とする疑いも見られる。こうした観点に立てば、本資料に見られる折れ面の取り扱いは慎重であるべきで、当該期石器群の実相を把握することとともに今後の課題として提起しておきたい。

（岩崎泰一）

## 第3節　1号住居址出土土器について

本住居址出土の土器は本地域における弥生時代後期の樽式に相当するものである。出土状況から廃棄された可能性が強いが、器種は細頸壺、甕、小形甕、小形台付甕、高坏、鉢、片口鉢等があり、当時期の土器としては典型的なセットとして把える事ができる。以下各器種毎にその特徴を述べてみたい。

細頸壺（第66図—13）[5]は小さな折り返し口縁をもち、頸部が緩い曲線を描いてくびれる長胴の器形で、文様は頸部下位に櫛描波状文のみを施している。この頸部の特徴は比較的「く」の字状の屈曲を呈する他の一般的な壺に比べるとやや異質で、竜見町式の要素を残した古式なものとも考えられるが、折り返し口縁の形状はむしろ後出的と考えられる。又本例と同様のものが土師器と共伴している例[6]のある事から、あえて時期を遡らせる必要はないだろう。

甕はその形状から球形胴をもち、広口壺形に近いもの（第65図—6・7）と長胴を呈し長い頸部をもつ一般的なもの（第64図—1～5、第65図—8・9）に分けられ、これを便宜的に前者をA類、後者をB類としておく。B類は更に頸部が弱い「く」の字状に屈曲するもの（第64図—1）と緩い曲線を描くもの（第64図—2～5、第65図—8）に分けられる。これを$B_1$類、$B_2$類とそれぞれ呼称する。A・B類とも単口縁と弱い折り返し口縁を呈するものがあるが、量的には折り返し口縁が主体を占めている。又、文様は$B_1$類のみが櫛描波状文と簾状文を施しており、他は全て波状文のみの構成をとっているのが特徴である。一般に壺、甕の場合、簾状文は頸部と肩部の境の屈曲部分に施されるものが多い。この事と本住居址出土土器に見られるように、屈曲部のある$B_1$類に簾状文が施され、明確な屈曲部をもたない$B_2$類にはないということから簾状文の施文と器形との間には何らかの相関関係がある事を示唆するものである。

小形甕は口縁が短く屈曲しB類を小形化した形状のもの（第65図—10～12）と、より法量の小さなもの（第66図—14・15）がある。前者は樽式に一般的な器形であるが、後者の箆描沈線文による斜格子文を施したもの（第66図—15）は形態、文様とも樽式の新段階ではなく、むしろ竜見町式の要素を残すものと考えたい。

小形台付甕（第66図—24、第67図—28～30）、高坏（第66図—16）、鉢（第66図—17～23）は樽式の一般的な形態を呈しており、特徴的なものは見られない。又、高坏、鉢は塗彩される例が多いが本住居址出土例はすべて無彩であり、その事からやや後出的なものである可能性も考えられる。

小形片口鉢（第67図—35）と匙形土製品（第67図—36）は、いずれも小形で整形が雑であり、又、胎土が同一である事から実用品というより、両者一組で祭祀的なものとも思われる。

以上のような各器種の特徴から編年的位置付けを試みてみたい。樽式は北関東西部地域における弥生時代後期の位置を与えられているが、より細かな時期区分や地域差の問題については一括資料が少ない等の資料的制約から十分に分析された事はほとんどないのが現状である。その中で井上唯雄、柿沼恵介両氏によって県内出土の樽式土器を全般的に取り扱い、主に文様系統を軸として古、新の2時期に区分された論考[7]は注目に値する。それによれば本住居址出土の甕類に見られた文様及び器形上の特徴は画一化された後出[8]のものであり、新段階のものに相当する。ただし前述のように箆描沈線文の施した小形甕は古式の様相を呈する事から最終末期までは下らないと思われる。ここでは以上の事から後期後半期に位置付けたい。又、文様の特徴として壺、甕類に見られたように波状文を主体としている点をあげたが、これは波状文と簾状文の組合せを基本的文様としてもつ他遺跡例に比べると異質である。これは文様の時間的変遷の過程で簾状文が省略されたとも考えがちだが、土師器を伴う終末期段階のものまで簾状文は残っている事[9]から、むしろ時間差ではなく小地域あるいは本住居址固有の特色として把えた方が妥当であろう。　（大木紳一郎）

## 第4節　古墳時代の遺構と遺物について

今回の調査で検出された住居址は6軒で、1号住居址を除いて他はすべて古墳時代後期後葉の範疇であった。住居址は大形のもの（2a・2b・5・6号住居址）と小形のもの（3・4号住居址）の二つの形態が見られた。各グループの住居址は主軸方位・竈・貯蔵穴の位置等に各々共通した要素が認められた。2a・2b号住居址は、竈・貯蔵穴・床面・主柱穴のあり方から「建替え」住居であり、6号住居址も同一の床面によっているが、竈・貯蔵穴・主柱穴のあり方は2a・2b号住居址と同様である。竈のあり方については、環境的要因が指摘されているが、古い段階では竈の方向にバラエティーをもち、しだいに竈の方向は安定（画一化）する傾向が見られ、一概に環境的要因のみを強調することはできない。住居址間には若干の時間差の存在も想定されるが、住居址はいずれも切り合い関係は認められず、比較的短い期間に展開されたものと思われる。

出土した遺物は土師器を主体とし、須恵器はわずかに2点出土したのみで、いずれも破片であった。土師器は相対的に重厚で、供献形態の器種の大部分は内面に黒色処理を施した所謂「黒色土器」であった。近年、関越道関係の調査で北毛地域の当該期の遺跡が調査され、その実体が明らかにされつつあるが、これらはいずれも平野部の土師器とは大きな相違が見られる。[10]

甕形土器は胴部最大径を中位にもち、長胴化の傾向が顕著なもの（第73図26、第77図1など）と胴部に比較的丸味をもつもの（第88図9・10）がある。前者は形態的には底部径が小さく不安定であり、技法的には胴部外面にケズリ後、ヘラ状工具によるナデを施す。それに対して後者は、形態的には底部は突出気味で安定感があり、技法的には胴部外面にハケメ後、下半部を棒状工具による丁寧なミガキを施す。また、小形の甕形土器は比較的薄手なものが目立ち、外面の整形は粗雑であるが、内面の整形は丁寧である。

壺形土器は土師器2点、須恵器1点の出土がある。いずれも欠損品で、全体の器形を復元できるものは認められなかった。いずれも外面はケズリ後、棒状工具による粗いミガキが施され、内面は丁寧なナデが施されている。

甑形土器は2a号住居址より2点が出土したのみである。逆「ハ」の字状の器形を呈し、大きく一孔を穿ったもの（第74図27）と、鉢形の器形を呈し、小さく一孔を穿ったもの（同29）である。外面にケズリ後、ナデ、あるいは、ミガキを施している。

鉢形土器は2a号住居址より2点（第73図22・24）が出土したのみである。2点とも明らかに底部は認められるが、口縁部形態に若干の差異が見られ、技法的にも小形の甕形土器に分類した第73図23などとの明確な区分は困難であった。しかし、第73図23には明らかに2次的な焼成が、また、煮こぼれの痕跡が認められ、甕形土器とした。

高坏形土器は、比較的まとまって出土している。坏部に稜線が認められるもの（第72・73図16・18・19・21）と椀状を呈するもの（第81図4）がある。前者は外面をケズリ後、丁寧にヘラ状工具によるミガキを施すのに対して、後者は坏部外面に粗いハケ状工具による整形後、ミガキを施している。脚部は前者が「ハ」の字状の比較的長い脚部なのに対して、後者は比較的太く、短い脚部となっている。

坏・椀形土器は量的に安定して各住居址から出土した。とりわけ2a号住居址からは良好な状態で出土している。その形態はバラエティーに富んでいる。

A　稜線をもたず、口縁部と体部の区別がないもの

B　稜線を有し、口縁部が直立するもの

C　稜線を有し、口縁部が外反するもの

D　稜線を有し、直立気味に立上り、口縁部中位より外反するもの

E　体部が深く、口縁部が直立するもの

このうち、主体を占めるのはC類の坏形土器で、全体の約５割強を占める。また、口径：器高比、および、口縁部長：体部長比は60％を示すものが多く認められた。

技法上の特徴は、体部は基本的に右回りのケズリ後、上半部をヘラ状工具によるナデ、あるいはミガキを施す。口縁部は一般的にはヨコナデであるが、わずかにハケ状工具による整形痕を残すもの（図版43―１・２）が認められる。

須恵器は２点出土したのみである。１点は６号住居址の埋土中より出土しその胎土の特徴から太田・金山窯跡群におけるもので、６世紀後半と思われる。他の１点は４号住居址の出土で、胎土から東海系と考えられ、６世紀中頃と思われるが、いずれも住居址埋土中の出土であり、時期決定の材料としては不確定なものである。

石製品は定形化した砥石１点（２ａ号住居址）と４・６号住居址から一括して10点の礫が出土している。砥石（第74図30）は酸性凝灰岩製で、四面の使用面からなり、小口には刃を整えるための浅い溝が残されている。形状は糸巻状となっている。４・６号住居址から出土した礫は二種類が見られ、１つは棒状の礫で、石英安山岩、輝緑岩等の比較的緻密な、重さ700～800gのものが多い。これらには、使用状況を推定させる痕跡は認められていないが、「菰編石」とされる当該期住居址によく伴うものである。他の１つは扁平な礫で、打痕の見られるもの、U字状の浅い溝[11]や先の砥石に見られた条痕が見られる。凝灰岩・砂岩等の軟質な石材を用いており、重さは700～900gである。これらの石製品には明らかに石材の選択が看取され、今後注目しなければならない遺物である。

本遺跡出土の土師器に見られた整形の手法は器種あるいは器形によって限定されたあり方を示していた。たとえば、長胴化の顕著な甕形土器や、坏部に稜線をもった高坏形土器にはケズリの後にナデが施され、胴部に丸味をもった甕形土器や坏部が椀状を呈す高坏形土器にはハケメの後にミガキが施こされていた。また、坏形土器にはハケメはほとんど見られず、クズリが用いられ、外面体部上半にナデ・ミガキを施すことによって、ケズリを消すかのような手法を用いていた。また、供献形態に属するものは、そのほとんどが内面に黒色処理を施したもので、一部に観察が困難なものもあったが、必ずミガキが施されていた。この「黒色土器」自体の分布は中部以北の山岳地帯を中心にし、北関東地方においては群馬県北部・栃木県北部・茨城県北部に顕著な発達があり、その流れは東北地方に至っている。本遺跡の黒色土器出土例が示すことにより、北毛地域は長野県から東北地方に至る土器文化圏に位置するとしてよいであろうし、その手法のあり方は長野・新潟地方に出土する土師器により近似しており、これまで知られている平野部から出土する土師器にも古い段階では黒色処理を施す類例が顕著ではないが認められる。それが平野部と山地との単なる地域差なのか今後の問題としておきたい。

（岩崎泰一）

註

(1) 宮坂英弐他「城之平竪穴遺構遺跡」1966

(2) 加藤晋平他「縄文文化の研究　2 ―生業―」雄山閣 1983

(3) 相京健史他「大原II・村主遺跡調査概報」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984

(4) 山内清男「縄文創草期の諸問題」ミュージアム224 1969

(5) これらの器種の他に甑が加わる事が多い。本住居址出土土器の中で鉢とした破片に甑に相当するもののある可能性も考えられる。

(6) 前橋市西大室遺跡群G区96号住居址例、同97号住居址例（『富田遺跡群　西大室遺跡群』昭和56年度前橋市教育委員会 1982）等がある。

(7) 片口鉢の一般的な形態は本例よりやや大きく器高の深いものが多い。又、匙形土製品の用途について、最近の論考（小林康男「縄文・弥生の匙形土製品」『信濃』第33巻第7号 1981年7月）によれば、呪術的・祭祀的な何らかの儀式に用いられたものと推定されている。

(8) 井上唯雄・柿沼恵介「入門講座　弥生土器―関東　北関東3―」『考古学ジャーナル』143 1977

(9) 註2に同じ

(10) 「関越自動車道　後田遺跡見学会パンフレット」1982
「関越自動車道　糸井宮前遺跡見学会パンフレット」1982

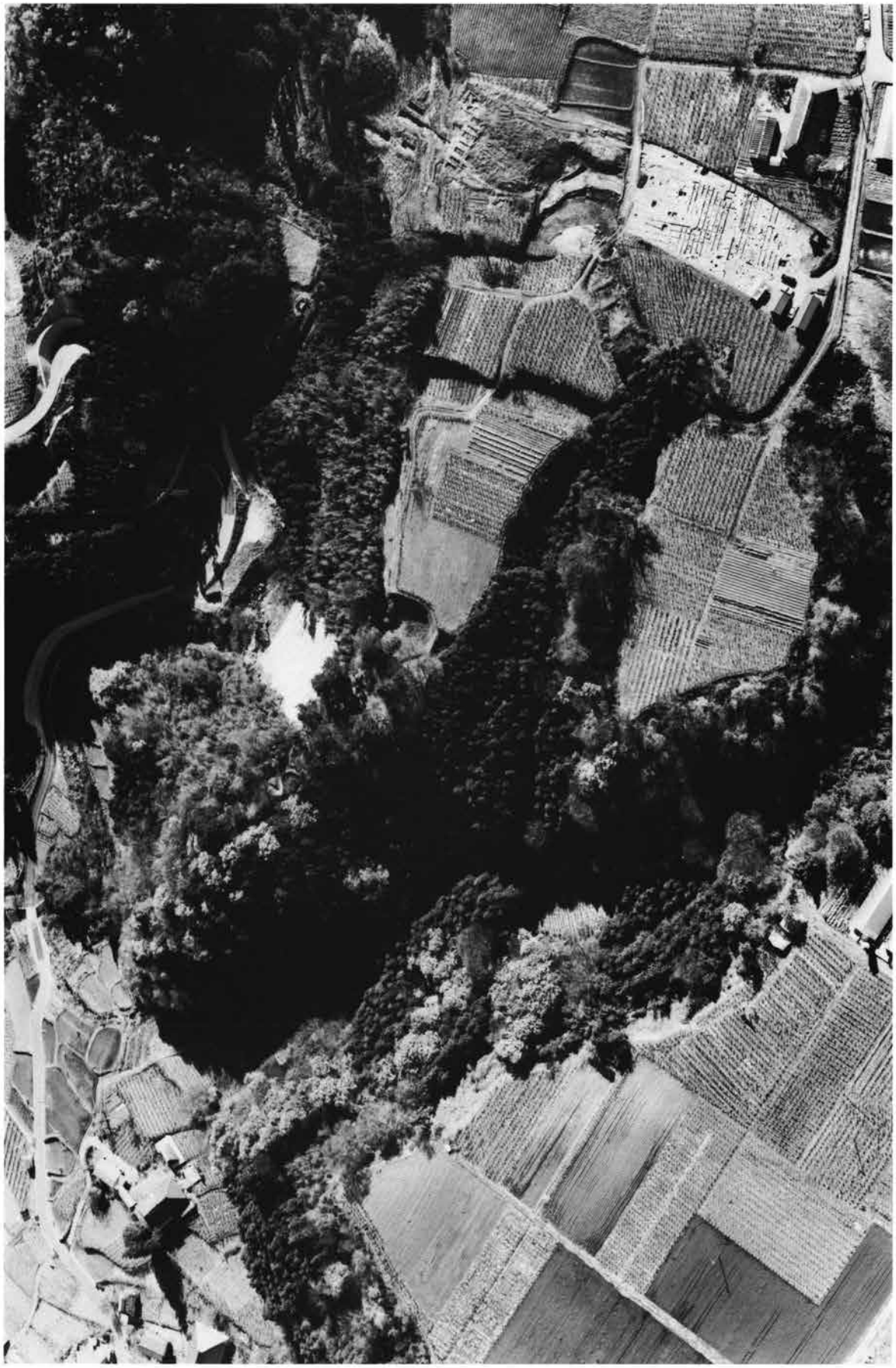
(11) 初出は明らかではないが、民族例から推察され、一般的に使用されている。

(12) 小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土器」考古学研究 18―2・3 1971

(13) 長野県市道遺跡・金鋳場遺跡・新潟県千刈遺跡・大久保遺跡などにみられる。
藤沢平治他「市道」1976
「金鋳場遺跡」中央道 50・その4 1975
加茂市教育委員会「千刈遺跡調査概報」1974
室岡　博「頸城地方の海と海底・海浜遺跡」上越市立総合博物館教養選書1 1972

# 図　　版

遺跡全景（1）

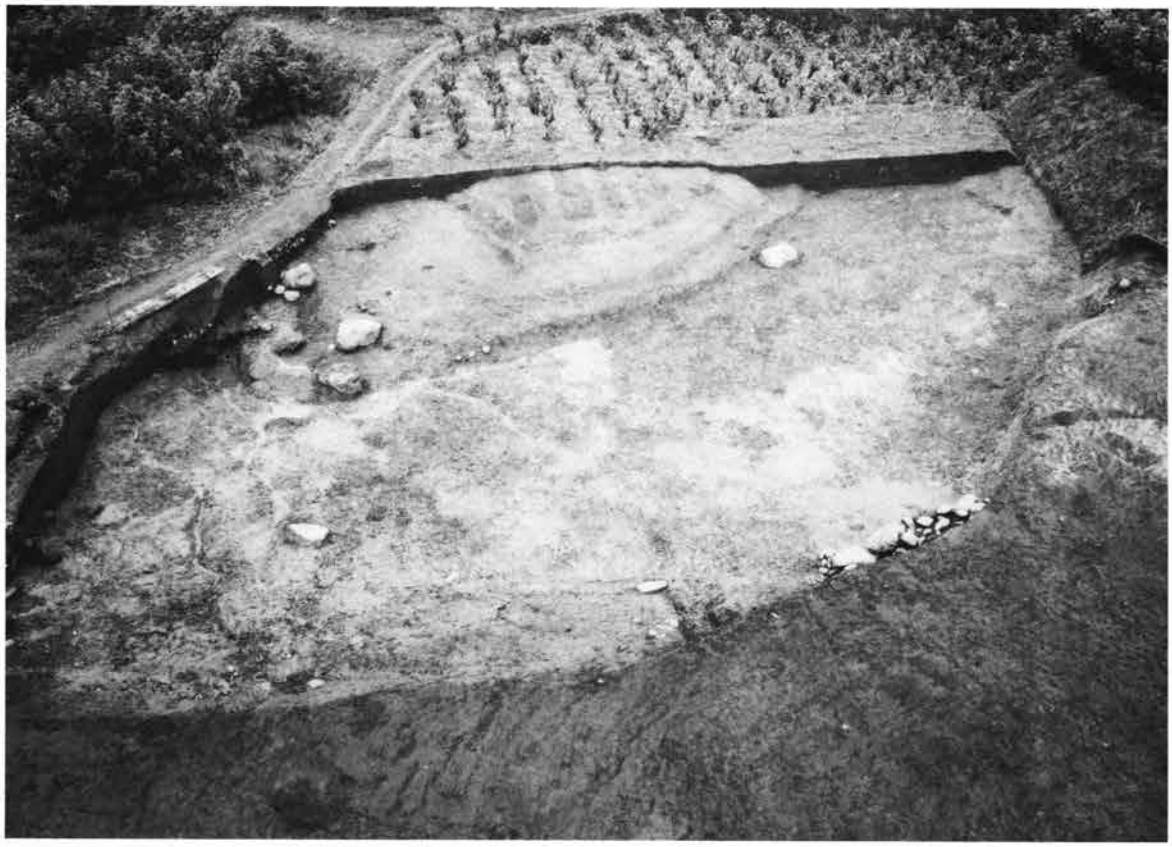


遺跡遠景　(2)

1　I号住居址

2　I号住居址　炉

1　名胡桃城址・馬出部　（調査前）



2　名胡桃城址・馬出部

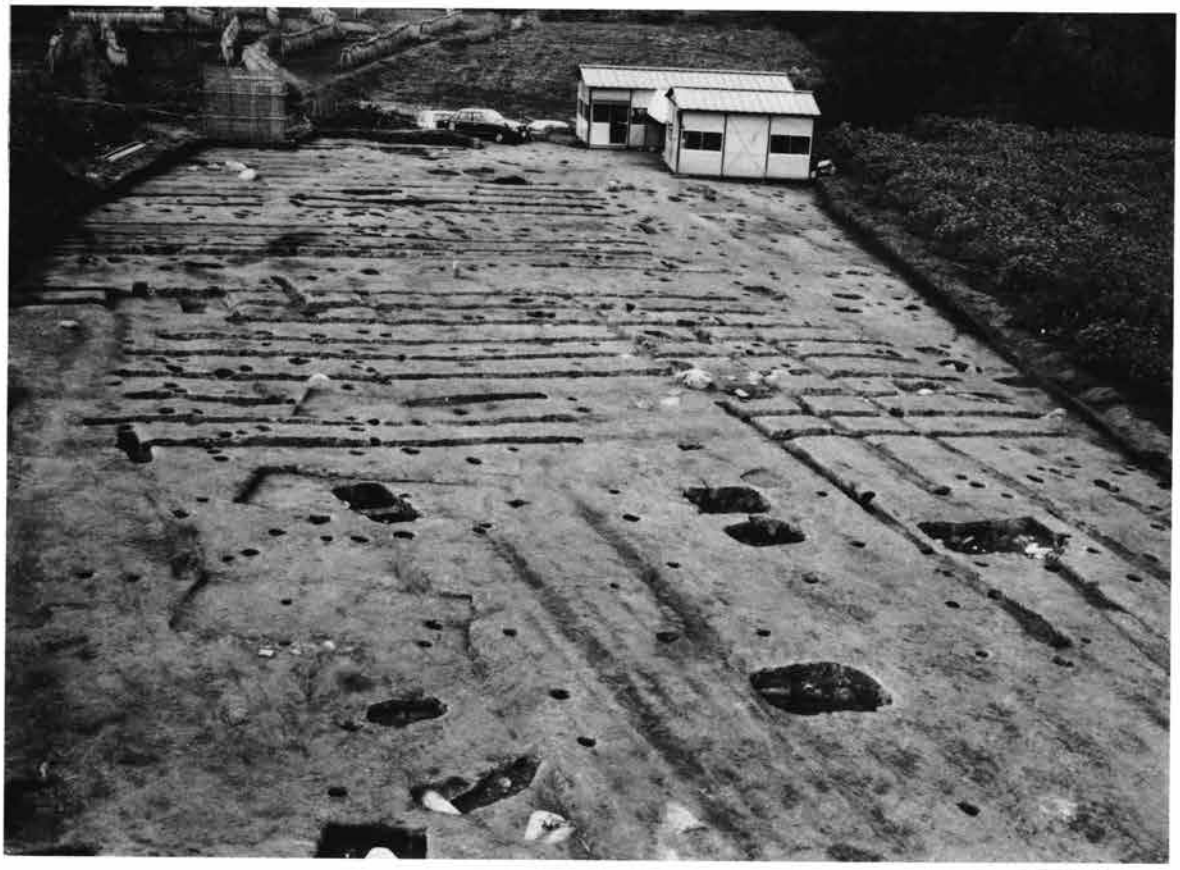
1　馬出・出入口部

2　同・調査風景

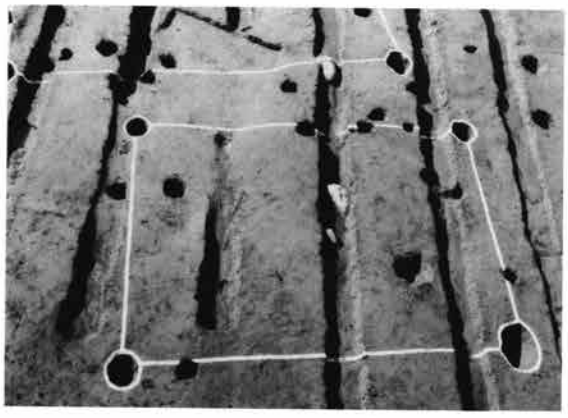
3　同・土層

4　同・馬出部

5　遺物出土状態

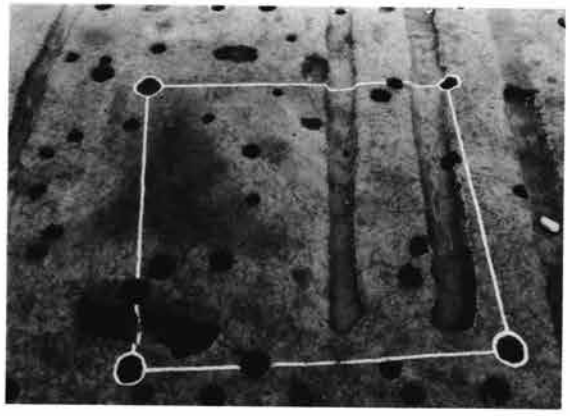


1　Ⅳ区全景

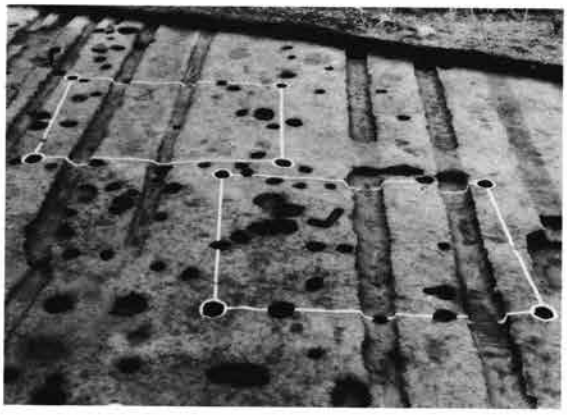


2　1号掘立柱建物址

3　2号掘立柱建物址

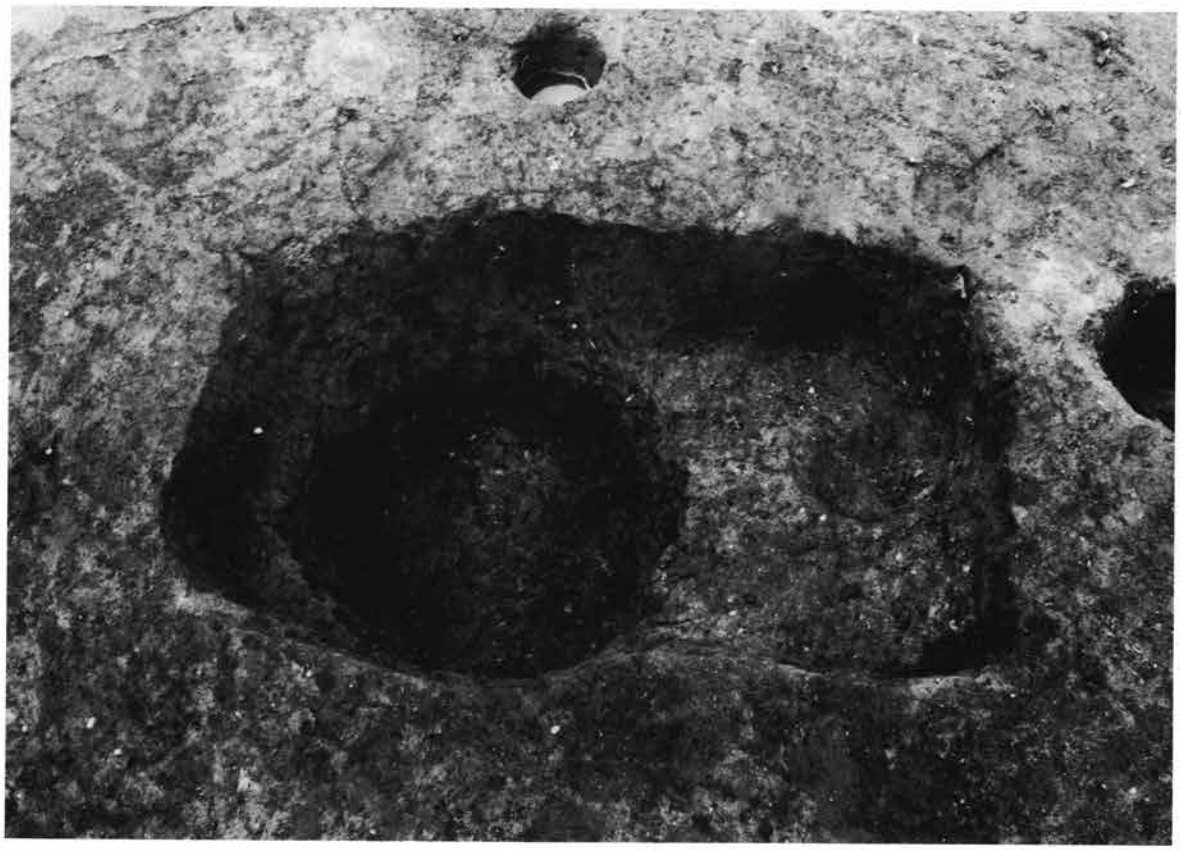


4　3号掘立柱建物址

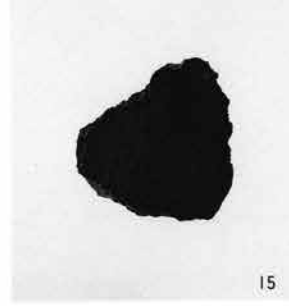


5　4・5号掘立柱建物址

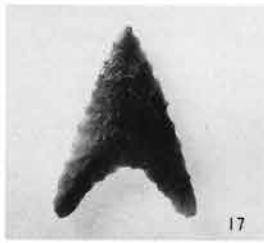
1　6・9号土坑



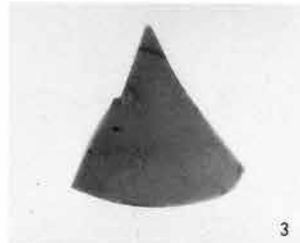
2　7号土坑




1号住居址出土遺物（1）

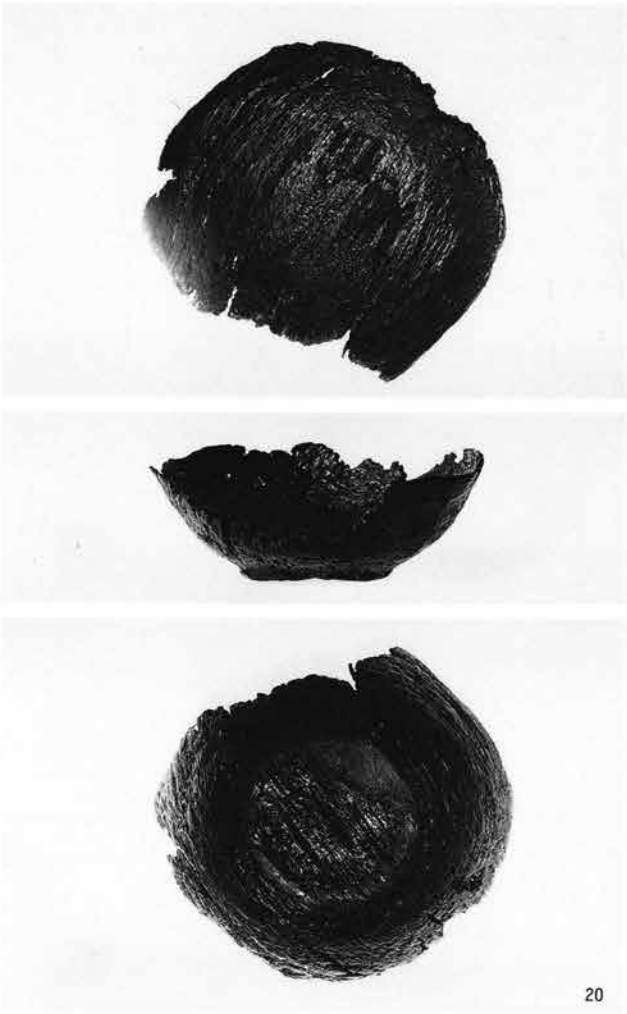


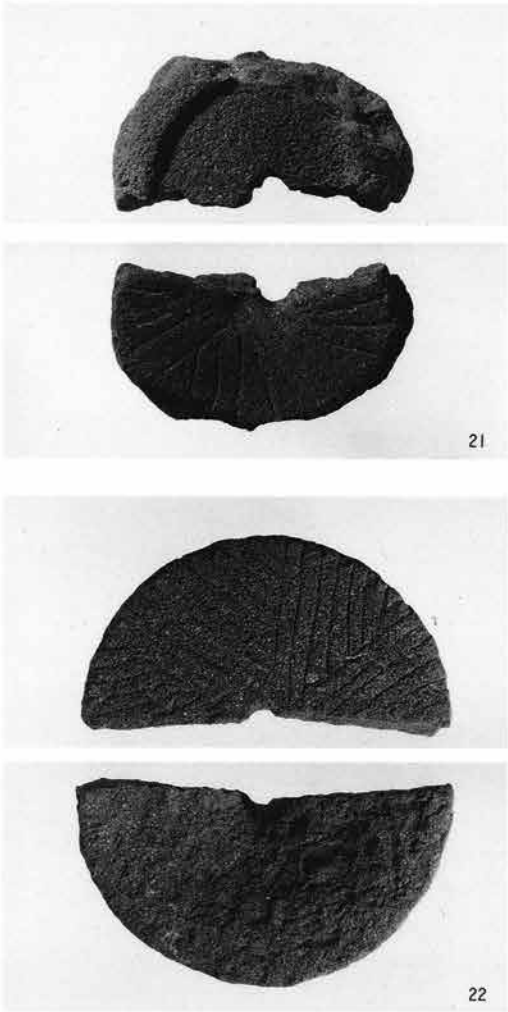
1号住居址出土遺物　(2)



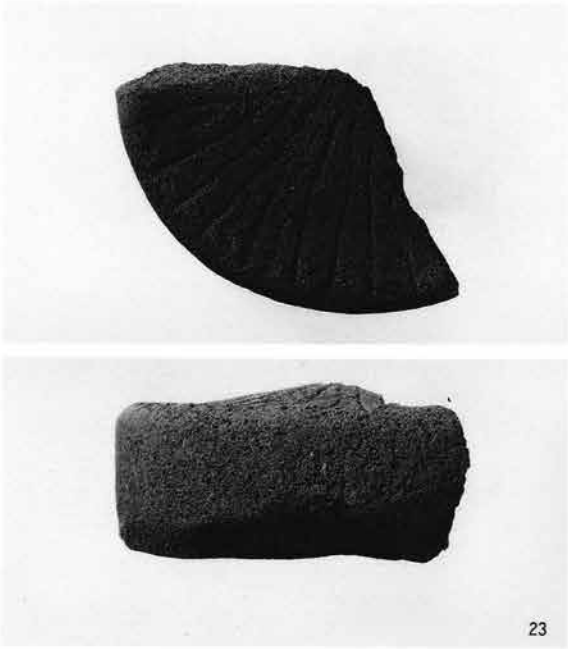
馬出堀出土遺物　(1)

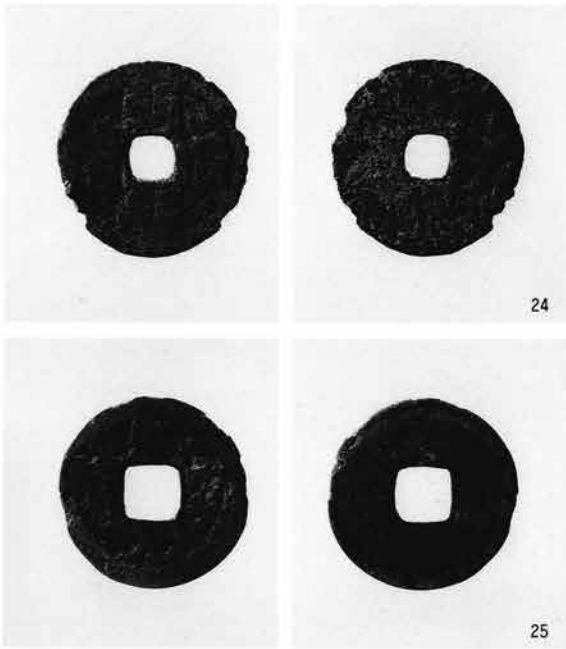
馬出堀出土遺物　(2)



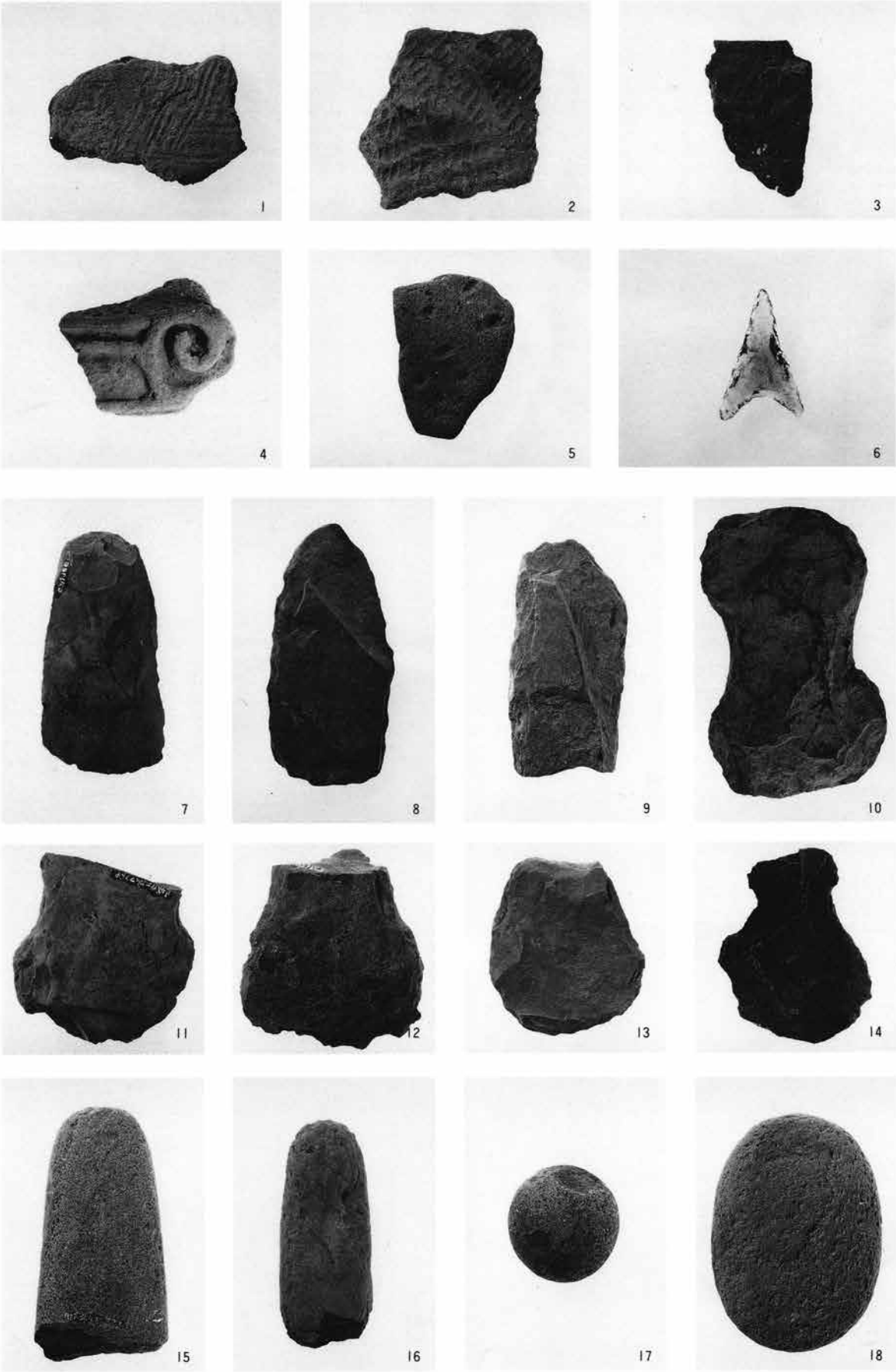




馬出堀出土遺物　(3)



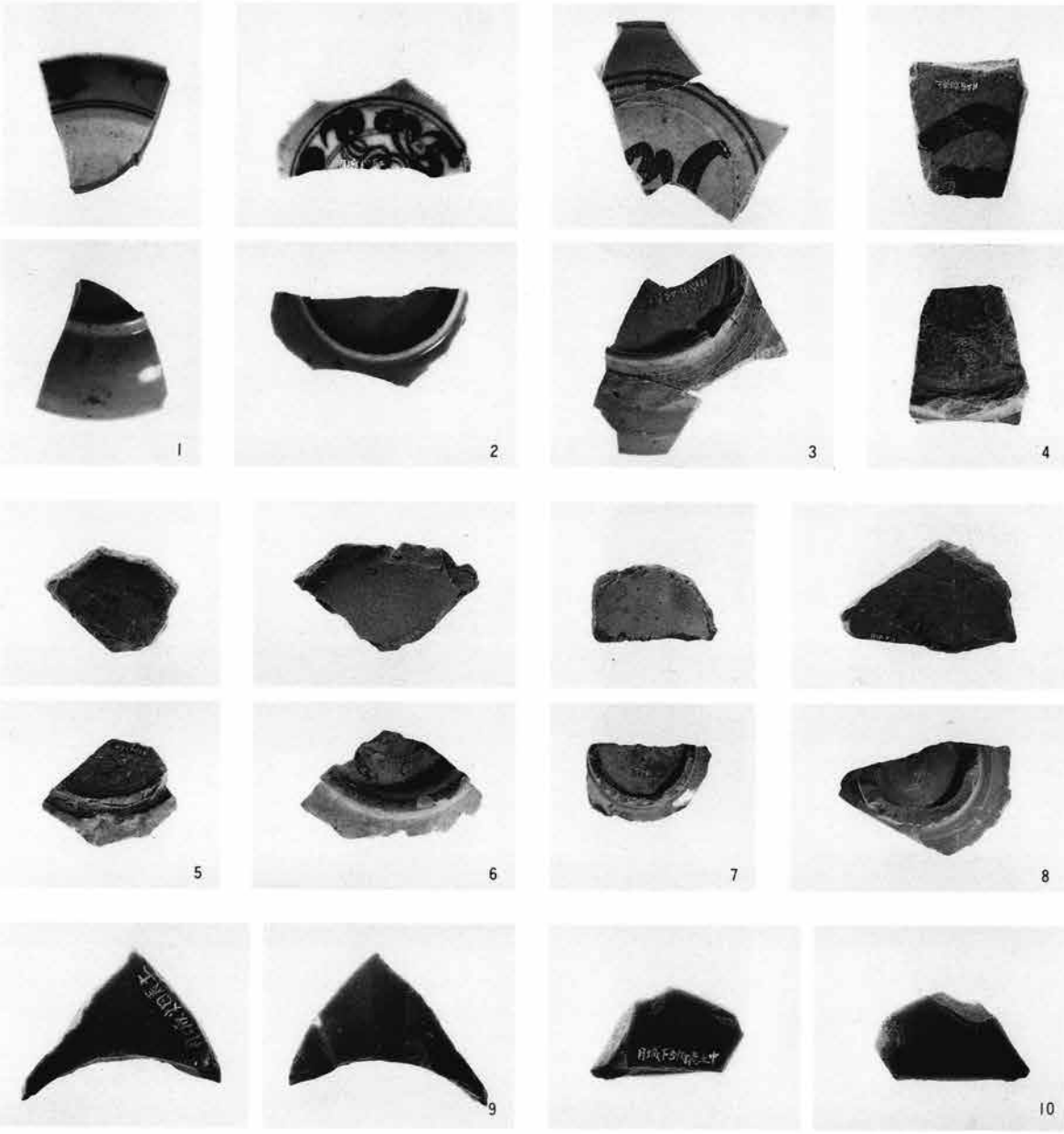




8・9号土坑出土遺物



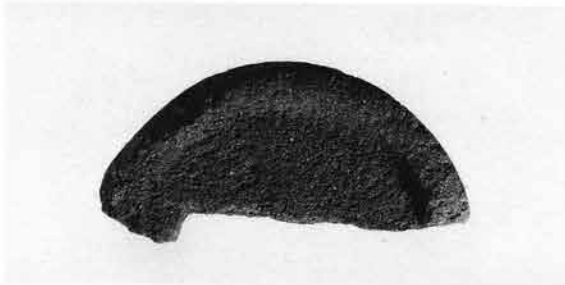

遺構外の遺物　(1)

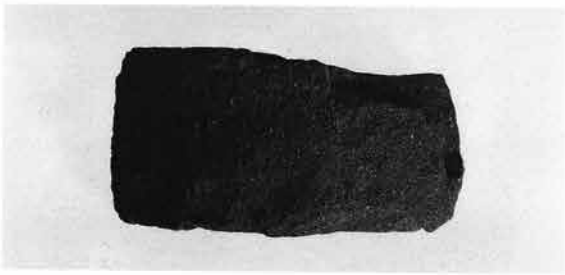
遺構外の遺物　(2)

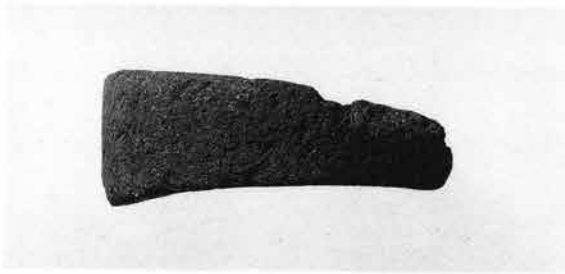



遺構外の遺物　(3)

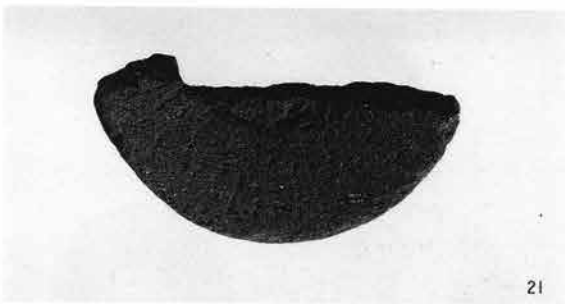
遺構外の遺物　(4)



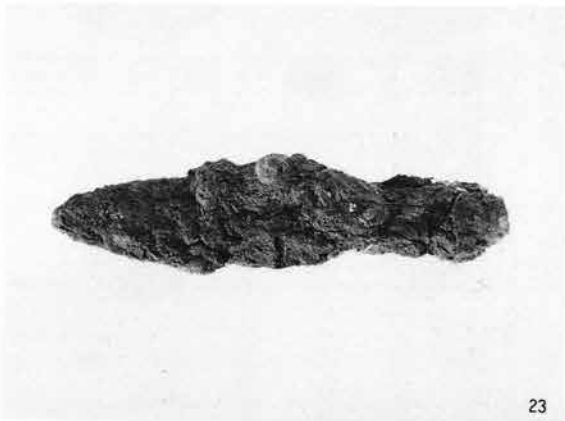




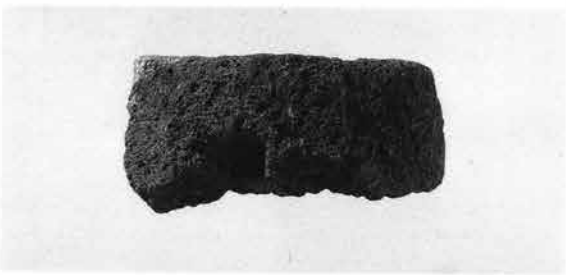
20



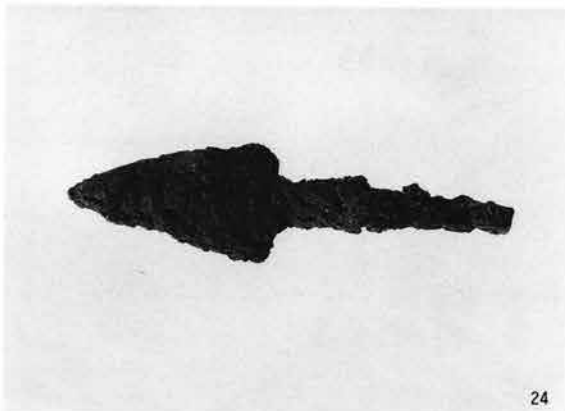
21



23



22



24

遺構外の遺物　(5)

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

遺構外の遺物　(6)

36

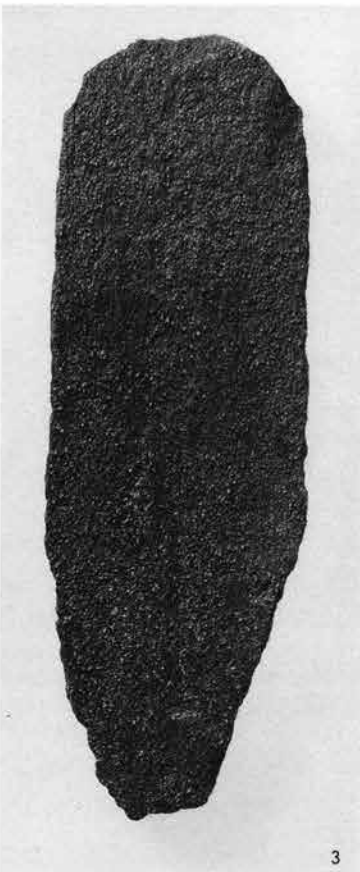
周辺採集の遺物　(1)

1

2

5

6


3

4

7

周辺採集の遺物　(2)

1　諏訪遺跡全景(南側)　(1)

2　諏訪遺跡全景(北側)　(2)

1　25号土坑

2　16号土坑

3　21号土坑

4　19号土坑

5　20号土坑

6　18号土坑

7　22号土坑

8　7号土坑

1　2号土坑

2　8号土坑

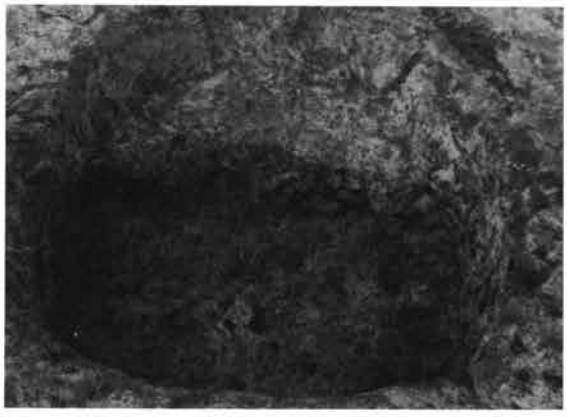
3　6号土坑

4　11号土坑

5　4号土坑

6　1号土坑

7　30号土坑

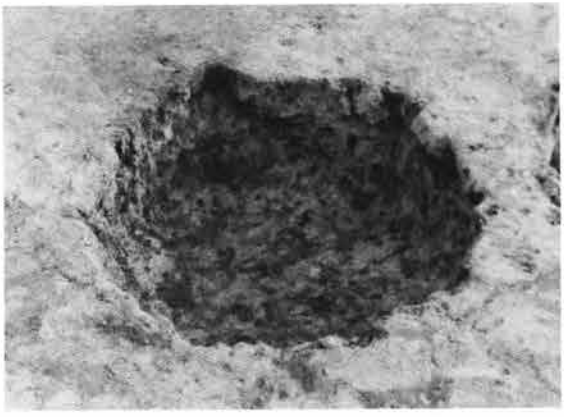


8　46号土坑

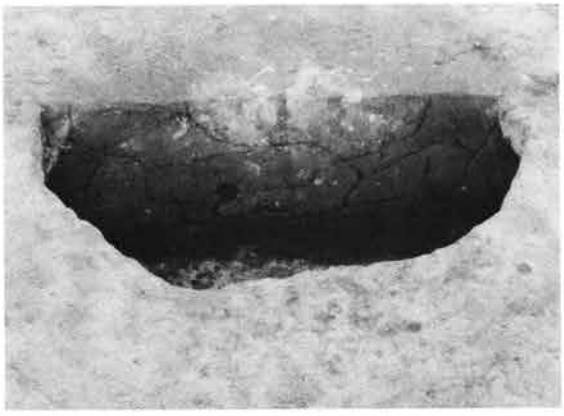
1　17号土坑

2　23号土坑

3　29・31号土坑

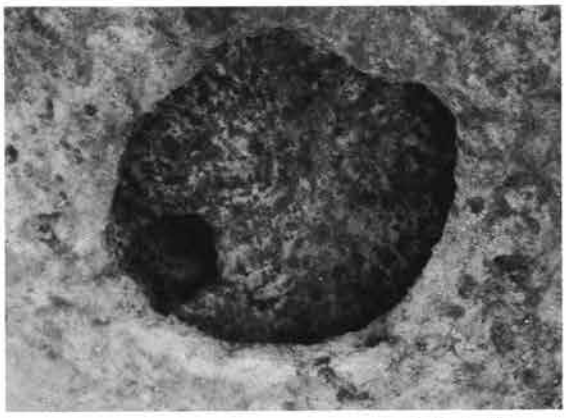


4　26号土坑



5　45号土坑

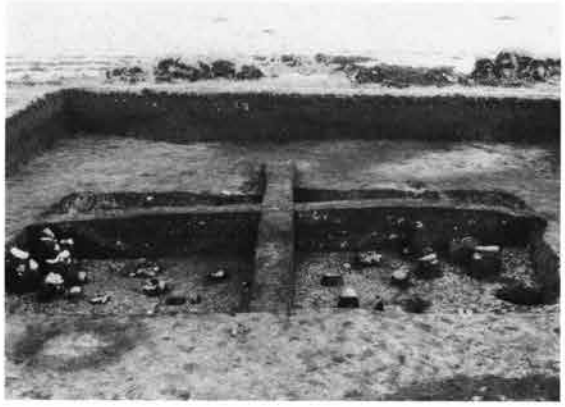
6　45号土坑



7　14号土坑

8　12・13号土坑

1　1号住居址



2　同・土層

3　同・遺物出土状態（1）

4　同・遺物出土状態（2）

5．同・炉

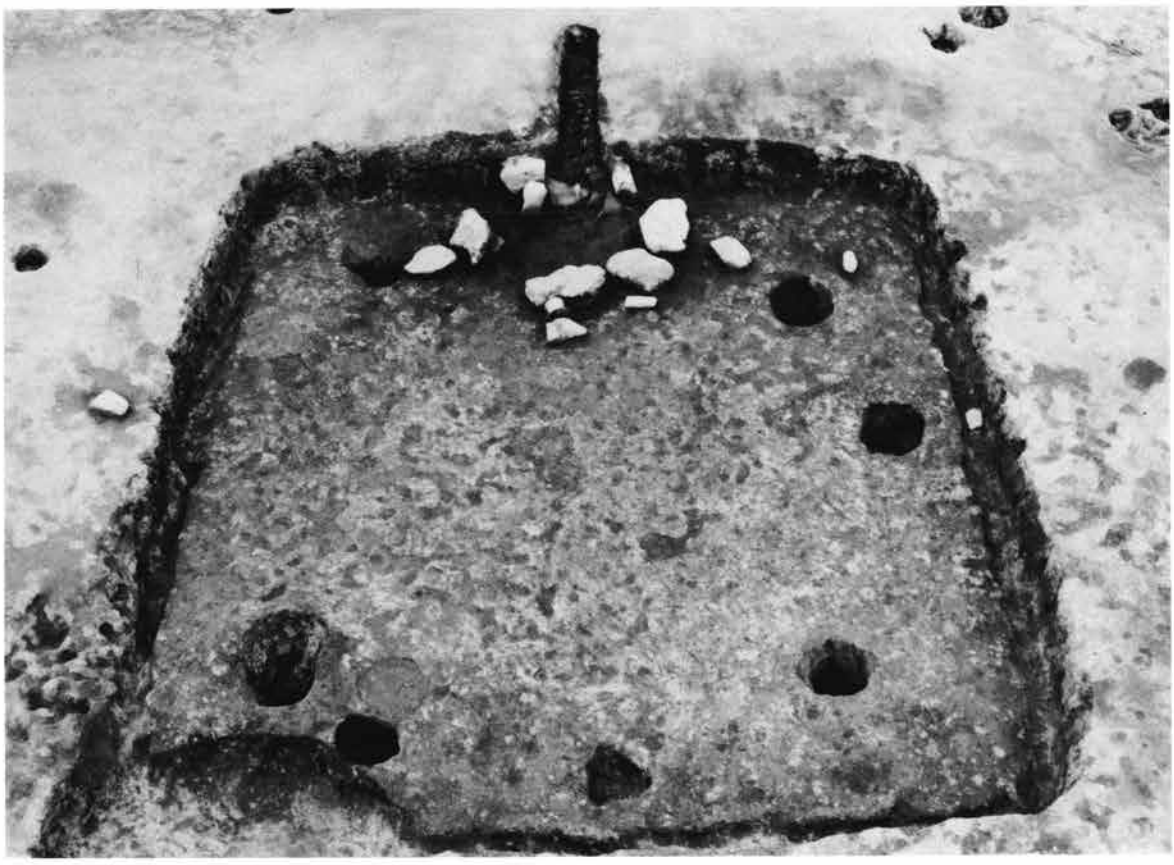
1　2 a・b 号住居址

2　同・土層

3　同・甕

4　同・遺物出土状態（1）

5　同・遺物出土状態（2）

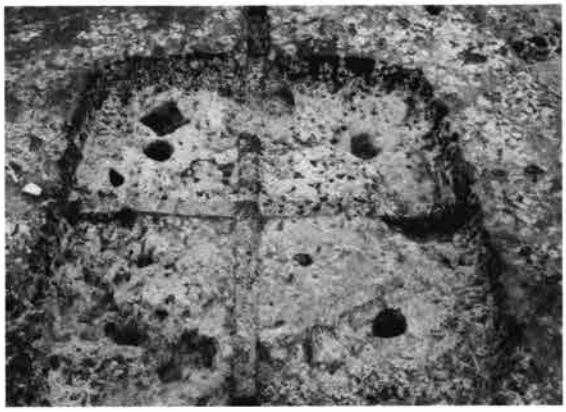


1　3号住居址

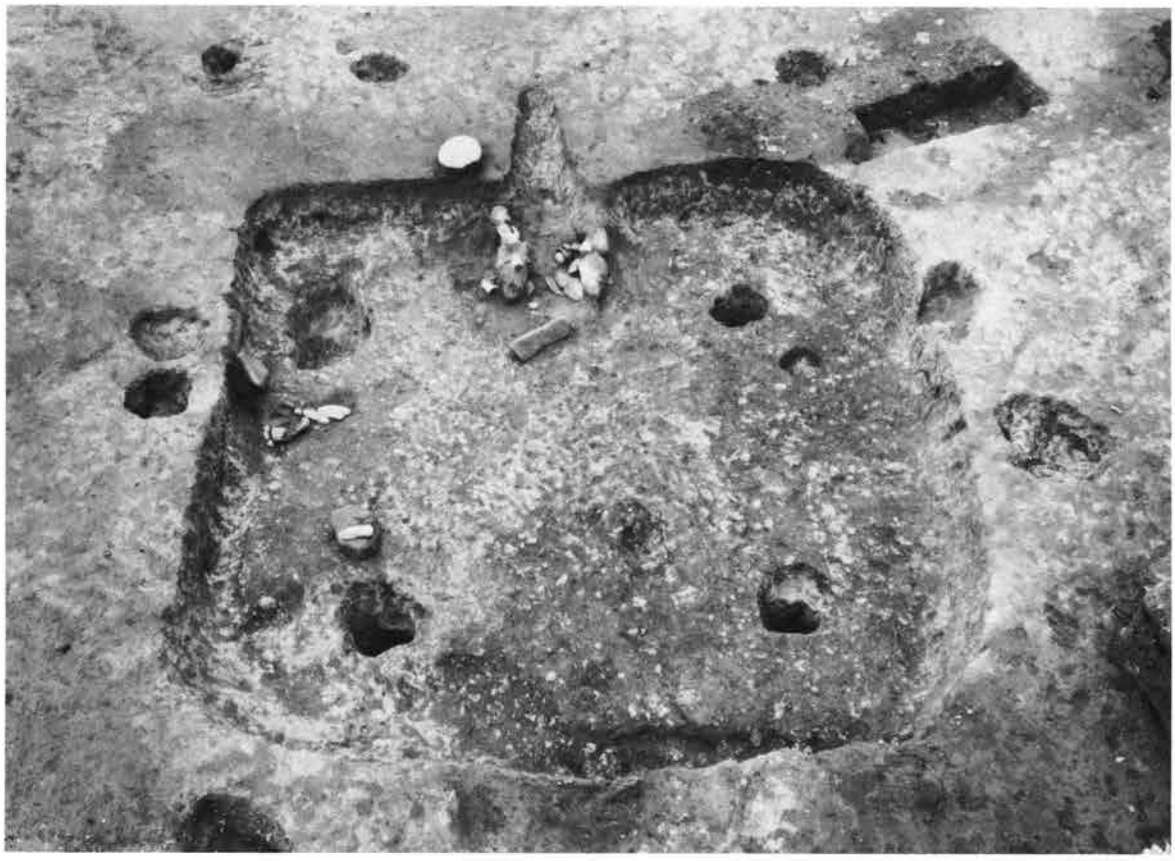
2　同・土層

3　同・竈

4　同・遺物出土状態



5　同・掘方



1　4号住居址

2　同・土層

3　同・竈

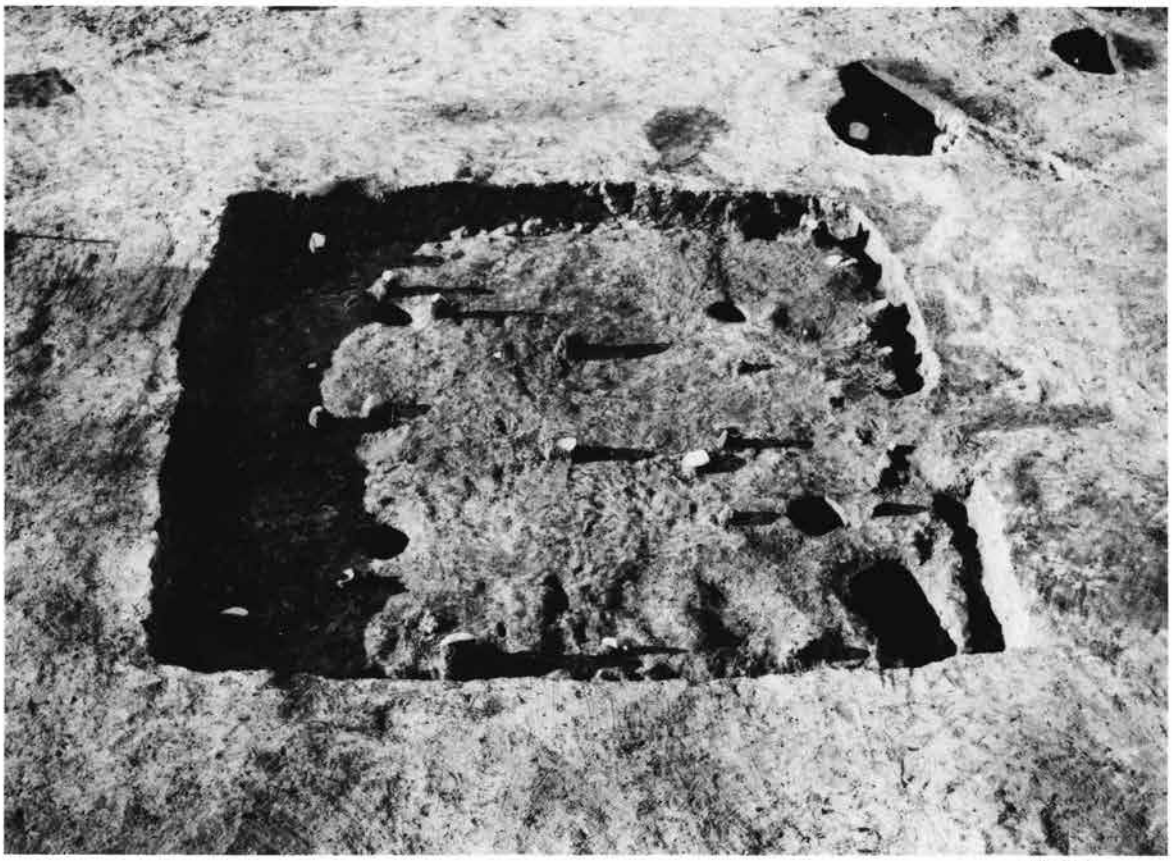
4　同・遺物出土状態　(1)

5　同・遺物出土状態　(2)

1　5号住居址

2　同・竈土層

3　同・掘方



1　6号住居址

2　同・竈土層

3　同・掘方

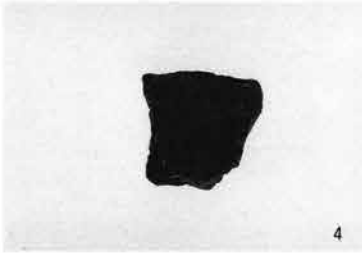
1　47・48号土坑

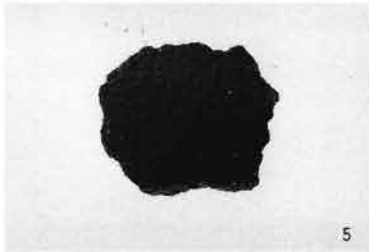
2　溝状遺構

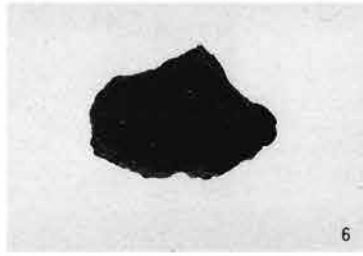
1

2

3


4


5


6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

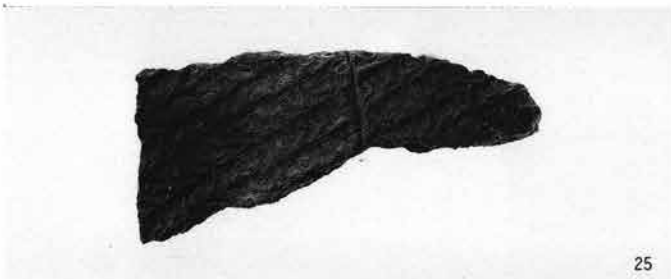
21

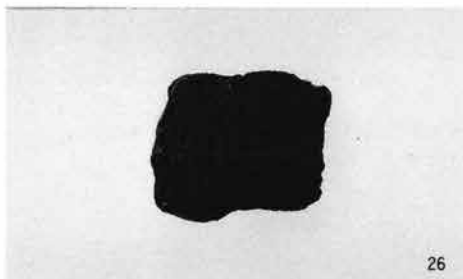
土坑出土遺物 (1)

22

23

24


25


26

土坑出土遺物　(2)

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

グリッド出土遺物　(1)

16

17

18

19

20

21

22

23

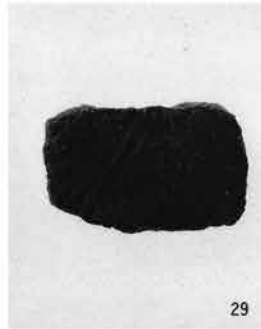
24

25

26

27

28


29

30

31

32

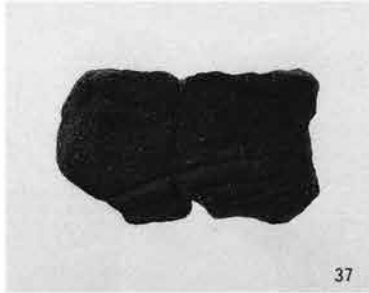
33

34

35

グリッド出土遺物 (2)

36


37

38

39

40

41

42

43

44

45

グリッド出土遺物　(3)

46

グリッド出土遺物　(4)

47

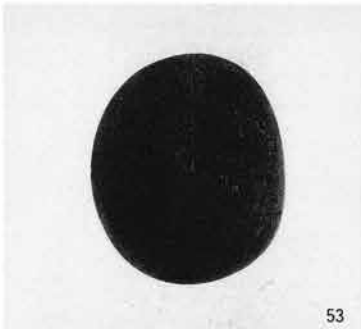
48

49

50

51

52


53

グリッド出土遺物　(5)

1

2

3

4

5

6

1号住居址出土遺物　(1)

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

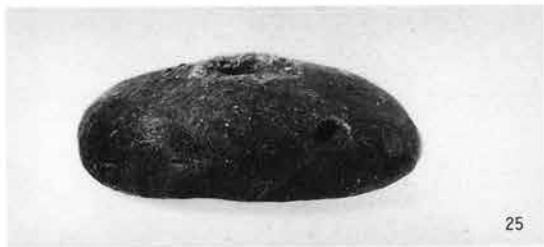
20

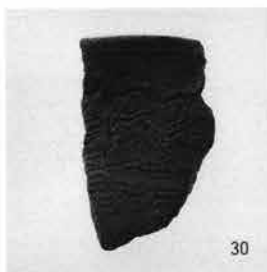
21

22

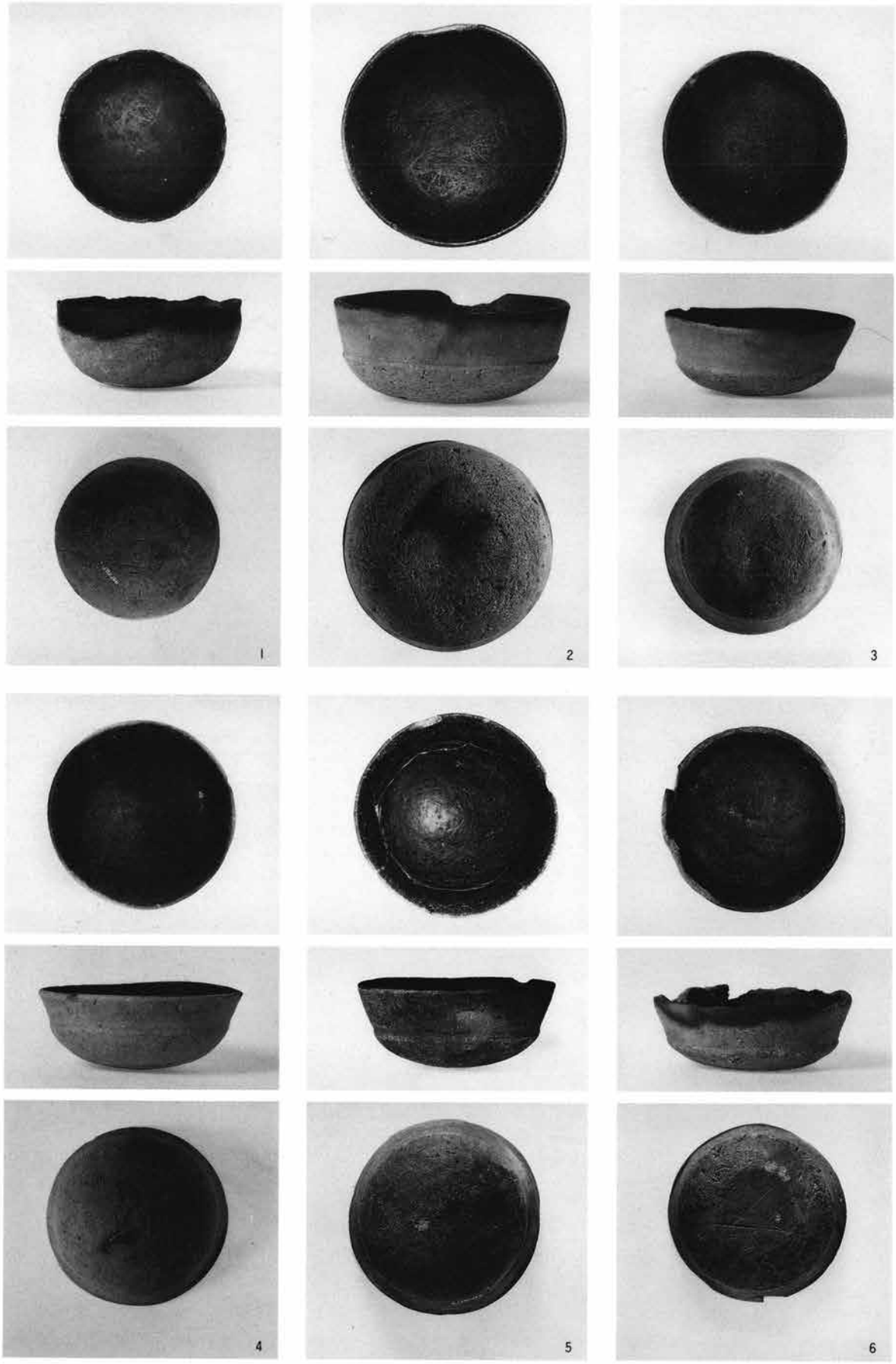
23

1号住居址出土遺物　(2)

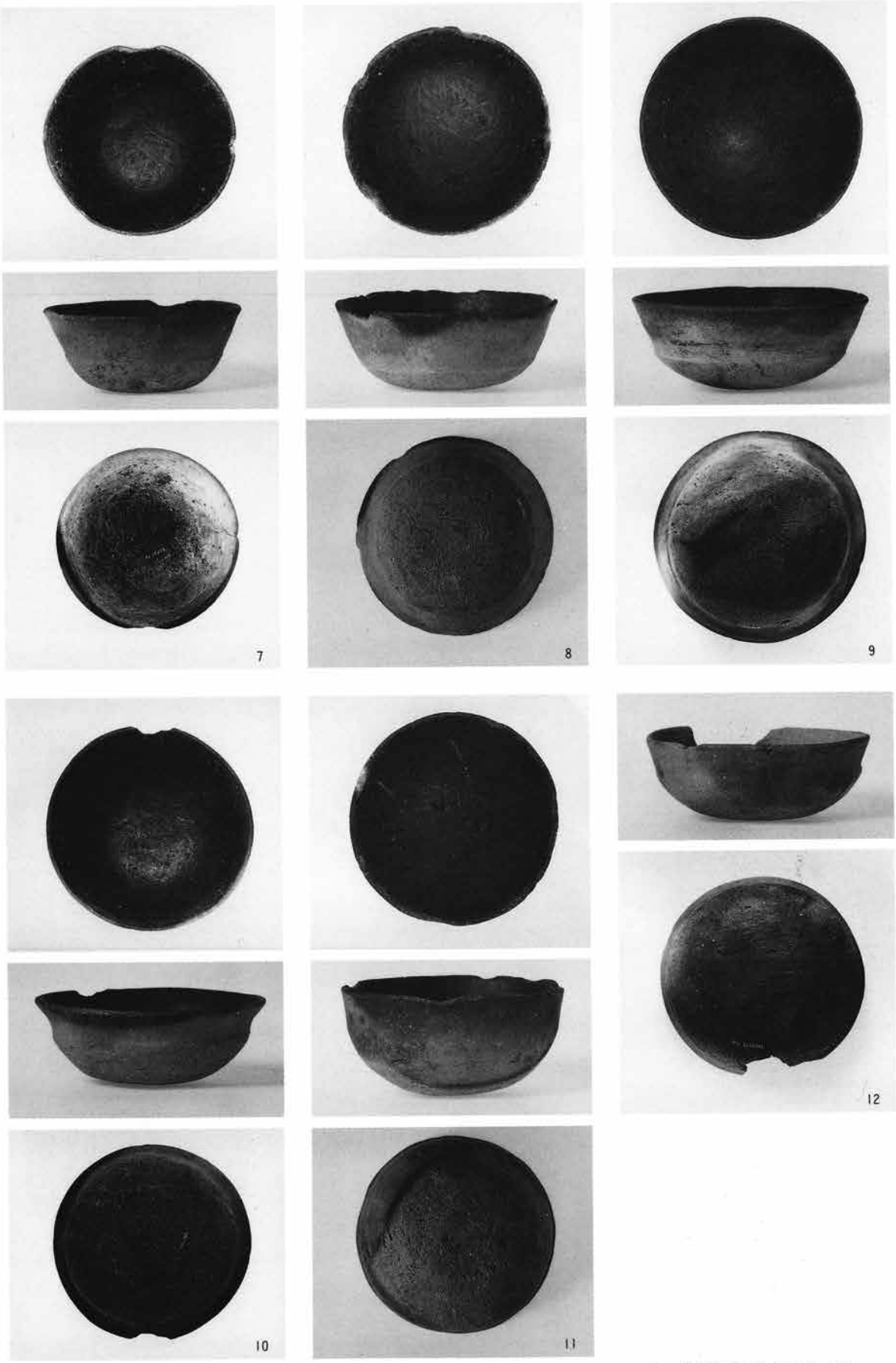




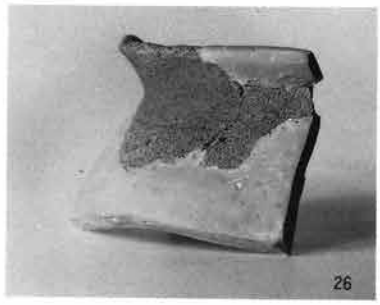
1号住居址出土遺物　(3)



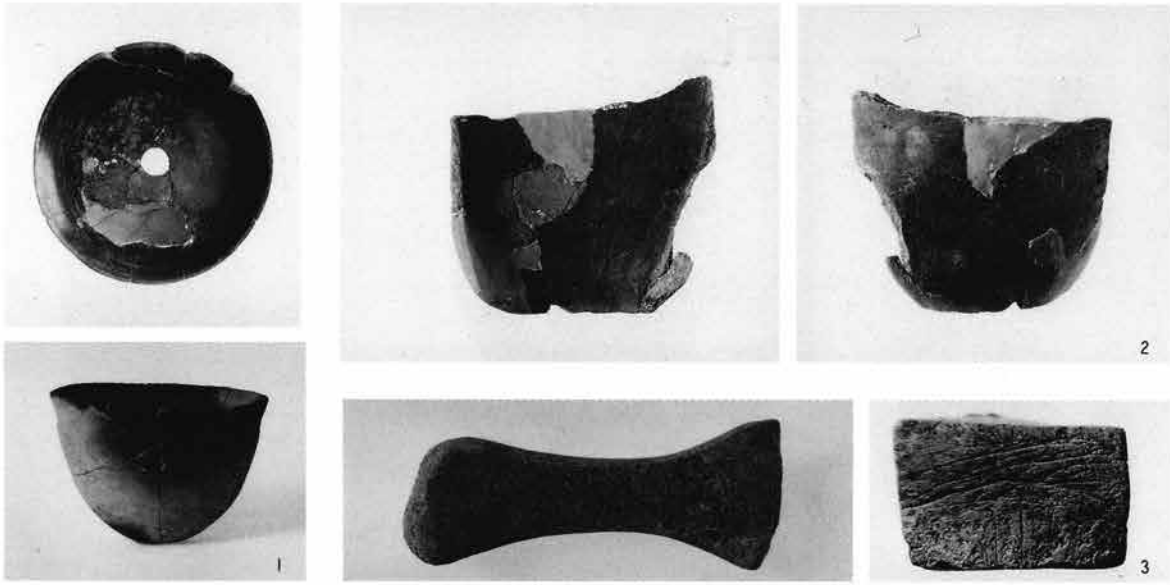

2 a 号住居址出土遺物 (1)



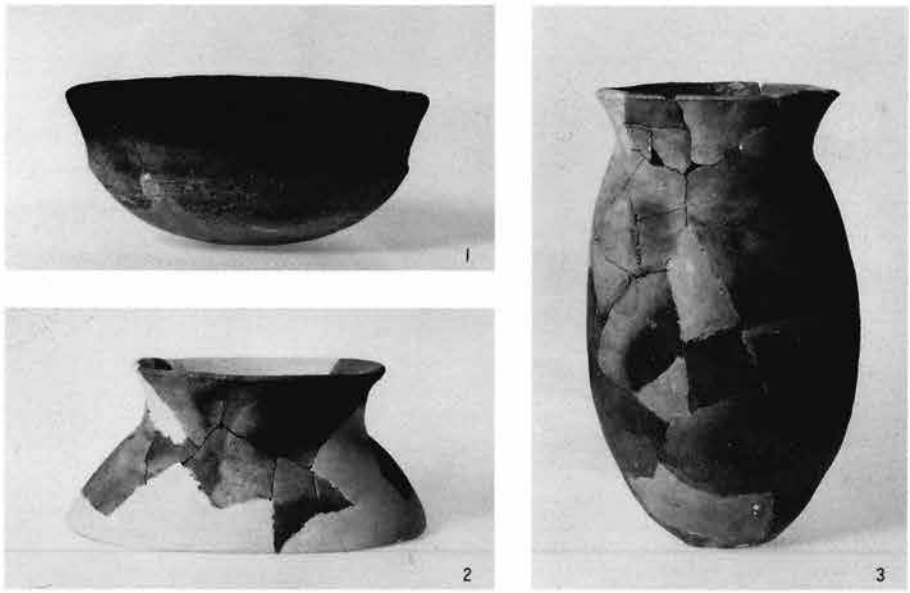

2 a 号住居址出土遺物 (2)



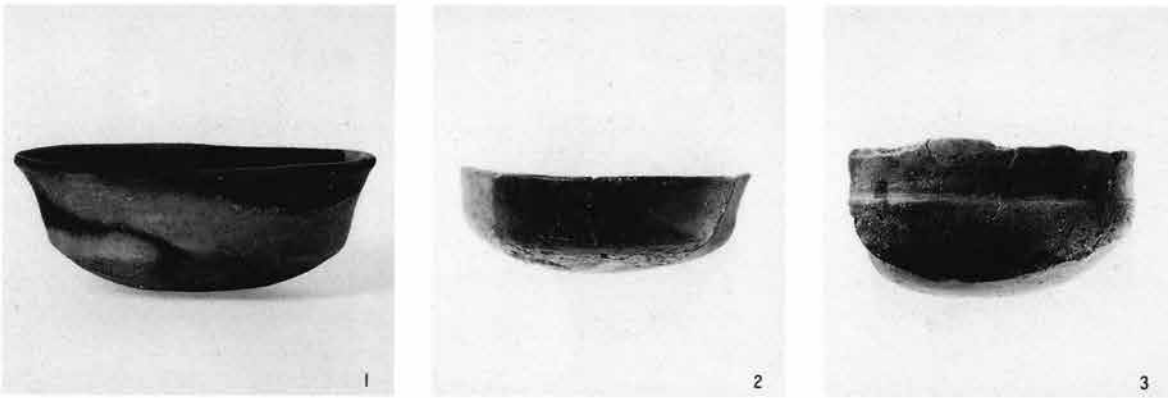

2 a 号住居址出土遺物　(3)




2 a 号住居址出土遺物 (4)

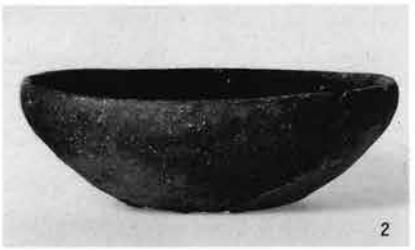


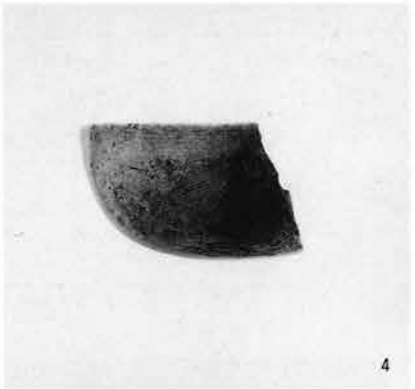

2 b 号住居址出土遺物

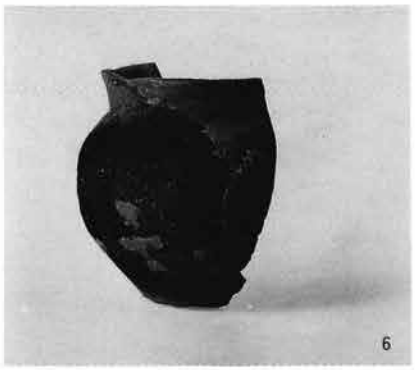



3 号住居址出土遺物 (1)

3号住居址出土遺物　(2)



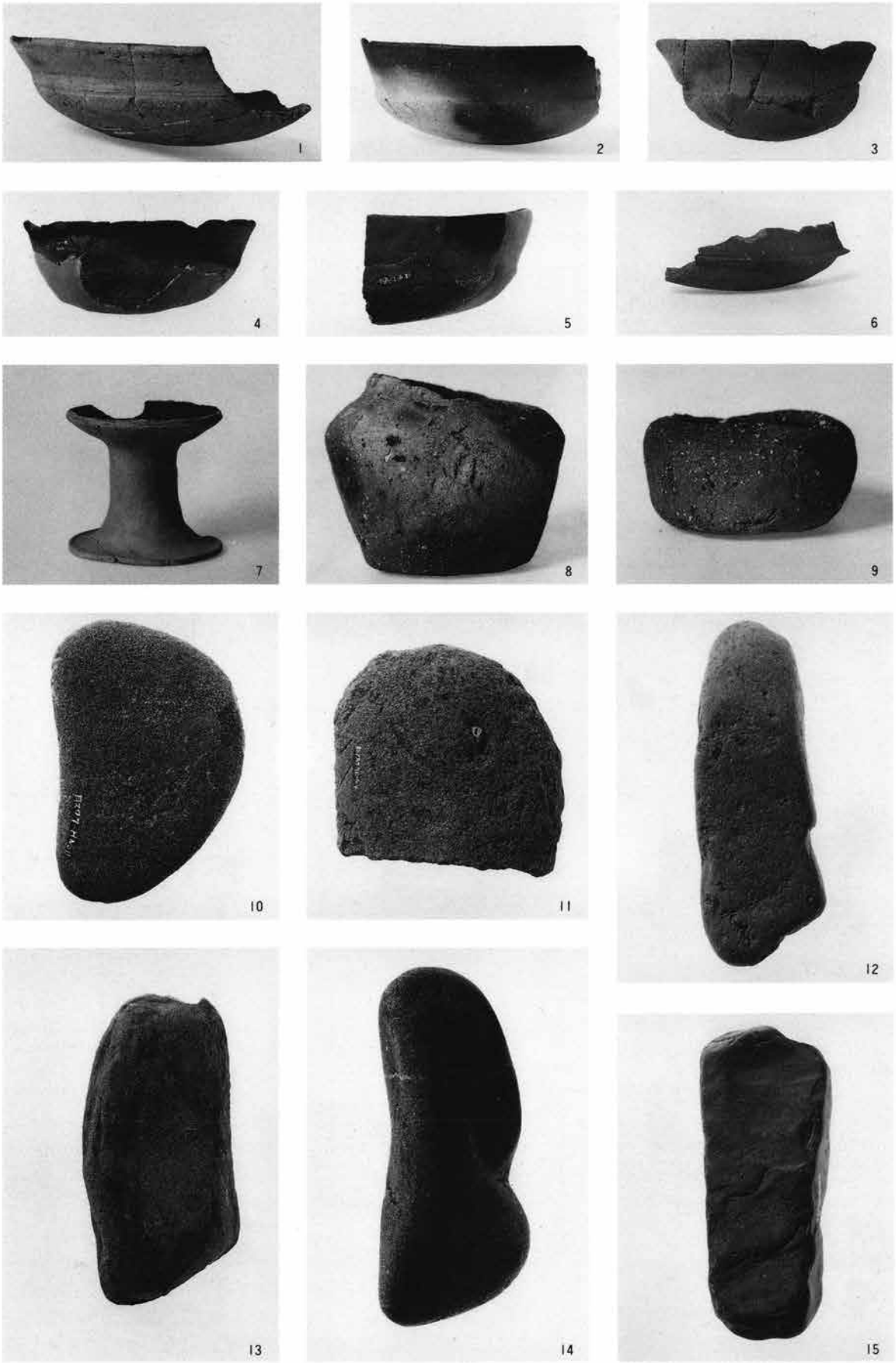




4号住居址出土遺物　(1)

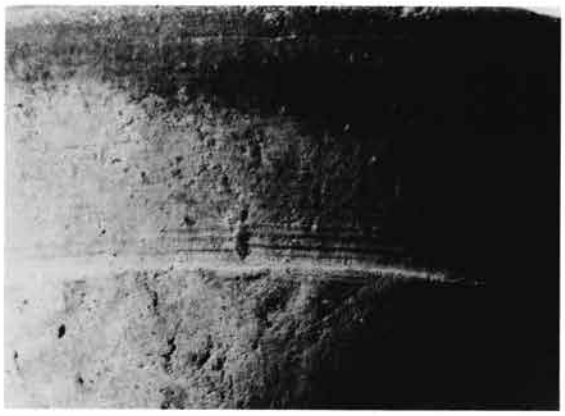
4号住居址出土遺物 (2)

5号住居址出土遺物

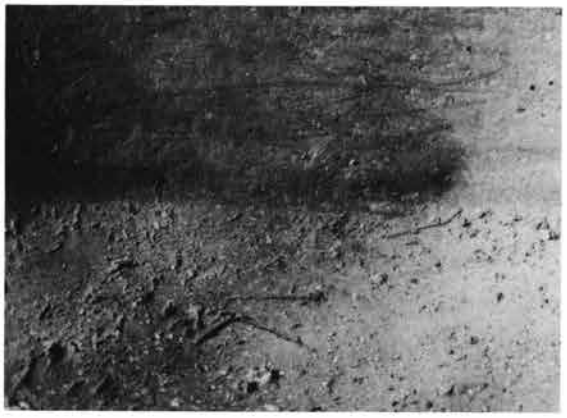



6号住居址出土遺物

口縁部調整痕　(1)



口縁部調整痕　(2)



口縁部調整痕　(3)

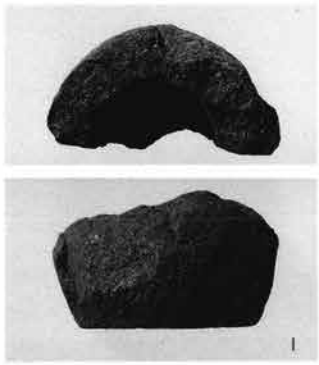
口縁部調整痕　(4)

口縁部調整痕　(5)

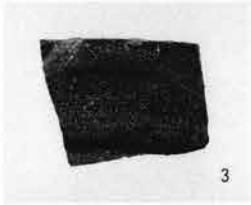
体部調整痕　(1)

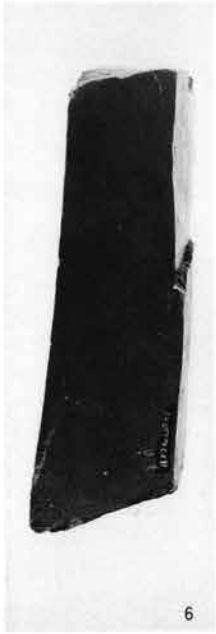
体部調整痕　(2)

体部調整痕　(3)


1

2


3

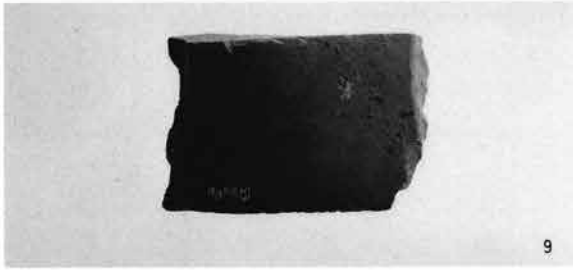

6

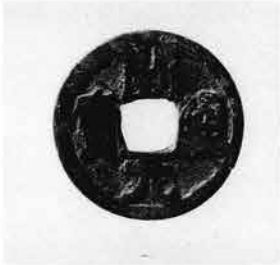
7

4

5

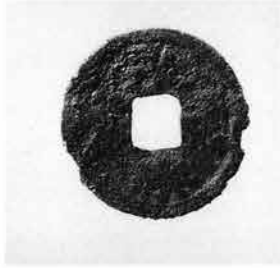
8


9



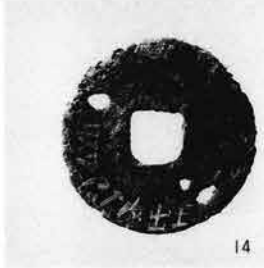
10

11



12

13


14

遺構外の遺物

**城平遺跡・諏訪遺跡** 一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書 ―Ⅰ―

印　刷　昭和59年10月20日

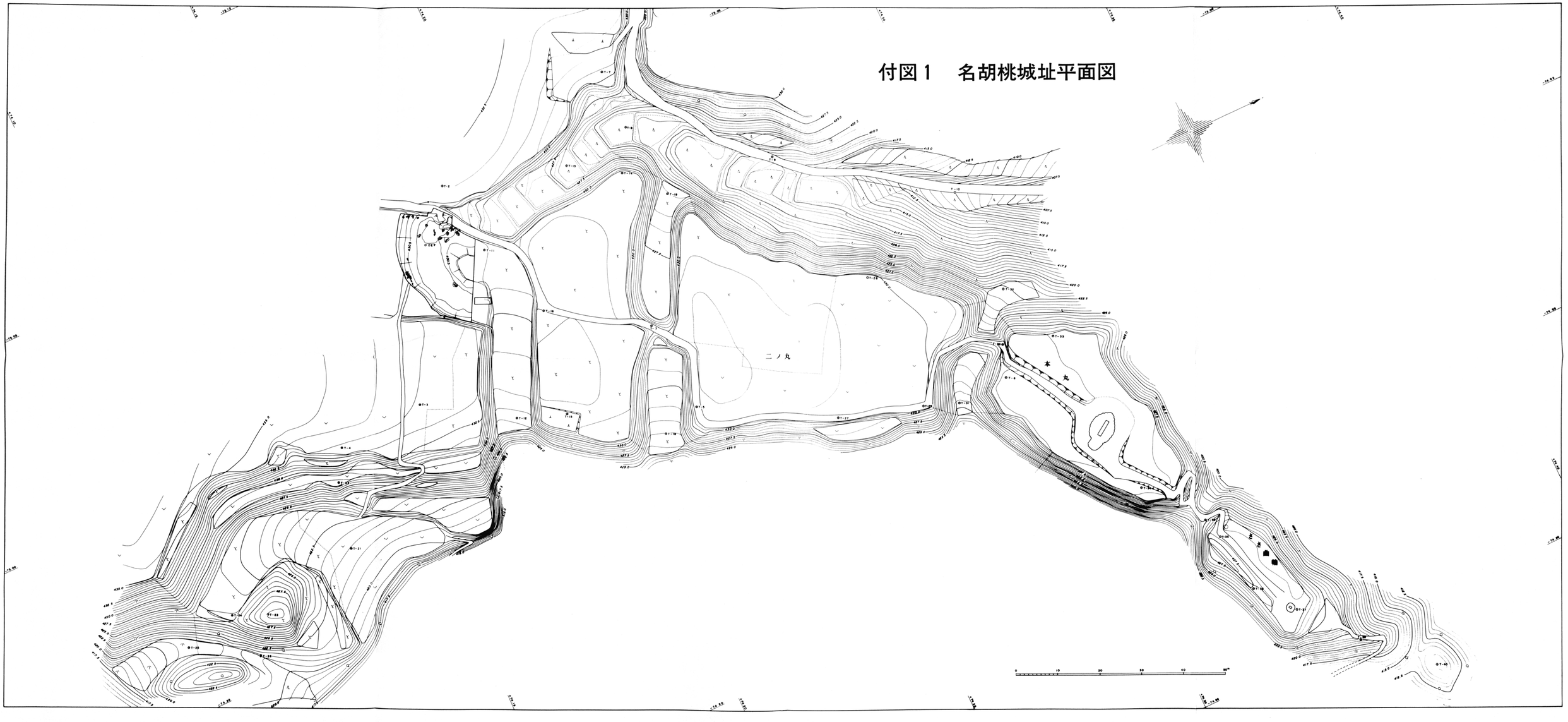
発　行　昭和59年10月31日

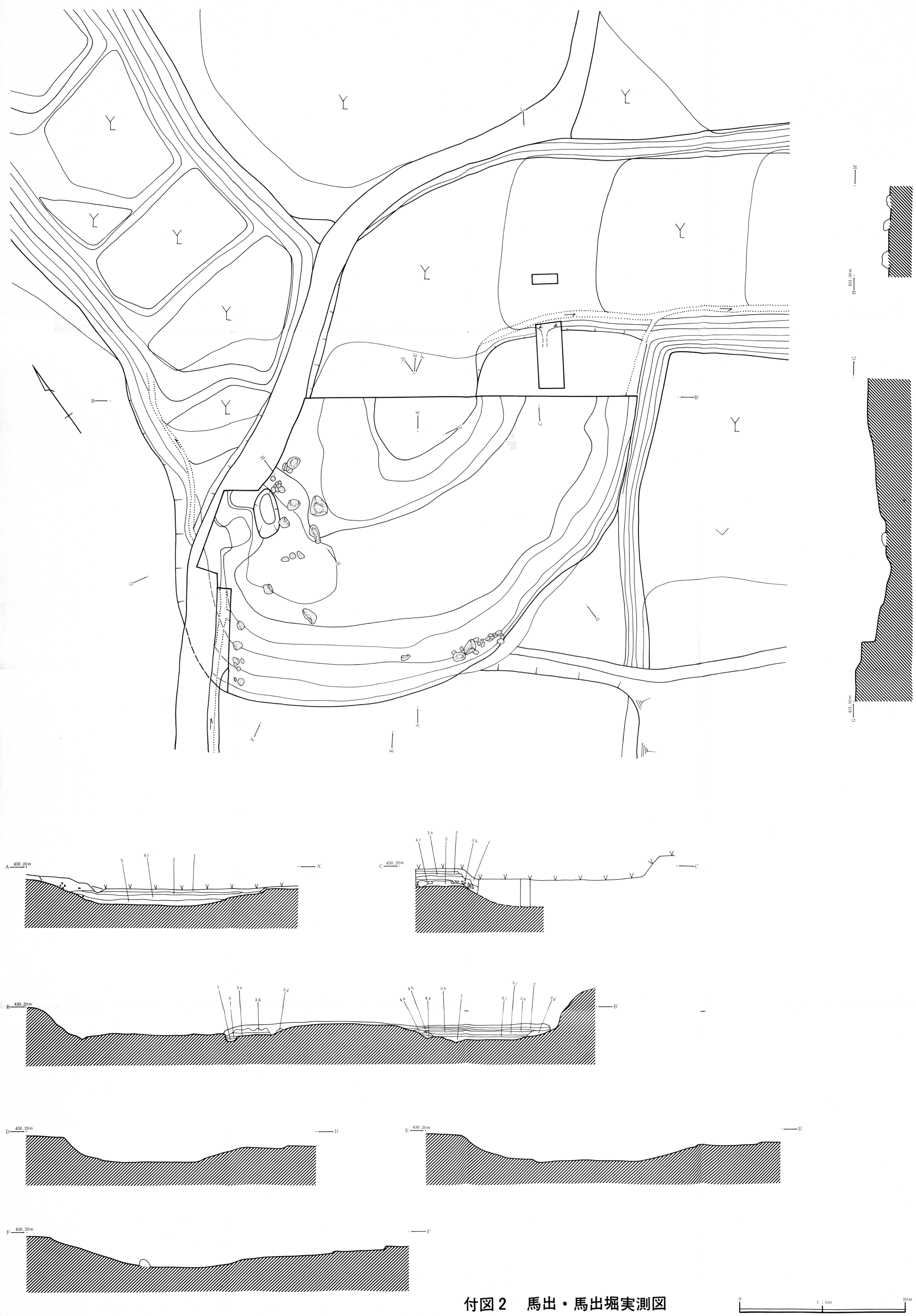
編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511(代表)

発行／[redacted]
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

# 付図１　名胡桃城址平面図






付図２　馬出・馬出堀実測図